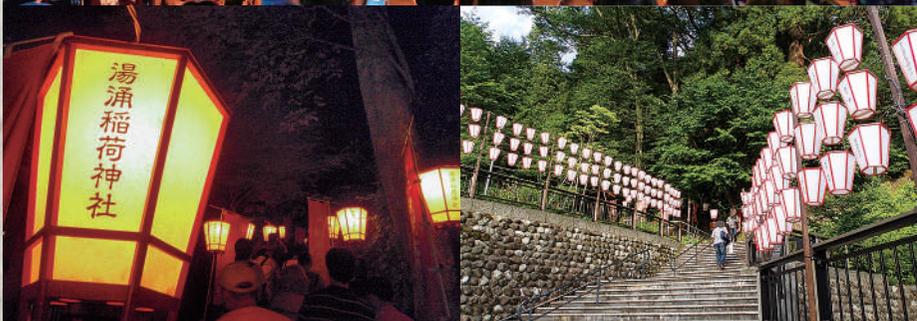




HOKKAIDO UNIVERSITY

| | |
|------------------|--|
| Title | 観光創造フォーラム2021講演録 (CATS叢書 ; 第16号) 全1冊 |
| Author(s) | 山村, 高淑//編 |
| Description | 2021年度オンライン観光創造フォーラム. 2021年10月15日-2021年12月1日. オンライン. 北海道大学観光学高等研究センター. |
| Relation | 観光創造フォーラム2021講演録 / 山村高淑 編 Proceedings of Tourism Creation Forum 2021 / Edited by Takayoshi Yamamura |
| Citation | CATS 叢書, 16, 1-196 |
| Issue Date | 2022-03-31 |
| Doc URL | https://hdl.handle.net/2115/84838 |
| Type | journal |
| File Information | CATS16.pdf |





cais 叢書 第16号

観光創造フォーラム 2021 講演録

山村高淑 編

北海道大学観光学高等研究センター



C A T S 叢書

第 16 号

観光創造フォーラム
2021 講演録

山村高淑 編

北海道大学観光学高等研究センター

2022 年

情報格差・学びの機会不均衡の是正を目指して

——巻頭言に代えて

山村 高淑

北海道大学観光学高等研究センター センター長／教授

本書は、北海道大学観光学高等研究センターが2021年10月から12月にかけて開催した、連続オンライン観光創造フォーラムの講演記録を叢書として取りまとめたものです（開催日時につきましては目次をご参照下さい）。まずは、ご登壇ならびに講演録のご校正を頂きましたゲスト講師の皆様へ、主催者を代表いたしまして厚く御礼申し上げます。

弊センターでは、昨年度に引き続き、今年度も積極的にオンラインでのフォーラム開催を推進致しました。これには大きく四つの事由があります。

第一に、新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のためです。2019年に始まった新型コロナウイルス感染症の世界的流行は、その後も変異株の登場等により、目下終息の見えない状況にあります。こうした中、一般の皆様へ公開するフォーラムとして、来場される皆様の安全を第一に考える必要がありました。

第二に、オンラインというツールを新型コロナウイルス感染拡大防止のための止むを得ない手段として捉えるだけでなく、情報格差・学びの機会不均衡を是正するための強力且つ有効な手段として利用しようと考えたためです。ここで言う情報格差・学びの機会不均衡とは、地方部と中央との情報格差、会場に来られる方と来られない方との情報格差を意味します。これまでの日本では情報は大都市部に集中し、東京などの大都市部で多くのシンポジウムやイベントが開催される一方、地方部でのそうした機会は圧倒的に少ないものでした。北海道においても札幌へ情報が一極集中している状況です。こうした中では、都市部に容易にアクセスできない地域に居住している皆様は、多額の交通費を支払って会場へお越しにならなければなりません。また、都市部に居住していても、ハンディキャップをお持ちで会場へのアクセスが困難な方や、職場や家事の関係で時間的に会場まで足を運ぶのが難しい方も多くいらっしゃいます。こうした背景が生んできた情報格差、学びの機会の不平等は、実はかなり深刻だったのではないかと私は考えています。オンラインでの講義に対しては、目下、実際の対話とは異なり微妙なニュアンスが伝わらず学びの方法としては不適切である、コロナ終息後は全て元の対面に戻すべきである、という意見が、実は教育現場でも多く聞かれます。しかし、こうした意見がある一方で、オンラインによって救われている多くの方々がいらっしゃることも事実なのです。観光学高等研究センターがこれまで最重要視

してきた、〈地方・地域が元気になるためのお手伝い〉というモットーから見ても、地域間・主体間での情報格差、学びの機会不均衡の是正は、極めて重要なテーマとなります。この意味で、弊センターでは今後もオンライン方式を推進していく予定です。

第三に、地域に根差して先駆的なお取組をなさっていらっしゃる現場の方々的心声を、広く世界に伝えたい、と考えたからです。ツーリズムという実践・産業は今後どうあるべきなのか？ そもそもツーリズムという概念自体、再考する必要があるのではないかと？ 変えるべきは何で、変えてはいけないものとは何なのか？ ……コロナ禍という困難な状況の中で、あらゆる地域がこうした問題に直面しています。そうした中で、地域の現場で汗をかかれていらっしゃる方々から、是非とも多くのことを学ばせて頂きたい。そしてそうした知見を、地理的制約を超えて広く共有させて頂きたい。そうすることが、コロナ禍をめぐる様々な問題を各地域が解決していく一助になるのではないかと。そう考えて企画致しました。

そして第四に、フォーラム運営の効率化です。弊センターは専任教員4名、非常勤スタッフ4名からなる非常に小さな組織で、マンパワーにも限界があります。実際に物理的な会場を借りて大規模なシンポジウム等を開催すると、準備、当日の運営、後片付けなど、この人数ではスタッフに多大な作業を強いることになります。かといって、私どものような小さな組織は、他の大きな部局と比べ、実績が少ないままで良いのだろうか？ もちろん〈否〉です。この点でオンライン開催という方式は、私たちのような小規模組織にとって、効率的且つ効果的にフォーラムを運営するための、非常にありがたいツールとなりました。

以上、オンラインフォーラムを積極的に推進した四つの事由を述べて参りました。もちろん、こうした意図が十分に達成できたかという点、まだまだ不十分な点ばかりです。ご登壇頂いた皆様、ご視聴頂いた皆様に、ご迷惑をおかけした点多々あったことと存じます。お気づきの点等ございましたら、是非とも弊センターまでご意見をお寄せ頂ければ幸いです。弊センターでは、今後も、地域で頑張っている皆様を応援し、そうした皆様から多くを学ばせて頂くために、オンラインフォーラムシリーズを継続して参ります。引き続きご理解とご支援の程、何卒宜しくお願い申し上げます。

最期に、オンラインフォーラムの企画から運営、広報、本叢書の編集・刊行まで、大変きめ細かなマネジメントをして下さった、観光学高等研究センター事務補佐員の野田由紀子さんに心からの謝意を申し上げます。

2022年3月1日

目次

| | | |
|--|-------|-----|
| 序文 | 山村 高淑 | i |
| 祝『北の縄文』世界遺産登録——北海道における縄文遺産の展開戦略を考える—— 〈2021年10月15日(金) 18:30- 20:30 オンライン (zoom ウェビナー) 開催〉 青野 友哉、小野 哲也、西山 徳明、岡田 真弓 | | 1 |
| アイヌ民族と文化交流としての観光の新展開に向けて 〈2021年11月11日(木) 18:30- 20:00 オンライン (zoom ウェビナー) 開催〉 北原 モコットウナン、岡田 真弓 | | 39 |
| ニセコ町観光の展望 〈2021年11月14日(日) 13:30- 16:30 オンライン (zoom ウェビナー) 開催〉 片山 健也、高橋 葉子、石黒 侑介、天田 顕徳、木村 宏、 「観光地域マネジメント論演習」2021年度受講者 | | 67 |
| 新たな祭りの創出と地域への定着——実行委員会から見た祭りの10年 課題と展望—— 〈2021年12月1日(水) 18:30- 20:00 オンライン (zoom ウェビナー) 開催〉 山下 新一郎、山村 高淑 | | 169 |
| 登壇者一覧 | | 196 |

祝「北の縄文」世界遺産登録

——北海道における縄文遺産の展開戦略を考える——

青野 友哉

東北芸術工科大学 准教授

小野 哲也

標津町ポー川史跡自然公園 園長

西山 徳明

北海道大学観光学高等研究センター 教授

岡田 真弓

北海道大学観光学高等研究センター 准教授

1. はじめに

1-1 あいさつと趣旨説明

司会 (岡田真弓) : このたびは、北海道大学観光学高等研究センター主催オンラインフォーラムの第 1 回にご参加いただきまして、誠にありがとうございます。これより第 1 回オンラインフォーラム「祝! 『北の縄文』世界遺産登録——北海道における縄文遺産の展開戦略を考える——」を始めたいと思います。まず北海道大学観光学高等研究センターの西山教授から今回の趣旨説明をいたします。

西山: こんにちは。皆様お仕事でお疲れのところ、また週末にもかかわらずこのフォーラムにご参加いただき、心より感謝申し上げます。

実は、このコロナ禍の中、我々大学としてどのように日頃の研究活動を発信していくことができるかを考えるなかで、私ども観光学高等研究センター「CATS=Center for Advanced Tourism Studies」では、今年度からオンラインで観光創造のフォーラムを開催することとなりました。いろいろな研究者の方や実践家の方、さまざまな市民の方々も交えて、オンラインでフォーラムを不定期に開催しようというものです。教員がそれぞれ自分の発意で、皆さんにお伝えしたいことをフォーラムとして企画していくという、あまり堅苦しくない形で実施します。企画が整うたびに CATS のホームページ、私どものセンターのホームペー

ジで皆さんにお知らせし、参画をお願いします。今日ご参加いただいている方々には、基本的にはメーリングリストに記載させていただき、新しい情報はお伝えできるようにしたいと考えていますが、基本はセンターのホームページでさまざまな情報をお伝えしていきます。

本日の第1回は、私、センターの西山と岡田先生とで担当させていただいています。私のバックグラウンドは建築学の都市計画で、観光と遺産マネジメントということをして専門として研究活動が続けているところです。今回は、本年、令和3年7月に「北海道・北東北の縄文遺跡群」、通称「北の縄文」がユネスコの世界遺産に登録されましたので、この登録を祝し、それに関わることで、皆さんが「北の縄文」の登録に関してちょっと気になっていることや、これからどうなっていくのだろうかと思っているようなことを、我々なりにまずは想定し、考古のご専門であり一線で大活躍しておられますお二方の先生をお招きして議論を進めていきたいと思っております。

1-2 議論のポイントと流れ

西山: このフォーラムを通じて皆様と共有したい、勉強したい内容の大きなポイントの一つは、「北の縄文」として全部では17遺跡ですが、北海道では7つの遺跡が登録されています。しかし、なぜ道南の方にばかりあるのでしょうか。千歳より以西ばかりです。後ほどいろいろお話もあると思いますが、北海道には非常に多くの縄文遺跡がありますし、もちろん全国にもあります。そういう遺跡の中から、なぜこういうものが選ばれて世界遺産になるのか、というようなことについての素朴な疑問に対し、多くの方が不思議に思っておられると思いますので、そのことに関しまして、まずは専門の先生から伺いたいということです。

それからもう一つのポイントは、世界遺産になったわけですから、縄文遺跡というものに深い興味を持つツーリストが世界中から北海道に今後押し寄せてくるということになると思うのです。そういう方々をどう受け入れ、招き入れてもてなしながらも、北海道のこの世界遺産にとどまらないさまざまな遺跡の文化遺産の魅力を発信していくのかということ、みんなで考えていく足がかりになればということ、これが2つ目の大きなテーマとして設定させていただいているものです。

次に本日の全体の流れについてです。まず、基調講演といたしまして東北芸術工科大学の考古をご専門とされる青野友哉先生に基調講演をいただきます。その後、パネルの方に移りまして、今度は標津町のポー川史跡自然公園の園長をしておられます小野哲也先生にパネラーとして加わっていただき、道東の縄文の魅力等についてご説明をいただきます。その上で、パネルでは、参加いただいている視聴者の方々からのQ&Aのご質問を軸にしながら、みんなで議論していくことができたらと考えています。多くの方にご参加いただいておりますので、ご発言をしていただくとなかなか2時間という時間に収まりませんので、大変恐縮ですがQ&Aの方にどんどん書き込んでいただいて、最後のほうでなくても結構ですか

ら、思うたびに質問等があったら書き込んでいただきまして、私どもに送ってください。お一方から複数の質問いただいても構いません。もちろん、時間の関係がありますので全てのご意見、コメント、ご質問等にお答えできないかと思えますけれども、なるべく皆さんと意見を交換し合いながら基本 2 時間を前提としまして、これからフォーラムを展開させていただきたいと思えます。

それでは、最初に基調講演をお願いしたいと思います。岡田先生から青野先生のご紹介をお願いいたします。

2. 基調講演：『北の縄文』の世界遺産登録の意義と北海道のアピールポイント

岡田：本日ご登壇いただきます東北芸術工科大学の青野友哉准教授のプロフィールをご紹介します。青野先生は北海道小樽市でお生まれになり、明治大学文学部を卒業後、伊達市教育委員会学芸員として北黄金貝塚を中心に縄文時代の葬墓制や儀礼、生業、そして北海道を含む北方文化交流史の研究を深められました。伊達市噴火湾文化研究所在籍中の 2011 年に北海道大学大学院を修了し、博士号を取得されています。その後 2019 年から現在お勤めの東北芸術工科大学で教鞭を執りつつ、引き続き、縄文研究に取り組まれています。それでは青野先生、ご講演よろしくをお願いいたします。

2-1 本日の内容について

青野：皆さん、こんにちは。東北芸工大の青野と申します。参加者の皆さんのお名前を見ると、北海道の方が多いいのかなという気がします。でもオンラインですので、全国各地から参加されているかもしれませんね。今のご時世、直接会えない不便さがありますが、遠隔地からも参加できる便利な部分もありますので、今日は皆さんの前でお話できることを非常に楽しみにしておりました。

私は、ご紹介いただいたように 3 年前までは北海道の伊達市にいました。今回、世界遺産登録になりました 17 の縄文遺跡群の内一つ、北黄金貝塚の発掘調査から史跡整備、そして世界遺産登録まで関わってきました。今は山形から北海道・北東北の縄文遺跡群を応援する立場ですが、その前までは自身がずっと関わってきた遺跡だということもあり、今日は講演に呼んでいただいたと思っています。

今日お話しするのは、世界遺産登録になりましたが、これからいろいろな活用という部分も出てきますし、全国に縄文遺跡はありますので、その辺が今後どう整理されていくのかということも関心事だと思います。「世界遺産登録とその後」ということでお話できればと思えます。

私は、『北の縄文』の世界遺産登録の意義と北海道のアピールポイント」として話をします。話の流れは、まず世界遺産になった価値、縄文遺跡の価値というのはどういうところなのかというおさらいをします。この辺をご存じないと話が分からないということもあると思いますので、少し厚めに話をしたいと思います。そして、世界遺産登録後の流れということで、北海道・北東北だけではなく全国に多様な縄文文化があるのだよということ、これはご存知の方が多いと思いますが、改めてお話をします。そして、今回は北海道の皆さんが多いと思いますので、今後、北海道の縄文遺跡群を活用していくときに、大きな売りになる部分があると思っています。それは、日本列島の中に、大きな文化区分という文化の境界がいくつあるのですが、その一番大きなものが、私は北海道の石狩低地帯にあると以前から思っていました。この道東と道南西部の文化の違いこそが、今後、道南だけにある世界遺産というものを超えて縄文遺跡群の価値を伝え、そして活用していくという時の大きな武器になると思っています。この点を生かすための発信の方法を考えるということでもあります。4番目に、それは世界遺産だけに縛られずに、時代的にも地域的にも超えた活用の戦略というのが必要だろうということです。つまり柔軟な活用戦略ということが大事だという話をしたいと思っています。

2-2 縄文遺跡の世界的価値とは何か？

青野：まずは、基本的な世界遺産の構成資産はどこかな、どんな遺跡かな、という話をしたいと思います。ここにあるのは世界遺産登録された17の構成資産と、参考の資産です（スライド①）。一番古い遺跡として、青森県の大平山元遺跡があります。そして垣ノ島遺跡、そして有名な三内丸山遺跡。皆さんは何度か足を運ばれたことがあるのではないのでしょうか。それから、岩手県の御所野遺跡、そして関連資産となっていますけども、私は世界遺産だと思っている鷲ノ木遺跡を紹介しています。その他にも、本州にはいくつものストーンサークルがあります。これらの構成資産のどこに価値があるのでしょうか。おそらく世界遺産となるということは、世界的な何か価値があるのだろうということは想像がつかます。この青森・秋田・岩手そして北海道の4道県が世界遺産を目指したときに、どういうところで訴えていけばいいのかということを約10年間議論したわけです。そして、推薦書素案というものを作りまして、国からユネスコへ正式な推薦書が提出されました。そのときの整理の仕方は、やはり定住する狩猟採集文化としての縄文の特異性を訴えて行こうということになったわけです。今スライドで映しているのは、世界史の教科書です。高校生は、これで人類史を習うわけです。教科書には「人類史は狩猟・採集を中心にした獲得経済から農耕・牧畜による生産経済に移るという重大な変革をとげた」と書いてある。そして、「その結果人口は飛躍的に増え、文明の発展の基礎が築かれた。そして農耕牧畜が始まると、人類は集落に



スライド①



スライド②



スライド③

住み・・・」と続くわけです。つまり世界史の教科書では、狩猟・採集社会というのは移動の社会なのだ。そして、農耕・牧畜が始まって初めて定住したのだ、ということが書かれています。世界史の常識として教科書に載っているわけです。もちろん例外はあります。ただ、ユーラシア大陸の大多数の文明が生まれたと言われる地域では、このように狩猟・採集の移動生活から農耕・牧畜の定住が始まり文明化が進行したのだ、そういう説明がなされているわけです。しかしこの日本列島は、島国ということもあって、それからユーラシア大陸からやや離れていたということもあって、特異な発展をとげました。この定住する狩猟採集文化、これが非常に稀であったということなのです。それを今日は具体的にお話をしていきます。

狩猟採集民というのは、獲物を追って移動していくもの、日本であっても、旧石器時代はそういう生活であったと言われていました。それが定住したというのには、どこに証拠があるのか、ということなのです。一つは土器の発明が定住の証拠だというのは考古学者の小林達雄先生が言われています。つまり大きな土器をいつも携えて移動していることはない、ということです。土器が誕生した時点から定住ということは考えていいのだ、というのが小林先生の考えです。ただし、定住といっても段階がいろいろあります。それは、時々行っては帰ってきてという繰り返しも考えられます。土器やそれから重たい石皿やすり石というのは、持ち運びができないとすれば、置いていけばいいという考え方もあるわけです。ですので、ひと所に拠点はあるのだけれども、よそを転々としてまた戻ってくるということも、定住のあり方としては考えられる。しかし、北海道・北東北の縄文遺跡群は通年、つまり四季を通じた定住だという証拠があるのです。それは北黄金貝塚や入江・高砂貝塚のような大規模な貝塚です。ちなみにイヌイットなどの狩猟採集民というのは、夏と冬で住む場所が違うわけですが、そのような生活とは一線を画するものなのだということが貝塚の中を見るとわかります。

それからもう一つ、貝塚は1万年間にわたる自然環境の変化に適応した証拠だということが言えます。貝塚の中からは、当時の環境の変化が分かる動植物が出土します。さらには、貝塚の位置の変化ということも海水面の変化と連動した姿を見せます。それから縄文人が作った釣り針や銛といった獲物を獲るための道具も、当時の自然環境の変化と関連しています。ですので、自然環境が変わり動植物が変化すると、それに合わせて道具も変化します。そういう生活や文化であることが、貝塚出土の骨角器などから分かるということです。北黄金貝塚のC地点という所の貝層断面を見ると1メートル以上の非常に厚い貝塚が残っています(スライド②)。この中で灰色に見えるのは、土ではなくてウニなのです。ウニの殻がずっと厚く堆積していますし、ホタテガイやマガキといった貝類、そしてクリーム色に見える部分は魚・エゾシカ・オットセイの骨です。こういうものが土壌の堆積する間もなく積み重なっています。ウニを採った時期はウニの旬にあたり、噴火湾で言えば夏です。動植物、特に魚などは季節が非常に明確に分かります。それはなぜかと言うと、産卵の時期というのは、魚は岸に寄ってくるのです。ニシンは春ですよ、群来というのが北海道では見られま

す。縄文人は、現在と違って深い所の魚を獲るといことはできませんので、海岸に寄ってきた魚を獲る。つまり旬のものを獲っている。貝層は季節を表しているということになります。貝塚の中から出てくる魚種の産卵時期を調べれば獲った季節が分かるということです。そうすると、噴火湾でいうとニシンは春、ウニは夏、アイナメは秋、マダラやアンコウは冬といったように、季節が積み重なっているということが分かります。ということは、定住がオールシーズンだったということを示すわけです。ですから、定住型の狩猟採集民、これが世界的には稀なわけですが、その証拠がこの貝塚の貝層なのだということがご理解いただけるかと思います。ちなみに、定住というのは知識の蓄積が起り、そして文化の成熟が起こったのだ、という重要な指摘もあります。

そして北黄金貝塚では1000年間この貝塚が作られるわけですが、縄文時代というのは1万年間継続しているわけです。北黄金貝塚ひとつだけで世界遺産になれるかということ、10分の1しか定住を示していないということになりますので、なれません。そこで他の遺跡とも組み合わせると縄文時代全体の定住ということをはっきりさせる。それが複数の遺跡を組み合わせると世界遺産登録を目指した理由です。これをシリアルノミネーションと言いますが、17の遺跡がそれぞれ時代や性格、異なるものを持っているということです。それらを合わせて縄文の全体を説明できるのだ、という考え方です。

北黄金貝塚でどんな動物が獲れているのかということをちょっと紹介しましょう。エゾシカやオットセイ、熊、イルカなども縄文人は食べています。魚の骨の特徴を調べていくと、「これはフグだな」とか、「これはカジキマグロだな」といったことが分かります。大きなマグロの椎骨も出土しますのでは、美味しいマグロを縄文人も食べていたということになります（スライド③）。

北海道の貝塚の特徴として、縄文人が多種多様な動物を利用しているということが分かります。これは寒流と暖流がぶつかる所でもあり、太平洋側と日本海側の地理的な環境の違いもあるわけです。特に、縄文時代の環境を復元するときに、この動物層の多様な状態というのは、非常に役に立ちます。それは高緯度ほど環境の変化に敏感だからです。ちょっと寒い、ちょっと暖かいでも獲れる魚が変化をする。去年も今年も海水温が高いとサンマが寄ってこないというようなことがありますよね。サケも獲れなくて、今年はイクラがなかなか高いという話も聞いています。そういうふうに敏感なのです。これが縄文時代の環境復元をするときに、貝塚を使った研究で明らかにできるということも、他の地域よりも有利だといえることが言えます。

それから、貝塚は生業だけの問題ではないのです。心の問題、精神文化の問題とも密接に関わってきます。これは北黄金貝塚の貝塚を掘りこんだ墓の写真です（スライド④）。これは、北大の河野広道という先生が、「貝塚はゴミ捨て場ではないのだ、全ての生き物の墓なのだ」という論文を書かれました。これはアイヌの人たちの物送りという考え方を当てはめたものですが、北黄金貝塚では、貝塚を掘ると13体の人骨が見つかったということもあり、丁寧に埋葬されていることから、河野先生の説を当てはめてもいいだろうと考え、来園者、

遺跡に来た方たちには、「貝塚というのは全ての生き物の墓なのだよ」という説明をしています。これが全ての遺跡に当てはまるかというと、実はそうではないのです。地域と時代によって、貝塚と墓が重なる場合と離れる場合とがあります。ですが今から 6000 年前の北黄金貝塚では、そういうことが当てはめられるということになります。

私が発掘調査をした時に驚いたものがあります。これは伊達市のポンマ遺跡という縄文時代の後期の遺跡ですけども、ここを丁寧に発掘していくと、ホタテガイの殻が 6 枚重なっていた例がありました（スライド⑤）。これは入れ子状に重なっています。一番真ん中が挟み込まれるような、普通のホタテガイの貝が合わさる状態です。それに更に上下から、更に上下からというふうに重なっている。三个体が重なっているという状態。普通は、こうは出てきません。なぜなら、仮に置かれたとしても一晩経つと崩れる。誰かがその上を歩いたら、また崩れるということもあると思います。これは稀な例で、これが置かれた後にすぐに土がかぶせられた。そのために充填環境といって、貝が動かずにいた例なのです。こういう稀な例があるということを見過ごしてはいけません。これは縄文人が貝を投げ捨てたのではなくて、そこに丁寧に置いたという証拠になるわけです。貝塚に墓が作られるというのと同じように、食べ終わった貝を丁寧に置くということは、縄文人が貝塚に対して特別な思いを持っていた、神聖な場所だと考えていた、そういう証だということが言えます。

ということで、私は縄文遺跡群の一つの価値として、特に現代的な価値は何かというふうに聞かれたときに、こういうふうに答えるようにしています。「縄文遺跡というのは、アニミズム的な世界観が存在した証拠なのだよ」ということです（スライド⑥）。アニミズム的世界観というのは全てのものに命があるという考えです。石にも山にも命があるのだ。そういう思考形態を現代の社会は当然忘れてしまし、西洋人は特にそういう考えは希薄なわけですね。これが、実は日本の先史文化を調べることによって、その存在を主張できるというのは、様々な価値観を認め合う必要のある現代社会において意義があるだろうと思っ

2-3 世界遺産登録後の流れ～多様な縄文文化の明示

青野：縄文文化の価値というのは当然あるわけなのですが、それは北海道・北東北に限ったことなのかと言われると、実はそうではありません。日本列島にはさまざまな縄文文化があります。特に、縄文を代表するような見事な土器や土偶が出土した場所というのがあります。例えば、新潟県には火焰型土器という有名な土器文化圏がありますし、長野県域は縄文のビーナスをはじめとした優美な土偶がたくさん出ます。さらには、巨大な石棒を使った祭祀が行われたということも分かっています。このように、実は日本列島にはそれぞれ地域的な特徴というのがあります。貝塚も北海道が有名ですが、仙台湾も東京湾、三河湾、それから岡山・広島の辺りも貝塚は有名です。というふうに、実は日本列島各地にそれぞれ特徴のある遺跡はあります。では、そういうものの価値はどうかと聞かれることがあります。それ

アニミズム的世界観 伊達市北黄金貝塚－縄文前期



縄文人にとっての貝塚＝すべての生き物の墓地

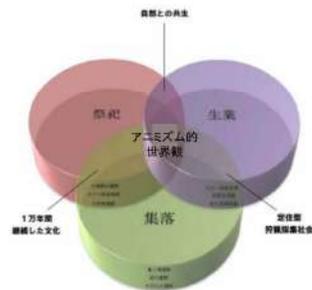
スライド④

アニミズム的世界観 伊達市ボンマ遺跡－縄文後期



スライド⑤

縄文遺跡はアニミズム的世界観が存在した証拠



・縄文文化は日本の基層文化であることは間違いない

・しかし、「すべてのものに命がある」との考え(アニミズム)を現代人は忘れつつある

・縄文遺跡群は、現代日本や欧米の社会とは異なった価値観である狩猟採集民の文化が存在した証し

・「自然の中の一員」と捉える思考を1万年間続けたことがユニークであり、後の文化にも影響している

縄文遺跡群(貝塚・ストーンサークル・水場・土器・土偶など)を調査・研究すると、現代社会が忘れたもう一つの思考方法の実感に迫ることができる。⇒大きな価値

スライド⑥

は当然、価値はあるわけで、先ほど「北海道・北東北の縄文遺跡群の価値は」というふうにしてユネスコに説明していた大部分は、実は日本列島の縄文の説明でもあったわけです。では「なぜ北海道・北東北だけなの？」ということになるわけです。実は遺跡の残りの良さ、保存という部分はかなり大きいのです。北海道・北東北は非常に面積が広いです。そして、開発は、本州の関東以西に比べれば比較的少ないわけですね。ですので、良質な縄文遺跡が、保存状態が良好なまま残されていた。これが非常に大きいわけです。ということで、北海道・北東北は、実は日本列島を代表して先に世界遺産になったのであって、他の価値もやはり一緒に発信していくということが必要になってくると思うのです。今後は世界遺産になりましたので、それぞれの遺跡が他の地域のことをしっかり紹介しあうということが大事になってくるはずなのです。日本列島には、オリジナリティのあるユニークな文化圏がたくさんあって、それらを巡ることでより多くのことが学べるのだということ、それぞれの遺跡の担当者が主張していくとか、説明していくということが必要になってくると思います。

余談ですが、今の話はNHKの「視点・論点」という番組でもしました。これは10分間の番組なのですが、これ一発撮りなのです。私は全然緊張しているつもりはなかったのですが、顔がこわばっているのを、皆さんには「緊張してたね」と何度も言われました。私、今日もそんなに緊張しないのですが、顔のデザインが生まれつきこうなものですから怖いように見られるのです。ある人は、録画して3回見ました、と。1回目はもう顔から緊張感が伝わってきて全然話が耳に入ってこないということで、2回目からはようやく落ち着いて見ることができて、3回目ですらようやく理解したと言われました。ありがたいような、申し訳ないような感じでおりました。この番組でも先ほどのような話をして、定住の意味ということも、もう少し詳しく話をしました。

「各地にはさまざまな縄文文化があるのだよ」と言ったときに、実は私、ここにバッジをつけていますね、今日もつけているのですけども、これ気づいた方はマニアックな方でしょう。福島市の上岡遺跡出土の「しゃがむ」土偶のバッジでした（スライド⑦）。このピンバッジをなぜつけているかという今、私は山形に住んでいて、福島の仕事もしているのです。土偶といえば、カックウ（茅空：中空土偶）などが有名ですけども、他にもたくさんあるのだよということも知ってもらいたかったわけです。

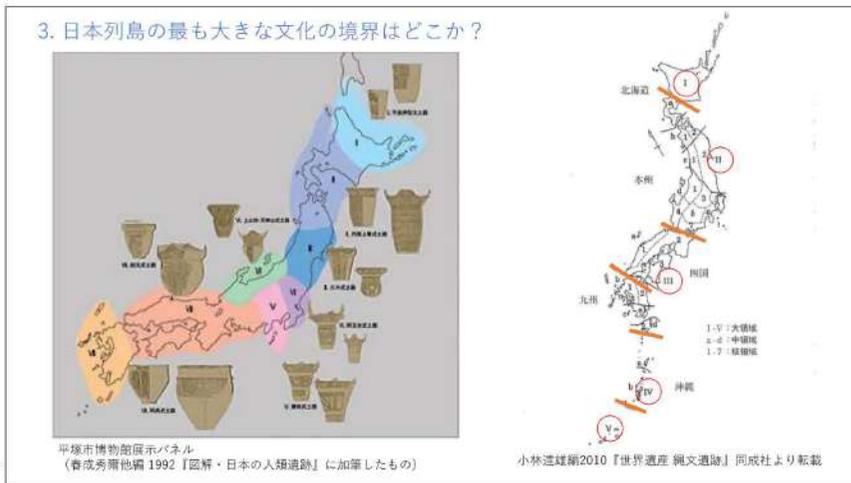
そして、山形にいますので山形の土偶も紹介しないと怒られますので、ちょっと皆さんには我慢して聞いていただきたいのですが、「縄文の女神」という国宝の土偶は有名ですよ。山形県舟形町の西ノ前遺跡で出土したものです。譽田亜紀子さんという有名な土偶女子の著書でも紹介されています。この方は、考古学者よりも多く土偶を見ているのだと思います。ご著書の『土偶界へようこそ 縄文の美の宇宙』（譽田亜紀子:2017 山川出版社）はとても素晴らしく、あらゆる角度から撮影した土偶が載っていて、「角度を変えると分かることがあるのだよ」と教えてくれています。ぜひ、この本を手にとっていただければと思います。



スライド⑦



スライド⑧

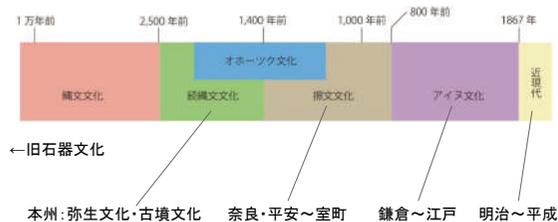


スライド⑨

さて、西ノ前型土偶には実は面白いところが1点あります。それは、足の裏がくぼんでいるのです(スライド⑧)。皆さん、ご存知でしたか。これは西ノ前遺跡発掘調査報告書(財団法人山形県埋蔵文化財センター 1994)に載っている実測図で、土偶の足を下から見たものと断面図です。下がくぼんで空洞になっています。これなかなかご存知無い方が多いと思います。なぜなら、接合されて復元した土偶が立った状態で展示されることが多いからです。レプリカもそうですよね。ですので、足の裏まではさすがに見ることができない。実は、お土産物を見ると面白いのです。この右側は古い物で、多分10年ぐらい前の文鎮のような重たい物なのですけども、これは窪みがありません。しかし、最近の「ガチャガチャ」はよく出来ていて、腰をくの字に曲げて座れるようなデザインにして、足の裏の窪みを見せているわけです。この窪みって何なのだろうかとというのは、実はまだ分かっていません。ひとつの説として、「粘土が全部詰まっていると生焼けになるので火の通りが良くなるように窪ませたのだ」という説で解説されることもあります。ただ、そんな必要のないような小さい土偶にも実はくぼみがあったりします。ですので、例えば、立てるために必要だったのだとか、人と同じように土踏まずの表現なのだとか、いろいろな仮説はあるわけです。実はこの窪みの謎に、私のゼミ生が、今チャレンジしてまして、卒論をこの西ノ前型土偶の窪みで書いているところです。何を言いたいかと言うと、このお土産物、グッズ開発についてです。遺跡の活用、遺物の活用、その中の一つとして考えるとしたときに、「足の裏に窪みがあるのだよ」というこのトリビア。これちょっと面白いと思いませんか? つまり、まだ解決していない謎なのですが、最先端の研究でもあるわけです。そういうものと、このグッズをお土産で渡したときにセットでお話ができると思うのです。つまり、普通の人は気づかない足の裏に穴が開いていて、それが実は研究すると面白いことが分かるのだよ、という情報とセットであるというのがミソだと思うのです。遺跡の活用を考えるうえで、考古学的な部分の情報と一緒に売り出すということが、面白みにつながると思います。

ちなみにですが、古い土産物である文鎮型の土偶の足には穴が開いていません。ということは、この文鎮を作った人は、形をまねたときに足の裏までは見てなかったということになりますね。ガチャガチャで出てくる土偶は、本物の土偶の裏を見たことがあるということになります。場合によっては、3Dスキャナーで撮ったものを参考に作ったのかもかもしれません。これは実は、縄文時代にも当てはまる大事な視点なのです。例えば、この西ノ前遺跡というのは、大きな「縄文の女神」が有名ですが、実は小さい土偶が数十点出土しています。その小さな土偶の足の裏が窪んでいるものといないものがあるのです。つまり、大きい土偶であれば生焼けを防ぐためという理由も頷けますが、小さいものであればそんな必要はない。じゃあなぜ窪ませたのかというと、大きな土偶の足の裏が窪んでいるわけですから、小さな土偶もそう作るべきなのだ、足の裏が窪んでいないものは本式とは言えないのだ、と思っている人が真似て作ったということです。つまり、小さな土偶を作った人たちは、この大きな西ノ前型土偶の足の裏を見たことがあるということです。儀式

北海道の文化の区分



スライド⑩



常呂川河口遺跡の幣舞式土器 (縄文晩期) 所蔵：北見市教育委員会
出典：文化遺産オンライン <https://bunka.nii.ac.jp/heritages/detail/276326/1>

スライド⑪



常呂川河口遺跡の幣舞式土器 (縄文晩期)
所蔵：北見市教育委員会
出典：文化遺産オンライン
<https://bunka.nii.ac.jp/heritages/detail/276326/1>

スライド⑫

の時に運んだことがある村人かもしれない。そういう人が作ったのだと考えると、この足の裏の窪みを持っている土偶が隣の村にもあったのか、遠く離れた村ではどうなのかといったことが当時の儀礼の仕方や参集範囲を復元するうえで非常に大事になります。実際には、少し離れた宮城県にも窪みを持つ土偶があります。土偶の祭祀に参加した隣人が自分の村に情報を伝えたのか、足の裏のことを知っている女性が他所に嫁いだのかもしれませんが。グッズ開発にも、こういう面白い、面白いと思うかは人にもよりますが、最新の情報を盛り込んでいくといいのかなと思っています。

2-4 日本列島の最も大きな文化の境界はどこか？

青野：さて、次に日本列島の中で大きな文化の境界はどこにあるのかという話です（スライド⑨）。実は、北海道は大きな文化圏、つまり2つの文化圏にまたがっているのだということです。一つは、北海道・北東北の縄文遺跡群がある道南西部。そして、それとは全く違う文化というのが道東にあります。今日は小野さんに標津の話をしてもらいます。それは北海道・北東北の縄文遺跡群にはないものです。非常にユニークな、そして魅力的な縄文文化がそこにある。縄文文化だけではない。その後のオホーツク文化も含めた特異な地域であるわけです。特異なというか、そこでは当たり前なのでしょうけれども、道南西部と比べると違いがある所です。この違いというのが、実は遺跡群を活用していく取り組みのときに大きな武器になるわけです。つまり、札幌にやってきた人たちは、南に行って遺跡を見て、東に行ってまた別な遺跡を見て、それぞれの遺跡を対比できる。文化圏を行ったり来たりして見ることができるわけです。こういう売り出し方、北海道の地理的な特徴と文化の特徴、歴史ですよね、それを理解したうえでぜひ回ってください、というようなことができるのではないかと思います。

日本列島には土器の文化圏がいくつも存在しました。円筒土器といわれる土管状の土器を作る地域もあれば、非常に装飾豊かな関東の土器、中部高地の土器などというようにいくつかあるわけです。こういう文化圏、つまり縄文時代を通してどこに差があるのかということ、小林達雄先生が図にしています。これの中で、ローマ数字のⅠ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴと5つに分けた部分の一番北の部分が石狩低地帯になります。おそらく日本列島全体で一番差の大きな場所が道東と道南西部の間になると思います。それぞれはさらに小さな地域に区分されます。例えば、青森県圏域であれば津軽と南部は有名です。太平洋側と日本海側で文化が違うというのは、当然地理的な要因があるわけです。津軽海峡は、一応、差はありつつも行き来はできる関係ですので、北海道・北東北の縄文遺跡群が一つにまとまるというのは、そういう意味がある。その北や東にある道東の遺跡というのは、道南西部と津軽海峡を挟んだ文化の違い以上のものがあるのだよ、ということなのです。それを知っていただければと思います。

ちなみに、北海道の文化区分の中にオホーツク文化という北方からやってきた文化があ

りますが、この時期の東と西の違いは際立ったものです。北海道内における東西の文化的な差異はそれ以前の縄文時代にまで遡ることができます（スライド⑩）。

具体的に見ていくと、土器の形が全然違います。これは北見市常呂川河口遺跡の縄文時代晩期の土器です（スライド⑪⑫）。特徴的なのは底が平らじゃない、不安定な形の舟底形になっている点です。どうもこういうのを見ると、木をくりぬいたようなものにも、それから白樺などの樹皮を剥いで、それを折りたたんだ形の容器にも見えます。つまり、有機質の物を土器で作ってみるとこういう形になるのではないかというようなイメージ、こういうのは、道南西部では見られません。道東のオリジナルの器形です。しかも本州でも見られないということです。中には、獣の皮で作られた容器、例えば、水を溜める水筒のような物が原型としてあって、それを粘土で作ってみるとこういう形になったのではないかと思われるような特異な形の土器もあります。

道南西部はどのような土器かという、青森県の亀ヶ岡式の土器、青森・岩手辺りの土器と同じような形の土器を使います。というふうに、形を見ても発想そのものが違うのではないかなという印象を持ちます。こういうものも石狩低地帯を挟んで東と西でちょっと行くだけで、違いに気づくことができる。あるいは気づいてもらうような戦略を立てる、ということが必要になってくると思います。

2-5 世界遺産だけに縛られない柔軟な活用戦略

青野：では、この後は少し頭を柔らかくしてというところなのですが、活用というのを考えていきます。今まで話をしました縄文文化、それから世界遺産の基礎的な部分を念頭におきながら、でも柔軟に、どうやったら魅力的に一般の人たちに縄文の魅力を伝えられるか、楽しんでもらえるか、というようなことをみんなで考える必要があると思っています。そのときに、どうしても今日私は少し固めな話をしてしまいました。考古学を研究する人間というのは、どうしてもそういう癖のようなものがあります。でも、一般の人たちに分かりやすくというときに、やはり柔軟性というのが大事ですよ。ですから、いろいろな人たちに関わってもらいながらアイデアを出してもらうのが良いと思っています。民間の方たち、特に事業者の方たちは、本当に頭も柔らかくさまざまな取り組みをすでにされています。シー・ビー・ツアーズの戎谷侑男社長は、もう20年ぐらい前でしょうか、「北黄金貝塚でツアーを作りたいんだ」というふうに言ってくださって、まだ全然お客さんもない時から、札幌発の北黄金貝塚に来るツアーを作ってくれました。ようやく世界遺産になった。これは、そういう民間の方たちの応援があつてこそであると思っています。戎谷さんたちの発想の中で私がすごいなと思ったのは、やはり遺跡を取り上げるだけだと、それを目的に行く人にはいいかもしれませんが、それ以上のものにならないという点です。つまり、遺跡だけを巡るツアーではなく、その周辺の食ですとか、他の観光の部分もやはり組み合わせていくほうが、多くの人に関心を持ってくれるということです。ですので、もちろん食の中には、縄文

人が魚介類をたくさん食べた話なども盛り込むことができますし、噴火湾の今食べても美味しいいろいろな物を実際に食べて喜んで帰ってもらおうということもできるわけです。私たちは、どうしても世界遺産の所だけを巡っているとツアーになるのだと思いがちです。確かに北海道は広いので一気に回りたいと思うと、「世界遺産だけ」というツアーになりがちです。でも考えてみると、日本遺産とか北海道遺産というものもありますし、他にいろいろな指定のものもあります（スライド⑬）。さらには、縄文文化だけではなくて、アイヌ文化の博物館もあればコタンもあるわけです。そして、開拓移住の歴史、和人の文化を表すものもあって、北海道の歴史と文化というものを総合した見せ方ができますよね。それにもっと魅力的なというよそに失礼ですが、食であったり、ジオパークであったり、温泉であったり、いろいろなものが北海道にはあります。ですので、縄文がテーマであれば、世界遺産がテーマであれば、その情報を盛り込んだメニューというものを考えれば、あとは自由で良いのではないかというふうに思っています。

例えば、私が伊達市にいた時に取り組んだものとして、蝦夷三官寺の北海道遺産登録という事業がありました（スライド⑭）。蝦夷三官寺とは伊達市の有珠善光寺、様似町の等澗院、厚岸町の国泰寺という江戸幕府が作ったお寺のことです。この時にも、戎谷社長には「じゃあツアーを作ろうよ」という話をされまして、これを一気に回るとするのは結構大変なのです。遠いのです。その中で、「他の北海道遺産も合わせて巡るツアーにしたほうがいいよね」ということになりました。ですので、今も蝦夷三官寺を巡るツアーというのをやっていたように思っていますが、おそらく他の遺産も見られているのでしょう。

この蝦夷三官寺というのは幕府が作ったので、和人の歴史なのですね。ただ、アイヌの人たちとの関りも非常に強いのです。やはり私たちは、歴史を見る上で客観性というのが非常に大事になります。和人側だけの考え、アイヌの側だけの考えというのではなく、双方の考えをしっかりと理解するということが歴史や文化を、さらには民族を正しく理解することにつながると思います。ですので、和人の遺産を見るのだとしたら、アイヌの人たちのものも一緒に見る。ウポポイに行くということの重要性というのはあると思うのです。ですので、その辺のバランスをしっかりと取ったツアーというのが望まれると思います。

そして、何より遊び心も大事だなと思っています。私たち北海道遺産を目指した時に、3市町の担当者や市長さん、町長さんたちとも何度も打ち合わせを重ねたのです。その時に、まだコロナなんかなかった時ですから、会議をした後に食事に行きます。そうするとお国自慢が始まりますよね。伊達はホタテが有名だ、様似はツブがうまい、厚岸は言わずと知れた牡蠣です。酒も飲んで、担当者もいい感じになってきますと、いろいろアイディアが出てくるわけです。じゃあこの3つを組み合わせた寿司を作って売り出してはどうだろうか。名前は“蝦夷三官寿司”でどうでしょうか、というような話も生まれてくるわけです。遊び心というのは非常に大事で、食の魅力と親父ギャグで売り出していこうというふうに思っています（スライド⑮）。

4.「世界遺産だけに縛られない柔軟な活用戦略 —北海道の歴史・文化への理解を基礎に—

- ・世界遺産
- ・日本遺産
- ・北海道遺産
- ・国指定史跡
- ・北海道指定史跡
- ・市町村指定史跡
- ・縄文文化
- ・アイヌ文化
- ・和入文化



スライド⑬

蝦夷三官寺 ～未来に伝えるアイヌと和人の関係史～

北海道遺産に認定!

江戸幕府が1804年に建立した寺院

- ・有珠善光寺(げんこうじ)
- ・様似等澗院(どうじゅいん)
- ・厚岸国泰寺(こうたいじ)



役割: 蝦夷地で死亡した和人の葬儀とアイヌ民族への仏教布教

背景: 対ロシア政策として幕府による蝦夷地支配を示す狙い

特徴: 緩やかな文化接触
⇒ アイヌ文化の独自性
⇒ 寺への崇敬の念の保持

スライド⑭

蝦夷三官寺みらいネットワーク

- 構成団体
- 有珠善光寺・様似等澗院・厚岸国泰寺
 - 伊達市・様似町・厚岸町
 - 有珠善光寺文化振興会
 - 有珠観光ボランティアの会
 - 伊達アイヌ協会
 - 厚岸ふるさと友の会

「明治期以降とは異なるアイヌと和人の関係」



伊達市

- ・文化資源を通じた住民の交流
- ・巡回展と文化観光
- ・蝦夷三官寺フェア

様似町

厚岸町

「蝦夷三官寺みらいネットワーク」



スライド⑮



スライド⑯

全国各地にそういう遊び心溢れるメニューがあります。例えば、島根県の博物館では「古墳ゼリー」というのがあって、ゼリーを食べていくと、中からクマのグミでできた被葬者が出てきます。「四隅突出カレー」は弥生時代の墳丘墓の形のカレーライスです。剣先スコップ形のスプーンで食べさせるというところも乙ですよ。

それから、食べ物に絡めて、しっかり学んで楽しむことも重要だと思っています。例えば、お菓子づくり考古学者のヤミラさんがやってくださったワークショップです（スライド⑯）。2017年3月に「土器! Doki!? 縄文ワークショップ“ドッキー”をつくろう」とのイベントを伊達市で開催した時のことですが、このヤミラ（本名・下島綾美）さんはこだわりがすごいのです。実際の土器を、ちゃんと子供たちに観察させます。色はどんな色かな、模様はどんな模様かな、縄文を転がしているのかな。それから、断面は真っ黒なのか、それともクリーム色と黒のサンドイッチ状なのか、なんていうふうにちゃんと観察させて、ワークシートに書かせます。それを基にして、クッキーの生地の色を付けます。例えば、食用の竹の炭を練り込んで色をつけたものを、サンドイッチ状の断面だったら3枚重ねて焼きましょう。文様は沈線文なのか縄文なのか、ちゃんと本物と同じように作るということ。こういうふうにして実際に焼いて、食べられるドッキー（Dokkie）を作ります。ドッキーと本物の土器を並べてみると区別がつかない。つまり、観察する、ものを見る、というのは考古学の基本なのですが、そういうことを楽しく知ってもらうためのワークショップということになります。

ということで今日、私が話をしたのは、縄文の世界遺産の価値もそうですし、これからの活用のことを考えていくのですが、大事なことは世界遺産だけに縛られない柔軟さです。他のものとの組み合わせというのが、おそらく魅力を倍増してくれるのだろうなという予測が立ちます。

ただし、本質から離れすぎないことも大切です。活用と言うと、どうしてもそのことだけ

が空回りしてしまって、遺跡や遺産と関係のないものに発展してしまう可能性があります。例えば、遺跡の中を全く違う施設にしてしまうと、そこが遺跡だということは忘れ去られてしまうわけですね。「綺麗な花を植えると人が来るから遺跡に花を植えたほうがいい」という考え方があるかもしれませんが、遺跡であることが忘れられ、丘全体に広がる「お花畑」としてだけ認識されてしまったら意味がないわけです。つまり、本質は外さない。北海道の歴史・文化というものを理解してもらって、知ってもらって、その魅力に気づいてもらって、喜んで帰っていただく。そのための入り口、敷居を低くして楽しくする。それをどうすればいいのかなということが課題になってくるわけです。ですので、あくまでも北海道の歴史・文化への理解というものを基礎において、あとは柔軟な考え方で活用していくというのが重要なかなと思っています。

岡田: 青野先生ありがとうございました。北の縄文遺跡の世界的な価値というところから活用を踏まえ、今後私たちが考えていく際のポイントを踏まえてくださった基調講演でした。

3. 事例報告：標津遺跡群にみる根室海峡沿岸地域の縄文文化

岡田: 次に小野園長から、事例報告として、標津の遺跡群についてご紹介していただきたいと思いますが、それに先立ちまして、小野園長のプロフィールを簡単にご紹介させていただきます。

東京都八王子市出身の小野園長は、北海道大学大学院を修了後、北海道内の市町村にて学芸員業務に従事されてきました。2009年より標津町のポー川史跡自然公園に勤務され、学芸員として考古学研究及び史跡保存に携わってこられました。それでは小野園長、お願いいたします。

3-1 北海道東部の遺跡について

小野: 皆さんこんにちは。ポー川史跡自然公園の小野と申します。どうぞよろしくお願いたします。今の青野さんのお話を伺っていた中で、いくつか印象に残ったのがあったのですが、全国に縄文遺跡がある中で、何で北海道南西部と北東北の遺跡が世界遺産になったのかと言った時に、青野さん、保存状態が良好だというところに触れていましたよね。多分、保存状態が良好だということだけを取り上げると、北海道東部北部の遺跡のほうが、かなり保存状態は良い遺跡があるのです。それでもやっぱり北海道南西部と北東北の遺跡が世界遺産としての価値を持って世界遺産登録されたのかというその決定的な違いは、おそらく保存状態がいいのだけれども、世界遺産登録された地域については、例えば、開発に伴う緊急調査とか、あるいは大学が入りやすいフィールドということで学術調査も適度な発掘

調査があつて、良好な保存状態の遺跡の価値をさらに高めるような学術的なバック情報が結構あるのだらうかと、そういうところが決定的な差かなと思っていました。

そこで、北海道東部の遺跡がどんな場所なのかというと、十分な発掘調査も行われていない地域なので、文化的なところはなかなか説明しづらいところがあるのですが、実際にどんな場所なのかということ、この後、私のフィールドとしている標津遺跡群の話題を取り上げて紹介していきたいと思います。

タイトルは「標津遺跡群に見る根室海峡沿岸地域の縄文文化」ですが、正直、縄文文化というところの話はほとんど触れていなくて、この標津遺跡群の特徴に従って、かなり幅広い時代でのお話というかたちになります。

まず、標津遺跡群の位置は、北海道東部の根室海峡沿岸に面した標津町にあります（図-1）。標津の市街地から北に4キロの場所に、ポー川と伊茶仁川という川が流れています。その河川の流域に標津遺跡群が広がっています。その中でも今、画面の図の緑色で塗られた所、そこに標津遺跡群の中核的な遺跡である伊茶仁カリカリウス遺跡という遺跡が残されています。ここの遺跡の特徴は、現在の地表面から古代の竪穴住居跡をくぼみとして観察できるということです。ちょうど今、左下の写真にあるように、これは春先に撮影した写真ですが、くぼみに雪が溜まっている状態、このような形で遺跡が残されています。

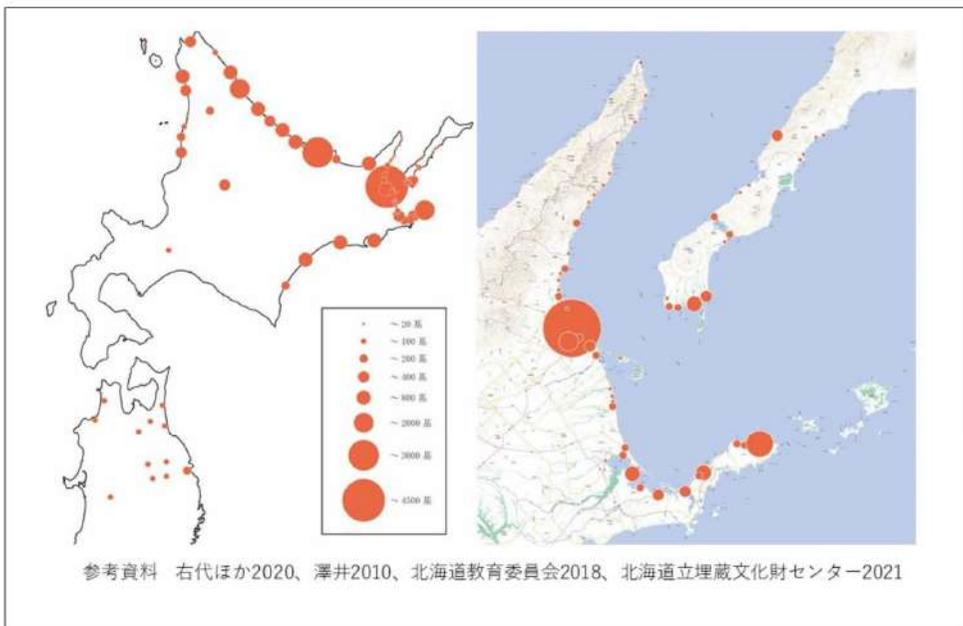
この標津遺跡群の価値をいろいろまとめて整理し直しているところで、そこで今、整理された要点を紹介していきたいと思います。

まず、世界史的な視点に立った時の標津遺跡群の価値は何にあるかというと、縄文時代だけでなく、その後の続縄文時代、擦文時代、アイヌ文化期まで、およそ1万年間ずっと人の暮らしが続いてきた遺跡であるということ。さらに、そういった遺跡が埋まりきらずにくぼみで残る竪穴住居跡として残されている点。これが非常に大きな、まず世界的な視点に立ったときの価値かと思っています。次に、日本史的な視点で捉えると、縄文時代から一貫してサケの利用に重点を置いた暮らしが営まれた、そういった遺跡群であるということになります。そして、最後は北海道史的な視点ですが、これは縄文から離れてしまうのですが、オホーツク文化と擦文文化という、大体1000年前ぐらいに栄えた文化の2つが接触融合したトビニタイ文化の形成過程を伝える非常に貴重な場である、こういった4つに絞られるのかなと考えています。特に、この中で縄文時代からアイヌ文化期まで人の暮らしが続いてきたということが大きな一番の特徴かなと思っています。

その価値の部分について、もう少し詳しく見ていきたいと思っています。まず、縄文時代からアイヌ文化期まで1万年継続して人の暮らしが続いて、しかも竪穴がくぼみで残り続けると一体どういったことが起こるかということ、非常に大規模な竪穴住居跡群が形成されることになります。どれくらい大規模かというと、今、画面に出た図は、北海道北東北で確認されているくぼみで残る竪穴群、それを地域ごとに調べたものです（図-2）。見つかったくぼみの数に応じて円の大きさを変えて表現しています。円が大きいほど竪穴の数が大き



図-1 史跡標津遺跡群の位置



参考資料 右代ほか2020、澤井2010、北海道教育委員会2018、北海道立埋蔵文化財センター2021

図-2 長期にわたり形成された大規模竪穴群

いということを表しています。この図を見てもらうと分かる通り、北海道東部から北部にかけてが、非常に大規模な竪穴が残されている地域だということが分かります。そのなかでも、根室海峡沿岸にかなり大きな円が密集しているのが分かるかと思います。そこで、この根室海峡沿岸をさらに拡大した図がこちらです。これを見ていくと、竪穴群が根室海峡沿岸のいろいろな所にあるのですが、なかでも標津町にある標津遺跡群の所が、とりわけ大きな円で描かれています。実は、この標津遺跡群全体で竪穴のくぼみが4千を超える数残されています。これは国内で最大の数と言っていいと思います。これが縄文時代からアイヌ文化期まで、その累積によって非常に大規模な竪穴群が形成された、そんな場所になっています。

3-2 自然環境とセットで残る1万年の居住跡「大規模竪穴群」

小野：次に、遺跡での暮らしの特徴についてですが、標津遺跡群では縄文時代から一貫してサケの利用に重点を置いた暮らしが続いていたということが分かっています。遺跡を調査しますと、当時食べたものの残りが焼けた骨として見つかるのですが、その内容を調べると、縄文時代では、見つかった動物の骨の全体の内の9割近くがサケの骨でして、かなりサケを重視した暮らしだったということが分かっています。これは標津遺跡群の際立った特徴と考えています。

このような特徴を持つ標津遺跡群ですが、実は世界遺産登録された北海道・北東北の縄文遺跡群と同じ時期に世界遺産登録を目指して手を挙げたという経緯があります。平成19年に、先ほど青野さんの報告の中でも紹介されていた北見市の常呂遺跡群、そこと一緒に「北海道東部の窪みで残る大規模竪穴住居跡群」という資産名称で提案書を国に提出しています。しかし、残念ながら暫定一覧表記載候補という位置付けにとどまっております。現在はそれぞれの資産の価値を高めるために活動を継続しています。

この標津遺跡群、北海道東部のこういった竪穴群の魅力は一体何にあるのかということに触れていきたいと思います。この魅力については、標津遺跡群に隣接して天然記念物の標津湿原という湿原があり、その湿原をはじめとして、遺跡周辺には世界自然遺産の知床、あるいはラムサール条約登録湿地の野付半島など、優れた自然環境が残されています。おそらく、こうした自然環境とともに遺跡が残されていること、これが最も大きな魅力ではないかなと感じています。1万年にわたって人と自然が調和してきた暮らしを続けてきた結果が、自然環境とセットで残る大規模竪穴群という姿で今に現れているのだと考えているところです。

そこで、ここからは自然環境とともにある遺跡が一体どんな姿をしているのかということ、映像を通じてお伝えしたいと思います。

最初の映像は、カリカリウス遺跡のドローン映像です（写真-1）。画面手前に川が見えていますが、これがポー川です。奥に見える山並みは知床連山です。だんだん遺跡のほうに近づいていきます。ちょっと白い点々が見えますが、ここに復元した竪穴の施設がありま



写真-1



写真-2



写真-3

す。これが復元した堅穴の施設です(写真-2)。昭和56年に発掘調査をした堅穴を対象に、床面の構造を復元公開できるように整備した場所です。ここの堅穴については、縄文時代のもではなく1000年前の擦文時代のもが整備されています。この復元された場所を過ぎていくと、画面の奥に落ち葉で覆われたくぼみが見えてきます。これが古代から残されたままの状態を観察できる堅穴のくぼみとなっています。

こちら遊歩道沿いに見える堅穴のくぼみです(写真-3)。この場所はカリカリウス遺跡という遺跡なのですが、その遺跡の中でも最も堅穴が密集している場所です。この遊歩道周辺の区画だけで300ヶ所以上の堅穴のくぼみが集中して残されています。これも大体1000年前の擦文時代のもです。

こちらは同じ場所を春先にドローンで空撮した映像です(写真-4)。雪が溜まっている場所が堅穴のくぼみとなっています。かなりの数の堅穴が密集していることがよく分かると思います。

こちらは夏場のドローン映像です(写真-5)。遺跡全体は、ミズナラ主体の広葉樹に覆われています。どんぐりなどが秋に実をつけるのですが、手前に見えている川もあって、森が広がっていて、見渡す限りの森の中がカリカリウス遺跡ということに指定されている範囲になっています。森の中には、このような樹齢500年を超えるような巨木も多く残されています。

こちらコゴミなのですが、遺跡周辺には多くの山菜類も自生しています。

こちらの映像は、遺跡に隣接する天然記念物標津湿原です(写真-6)。国の史跡と天然記念物が隣り合わせで一体的に保存されていまして、両方合わせると東京ディズニーランドと言うと12個入るぐらいの範囲が保護区域として、現在保存されている状態です。

こちらは湿原に自生しているエゾイソツツジという花です(写真-7)。アイヌの人たちは、この葉っぱを煎じてお茶のようにして飲んでいたと言われていました。

こちらはエゾゴゼンタチバナという花で、絶滅危惧種に指定されている花です(写真-8)。夏に赤い実をつけるのですが、それを食べることができます。

こちらはワタスゲですね(写真-9)。アイヌの人々はこの綿の部分を取っておいて、冬場の防寒対策に靴に詰めていたそうです。

湿原には草原性の野鳥も多く見ることができます。遺跡周辺では、これまで115種の野鳥が観察されています。

鹿は珍しくもなにもないと思うのですが、遺跡内には鹿の他に普通にクマも生息しています。今年、札幌でも結構クマ騒動がありましたが、うちでも7月にクマが頻繁に出没しまして、コロナではなくクマが出たことによって遺跡の公開を停止した時期が何回かありました。

こちらはポー川の流れです(写真-10)。茶色く濁っているのですが、決して汚れているわけではなく、湿原の成分が滲み出て褐色に見えています。水質的には非常に良好な川でして、清流に育つといわれるバイカモが見られるほか、北海道東部で生息している淡水魚



写真-4



写真-5



写真-6



写真-7



写真-8



写真-9



写真-10



写真-11



写真-12

のほとんどが生息しています。このポー川の水というのは、遺跡周辺で湧き出ている湧き水を集めて流れています。湧き水は真冬でも凍ることがありませんので、堅穴を残した人々たちは、冬でもここに来れば水を手に入れることができたのですね。こちらは湧き水の泉です（写真-11）。泉の底からどンドン水が湧き出ているのですね。こうした湧き水の周辺というのは、サケの仲間の産卵場としても非常に貴重な場所です。春先になると多くのサケ科魚類の稚魚が姿を見せています。昔はここに遡ってきて、鮭が産卵をしていた、そんな場所になります。今の画面はヤマメの稚魚だと思います。こんな光景が春先に来ると、よく見ることができます。

再びポー川の映像に戻るのですが、カヌーが今移動しているのですが、川は飲み水とかサケを獲るだけではなく、かつては交通路としても重要な役割を果たしていました（写真-12）。非常に流れが緩やかな川なので、当時であれば丸木舟を使えば、河口から遺跡まで舟でさかのぼって移動することもできたと思います。この映像は、丸木舟に乗って移動していた人々と同じ目線で見た川の様子です。遺跡群には、カヌーに乗ってポー川を移動する体験なども行なっています。

このように、標津遺跡群の堅穴周辺というのは、当時の暮らしの理解につながるような自然環境が良く残されています。私はこうした遺跡と自然環境が一体的に残されている点というのが、この遺跡群の最大の魅力だろうと考えています。

以上で私からの話題提供の報告を終わりたいと思います。

4. パネルディスカッション、質疑応答

岡田：小野園長、ありがとうございます。基調講演でご紹介いただいた北東北、南北海道
の遺跡とはまた少し違った道東の遺跡の特徴についてご紹介いただきました。

それではここからパネルディスカッションに移りたいと思います。パネラーは、今ご登壇
いただきました青野先生、それから北海道の縄文文化の多様性について、これから話題提供
をしていただきます標津町ポー川史跡自然公園の小野哲也園長、そして西山先生にご登壇
いただき、私が司会進行を進めていきたいと思います。

早速、視聴者の方から質問が来ていますので、全部はなかなかご紹介できないかもしれ
ないのですが、できるだけご紹介してディスカッションの中でお答えいただければと思いま
す。

4-1 北海道・北東北の縄文遺産だけがなぜ世界遺産に？

岡田：最初に、「北海道・北東北の縄文遺産と本州、特に東日本の縄文遺産はどこが違うの
でしょうか。本州の縄文遺産には世界遺産の価値はないのでしょうか？」という質問が来て

います。この点、青野先生それから小野園長のお話の中でも少し触れられていましたが、改めてポイントを整理できればと思うのですが、この点については、ひとつ世界遺産の制度的な特徴も関係していると思いますので、まず西山先生から始めていただいて、次にもし青野先生、それから小野園長のほうで考古学的な観点から補足があればお願いします。

西山：ありがとうございます。お二人の先生に、大変魅力的で濃密なプレゼンテーションをいただき、非常に心が豊かになったような気がいたします。特に、前半では青野先生の定住する狩猟採集文化そのものが実は世界史的に珍しく、それがあだけの物的な証拠をもって示されるというのは非常に迫力のあることです。私も北の縄文を少し勉強はしたつもりだったのですが、やはり世界遺産の登録申請では、一番の核となる価値、まさに Outstanding Universal Value ということで、他に類を見ないとか、傑出したとか、代表するといった、かけがえのない価値が問われるわけですから、そういう意味で、ここは譲れない、これこそが日本の縄文の価値なのだという、まず根幹的な部分を教えていただいたのだなと思いました。

しかし、私も最初に問題提起的に話させていただいたように、ご質問された方もまさに同じだと思うのですが、どうして北海道・北東北の縄文遺跡が優れていて、それ以外の地域の縄文遺跡は劣っているのか、という風に、どうしても普通の人は考えてしまいます。世界遺産になれる・なれないの差と言ってもいいでしょう。ところが今、岡田先生もおっしゃったように、世界遺産というのは実はかなり難しいと言いますか、理屈っぽいところとか、戦略的なところが当然一方であって、私も10年前に北の縄文の学識者の懇談会、道庁さんが主宰される会議に出て議論していたのですが、やはり最初は、このまま東北と北海道だけでやっていけるのかなと心配していました。全く同じようなことが、「明治の産業革命遺産」の時にもありました。最終的には「明治日本の産業革命遺産」という形で登録がなりましたけれども、当初は「九州・山口の近代化産業遺産群」ということで、九州・山口だけで知事の人たちが集まり、自分たちでやろうということを書いていたわけです。それが結果としては、やはり日本の産業革命遺産は九州・山口だけではないということで、その理屈を守れずに、日本の他の地域の静岡の韮山や宮城の釜石、つまり関東地方、東北地方も入れなければならなくなった。北の縄文も、そういうようなことに結局なるのではないのかと考えていたわけです。だから北の縄文というのは、やはりどこかで地域の限定性をギブアップせざるを得ないのではないのかなと、実は私、今にして思うのと不遜ですけれど思っていたのです。でも結果としては、しっかりとした理論武装のうえで、先ほどの文化の違いの話もありましたけれども、きちんとこの地域で北の縄文という形で説明しイコモスの専門家やユネスコの世界遺産委員会を説得した、納得させたというところがあつたと思うのです。どちらかと言いますと今日は、別に世界遺産だけが大事ではないという話を後半したいということがありました。そこで青野先生も、どちらかという、その部分はあまり細かく説明せずに、どちらかという縄文の価値についてお話されたようにも感じたのですが、やはり視聴者の

方の多くが、どういう理論武装ができたから北の縄文が他の地域に広がらずに世界遺産になれたのか、ということについて、もしよろしければ追加でお話しいただけないかと思えます。

青野：はい、分かりました。一つは、もしこの文化圏ではなく世界遺産を目指す方法としてどういう手があったかという、例えば、北海道から一つとか、本州から3つとか、九州からいくつみたいなやり方というのはあったかもしれません。そうすると、今度は縄文文化というのはそんなに広いのかという話が出てきます。世界の中で、文化圏というのは実は非常に小さいまとまりとして考えられています。日本の縄文が1万年間ずっと続いたということも、世界遺産関係の人からすると、それは実は懐疑的なのです。普通は1000年、2000年で別な文明に変わるだろうと言われていました。それが縄文の場合は、もちろん縄文前期とか中期とかという違いはあるにしても、長い継続性があるのだ、島国なのでありうるという話をしています。その説明をするのに付け加えて、じゃあ日本列島全体も、ということになると、時代も地域も拡大して説明することになるわけです。そうすると、なかなか説明しづらいということが実際にあります。北海道・北東北という、同じような土器を作る文化圏、同じような生活スタイルの文化圏というのが、例えば、中国だと西安の近くの仰韶文化とか、いくつかあります。それぐらいの地域的なまとまりというのがちょうど円筒土器文化圏の広さと合うわけなのです。つまり、一つの文化圏、そして長い歴史というものを説明するときに、やはり、あそこもここも、というのは受け入れられなかったということだと思います。つまり、論理性が欠如するということです。これは世界遺産に登録する一つのテクニックであって、本州の他の遺跡に価値がないということは全くないです。むしろ他の文化、豊かな文化というのがあるということを示せると思っています。

西山：ありがとうございます。ちょっと私も生半可な知識かもしれませんが、やはり本州のほうに行くと弥生文化が入ってくる。まさに北海道では、続縄文から弥生という時代を経ずにアイヌの文化期に入っていったという部分で、その考え方、要するに非常に長い1万年とも12000年とも言われる縄文が続いたということですね。気候的な問題もあるのですが、その辺である程度区別ができたというふうにも理解していたのですが、その辺はどうなのでしょう？要するに、弥生に移行しなかった、縄文的な文化がアイヌの時代までずっと続いたという意味においては、南や西のほうとはある程度の線が引けるのでは、という考え方はなかったのでしょうか。

青野：そうですね。やはり、歴史的な背景というのは大きいですね。特にアイヌの人たちに繋がる基となる文化なのだということで、これは海外の方たちに説明する時に、すごい説得力がありました。ただ、そんなに実は推薦書ではそこを強調してはいないのです。それはなぜかということ、北海道は当然アイヌの人たちに繋がるという考えではあるのですが、

青森・秋田・岩手というのは、そこまででもないということもあって、一つを強調すると一つが説明つかないということもありました。ここも非常に難しいところなのですが、推薦書ではそこまでは説明できませんでした。ただ、これから活用ということを考えていくときに、やはり北海道の歴史を正しく理解してもらう。それは、縄文、続縄文、擦文というような文化の流れです。文化は変わりつつも受け継がれていきますよね。縄文＝アイヌではありません。でも、受け継がれていった文化と歴史というのを理解してもらうというのは、非常に大事だと思っていますので、これは欠かせないところだと思います。

西山: 本当にご説明が難しいものを無理やり聞いて大変失礼しました。やはり一番根幹となるストーリーをしっかりと説明するために、あまり他の説明をむしろ加えないほうがいい。こちらを立てるとあちらが立たずというようなこともなる。それもやっぱり世界遺産の戦略であったと理解できました。

一方で、これから北海道として、今日はまさにそのためのフォーラムだと思うのですが、世界遺産をいかに活用するのか、その一つのインパクトをどのように地域として受け止めるのかということを考えれば、申請時に遠慮して書かなかった部分を北海道の中で大いに展開していくということはあり得るのだということ、私も強く感じました。ありがとうございます。

4-2 厳しい気候の寒冷地に定住したわけ

西山: 他にも、私のほうでいただいた質問を見ていたのですが、これは小野先生に伺います。視聴者の方からのご質問で「なぜ厳しい気候の寒冷地に定住することになったのでしょうか。また縄文人と呼ばれる定住した人たちは、どんな人たちだったのでしょうか。和人だったのか、アイヌだったのか、オホーツク人だったのか」という書かれ方をしています。まず一つは、これだけの濃密な竪穴住居群が生まれたということから、厳しい寒い気候の中に、なぜそれだけの人たちが集住したのだろうかということについて、小野先生、ご説明いただけますか。

小野: そうですね。青野さんの話の中でも定住の話が出ましたが、通年の定住ということで貝塚の事例を挙げておられました。しかし標津遺跡群を中心とした根室海峡沿岸は、根室半島の一部を除いて貝塚は出てこないのです。自分はむしろ、通年でそこががちり定住していたというよりは、根室海峡の沿岸を広域に利用するような、移動しながら、拠点はあるのだけれども、結構流動的な暮らしをしていたような、縄文の頃からそういう暮らしがあったのではないかなというイメージで思っています。もしかしたら寒冷地ならではのそういった暮らし方もあったかもしれないという印象も持っています。これはもう標津遺跡群のローカルな部分の話になりますが、それが多分一つ目の質問の答えとなるでしょう。

2つ目は、縄文人と呼ばれる人たちが、どういったルーツなのかというところですが、これは和人もアイヌも基本的には縄文がベースにあると思うのですが、その後も人種的には一緒だけれども、多様な文化の混じり方というか、交流の仕方の違いによって、本州では弥生文化が、北海道では続縄文文化へと展開し、大きく2つの道に分かれていきます。これがその後の和人となっていくか、アイヌになっていくかという、大きな分岐点になったと思うのです。さらに標津遺跡群においては、縄文文化をベースにした続縄文、擦文文化の人たちと、より北方の地域から移住してきたオホーツク文化の人たちとの接触の場となり、トビニタイ文化みたいな特徴的な文化が育まれたりします。北海道は広いので、いろいろな文化が交錯するような、そういった場の遺跡があるというのが標津遺跡群の特徴かなと思っています。答えになっていないかもしれませんが。

西山:ありがとうございます。これも私の生半可な知識ですが、オホーツク、カムチャッカ、北の方から人が来られたと、仮にそういうことも考えられるわけですよね。必ずしも南から北に行ったわけじゃなくて、北から人が来たという考え方はできますよね？

小野:オホーツク文化については、そう言えると思います。あと、縄文の頃も、縄文時代前期の石刃鍬文化などは、北から入って来た文化なので、北海道だけでなく暮らしていた人だけで成り立っていたわけではなくて、時代のいろいろな節々に結構外から入ってくる人たちはいたと思いますね。

西山:質問された方のイメージだと、多分だんだんと北に人が移っていくような発想かと思いますが、実はより北の人からすれば、むしろ北海道は温暖というか、より住みやすい場所だったかもしれないということもあり、またそういう方々が突然いなくなるという、オホーツク文化に関わる謎みたいなものが、ある意味非常に面白いと思います。先ほど青野先生のトリビアの話ではありませんが、いろいろな考えるべき、我々がロマンを感じたり謎を感じたり、不思議を感じたりするような情報がたくさん秘められているのだろうと、私も感じます。

4-3 縄文の精神文化の魅力を発信する

岡田:ちょっと視点を変えてみます。「北の縄文」を中心とした北海道の縄文の遺跡や文化というのは、観光の文脈で考えてみたとき、訪れる人にどうやってその魅力を発信するかというところが一つポイントになると思うのですが、視聴者の方からのご質問で、「縄文の人々の精神性が、現在の日本人にも受け継がれているという話が青野先生の発表でありましたが、その点を少し詳しく教えていただけると嬉しいです。また、いわゆる海外におけるアミニズムと縄文のアミニズム、精神文化は違いありますか？」という質問が来ています。

私からもこれに関連して、精神文化はなかなか目に見えません。いわゆる遺跡を復元するのは異なり、精神文化は復元などが難しいなかで、それを初めて北海道を訪れた、あるいは初めて日本を訪れた人に伝えるときの工夫とかポイント、もしあれば併せて教えていただければと思います。

青野：はい、精神文化の説明をどうすべきか。難しいですよ。現在にどう繋がっているかという話も、本当に一言では絶対に言えませんよね。簡単に言えば言うほど間を端折ってしまうので誤解を生じてしまうからなのです。北海道の縄文の文化がいろいろな時代を経て、変容しながらアイヌの人たちに受け継がれています。例えば、物送りという儀礼がある。それが受け継がれていっているというのは、もちろん儀礼を辿っていくと証拠もあるわけです。例えば、熊送りですとか、アイヌの人たちが熊の頭骨に穴を開けて霊を逃がすのだといいます。そういう方法を、熊の骨に穴の開いたものがいつから出てくるのかということをやらずと辿っていくと分かるわけです。これは慶応大学の佐藤孝雄先生という方がやられていることですが、熊送りの儀礼を辿っていくと、やはり12～13世紀までは辿れる。ただ、頭に穴が開いたものは縄文までは遡らないのです。それでも、統縄文期の遺跡からは熊の彫刻がされたスプーンが出てきたり、縄文人は熊の犬歯を大切に扱ったりというような、形を変えながらやはり移って行っているわけです。そういうことを考えていくと、本州の文化も、例えば、縄文土器に付いているカエルやヘビの文様も同じです。例えば、諏訪神社の正月の行事にカエルが登場したりするのです。そういう神道の中に実は生きている可能性があるとか、そういう物証を積み重ねていくということが大事になります。なので、今ここでパツと言うような、軽々しく言うようなものではないということですね。ただ、繋がりには当然あると私は思っています。また別の機会に話をさせてください。とりあえずそんなところでしょうか。

海外との違いですが、例えば、動物に靈魂があって、それが飛んでいくというような時に、頭に穴を開けて天に返す、という所が圧倒的に多いのですが、でも、エスキモーなんかだと、例えば、アザラシの膀胱に霊があると考えて、狩猟した後に氷の穴から膀胱の部分だけ切り取って流すのです。そうすると、海の底にイヌアという靈魂が戻って、そしてまた生まれ変わって帰ってくるのだという考え方があります。ですので、天上に上がるという考え方と、海の底に沈むという考え方の違いや、頭に靈魂があるのか膀胱にあるのかといったような違いなどは確かにあります。ただ、根源的な部分は似ている。狩猟採集文化の特徴的なものだと思います。

4-4 自然遺産、自然環境と縄文

岡田：次に、小野園長にご質問が来ております。かつて釧路にお住まいだった方からの質問です。この方は、「非常に広大な阿寒釧路地区の保存には前田一步園のご支援があったので

はないでしょうか」というコメントとともに、「発表の中でも見せていただいたように、貴重な縦穴遺跡群と同時に、当時人々が暮らしていた時に見ていた環境に近いものが現在でも残っていて保全されているという状況だと思うのですが、今後こうした文化、そしてその文化が育んだ環境というのを総合的に保全したり活用したりしていく、地方行政との連携とか展望がもしあったら教えてください」ということです。

小野：多分視聴者の皆さん、みんなご存知だと思うのですが、北海道東部北部の魅力と言ったら、地元行政の職員も皆、自然環境を第一に挙げますよね。これはもう行政、地方行政、うちの標津町も含めて、みんなそうなのです。ただ、実際にはそういった自然の中にいい遺跡が残っているのですが、なかなかそこに気づいてもらえないという現状はあります。何とかそこに風穴を開けたいなと思い、ずっといろいろな活動に取り組んでおりまして、特に隣町の羅臼とか斜里、世界自然遺産に知床はなっているのですが、この知床半島には縄文遺跡も当然ありますし、本当はもっと自然の中にきちんと縄文からの文化というものがあるはずなんです。なので、自然だけではない、きちんと当時の人の生きた証、そこも含めた自然の価値というところに目を向けていけるようなことを、なんとかそこに行政も含めて目を向けてもらえるように、今いろいろ試行錯誤しているところです。

西山：今の話について1つだけ。知床が世界自然遺産になった時も、本当はあそこにはアイヌの文化との濃密な関係というものが、単に純粋な原生自然だけではない、アイヌ文化というもの、知床半島におけるアイヌの人々の暮らしとか、そういうものを本来は世界遺産の価値付けに入れていけるのではないかということがありましたが、結局はそれが全くなされなかったという話もあります。先ほどの小野先生の動画をずっと見せていただきながら、本当に美しい動画だし、愛に溢れるというか、この竪穴群という一見草に埋もれたら一切見えなくなってしまいそうなものを、雪解けの景色の中で見せる映像。まさに自然の中に、もうはるか昔の遺跡ですから本来であれば完全に消えていてもおかしくないものが、今も目に見える形で表現されていました。ちょっと工夫をすれば目に見える形にできるということの驚き、そして、私は九州の出身なのですが、北海道に来て本当に自然の川の美しさというものにいつも大変感銘を受けます。まさに原生的な自然、そういう自然と人々が共生して暮らした姿というものをカメラの映像などで見せてもらおうと、本当に、道東・道北といえば自然だ、みたいな考え方というのは、北海道の観光資源をある意味狭めてしまっていると思うのです。やはり、そこに人が暮らしたということに思いを馳せてみる自然と、ただ野生動物が闊歩していて、遠くから望遠鏡で見るような自然とは違うと思うのです。そういう意味で、本当にポー川自然公園の魅力というものを、私もこれからどんどんいろいろな所に説明させてもらいたいなとも思いました。まさに自然と人というものの関係が、これから北海道に、まさに世界遺産を目指して訪れて来るような人たちに対して大いにアピールすべきものではないのかということ、今お話から伺いました。

4-5 今後の遺跡の整備や訪問のルールはどうあるべきか

岡田: ありがとうございます。そろそろ閉会の時間も迫ってきたのですが、最後の質問をパネリストの皆さんに、一言ずつお答えいただければと思います。

今回のユネスコ登録で北の縄文遺跡群を中心とする北海道の縄文文化について注目が集まって、より訪れたいと思う人が増えると思われそうですが、パネリストの皆様が考える今後の遺産、あるいは遺跡の整備や訪問のルールはどうあるべきか、もしご意見があれば教えてください、ということです。

青野: 訪問のルールは当然、遺跡・遺産を壊さないということですよね。世界遺産は、日本の国が世界にこの遺産を永遠に残すのだと約束した場所ですので、これは来訪する者のルールとして必ず守ってもらいたいことだと思います。それ以外は、どんどん自分なりの楽しみ方、学び方をしてもらえればいいのだろーと考えます。というのは、「そんなに来られると遺跡が壊れてしまう」というようなものでもないと思うからです。もちろん管理というのは各自自治体がしています。その範囲内でどんどん活用してもらいたいと思いますね。

ちょっと話はズレますが、先ほどの小野さんの「道東は居住の仕方が違うのではないか」という話がありました。移動しているのかもしれない。こういうのも非常に魅力ですよ。石狩低地帯を挟んで、定住型の貝塚を作る文化と移動型の縄文文化があるのだよ、とお互いを紹介しあうことで、今回は道南に来たけれども次は道東に行ってみよう、その逆もあるというような、やはり来た方にもう一度来てもらう、別な所も行ってもらうという姿勢が大事じゃないかなと思います。最後なのでもう一つだけ。遊び心の面で、例えば、標津の堅穴群のくぼみに残雪が残っているのをみると、私はワッフル状の焼き菓子を思い浮かべます。ワッフルに生クリームを塗って、堅穴住居のくぼみに残る雪を表現したお菓子なんて、いかがでしょうか。

小野: 今のお話を聞いて、僕は逆に堅穴の白いプリンみたいなのを作ったら売れるのではないかなとちょっと考えました。

標津遺跡群は世界遺産ではないのですが、文化財の保存活用計画を作っているなかで、遺跡ってなかなか分かりにくい資産で、やっぱりその価値を伝えていくのが重要だと思いました。ただ大勢の人が来て見せればいいというわけではなく、そこをどう伝えていけるかというのが、すごく悩ましいところです。やっぱり一番いいのは、しっかりした価値を伝えられるガイドの人が育っていくようにしなければいけないなと思っていて、そこに一生懸命いま力を入れてやっているところです。従来はボランティアガイドみたいな形でやっていたところもありましたが、ただそれも限界があって、多様な価値観を持った人が来るなかで、遺跡の価値をその人に合わせて伝えられるかなり高度なガイドみたいなのを育てていく必要があるなと思っています。多分、遺跡の遊歩道整備とか堅穴住居の復元というよりも、

そこが一番遺跡の活用、保存整備のところでは重要な役割になっていくのかなと感じています。

5. おわりに

西山：最後にまとめも含めてお話をさせていただきます。本日の青野先生の基調講演の中で、私が一番心に残ったのは、今回の世界遺産登録は何だったのかということです。それを考えたときに、私は、先ほどの質問で逆のことを聞いたのですが、やはりしっかりとあるエリアを切り取ってクリアなストーリーで、世界に対し、国際社会に対して日本の縄文文化というものをしっかりとアピールし、説明して世界遺産にしたわけです。そもそもは、上部構造物も残っておらず、見た目で見分けるのが難しい日本の縄文遺跡、縄文の価値というものを、これだけのきちんとしたストーリーを作り上げることで、はっきりと世界に示したということです。それを最も短い言葉で言えば、まさに「定住する狩猟採集文化」です。パッと言葉を聞くと「そうか」と思うのですが、実はこれがどれだけ世界史の中で特別な意味を持つのかということを、今回の世界遺産登録は示しました。これによって日本に縄文という、縄文というのは JOMON と書くのかもしれませんが、縄文という文化が固有名詞としてあるという、しかもその性質が何なのかということが世界に発せられたということ、私は、本当にこれは大きなことだと思います。

火焰式土器とか素敵なビーナスのような縄文の遺産もありました。当然ながらいろいろな地域で縄文時代のピークがあり、非常に優れた、今見ても惚れ惚れとするようなものが、北の縄文以外の場所にもあるということをお今日は教えていただきました。ですから、まずは縄文が発信されたということに我々は一番の喜びを感じるべきでしょう。縄文というものに関わることでできる人々には、これを機会に改めて自分たちの身近にある縄文文化がどのような特徴を持っているのかを再考してもらいたいものです。北の縄文という一つの物差しができたわけですから、それに対してどう違うのかということをお説明することによって、妙な前置きは排して、海外の人にも説明できるようになったのです。

そんなことを理解するうえで、小野先生が話された質の高いインタープリターやガイドのような方が必要だということです。まさにそうなのですが、青野先生の「紹介しあうことが大事」という言葉が、私はとても重要だと思いました。とかく観光開発というのは、自分の所が儲かれば良いと考えがちで、「うちに来たらよそこには行かなくていい」と言って囲い込みたがるのが観光開発の悲しいところです。ですがそうではなくて、ともかく縄文という価値が世界にきちんとした形で示されて、それとの関係で自分たちのさまざまな遺跡が説明できるようになったということは、逆に言うと、相手を説明できるようになるということなのです。自分の所だけの足元を見つめて深掘りする説明だけではなく、やはり他を知ることによって自分たちの遺跡の価値というものを相対化できる。こうしたことを、今日いただいた両

先生のお話の中から、私は大いに学ばせていただきました。

青野先生の後半のとても面白い蝦夷三官寺の三カン寿司の話とか、お菓子づくりの考古学者、この方はお菓子づくりが本業なの考古学が本業なのか分からないままでしたけれども（笑）、とても面白い、逆に言うと、謎が多いからいろいろとそれをまた楽しむ方法もあるということ、大きなヒントとしていただけたかなと思います。

最後に、自分が用意した資料が1枚だけあり、お見せしたいと思います。「縄文のまち ハンドブック&スタンプラリー」という面白いハンドブックを何年か前に入手したのですが、そのなかに北海道の遺跡分布の地図があるのです。多くの方はご存知だと思いますが、これだけの数の遺跡発掘は、研究目的の調査調査だけでは到底できません。実は1970年頃に文化財保護法が改正され、「開発をするときには、遺跡がありそうなところは必ず事前に発掘調査をしないと開発してはいけない」という、世界的に見てもユニークな制度ができました。道路を造るとか、市街地を開発する、建物を建てるというときは、埋蔵文化財のある可能性がある場所、包蔵地に関しては、場合によっては開発者が負担して発掘調査をやらなくてはならないという、この面白いルールがあるせいで、いろいろな所で開発が起きるたびに縄文に限らずさまざまな時代の遺跡が見つかるということが全国で起きています。

1970年頃に法律ができてから、今でも毎年1万件ぐらいの発掘が全国で起きているらしいのですが、ただそれらのほとんど、99%が学術的な発掘ではなく開発に伴う緊急発掘です。ですから、この広大な北海道を見渡した時に、実はこれまでに発見されている遺跡というのは、道路を造る時に発見されたり、市街地を開発する時に発見されたりしたものがほとんどなのです。別の言い方をすると、まだ他にどれだけ貴重な面白い、びっくりするような縄文遺跡が北海道の中に隠されているのか分からないのです。秘められているから分からないということです。

他の種類の遺産、例えば、お城やお寺の建物のように地上に建っているものは、どれだけあるかというのはみんな分かっているのですけれど、遺跡というのは地面の下にあって掘るまで分かりませんので、とんでもなく未知数なものなのです。それでも、21世紀のこの時期に、ある意味、戦略を立て、縄文という文化をそろそろ世界に出していこうということで世界遺産リストに登録しました。しかし、縄文遺跡は今後どんどん皆さんの足下から発掘されていく可能性があるということです。そう考えるだけで非常に夢が膨らみませんか。特に、北海道のように開発されていない場所が多い場所においては、今後、温暖化も進み日本の中心がどんどん北に移ってきたら、いろいろな意味で新しい縄文が50年後100年後に発見されて、もしかしたら今の17資産ではない別の資産と入れ替わったり、もっと数が何十にも増えたりしているかもしれない。こんなことを思うわけです。ですから、そういう意味では、今回の縄文の世界遺産登録というのは、さまざまな地域にとっての大きなチャンスであり、とっかかりになると考えます。

その第一歩をやっと踏み出してくれたのだと考えて、我々は大いにこれを活用していきたい。観光関連の方、先ほどのようにグッズを魅力的に作ることも大事ですし、質の高いガ

イドやツアーを組んで、そういう人たちを満足させリピートさせていくということに、本日のフォーラムの話題を通じていろいろな可能性を感じていただけたのではないのかな、そういう 2 時間になったのではないのかなと思います。勝手ながら、企画を思いついた者として、今日は充実した気持ちでこの会を閉じることができるかなと感じます。本当に両先生には貴重なお話をありがとうございました。これからも、どんどん新しい魅力を発見して頂き、我々にも伝えてほしいなと思います。

岡田：1 万年にもわたる多様で非常に濃密な縄文文化と、そして北海道の観光振興、地域まちづくりについてさまざまなポイントをお話いただきました。登壇者の皆様、改めてお礼を申し上げます。第 1 回目のオンラインフォーラムはこれにて終了したいと思います。ありがとうございました。

アイヌ民族と文化交流としての観光の新展開に向けて

北原 モコットウナシ

北海道大学アイヌ・先住民研究センター 准教授

岡田 真弓

北海道大学観光学高等研究センター 准教授

1. 趣旨説明

岡田：これより、北海道大学アイヌ・先住民研究センターの北原モコットウナシ准教授をお迎えし、「アイヌ民族と文化交流としての観光の新展開に向けて」というタイトルで、オンラインフォーラムを始めていきたいと思います。現在、北海道各地でアイヌ民族やアイヌ文化がかかわる観光振興が進んでおります。2019年には、アイヌ民族を先住民族と明記したアイヌ施策推進法が成立し、2020年にはアイヌ文化の復興及び発展のための国立施設、民族共生象徴空間（愛称、ウポポイ）が北海道の白老町に開設されました。また、アイヌ民族や文化をテーマとしたアニメ漫画や小説などの影響もあり、アイヌ民族や文化に対する社会的な関心が高まっています。

こうした状況を受け、北海道内各地では、地域のアイヌ文化を核とした観光コンテンツの企画や観光プロモーションを進める動きが広がっています。一方、マイノリティー文化を観光の文脈で取り上げる際には、ゲストやホストは多様な立場が想定され、どの立場に立つかによって観光の意義も変わります。本フォーラムでは、アイヌ民族というマイノリティー集団の立場から、ホストとして観光の実務に当たってきた北原先生にご登壇いただき、文化交流を促し学びの機会となる観光振興を考える上でのポイントをお話させていただきます。

本日は講演いただきます北原モコットウナシ先生は、樺太アイヌの信仰、物質文化、口承文芸などを専門に研究されています。2005年から2010年まで白老町の旧アイヌ民族博物館の学芸員として勤務され、体験プログラムや資料映像などのコンテンツ企画作成に従事されました。近年では、札幌駅の地下歩行空間にあるアイヌ文化を紹介するエリア、アイヌ文化発信空間ミナパや、ウポポイでの展示体験学習プラン、また、道南バスによるアイヌ語車内放送、そして北海道観光振興機構とともに『アイヌ文化・ガイド教本』の改訂版作成などに携わってこられました。それでは、北原先生から「マイノリティー文化観光と学びーアイヌ民族の事例」のご講演をお願いしたいと思います。

2. マイノリティー文化観光と学び—アイヌ民族の事例

2-1 はじめに

北原: 私は文化人類学を専攻しております、さっきご紹介いただきましたように樺太アイヌの宗教儀礼について学んでまいりました。博物館で勤務をする中で、いろいろと社会に共有されている感覚と、研究機関の感覚のギャップに驚きながら、どうやってこれを橋渡ししたらいいのかということを考えてまいりました。

それは、1つにはもちろん教育に携わる、そのはしくれの者として少しでも社会に貢献したいということがあるわけですが、同時にアイヌ民族についての理解を深めるということは、自分や家族を含めた私たち自身のためでもあるということ、それなりに専門外のことまで、必要にせまられて取り組んできました。今日は、そのあたりのことを少しご紹介できればと思います。

はじめに、アイヌ民族についてよくご存じの方でも、「和人」という言葉はあまり聞いたことがないという方もいらっしゃると思うので、私の話の中で出てくる言葉について、簡単に定義をしておきたいと思います。それから、従前の観光の典型的なあり方ということについて見ます。

その後、アイヌ民族の歴史について、特に近現代以降の歴史について簡単に見て、それからいわゆる狩猟採集民族といわれるアイヌ文化と農耕民族といわれる日本文化、和人文化にも実は連続性がある。そういった文化のとらえ方の話をしまして、あらためて従前のアイヌ文化観光がどういう点で課題を持ってきたかということを確認したいと思います。

それを踏まえて、これからの観光のあり方。観光というのは、言い換えれば他者を表象することであるとか、あるいは、自分たちの集団が観光のテーマになっている場合には、自己表象でもあるということで、このあり方についていくつかポイントをまとめたいと思います。最後に、私自身がこれまでお手伝いしてきた実践例からいくつかお話をしたいと思います。では、よろしく願いいたします。

2-2 アイヌ民族と観光

最初に用語の整理ですけれども、日本人という言葉は皆さんよく耳にすることがあると思います。日本人というのは日本の人ということですが、ここには実は2つの意味が重なっています。1つは国籍の問題ですね。日本国籍。言い換えれば日本国民。そしてもう1つは民族集団としての日本人。日本語、日本文化をつくってきた、そういう人々としての日本人。

この2つはほぼ同じもののように感じられますが、実は少し違っていますね。日本社会に暮らしている人の全体の中に、いわゆる民族集団としての日本人がいる。この日本社会の人々は、たいていは日本国籍を持っている人であって、その中に民族集団としての日本人がいます。しかし、この日本人があまりにも多数である。ほとんどすべての人口をこの日本人といわれる人々が占めているので、日本に暮らしている人は、みんな我々と同じ日本人であるという感覚を無意識に持って生活するようになります。

しかし、これは実態とはズレている錯覚であるので、実際には、そこにほかの民族集団がたくさん暮らしている。例えば琉球の人々とか、もともと外国籍で日本に帰化した人々、それからアイヌ民族が暮らしていますし、日本国籍は持っていないけれども、外国人が280万人ほど暮らしているといわれています。ですから、多数の民族が日本社会の中には暮らしていて、そのうちの多くの人々は日本国籍を持っている人でもあるということです。

このあたり、うまく話が通じないことがあって、結局アイヌは日本人なんですかというふうに聞かれることがある。その場合の日本人が何を指しているのかということが、やはりかなり混乱しているんですね。日本国籍を持っているという意味であれば、日本国の人である。しかし、すなわち日本人と同じになった、民族的に日本人と同一になったかといえば、そういうことではない。ですから、私たちのこの社会には、実は国籍と民族の2つのアイデンティティーが重なっているということ、いつも確認しておく必要があります。

この民族的な立場の違いが、ゲストやホストといった立場に重なってきます。そして、この日本人という言葉は非常にややこしいですね。国籍の話をしているのか、それとも民族性の話をしているのかよく分からないということで、少し違う名前を付けて整理をした方がよかろうということがいわれます。

沖縄の場合は、伝統的に「やまとんちゅ」という言葉が使われる。それに対して、アイヌ語では「シサム」といったり、北海道の学校教育などでは、あるいはアイヌ史の研究では、平和の和に人と書いて「和人」という言葉が使われたりします。「やまとんちゅ」や「和人」、これが民族集団としての日本人のことであり、日本国籍を持つ人という意味での日本人とは区別して使う。これがとても重要なことだろうと思うわけです。

そして、いわゆる典型的なアイヌ観光のあり方というのはどんなものだったかということ、ここで振り返りますが、こういうキャッチフレーズにそれが集約されていると思います。「私たちの知らないアイヌ文化を見にいこう」。このような、おおよそこれに類する売り文句で、観光に人々を誘ってきたということがありますが、場合によっては、これが文化ではなくて「アイヌ人を見にいこう」。人間を好奇心の対象として見にいこうという広告が打たれることもあって、そのような広告のあり方は差別的だということで批判を受けるといこともままありました。

私たちの知らないアイヌ文化ってどんなものなのだろうかという言葉は、和人から和人に向けて発せられている。このような広告を打って人々を誘うというのは、和人が経営する

観光業者であることが多い。そして、これを受ける側も和人である。

中には、ホスト側にアイヌ民族がいることはもちろんありますが、そういった人々はどちらかというと末端の現場で働いていて、観光のあり方を決めているのは、やはり和人資本であることが多かった。そして、こういったキャッチコピーができるのはなぜかという、1つはかつて異文化といえば海外のことだった。つまり、日本国というのはやはり和人だけが暮らしている、そういう空間であるという意識が強かったので、外国に行けば変わった人々がいる。日本国内はみんな均質だ。そういうイメージがあります。これは、和人的価値観を標準とするホモソーシャルな空間が日本国内に存在してきたし、今もあるということになります。そこで例えば異文化を、あるいは異文化の人々を物珍しいもの、珍奇なものとして扱ったり、敬意を欠いた扱い方をしたりしても問題化するということは、これまであまりなかった。ですから、今日でもメディアでは外国人を非常に嘲笑的に扱うといったことがいまだに続いていますけれども、そういったことがなぜ起こってきたかという、テレビを見ている、あるいは観光に参加する人々はみんな同じ立場であって、違う立場の人は日本の外側にしかない。こういう感覚が強くなるからですね。

参考として、某テーマパークのアトラクションを見てみましょう。これはもともとは海外資本で日本に招致して作られたテーマパークです。そこに乗り物が急速に落下する絶叫マシンのたぐいのアトラクションがあります。このアトラクションは「ある古いホテルに客が入っていく。そのホテルのオーナーというのは世界中の珍しい物を集めてくるトレジャーハンターだった」という設定になっています。このオーナー／トレジャーハンターは、ヨーロッパ系のかなり高齢の男性で、あるとき、この男性がアフリカの架空の民族のところを訪れて、その民族が大切にしていた呪いの神像というものを盗み出した。その呪いの神像の力によってトレジャーハンターは異次元に飛ばされてしまって、以来、行方不明になっている、という設定なんですね。来場者はそういういわく付きのホテルに入っていくって、そして「トレジャーハンターが行方不明になった、その現場であるエレベーターに乗り込んでみよう。無事に帰ってこられるといいですね」というような形で恐怖感をあおる。そういう設定になっています。もちろん観客は全員無事に出て帰っていくわけですが、至る所にその架空のアフリカの民族、「部族」というふうに表現されていますけれども、非常に差別的に表象された人々が描かれています。それから、このオーナー／トレジャーハンターがかなり上から目線でその人々に接したり、宝物を盗み出したりと犯罪的な行為が描かれるんですが、そのことの問題性というものは、このアトラクションの中では一切指摘されないわけですね。

私がおこへ遊びに行った際にものすごく違和感を感じたのは、現実にはアフリカという土地があつて、そこにはさまざまな民族がいて、その実在する民族の衣装などを表象に使いながら架空の民族として描いてしまう。そのように他者の存在そのものをコントロールできて、自分たちの資源として利用可能なものとする。そういう大変侮蔑的な姿勢がこのアトラクションにはあるというふうに思います。また、ヨーロッパ系の人物がそこに行って、案内

をさせて宝物に触れてそれを盗み出してくる。これはやはり植民地主義を背景とする取奪というものを描いていることになるわけですが、ここで問題なのは、来場者にそういうことを問題視させるような要素がまったくないということですね。つまり、「秘境に行つて、『原始的』な人々のところに行つて、宝物を盗んでくるというのはわくわくすることである」というふうに描かれている。そういうふうにしてうまく盗み出してきたんだけど、呪いによって不幸にして行方不明になってしまった。そういう人物の体験を来場者に追体験させる設定になっている。そしてもっと恐ろしいのは、このアトラクション自体はフランスとかアメリカの、同系列のテーマパークにもあります。ところが、そちらのアトラクションはホラー設定なんです。「なぜか人が行方不明になる不思議な場所に行ってみよう」という設定になっている。このアトラクションを日本に導入したとき、もとの設定をそのまま使えない事情があって、そこで日本独自の演出としてこの差別的な設定が導入されたようです。

ここには、日本国内における異民族、異文化に対する扱い方というのが凝縮されていると感じます。なぜこういうことができてしまうのかというと、日本社会にはいわゆる米兵や様々な職業にあるアフリカ系の人々が暮らしているとか、その人々と結婚した家族や生まれた子供、アフリカ系の属性を自分自身が持っている人々が日本国内にはたくさんいるわけですが、そういうことが想像できないところに大きな問題があると思います。

つまり、日本社会には同質な人しかないというふうに漠然と感じていて、そういう信念があつて、違う人々がいるということ想像する力が抜け落ちている。また、描き方によってその他者が傷つくこと、あるいは日本国内から申し立てを受けること、そういったことへの想像力が欠けているということが、ここの背景にあると思います。そして、同じようなことがアイヌ民族をテーマにした観光や広告にもしばしば見られる。あるいは漫画などのコンテンツにもしばしば見られて、そして場合によっては申し立てを受けて取り下げということが起こってくるわけですが、こういった問題は同じところに根があるというふうに感じます。

2-3 アイヌ民族の歴史と文化

さて、ここからアイヌ民族の基本的な情報と歴史について見ていきたいと思います。アイヌ民族はどこにいますかと一般の方あるいは学生に聞きますと、北海道のどこか山の方とおっしゃる人が多いんですね。例えば北海道東部に阿寒というところがあるので、阿寒には「アイヌコタン」という場所があると知っている。白老というところにはアイヌの村があるのを知っているというふうに、北海道の中の、それも都市部ではないというイメージを持っている人が多い。

北海道大学の学生も、札幌にもアイヌが暮らしてきたということを説明しても、なかなか通じなくて「オホーツクのどこかにいるんですね」と、先入観が変わらない人がいます。そうではなくて、北海道中はもちろんどこにでも暮らしてきましたし、本州東北部、それ

から樺太南部、そして千島列島の全島にアイヌは暮らしてきました。そしてもっと南に行きますと、和人（シサム）が暮らしていて、琉球の人々がいて。それから朝鮮半島にはアイヌ語でカウレンと呼ばれる人々がいました。ですから、アイヌ語の中にこういう言葉が入っているということは、かなり距離がありますが、朝鮮半島の人々を直接あるいは間接的に知っていたということが分かります。歴史的には、朝鮮からの使節が漂流して、礼文島に漂着したという事実がありますので、もちろんポイント、ポイントでは直接接触していますが、おそらくもうちょっと広く朝鮮半島の人々のことが意識にあったというふうに思います。

それから、トゥングース系の諸言語を話すさまざまな民族が樺太およびロシア極東から沿海州の地域にかけてたくさん暮らしていて、一部を紹介しますと、ウイルタ、ナーナイ、そしてウデヘという民族がいる。それからニヴフ語という、またまったく系統の違う言語を話す人々がここに暮らしている。カムチャツカ半島にはイテリメンという人々がいる。13世紀ぐらいになりますと、カーカンという首長、ハーンのことですね。ハーンをいただく民族がこのあたりにやってきて抗争を繰り広げたり、あるいは朝貢関係を結んだり、交易などを行ったりした。

次にマンチウ（満州民族）が中国最後の清王朝をつくり、その後17世紀になると、ヌチャ（北方民族の言葉でロシア人）がやってきた。こういったさまざまな民族が周囲に暮らしており、環日本海地域を舞台にしてこうした諸民族の交流が盛んだったということが分かっています。ですから、例えば、私は樺太の宗教のことを調べていますが、樺太アイヌが作るお守り像と朝鮮半島で作られる像が大変よく似ているんです。こういうちょっと不思議な、しかし当然なのかもしれないという文化の類似性がたくさん見られます。

このような配置で人々が暮らしていたのは、明治時代に入るまでの近代まででした。近代に入ると、北海道までがまず明治の初年に日本の領土になります。それまで日本国は函館周辺の和人地といわれるところまで、その先は外国という扱いでした。ところが、ロシアとの領土争いが幕末ぐらいから起こってしまっていて、明治になったところで、ここが日本の領土だということが宣言されます。それとともに南の人々が北に移住してくるということが起こります。北海道で暮らしていたアイヌは、まず日本語の名前を名乗るのですとか、土地制度などもふくめ、日本政府が決めた規則に沿って生活をする。そして、生活習慣も日本式に変えていくということが進められていきます。

少し歴史が進みますが、第2次大戦の敗戦によって、それまで日本の占領下にあった南樺太、それから千島列島はソビエトの侵攻を受けます。これによって、この地域に暮らしていた人々は北海道以南に移住することになりました。私の祖母はもともと樺太西海岸の出身ですが、敗戦の年に余市町に避難して、そこで私の母が生まれました。それ以来、この国境がここで確定したまま現在に至っています。

ですから、アイヌといえば北海道にいらっしゃるんでしょうというのと、戦後の状況を見ると確かにそうですが、もともとは国境に関係なく非常に幅広い地域に暮らしてきて、本州ばかりでな

く北方の諸民族、諸文化と接しながら生活してきた。敗戦によって、今多くが北海道以南にいるという状況です。

私の母は余市で生まれまして、成人してから東京に働きに行つて、そこで私が生まれました。関東近辺にも数千人単位のアイヌ民族がいるということが分かっていて、それから名古屋や大阪といった都市にもやはり人が移り住んでいて全国各地で暮らしています。アイヌではない多くの人、北海道の人でもそうでしょうけれども、特に本州の人は、今まで一度もアイヌに会ったことがないというふうに感じていると思います。しかし、実際には日本中に生活しているんですね。

なぜ、ではアイヌに会ったことがないと感じるかという、それは、例えば容貌、容姿、生活習慣が関係しています。私は今 T シャツにパーカーで話をしていますが、こういう身なりですとか食生活ですとか言語ですとか、いろいろなことでほかの人々との差がほとんど目立たなくなっている。それはさっき言いましたように、明治に入ってから日本化が強烈に押し進められたということがあって、今日ではほとんど差異が見えづらくなっているということがあるわけです。

さて、近代以前のアイヌの生活はというと、採集を行ったり、それから狩猟を行ったり、漁労を行ったり、交易を行ったり。こういうことでアイヌ民族というのは狩猟採集民族であり、したがって日本文化とははっきりと線引きができて、まったく異質なものであるというようにみなされることが多い。しかし、実はそこにももちろん個性はあって、さまざまな点で連続性があるということをお話したいと思います。

例えば、北海道大学植物園博物館にも収蔵されている樹皮性の着物。これはハルニレ、オヒョウ、シナの木の皮をはがしてきて、それを処理して繊維を取り出し、それを柔らかい糸にして機織りをして反物にして、アットウシという着物に仕立てます。このアットウシは小学校の授業なんかでアイヌ文化学習をやると、必ず紹介されます。ですから、木の皮から着物が作れるんだというので多くの人驚きますが、実は本州でも同じようなものがずっと作られてきた。今日でも産物として使われているということは、地元の人のご存じだと思うんですが、日本全体だと少し知名度が低いかもしれません。例えば秋田県にシナ布というのがあって、シナの木の繊維から反物を作る。アイヌと同じ素材ですね。シナの木の糸を使って着物を作ったり、今日ではバッグとか和服の帯にしたりとか、そういう使われ方が好まれているようです。それから静岡の葛布とか岡山の藤布のように、全国各地にこういう自然素材の布というものは残っていて、また仕立て方もよく似ています。細かい説明は省きますけれども、これは和人の労働着のスタイルで実用本位のあまり装飾性のないスタイルですが、それがほぼそのままアイヌの着物にも当てはまるくらい。タグを付けずに博物館の中に収蔵していたら、これがアイヌ資料だといわれてもまるで分からないくらいよく似ています。

強いて違いが何かというと、文様が入っていることです。文様がアイヌの着物らしさですが、これを取り払ってしまえば、こういう和人の野良着、労働着とまったく同じようなもの

になる。おそらくこういう自然の繊維を使った着物の作り方の技術というのは、南からアイヌに伝わっていったというふうに言われている。一方、文様装飾の技術というのは、より北の方につながっていくといわれ、動物や魚の皮を使った着物の中で形成されてきた装飾の技術がこの着物に重なって、アイヌ的な着物スタイルが生まれたと言われています。こうして見ると、どこまでがアイヌの文化でどこまでが北方文化で、どこまでが和人文化でということが、そんなにきれいに分けられないことが分かります。グラデーションのように重なっていて、やはり当然ながら、非常に近い地域で隣り合って暮らしてきた民族ですから、お互いの文化がよく似ているということがあります。

それから、文様に特色があるということを申しましたけれども、文様に使われているそれぞれの要素を見てみると、実は非常に広い地域に共通したものが多いということが分かります。例えば、これは和太鼓によく施されているともえ文様というものです。アイヌ民族の木製品なんかに、あるいは布製品にもよく使われる文様です。

ともえというのは、ともえ投げとか、ともえという漢字とか三つどもえとか、ぐるぐる一緒くたになって転がっているというイメージがあるので、てっきり私はこの文様そのもののことをともえというと思っておりました。しかし、もともとは弓を打つときに左手に着けるプロテクターのことを「とも」というんだそうです。そこについている絵だからともえというので、日本語の言葉とこの文様がぴったり一致しているかのように思うけれども、そうでもないということが分ると、ちょっとこの模様の見方も変わってきます。それから琉球漆器にもともえがあつて、韓国の太極扇にもともえみたいなものがある。

類似した文様の要素は、もっといろいろな地域にあります。例えば、イギリスのケルト文様の中にも見出すことができます。これは装飾写本とって、聖書に華やかな装飾を施した写本ですが、例えばここにともえ文様が見えています。ケルト文様の解説書には、ともえ文様の様々なパターンが掲載されており、二つどもえとか三つどもえのようなものもあります。ケルト文様とアイヌ文様はあまりに離れていて、関係があるのかどうかということを手を論じるのは難しいですが、8世紀とか9世紀ぐらいからこうした文様がケルト文化圏でも作られていて、アイヌ文様と平行して存在しているということは少なくとも指摘できます。私は、これはおそらく伝播の関係にあると思っています。もちろんケルトと、例えば朝鮮とか沖縄が直接結び付くわけではなくて、間にたくさんの民族が暮らしていますから、それぞれの地域の中で共有されていって、そして結果的には非常に離れた地域によく似たものがあるという状況が生まれたと思います。

例えば、ともえ文様はポルトガルやギリシャといった南ヨーロッパにもありますので、そうすると、中東を介してすぐにアジアまでつながってくるということは考えられます。それから、和文様の中にもアイヌ文様に共通するものがあります。例えば、寺院の装飾によく見られる工字つなぎと呼ばれる和文様がありますが、類似した要素がケルトのレリーフの中にも用いられています。私たちがアイヌ文様だと思ったり、和文様だと思ったりしているものは、実は非常に広い地域、ユーラシア全体に共有されてきたものでもある。ですから、地

続きであるし、しかもその地続きの範囲というのは、思ったよりずっと広いのではないかと
いうことです。

今コロナがまん延しているので、新聞で流行病のとらえ方のことを紹介する記事を書き
ました。その中で、アイヌ民族のカムイは非常にたくさんいて、多神教であって、しかも動
植物ばかりではなくて、火とか水とか風とか自然現象にも神が宿っている。そして、天然痘、
疱瘡という病気を広める神までいるということが紹介されて、読者の方に驚かれたりする
わけです。私も博物館で解説を始めたころはよくそういう説明をしていたんですけど、実は
疱瘡の神というのはアジアに非常に広く見られる、一般的なものだということを最近知り
ました。

日本でももちろんこの疱瘡神というものが考えられていて、江戸時代にはこの疱瘡神を
描いた絵が盛んに売られたそうです。それからアジア地域にも疱瘡神のような神がいるよ
うで、起源はインドではないかというふうにいわれています。神のとらえ方1つとっても
決して他と無縁なものではなく、むしろかなり広いアジア文化圏の中にアイヌ文化も属し
ていて、ただ、若干の個性があるということはいえるかと思います。時間の関係で、詳細は
割愛しますが、神話や民話のたぐいを比較すると、やはり非常に広い地域、少なくともユー
ラシア全体とか、場合によっては北アメリカなどにも類似の話が見当たることがあります。

さて、着物、文様、それから精神文化、神話などについて見てきましたが、それ以外のと
ころでもさまざまな類似性、連続性があるということを見たいと思います。言葉はわりと1
つの均質な集団みたいなものが想定しやすいので、アイヌ語集団、日本語集団というふう
に、まあまあお互いに均質性を持っている。しかし、隣り合った地域に暮らしている人々はお互
いの言葉を覚えて、子供同士で遊んだりしているうちに自然とバイリンガルになるという
ことは珍しくありません。ですから、ここの人とここの人を比べれば、まったく違う言語を
話す異質な人だというふうに分ける目安にもなりますけれども、必ずしもどこに行っても
明瞭に分けられるというわけではない。例えば、畑作文化ということで見てみると、和人文
化ではよく畑作が行われる一方、アイヌ民族も畑作は行ってきた。ですから、日本人は農耕
民族、アイヌは狩猟採集民族みたいにすっぱり切れるものではないということです。狩猟に
ついて見てみると、確かに多くの地域でそれは行われていますが、和人も本州、四国、九州、
それぞれの地域で狩猟を行ってきまして、今でも継続されていますね。ですから、農耕民
族だって狩猟をしないわけではない。それから漁労でいえば、さらに多くの人々が共通の文
化的要素を持っているということになる。ただ、どういう動物を取るか、どういう魚を取る
か。それを女性が行うのか、男性が行うのかとか、細かく見ていけば文化の個性というの
はもちろんあります。しかし、農耕民族、狩猟民族みたいに大きなくくりをするときには、そ
う簡単にすばつと切れないということが分かります。

それから、和人といえば稲作文化だという意識が強くありますが、日本の中でまったく稲

作をしない地域というのものもあるわけですね。ですから、和人が均質な1つの集団だ、アイヌが均質な1つの集団だ、そして両者ははっきりきれいに線引きすることができるというのは、やはり一種の錯覚というか誤解ともいえます。そして、近代以降、和人とアイヌをはっきり分けるために違いの点が強調されてきたために、こういう連続性があまり見えなくなってしまうのだと思います。

2-4 「幻想のアイヌ観光」

少し遠回りしましたが、近代以降、特にアイヌが日本国に統合されていく中で、もともと文化的な連続性はあるし、言語的な差ももうまったくなくなった。そして、どこにアイヌがいても、いるということに気付かれないほどの差異の減少ということが起こってきたわけです。こうした歴史的経緯を踏まえると、従前のようなアイヌ観光のスタイルというのは、本当は成り立たないはずですが、しかし、それを無理やり成り立たせるためにある種ちょっと無理がかかっているということがいえるのではないかと思います。

「幻想のアイヌ観光」というふうに書きましたが、この観光の問題点をいくつか見ていきたいと思います。まずはアイヌ民族とかアイヌ文化に対する強い見下しや侮蔑が、さまざまなキャッチコピーの中にも入ってきている点です。これは必ずしも意識されているとは限りませんが、「素朴」であり、「停滞的」であり、「どこでも同じ」でありというような、そういう評価に現れることもあります。それから原始性の強調、よくあるのはかがり火のイメージです。実際にアイヌはそんなにかがり火はしませんが、かがり火が照らす闇の中で踊っているみたいな、そういうおどろおどろしい描き方がされることがあります。また、外見の違いの強調ですね。顔立ち、彫りが深いであるとか眉が濃い、ひげが濃い。そういう外見の違いを強調して描いて、しばしばそれが差別的なニュアンスも伴っているというものです。それから滅びのイメージ、もうほとんどいなくなってしまった、滅びつつあるということがずっと強調されている。これは以前からずっと同じことがいわれているので、いつ滅び終わるんだと思うほどですが、ずっと滅びかけということになっている。

これは一種のロマン化といえます。もうすぐ消え去ってしまうので、今のうちに見ておきましょうみたいな、滅びるということを強調することが、ある種の付加価値をそこに帯びさせるような、そういう効果を持っていると思います。そして、この滅びの強調の中には必ず、なぜ滅びるのかということは問わないわけですね。例えば、文化がかつてに比べてあまり見られなくなったとか、言葉話す人がもう誰もなくなったとかというのは、日本の植民地主義の結果ですが、そういうことを一切問題視しない。自然に動物が減っていくかのように、滅びることがロマン的に語られるのが特徴だというふうに思います。

それから、見下しや排除というのが分かりやすい差別だとすると、分かりにくい差別として聖化というものがあります。これは見下しの反対で、極端に持ち上げることによって、やはり異質性を強調するものです。しばしば、さまざまな生活文化の中にマジカルな意味づけ

がされます。例えば文様は魔よけである。何かというと魔よけが皆さん大好きですね。そういう、当事者がそれほど言っていなかったことを過剰に強調して、そこを印象づけようとする。あるいは自然との結び付き。具体的な内容は語られませんが「自然と協調して、ともに生きて暮らしてきた」ということが再三語られる。自然と協調して生活するということは和人もしてきたはずです。ですから、よく考えれば、これはどこの民族にも当てはまるにもかかわらず、アイヌ民族の場合は何しろ自然が強調されます。解説の文言にも現れますし、イメージ映像やポスターの撮影現場を考える際にも自然との結びつきが強調されます。本当は屋外で踊ることはあまりありませんが、森の中で踊っている様子が撮られる。

ほぼファンタジーのような描き方、ちょっと悲壮感のある、はかなげな悲しいイメージとか神秘的なイメージを出すためには、まったく捏造の伝説みたいなものがつくられることもよくあります。次にいくつか私が見つけた悲しいアイヌの伝説というのを挙げてみます。よく知られているのが、阿寒のマリモの由来談。ある身分の違う男女が、どうしても恋を認めてもらえなくて身投げをしようということで、湖に身投げしてマリモになりましたという伝説がありますが、これはアイヌの伝説として創作された和人によるお話だということが分かっています。それから網走の語源です。「この地名の語源を説明するものとして、こういう伝説があった。2人の青年から愛された女性が、どちらも選ぶことができない。2人の間で板挟みになって入水して白い鳥になって、チバシリ、チバシリと鳴きながら飛んで行った。そのチバシリが今の網走の語源だ」というような話です。それから、「乙女が身を投げた」、「子を負ったまま岩になった」、「義経に恋をしたしゅう長の娘が、義経が去ってしまったので毒を飲んで死んでしまった」。何しろ、女性が悲恋の末に身を投げたとか死んだとか、石になったとか、身を投げ過ぎというのが私の印象です。本当に同じパターンでどの話もでき上がっていて、アイヌに、はかなげで悲しげなイメージというのがあって、なおかつ、それが女性を通じて表現されている。

場合によっては、恋愛関係がある程度進展してから、最後は捨てられてしまうというように、少し性的なところが語られたりもする。ある種の消費のされ方のパターンが、ここにはあると思います。こうした話は、あまり好ましくない働きをしますが、その1つには、アイヌ民族が過去の存在であるということをもう一度印象づけることです。昔、こんな話があったんだよというふうにして、今のアイヌは語られずに昔の話ばかりが繰り返し語られることによって、やっぱりもういないものというイメージが強まっていく。もう1つは、例えば義経とか和人の貧しい青年が「しゅう長」の娘と恋をする。これは、アメリカではポカホンタスに代表されるように、いろいろな地域で入植者の男性と被入植者、地元女性の恋物語が語られます。こうした話はどこでも同じ効果を持っているだろうと思うのは、女性が男性を受け入れることというのは、象徴的に先住民が入植者を受け入れるということを表している。そこでは、人間的な関係がちゃんとできて、決して悪いことばかりじゃなかったということが語られて、しかし、悲しいかな、相手は死んじゃったんだよねというふ

うにして、今はいないというふうに解決する。

解決というのは、あえてこういう言い方をしているんですけど、先住民が普通に主体性を持ってそこにいたら、やっぱり入植者にとってはいろいろな面でバッティングが起きるので、いなくなったことになる。しかも、受け入れた上でいなくなったことになるということを説明する。非常に便利な「伝説」だというふうに思います。

問題性のポイントとして、こういうこともあります。ホストの側に和人とアイヌがいるケースですが、力関係に圧倒的な違いがある。ですから、アイヌというのは、現場で踊ってみせるとか、木彫りの実演をすとか、そういう場面では駆り出されますが、観光産業全体をデザインしたり、解説の骨子をつくったりするのは往々にして和人である。場合によっては、研究者がそこに協力することがある。そこでは、大きな、深い、そして興味深いテーマであったとしても、非常に簡単に、一言で済まされることが多いなというふうに感じています。

先ほど、北海道観光振興機構の『アイヌ文化・ガイド教本¹』のことを紹介していただきましたが、同じ年度に同財団の仕事でA4のガイドマップを作りました。ガイドマップといっても冊子の形になっていて、地図が載っていて、それから道内のいろいろな施設も写真と解説を入れて紹介するというものです。同じ業者がそれを受託して、私に監修を依頼したので協力をしました。そのときに感じたのが、まずは非常に簡単にアイヌの起源が語られる点です。「アイヌ民族は13世紀ごろに成立しました」というふうに、一言でアイヌの歴史的起源が済まされてしまいました。これは、今言ったようなA4のパンフレットとかB5を三つ折りにした、本当に小さい簡単なパンフレットにもたいてい書いてあります。これが和人の起源だったら、こんな一言では済まないはずだと思うんです。もし、さらっと「18世紀に和人が、日本人が成立しました」というふうに書いてあったら、とんでもないことだと大論争が起きると思います。

民族起源というのは、非常にいろいろな思いが交錯していて、どういう視点で語るかによって、まったく結論も変わってきますし、勝手にほかの人に結論を出してほしくない。自分の起源というのは、自分で大事に調べて考えていきたいと感じる、そういう領域だとも思います。ですから、日本国内には重要な遺跡があるということにははっきり分かっているにもかかわらず、まったく発掘がされない場所がいくつかある。例えばかつての天皇家の墓の中には発掘調査できないものがあります。発掘すればいろいろなことが分かるけれども、大事なものだから手をつけない。そこに例えば外国から調査団がやってきて、強引に発掘していったら大変な問題になると思います。しかし、アイヌについてはそういうことがわりと簡単に行われるし、非常に手軽に結論付けられてしまう。外からアイヌの歴史を規定するということに、誰も何の疑問も持たないということが起こる。それは、やはりアイヌと和人の力関係がまったくバランスを欠いているということによると思います。

¹ (公社)北海道観光振興機構アイヌ文化分科会ワーキンググループ2019:『アイヌ文化・ガイド教本』
https://visit-hokkaido.jp/ainu-guide/pdf//ainu_guide.pdf (2022年2月1日アクセス)

もう1つは、一方的に規程されるということです。具体的には、和人についてはまったく説明がされない。特にあらためて言及されることもない。一方、アイヌについては、「アイヌは〇〇です」、「これはアイヌです」「これはアイヌ語です」「これはアイヌ文様です」というふうに言及される。つまり、和人は普通、標準なので触れる必要がないということですね。先ほどのA4のパンフレットを作った時、「アイヌ関連施設にはアイヌマークを付けます。こういうマークを付けて表示しようと思います」というふうに、その制作会社が提案してきたので、であれば「これはぜひ和人マークも付けるべきだ」と私は言いました。アイヌ関連施設とは、川村カ子トアイヌ記念館（旭川市）、北海道博物館（札幌市）、ポロトコタン（白老町、旧アイヌ民族博物館）、阿寒湖アイヌコタン（阿寒町）とか、ものすごく限定されていて、ほかのどの市町村にもアイヌ民族は暮らしているはずなのに、それらはアイヌとは関係ないということになっている。それから、和人については、例えばニシン御殿については何のマークも付けないと言うので、まずは両方対等に並べるところから始めなきゃいけないでしょうと提案し、和人マークを考えて、ニシン御殿に付けてくださいというふうにお願ひしたんですね。そうしたら、「和人をそんなマークで、つまり日本人を1つのマークで簡潔に表すことは無理なんじゃないですか」と制作会社が言ってきて、「じゃあ、何でアイヌにはそれができるんですか」と、ちょっとむっとしちゃいました。それで、「絶対に和人マークを考えてください」と言って、考えてもらったんですね。そういうことを通じて、いかに普段アイヌを軽く扱っているかということがようやく自覚されていくわけです。和人は普通で標準で、そんな簡単に規定されるものではないって感覚が無意識の中にあるということです。

今見てきたような、アイヌのイメージというものが非常に固定的に語られてしまうにもかかわらず、現在は描かない。これは研究者の中にも同じような感覚を持っている人がいて、今のアイヌを見せたって面白くも何ともないだろう、いるのは分かっているんだし、というふうに言われることが非常に多いです。でも、分かってもらえないから、私たちは現在のアイヌを伝えなきゃと訴えるんですけど、なかなかそれが理解されることはありません。

そして、これまで見てきたようなことを和人の悪行のように私はずっと語ってきました。たしかに、こういう期待は和人の中で生まれてきたものですが、アイヌ自身がこれを強く感じとって、内面化して、もう問うこともないほど自然にこれを感じとっていて、その異質性を自ら演じてみるということもよくあります。ですから、魔よけとか神がどうのこうのとか、そういうことをアイヌ自身が強調する。日本との違いというのを強調する。本当は違わないことでも、違うように一生懸命語るということとはよく見られます。これは、戦略的本質主義というふうに見ることもできるかもしれません。戦略的本質主義というのは、アイデンティティーの支えにするために、分かりやすい象徴をつくるということです。日本との違いがこ

ここにあるから、自分たちはアイヌなんだ。それを共有している我々は、やっぱり1つの仲間なんだということを考えるときには、分かりやすいマークがあった方がよい。しかし、そういう効果を意図してこういうことが行われているというふうには、私にはあまり感じられません。また、このことに関連する問題は、やっているアイヌにとっては収入につながるわけですから、たとえそれで自分に対する偏見を強めてしまって傷ついたとしても何か見返りがある。しかし、観光業にタッチしてないアイヌにとっては、完全に被害体験でしかない。例えば、ことさらにアイヌの「原始性」を強調している観光地に他のアイヌが行くということもあります。社員旅行でそこを訪れる。私の母が経験したことですけど、そうすると「あんた、あれと一緒になの？」というふうに同僚から言われたそうです。同じような体験をほかのアイヌがしているというのも聞いたことがあります。この体験は、やっぱり母にとってはすごく不本意なことだったわけですね。だから、そういう経験を通して観光が大嫌いになるというアイヌは大変多い。でも、私はその観光の場である白老町のポロトコタン（旧アイヌ民族博物館）というところで、学生時代からいろいろな学びを得る機会を持ってきました。だから、私自身は観光そのものが悪いとはどうしても思えない。いい観光というものがあるはずで、それを目指せばいいんだと思って白老で働いていましたが、母からは「よりによって、あんたが白老で働くとは。がっかりした」みたいなことを言われて、観光地で働くこと自体を非常に残念がられてしまった。そういう母の気持ちもよく分かります。同じく観光を苦々しく思うアイヌからもいろいろなことを、「悪く言いたくはないんだけど」という形で聞かされるんですね。その気持ちも本当によく分かるので、やっぱり「とりあえずやればいいじゃん、とりあえず受ければいいじゃん」というスタイルは、もう脱却していかなければいけないということです。

では、何がポイントになるのかということ、やはり誰が誰に何を語るのかということ意識しなければいけないという点だと思います。リニューアルする前の旧アイヌ民族博物館は、アイヌ民族が主体となって運営する博物館というふうによく紹介されていました。しかし、解説している内容は、どうしても和人目線の解説になっていました。口頭で話すことも、展示の解説文も、どれも和人が和人に向かってアイヌを語るという文体からなかなか脱却できなかった。それはアイヌ民族博物館の解説部門、学芸的な部門をずっと和人の研究者が担ってきて、閉鎖直前にやっとアイヌが多数派になったという状況を反映しているのだと思います。そこから脱却するためには、語っているのは何者か、聞いているのは何者かということ意識しなければいけない。そしてさっき見たように、観光に従事しない、場合によっては来客としてやってくるアイヌ民族もそこにいるということ意識して、誰が聞いても違和感のない解説内容にしていかなければいけないのだと思います。

もちろん、描き方に倫理的な問題はないかということもチェックしなければいけません。旧アイヌ民族博物館には、いわゆる展示をする博物館の建物と屋外の復元した家屋の2カ所ありました。その復元家屋の方では、だいたい10分ぐらいでアイヌの昔の暮らしが紹介

されて、最後の方に女性の習慣として口の周りの入れ墨が取り上げられていました。その際、もともと白老で働いていた伝承者といわれる高齢の女性の顔写真をパネルにしたものを見せながら、入れ墨についての説明をしていました。しかし、アイヌ女性の入れ墨はかなり差別的な目で和人から見られて、アイヌ自身も大変これで苦しんできた経緯もあります。別の地域で観光に従事している方が白老を訪ねてきた際に、入れ墨の解説場面に個人の写真を出すのはまずいんじゃないのかという指摘をしてくださいました。このことがあってから、写真パネルをやめて絵画のパネルに替えることになりました。入れ墨そのものをあまり変な形で強調しなくてもいいんじゃないかと思いますが、入れ墨はやっぱり話題にしたいということなので、実在の人物の写真をやめて江戸時代に描かれた絵画に置き換えることで、多少軌道修正されたということがありました。この話でいえば、入れ墨文化の紹介で使われた写真に写っている本人にとっては、この扱いはどうなのかということを考えねばなりません。

それから、やっぱり一方に圧倒的な強い力があるということに自覚的にならなければいけない。力が弱い方は無意識に、あるいは意識的に相手にどんどん合わせていきますので、そこに力関係があるということに気付くのはなかなか難しい。男性の多くがセクハラに気付くことができないというのも、相手が自分に合わせてくれているとか、我慢してくれているということに気付けないということが理由としてありますが、同じようにこういう力関係というのは、意識して「ある」ものだと思ってチェックしていかないと、なかなか気付けないだろうというふうに思います。

そして、気付くたびにアイヌ民族に発言をしてもらおう。そういう機会をどんどん増やす必要があるのですが、根本的なところ、何を見せようかということを考える段階からアイヌ自身の参画を求めるということが、大変重要ではないかと思います。例えば、儀礼をすべて見せていいのか。儀礼の中のこの部分は、誰がそこにいてもいいが、これは見せられないとか。そういう線引きというのは今までまったくなかったんですね。やっぱり不思議な感じがするもの（儀式）が喜んで取り上げられましたので、宗教的なものばかりむしろ強調されてきたというふうに言っていると思います。しかし、あらためてそれでいいんだろうかということアイヌ自身も検討していく必要があるだろうと思います。言い換えれば、アイヌが主体性を持つ、あるいはアイヌの主体性を非アイヌは尊重するということになろうかと思えます。

2-5 近年の実践例

では、残りの時間で実践例について簡単にお話ししていきたいと思えます。紹介の中でも触れていただきましたが、アイヌ語のアナウンスをこれまで何カ所かでやってきました。実は一番初めは、旧アイヌ民族博物館の場内アナウンスでした。広い野外博物館の中をお客さんがあちこち移動しながら、時々解説の時間になったら解説の場所に集まってきます。復元

家屋の何番目でこれから解説が始まりますとか、何々高校ご一行様は体験学習館（修学旅行生などが木彫りをしたり楽器に触れたりできる場所）に集まってくださいとか、そういうアナウンスが結構頻繁に流れるんですね。そして、外国人の観光客も大変多かったのも、中国語、韓国語、まれに英語とかタイ語などのアナウンスも流れている。やっぱりここにアイヌ語を流さない手はないでしょうということでアイヌ語のアナウンスをつくりました。そして朝のミーティングでみんなでそれを発音して練習してもらって、生でマイクでしゃべってもらおうという、結構頑張った試みをしたことがありました。

それから、次に那覇に出張に行った際、日本トランスオーシャン航空という羽田と那覇を結んでいる航空会社がありまして、帰りの便はそれに乗ったんです。そうしたら、客室乗務員と機長が流ちょうなうちな一ぐちで機内アナウンスを始めたんです。それもハイサイ、こんにちはみたいな一言ではなくて、「皆様、本日はご搭乗いただき誠にありがとうございます。私は客室乗務員のハセガワでございます」みたいなことをべらべらべらっとうちな一ぐちでしゃべっていくんですね。これは、決まった内容であるとはいえ、かなり頑張った取り組みだと思いました。生の声で人間がしゃべっているということの存在感というのはやっぱり重要でして、どうしてもこれをアイヌ語でやりたいと思ったんですね。実は私は JR 北海道のアナウンスをしている男性アナウンサーの大ファンでして、あのかっこいい声でアイヌ語をしゃべってほしいなという、そういう思惑がずっとありました。幸いに、念願かなって JR 北海道でも車内アナウンスを渋い声でもらえることになった。JR のエアポートライナーでは、札幌と新千歳空港を往復するときに、出発前に「イランカラマテ（こんにちは）」という一言が流れる。それから、特急が白老駅に着く前に、「ウポポイにお越しの方は次の白老でお降りください」というアナウンスがアイヌ語で流れる。これはウポポイのアイヌ語担当職員が吹き込みをしてくれました。

それから、これは平取の関根さんというご一家が間に入ってくださいって、話をうまく進めてくださったんですけど、道南バス、特に平取町内を走っている間の路線の各停留所で、「次は平取小学校前」といったアナウンスを日本語とアイヌ語で流すということが実現しました。各停留所で録音した音声流れるんですけども、もちろんアイヌ語が流れても分からない人が、アイヌ自身でも分からない人がほとんどですので、何をしゃべっているのかということの説明するパンフレットを2種類作りました（写真1）。私はアナウンスだけでいいと思っていましたが、停留所名も全部アイヌ語にすることになって、平取町教育委員会の関根健司さんという方が大変なご苦勞をなさって、元の地名を調べてくださり、ようやくでき上がりました。つまり、地名もたくさん変わってしまっていて、〇〇専門学校前といった地名がもともと何と呼ばれていたかということ町古の古い記録からたどる作業が必要でした。元の地名に戻せない所は、今の停留所名をアイヌ語訳しました。

それから、地下鉄札幌駅の改札裏のところにミナパという展示スペースがあります（写真2）。アイヌ文様をあしらった空間にさまざまなものが展示されたり、休憩できるようなテーブルとベンチが並んだりする中、大きなモニターがありまして、アイヌ民族に関するアニメ

ーションとかドキュメンタリー映像とかいろいろなものが流れています。その中で、1時間に数回天気予報が流れるようになりました。私はこれをぜひやりたかった。昔話というのは、ある意味決まったものをずっと毎回聞くことになるわけなんですけど、天気予報とか、地下鉄だから「2つ前の駅を出ました」とか、そういうリアルタイムでそこを通る人に役に立つ情報をアイヌ語で伝えるということをしたかったんです。天気予報では、アイヌ語によるお天気マークの凡例も画面に映っていて、アイヌ語で晴れのマークや雨のマークを示しています。地名もアイヌ語で表示しています。例えば室蘭というのはモルエランが語源なので、それをそのまま天気予報の地名として示しています。困るのは岩見沢ですね。岩見沢は新しい地名で、もともと今の岩見沢一帯の地域をどう呼んでいたか、なかなか特定が難しいところがあります。そういうところを少し何とかしながら、天気予報を実現していったということです。

道南バスアナウンスなどが実現したときに、結構報道で取り上げてもらいましたが、報道の中で説明されるのは「アイヌ語に触れてもらう」、「町外から来た人にアイヌ語に触れてもらって、楽しんでもらう」ということが意義として報道されていました。しかし、私は、そういうことに加え、一番はアイヌ語の認知向上であると考えています。触れてもらうということに近いですが、楽しむというよりは、日本国内に異言語があるということを知ってもらう。それから、アイヌ語を使いたいと思っている人自身が、アイヌ語を聞くことができる。聞いて、自分に必要な情報をそこから得ることができる。そういう情報を得ることと、それからアイヌ語が流れているのが当たり前になる。そういうふうにしてアイヌ語の使用範囲が拡大されていくということが、一番重要な目的だと思っています。それは、日本トランスオーシャン航空の機内放送を聞いたときから思っています。つまり、これはアイヌ自身の言語権の保障のためにやることで、そのために多数派の和人がアイヌ語に関心を持って、自分たちの暮らしているところに異言語が流れているということを当たり前を感じるようになるということが絶対に必要なことです。

おなじみのアナウンス アイヌ語では...

■ このアナウンスは、アイヌ語抄訳方言で行っています。
 ■ 赤文字の言葉は、翻訳に際して作成した新語です。
 ■ 各停留所のアイヌ語名は、座席ポケット又は車内に発出の「アイヌ語(バス停名)」をご覧ください。
 ■ アナウンスの詳細は、専用Webサイトでご覧いただくことができます。 *QRコードからアクセスできます⇒

| 日本語 | アイヌ語 | |
|---|--|--|
| 道南バスより、お知らせいたします。 | イランカラフテ、 道南バス チネ ワイタカ、チキ ス ヤン、 | Irankarafite, 道南バス chine wa itak-as diki nu yan. |
| このバスは、〇〇から〇〇の区間、 日本語とアイヌ語で ご案内いたします。 | タケツネ、〇〇 オロフ、〇〇 パノ、 アイヌ イタク シラム、イタカニ アイシラムキレ、クス ネ、 | tao anakne 〇〇 orwa 〇〇 pakno aynu itak siaram itak ani a=i-sirankire kusu ne. |
| 詳しくは、座席ポケットに備え付けの リーフレット、またはポスターを ご覧ください。 | ウシ、カンピオ(座席ポケット) オロ、オマ ウエベケ(リーフレット) クサ トウラムカサ(ポスター) スカラシ、 | usa kampio or ama uebekerama usa tutamkausisa mukir yan. |
| 次は〇〇です。 | ネイ トツタス 〇〇 オロ アコシレバ、ネ、 | ney tutanu 〇〇 or a=kosirepa ne. |
| お降りの方は、お知らせください。 | ツバシ、ルスイ、チキ、ラウヌレ、ヤン、 | rap-an rusuy diki ur-nure yan. |
| 運行中、万一の急停車に ご注意ください。 | バス、ホコブ、ラボク、ニサツ、アッ ヒ、カ、アツ、クス、ヤイトバシ、ヤン、 | バス hoyubu rapokke, nisaatsu as hi ka an kusu, yayitupere yan. |
| ここまでの区間は、日本語と アイヌ語でご案内いたしました。 | テ、パノ、アイヌ、イタク、シラム、 イタカニ、アイシラムキレ、ハユ、ネ、ウ、 | te pakno aynu itak, siaram itak ani a=i-sirankire hawe ne u. |
| ありがとうございます。 | イヤイラカレ、 | iyayra-kare. |
| 〇〇経由〇〇行きます。 | タケツネ、〇〇 カリ、〇〇 ランノ アツバ、ネ、 | tao anakne 〇〇 kari 〇〇 urno arab a ne. |
| 到着をお知らせいたします。 | チウレンカレバ、ウイナ、ヤン、 | churenkarep uyra yan. |

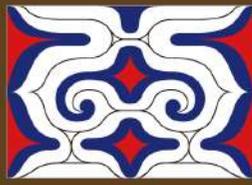
※ 札幌 五輪駅 道南バス 先住民族センター 電話 011-708-5161

お問い合わせ

「イランカラフテ」キャンペーン推進協議会事務局
 (内閣府アイヌ総合政策推進部北海道分室)

〒060-0811 札幌市北区北条通2丁目 札幌駅1台階5号
 電話 011-708-5161

Webサイト
http://www.ainu.or.jp/event/direct/2018aynu_itak_ani_a=i=sirankire_kusu_ne/bus01.pdf



道南バス
 高速ひだか号・特急ひだか号・日高富川高校線

**アイヌ語で
ご案内します**

**アイヌ イタカニ
アイシラムキレ クス ネ**

アイヌ語でご案内する便

- 高速ひだか号(日高ターミナル～札幌駅前ターミナル)
 - ▶ 6:30 日高ターミナル 発 ▶ 15:45 札幌駅前ターミナル 発
- 特急ひだか号(日高ターミナル～苫小牧駅)
 - ▶ 7:50 日高ターミナル 発 ▶ 14:25 苫小牧駅 発
- 日高富川高校線(富川高校～日高ターミナル)
 - (往) ▶ 18:00 富川高校 発
 - (帰) ▶ 8:42 日高ターミナル 発 ▶ 12:22 新日高 発
 - ▶ 15:00 日高ターミナル 発

「イランカラフテ」キャンペーン推進協議会
 (内閣府アイヌ総合政策推進部北海道分室)

写真1 道南バスアイヌ語アナウンスのパンフレット

(出所:「イランカラフテ」キャンペーン推進協議会事務局 https://www.ff-ainu.or.jp/event/direct/2018aynu_itak_ani_a=i=sirankire_kusu_ne/bus01.pdf)

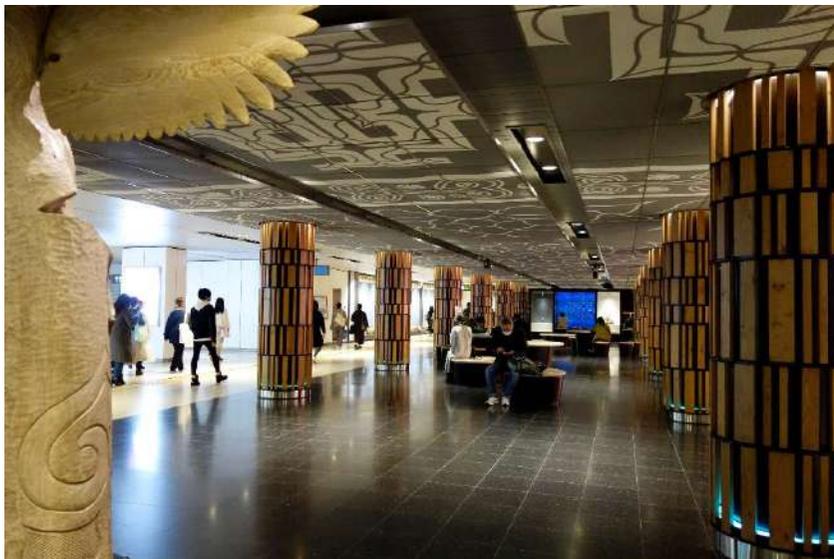


写真2 札幌駅地下歩行空間にあるミナバ (撮影:岡田真弓)

ウポポイにおける取り組みについても少しだけ話したいと思います。まず芸能公演の話を見せてください。ウポポイの体験交流ホールでは、芸能を紹介する2種類の公演を行っています。とくに気を付けたのが、まずは uwerankarap というアイヌ語の伝統的なスピーチがあるんですけど、それを職員一人一人ができるようにし、一人一人違ったメッセージをそこに込めるということをしました。必ず違う必要はありませんが、自分が言いたいことを職員が自分で考えて盛り込みました。ここで重要なのは、働いている職員の中には和人とアイヌと両方いることです。だいたい半々ぐらいいます。しかし、ほかの観光地も含めて、来場する人は、そこにいるのはみんなアイヌだというふうに思うわけです。だから「あなたはアイヌに見えないけどアイヌなの？」という質問がされたり、あるいは「自分は和人だ」と言うと「にせものがこんなことをしていいのか」とみたいな非常に侮蔑的なことを言われたりします。それは和人職員にとっても大変つらい体験になっています。ここで和人が働いていることも、積極的な意味を持っているということを伝えることが、この施設の大きな役割だと思うんです。協働でアイヌ文化の復興と普及を行っていく。その中で、民族的な背景の違いというのをお互いによく知りながら、一緒に働いていくということが、民族共生の1つの体現になると思いますし、それをここでやっているんだということをスピーチという形で、自分たちで表現することに挑戦しています。

それからもう1つは、クマ送りという儀礼の流れをダイジェストで再現するプログラムがあります。当初は、シャツとか着ていない、腕時計とかしていない、眼鏡もしていない、「本当のアイヌの儀式空間」を表現するというのが原案としてありました。和人もそこにはいないという設定です。そういう状態は少なくとも200年以上前じゃないとないわけです。しかし、200年前の踊りがどういうものだったのかというのは、残念ながらまったく分かりません。鳥の踊りがあったとか、そういうことぐらいはわかりますが、芸能というのは非常に短いスパンでどんどん変化していきますので、20年前どうだったかということをきちんとたどろうと思ったら、結構大変です。それが戦前になったら、もう分からない。200年前になったら、まったく分からないと言った方がよい。だからそれを、「200年前のものを再現しています」というふうに言うのは、やはり看板に偽りありになってしまうわけです。むしろ今多くのアイヌがクマ送りを経験したことがない。クマ送りの意義も自分たちであえて勉強する機会を持たなければ分からない。この場面ではどういうことを祈ればよいのかもまったく分からない。そのようなことを無理してするよりは、それを取り戻していく過程をここで公開しているというふうに言った方が事実に近いし、胸を張ってやれるんじゃないか。今ここでやっていることは、将来的にクマ送りをしようと思ったらできるようになる。その知識を職員が仕事を通じてもう1回構築している様子を公開する。だから伝承がここにはないんだ。今、回復をしようとしているということを前面に出した方がいいんじゃないかというふうに言ったんですね。それはやっぱり結構当たりだったなと思っています。あとは、儀礼の雰囲気を出すために、アイヌ語しか使わない。そして、アイヌ語でアドリブを入れる試みもしました。ただ、この舞台は参加する人数が大変多いので、密を避けるため

にずっと公演中止になっています。昨年の秋から全然できていないので、その点は大変残念に思っています。

あとは、国立アイヌ民族博物館における展示品の復元についてお話しして終わりたいと思います。博物館の展示では、いろいろな地域のアイヌの工芸家が複製などの形で作ったものがたくさん展示されています。複製を通じて技術を復元し、取り戻していくということも、この博物館の機能の重要な側面です。特に私がかかわったのは、この仔クマの装飾です（写真3）。クマ送りで送られるクマは装飾品を付けていましたが、クマ送りで用いられた装飾品関係のものは、日本国内では網走の北方民族博物館に1点しかありません。それから、耳飾りと頭飾りがあって、頭飾りは上野の東京国立博物館に1点、耳飾りは北海道大学植物園博物館や大阪の国立民族学博物館とかに何点かずつありますが、すべてそろいの資料というのは、この網走に1点しかありません。二股の木は、クマをつなぐための杭です。これは日本国内には模型しかなく、実物は世界のどこにもありません。この杭は非常に巨大で、巨大過ぎるがゆえに博物館に収蔵できない。だから模型は残っていても、実物はもう地上に1つもありません。これを調査を通じて、作り方から何からを確かめて復元し、展示に至りました。

クマの頭飾りは、ロシアのペテルブルグにある資料をもとに再現しました。クマの帯には小さい袋がたくさんついていて、ここにクマのための食べ物が入っていますが、これは網走の資料をもとにして作りました。大きな杭は、これは当時の写真と模型資料の観察をもとにして復元したものです。



写真3 仔クマつなぎ杭（提供：（公財）アイヌ民族文化財団）

アイヌを主体にした観光や文化表象において何が重要かという、やっぱり目的がどこにあるのかということだと思います。アイヌ政策の場合もそうですし、観光の場合にもそれが重要だと思います。マイノリティー自身が自尊心を回復していくためにやる。以前の観光

のあり方というものは、本当に尊厳を削るような紹介の仕方だったわけですが、そうではなく、当たり前の人間としての価値というものを確かめるような、喪失してしまったものを回復していけるような、そういうことが大前提として考えられてなければいけないだろうと思います。それから観光地で働く人は、そこに至るまでにさまざまな差別体験をしてきています。自分自身が直接差別を受けたり、あるいは誰かが差別を受けたりしていることを目の当たりにして、自分の属性を隠すように生活してきた。そういった人々が観光地で働いて、そこでもう一度差別的な体験をするというのは、もう目も当てられないことです。まずはそこで働いている人にトラウマがあるということを想定して、そのケアや自分自身で回復していくための取り組みも含めて考えられなければいけません。そういうことを実現していくためには、観光にかかわる意思決定の重要な場面にマイノリティーが参画していることが必要だと思います。

本日は、主にアイヌについてお話しました。しかし、今日お話したポイントは、最初の方でアフリカ系の文化表象について触れたように、多くのマイノリティーに共通する事柄ではないかと思っております。ありがとうございました。

3. ディスカッション

岡田: ここからは北原先生のご講演内容をもう少し掘り下げていくために、対談形式で進めていきます。

北原先生のご講演で重要なポイントだと感じた点が3つありました。まず1点目が、マイノリティー文化観光、あるいはアイヌ文化観光においては、内向きの需要と外向きの需要があるという点です。ここは、一般的な観光と少し異なります。

例えば、明治以降のアイヌ民族と和人に関する歴史的背景や観光が非常に多岐にわたる事業体との連携によって成り立っている産業であるという理由から、必ずしもホストが文化伝承者（アイヌ民族）、ゲストがそれ以外の人たちという単純な関係性にはならないという指摘がありました。こうした状況の中で、観光を通じてアイヌ民族や文化をどのように伝えていくかが一つのポイントになると思いますが、この点について補足があればお願いします。

北原: 内向きの需要というのは、例えば和人の場合、小学校に入る前から保育所とか幼稚園などで日本語を教えてもらう。読み書きを教えてもらう。あるいはお遊戯などを通して自分たちの文化などを教えてもらうということができる。小学校に入ると、さらにそれが進んでいくわけですね。ところが、アイヌや琉球といった日本の中のマイノリティーは、公教育の中で自分たちについて知る機会がほとんどないわけです。

ですから、例えばウポポイに修学旅行生がたくさん行っていますが、旅行生の中にアイヌの児童がいた場合、ウポポイは初めて自分について知る機会になる。学校でもアイヌ文化に関する授業をやりましても、先生も（アイヌ文化について）十分な訓練を受けずに教員になっていることが多いので、飛ばしてしまったり、あるいはちょっと不完全な形で紹介されたりする。それも4年生の間の数時間だけ。だから、じっくりと自分の文化について知ったり、触れたりする機会として、観光というのは重要な場合が多い。

私の場合も、学生時代に白老に何度も通って、そこで儀礼に参加させていただいたことが今の研究に非常に生きているので、そういうアイヌのための場所でもある。その深さなんか少し違いがあるということで、どの程度のものが求められるのかということにもバリエーション、多様性があるんじゃないかということです。

岡田：北原先生のように、当事者として博物館や観光地でアイヌ文化に触れたことによって、アイデンティティーに気が付いたり、それを強くしたりするケースもあると思います。一方で、従前のように初めてその文化に触れる人が、新しく文化を学ぶ場合と、当事者が学びに触れて自身のアイデンティティーを強化するといった場合の文化交流としての観光が果たす役割、言い換えると観光を通して発信される内容や見せ方は異なってくると考えられます。

北原：ホスト側にもいろいろなそこ（観光）に至るまでの経験があって、自分のニーズというものもあると思うんですね。例えば本当に踊りが好きで観光地で働いている人もいるし、工芸が好きで働いている人もいるので、自分自身が何が楽しくてここまで来たのかということが出発点になるでしょうし。私の場合は樺太がルーツなので、アイヌ文化とはこうですというふうに、白老の文化だけとか平取の文化だけという紹介の仕方だと、私のニーズと合わない。

旧アイヌ民族博物館は、アイヌ全体を網羅的に扱うということを一応モットーとしてやっていたので、そこに行くと、樺太の文化に触れることもできました。「これが自分の、アイヌの中でも特にこれが自分のものなんだ」というふうに多様な学びができるということが、もう1つ大事じゃないか。外向けにはどうしても大ざっぱな紹介になりがちですが、あえて多様性というものをきちんと紹介することで、内向きの需要にも応えられるし、外向けにも丁寧な紹介をすることができると思います。

岡田：今の点に関連した質問が会場からありました。ご講演の中で、白老の旧アイヌ民族博物館で女性の入れ墨の解説をする際に、最初、実際の写真を使っていたが、途中から絵に替えたというお話がありました。伝統文化をどのように説明するか、どのような資料を見せるかという検討がなされたようですが、例えばこれを教育の現場に置き換えたときに、民族文化をどのように説明するかという検討にもつながるように思います。こうした検討は教育

現場でもなされるべきでしょうか、という質問が来ています。

北原: ありがとうございます。やっぱりアイヌについて語るときに、精神性についてというのは非常に多いんですね。ほかにもいろいろ語るべきことはありますが、やっぱりこれまで長く、そこを特に紹介してきた蓄積がある。例えば各地域のアイヌ協会とかアイヌ文化保存会という組織があるんですけど、そこの方が小学校に行って、普段は観光の仕事をしているわけじゃないけれども、地域のゲスト講師として子供たちに教えるということが増えてきています。そうした際にも精神性を語らないと、アイヌ文化を語ったことにならないんじゃないかというふうを感じる人が多いようです。それを言わないとさまにならない。あとは宗教儀礼には装飾品や晴れ着などの華やかなものが多い。なので、やはり目を引くということで、それを取り上げやすいということもあると思います。しかし、宗教儀礼ですので、それを聞く学生や生徒の中にもいろいろな背景を持った子供がいますから、一律に経験しなきゃいけないというものではないだろうとも思います。

また、経験する以上は十分敬意を持たなければいけないと思いますが、学校の授業ではそういう心構えがない場合も少なくないと思うので、そこに無理に大事なものを一律に導入しなくてもいいんじゃないか。もっと手軽に触れやすいものというのが選択されていくべきだし、そのための研究が必要なんじゃないかと思います。

岡田: 次に 2 点目に移りたいと思います。アイヌ民族による観光、アイヌ文化観光を含むマイノリティー文化観光において、文化伝承あるいは振興の重要性というのは看過できないと思います。実は、こうした指摘というのは国際的にもされておりまして、国連の世界観光機関 (UNWTO) が 2019 年に出した「先住民族観光の持続可能な発展に関する勧告²」にも、先住民族観光が文化伝承や文化交流に果たす役割の重要性が指摘されています。

本日の北原先生のご講演や UNWTO の勧告を照らし合わせると、観光活動を通じた文化伝承は、マイノリティー文化観光を特徴づける重要なポイントです。今後、北海道のアイヌ文化観光における観光を通じた文化伝承や文化振興について、どうお考えでしょうか。

北原: もともと文化というのは、どんどん創造されていくものです。だから、その文化が力を持っていれば、活力を持っていればどんどん変化していくのが当たり前だと一般的にいえます。だとすると、200 年前のものが本物だから、それを見るのが一番良いという考え方は、そもそも文化の実態と離れていることになります。一般的には、「伝統」が素晴らしい

² UNWTO World Committee on Tourism Ethics 2019: *Recommendations on Sustainable Development of Indigenous Tourism*. <https://www.unwto.org/doi/pdf/10.18111/9789284421299#:~:text=The%20Recommendations%20on%20Sustainable%20Development,and%20experiences%20within%20their%20communities>. (2022 年 2 月 2 日アクセス)

と考えられています。伝統というものをもし解釈するとすれば、私はよく俳句や和歌にたとえます。俳句は五七五みたいな長さのルールが決まっています、それを踏まえる。それから季語を入れるとか、気の利いた言葉を選ぶというのが約束事としてはありますが、歌そのものは毎回「新しい」ことに価値があるとされます。伝統はそれに近いものだと思うんですね。

だから、要するに「同じである」ことが大切なのではなくて、それを受け取る人を楽しませることが一番大切。クマ送りについても、いろいろな芸能の演目が新しく加わりながら常に変化してきたはずで、その変化を肯定的に示すという意味でも、復元的にやっていく。そして、未来志向のクマ送りだから、新しい演目や要素でも楽しければ、クマの神が喜んでくれそうなものはどんどんそこに入れていくんだという提示の仕方をする事で、停滞的で固定的な伝統観念みたいなものを脱することができるというふうに考えてやってきたわけです。

それから、文化伝承と観光の視点でいえば、例えば、実際には来場した人に見せるためには、15分から20分ぐらいのステージで見せることが必要になります。一方で、15分ぶんの踊りしか知らなかったら、何かとても寂しいですね。アイヌ文化にはたくさんの歌、踊りがあるので、実際にはステージでやるのは15分間だけど、自分はレパートリーをたくさん持っていて、その気になれば2時間でも3時間でも延々と披露できる。そういう豊かな伝承を自分が持っていて、そこからいいところを選び取って、あるいは毎回組み合わせを変えていろいろなものを紹介していけることが豊かな伝承につながると思うんです。

だから、博物館に勤務する人は、まずは新しくそこで仕事としていろいろなことを覚え始める。刺繍の人は本当に分業みたいに刺繍だけを覚える。木彫の人は木彫だけを覚えるというふうになりますが、勤務する中で覚えるものを増やして行って、自分自身にとっても、個別の要素が横につながっていく豊かな伝承というものができていくというのが望ましいと思います。

岡田：2000年以降、加速化した政府によるアイヌ文化振興やアイヌ民族に関する施策中でも、文化伝承と経済活動を両立するツールとして、観光に期待が寄せられ、関連する支援策も取られてきました。その際に、観光産業だけに支援が向くのではなく、文化観光の根底を支える新しい文化の振興というところもきちんと支えていかないと、バランスがとれていかないということでしょうか。

北原：ほかの文化振興と観光と、完全に分けなくてもいいと思うんですけど、観光地というのもそこが学びの場であって、学んだことを紹介していくことができます。それは、大学で研究している人間が研究の幅を広げて発信していくということとまったく同じだと思います。ただ、こういう施設にそれが限定される必要はなくて、それぞれの地域でそれぞれの学びというのを支援するというのが一番いいと思います。

岡田:ここでフロアからの質問をご紹介します。従前の観光では、ゲスト側がアイヌに原始性を求めたり、自然との共生といったイメージを求めたりするという点が指摘されていました。新しく開設されたウポポイにおけるアイヌ文化の表象において、上記の点はどうなったと思いますか。

北原:なかなか脱却できないところもあると思います。分かりやすくアイヌってこういうものですよというふうにくくって、しかも分かりやすくする分、現実とは乖離しますし、面白おかしく脚色されたような描かれ方になるということも避けられないと思います。これを脱するためには、例えばやってくる側の主観を問い返すということが必要になってくる。あなたは、アイヌである私を見にきたけれども、あなた自身はどういう人ですかというような、そういうコミュニケーションが必要になってきます。

さっき私がいくつかの文化の例で紹介したみたいに、こうやって見てみると、和人もアイヌも同じじゃない？じゃあ、完全に同じかといったら、それぞれアイデンティティーがあるんだから、その違いはどこから来るのだろうか、一人一人の相手に応じたコミュニケーションをしなければいけない。それは相当大変なことで、時間を食ってしまうので、たくさんの方をさばかなければいけないポジションの人は、どうしても紋切型の語りになりやすいですね。

ですので、こうした対策は現場ではないところで何かしていかなければいけないと思います。仮に、1人で100人の来客をこなさなきゃいけない、けれど、丁寧な解説のために1人当たり30分話さないとされたらそれは不可能なので、どうやってそれを解決するかというのは、運営側が考えていかなければいけないことだと思います。

岡田:ありがとうございます。3点目として、本日も指摘いただいた従前の観光における課題点を解決するためにも、当事者あるいはコミュニティと観光事業者のパートナーシップは欠かせないと感じました。UNWTOの「先住民族観光の持続可能な発展に関する勧告」をはじめとする先住民族観光をめぐる国際的な議論でも、先住民族とのパートナーシップの重要性が指摘されております。恐らく北原先生が携われた北海道観光振興機構の『アイヌ文化・ガイド教本』も先住民族と観光事業者とのパートナーシップをめざすため、観光活動における誤解や意識しない差別発言などが起こらないよう、適切な情報発信をするためのガイドとして作られたと理解しています。

実はこうした観光産業向けのガイドは、ほかの国でも出版されています。例えば、カナダのブリティッシュ・コロンビア州の先住民族観光協会が、観光事業者向けに先住民族に関する観光を企画する際に、観光事業者が留意すべきチェックリストを作っています³。また、太平洋アジア旅行協会も世界先住民族観光連合とともに、先住民族観光と人権についての

³ Aboriginal Tourism Association of B.C. n.d: *Aboriginal Cultural Tourism Business Planning Guide*. <http://cms.spincaster.com/siteFiles/85/files/ACTBPG.pdf> (2022年2月2日アクセス)

チェックリスト付きガイドを作っております⁴。こういう海外でも日本でも今進みつつある観光事業者と先住民の公平な連携のための仕組みづくりというのは、私自身も非常に関心があって、これからきちんと調べていきたいと思いますが、この点についてお話を伺ってみたいと思います。

まず連携のあり方として、例えばアイヌ民族と和人が一緒に観光業をつくっていくという可能性についてはどう思いますか、という質問がフロアから来ております。これに関連し、私からも一つお尋ねします。北原先生もご指摘されていたとおり、先住民観光には先住民が企画段階の段階から、明確に意思表示ができるようなコミットメントのあり方が求められるという考え方が散見されます。現在の北海道で、こうした連携をめざす際、望ましい連携のあり方や仕組みなどについてお考えがあれば教えてください。

北原：1つ目は、一概には言えませんが、当事者と非当事者、この場合はアイヌと非アイヌの立場があったとして、やっぱりアイヌの方がリアルに自分のアイデンティティーということを考える場合が多いと思います。私の場合だったら、樺太の中の西海岸の、西海岸の中にも南と北があるので北の方の、特にオタスッというところが自分の地元なので、そのことを、より絞って知りたいとかですね。ほかの地域のアイヌ文化が分かっても自分は満たされないんだと。いろいろな細かいニーズがあるんですね。

それに対して、非アイヌの方は「そこまでいいわ」ということもある。別にそれが悪いというわけではなく、ただ「そこまで細かく関心は持たないけど」というスタンスが多いと思うんですよ。なので、わりとパターン化された、要約されたアイヌについての知識を持っていることが多いと思うんですけど、それをもう少し情報を提示する側が、分かりやすく多様性や深みを紹介できるような環境をつくっていくと、和人として観光に携わる人も、アイヌ文化とかアイヌ民族のいろいろな可能性に気付くチャンスが増えると思います。そうすれば、自分なりにここを紹介しようというような意欲も出てくると思うんですね。そうならなければ、やっぱりこんなものですよという通り一遍の説明で済ましてしまうということになりがちだと思います。だから研究と情報の提供こそが、まずは重要だと思います。

それから、今日お話したような、「当事者じゃなければ気付かないけれども、実は傷ついています」みたいなことの共有とか、いま起きていることの共有は、やはりもう1つ必要でしょうし、まったく悪気なくアイヌについてこうやって語っていたことが、隣で働いている当事者を傷つけていたとか、そういうケースって結構ありますので、その共有も必要です。

来場者に対する事前の情報提供って大きいと思うんですね。例えば、私はハワイのポリネシアンカルチャーセンターというところに一度行ったことがあるんですが、あそこはハワ

⁴ Pacific Asia Travel Association & World Indigenous Tourism Alliance 2014: *Indigenous Tourism & Human Rights in Asia & the Pacific Region: Review, Analysis, & Checklist*.
<https://www.ecotourism.org.au/assets/Resources-Hub-Indigenous-Tourism/International-Indigenous-Tourism-Human-Rights-Review-Analysis-Checklists.pdf> (2022年2月2日アクセス)

イだけではなくて周囲の太平洋の島々の文化を紹介している。隣に大学があって、その学生の中にはそれぞれの島出身の学生がいるんですね。カルチャーセンターでアルバイトをして、自分がトンガの学生ならトンガの文化について学びながら、それが仕事にもなって、学費や学生生活を維持していく上での収入にもつながっていくという、そういう施設の意義というのを行く前にレクチャーしてもらっていたので、この施設の意義を理解できたと思うんです。だから、短くてもいいので、事前の情報というのはすごく重要です。それによって来場者の振る舞いも大きく変わってくると思います。

あとは、旧アイヌ民族博物館で働いていたときに、見学者のマナーがすごく悪いことが気になりました。大切な展示資料を無造作に触っていくとか、イナウという大事な、神様にささげたものを引っこ抜いて振り回して遊ぶとか、そこは「何をやってもよい原住民村」みたいな雰囲気だったんです。同じ人がたぶん美術館に行くと、展示品が露出していても触らないと思うんですね。引っこ抜かないと思う。だから、そこがどういう施設なのかというメッセージというのはいろいろな形で発せられていて、行く前にもう態度が決まってしまうところがあると思います。

それから、従業員がエスニックな格好をしているのか、それとも美術館の職員然としてちょっとよそ行きの格好をしているのか。それによってもかなり心理的な態度って変わってくる。だから、ヨーロッパふうにする方がいいということを言いたいわけじゃないんですけど、いろいろな演出というのも来場者の態度を決めることにつながっていく。だから、アイヌ文化らしさを何か込めながらも、見る側が敬意を持つような演出も考えてみる必要があると感じてきました。

岡田: ありがとうございます。北原先生のご講演の中でも、アイヌ文化における多様性についてのご紹介がありました。アイヌ文化観光において、地域の多様性を発信することは当然のことながら、地域の多様性に配慮することは文化観光におけるマナーにも関連してくることかと思えます。そうした場合、『アイヌ文化・ガイド教本』のようなガイドや指針は良質な学びにつながる文化観光にとって必要な手段であるように思いました。『アイヌ文化・ガイド教本』を元手に、地域ごとの文化的多様性に配慮した観光振興が検討されるようになると、各地のアイヌ民族と観光事業者の連携が生まれる可能性が高まると推測されますが、このあたりはいかがでしょうか。

北原: あれはかなり大ざっぱなものなので、それが今度は地域の実情に合ったものがつくられていくといいと思います。あの中で1つ気を付けたのは、例えばアイヌの起源ってすごく簡単に語られてしまうことをさっき申しましたけど、ガイド教本では、北海道島に人間が暮らし始めたところから今に至るまで、ずっと一貫したアイヌの歴史だと考える立場もあるということを示したんです。

それが本州の場合であれば、みんなそういう感覚を自然に持っていますね。例えば、かつ

て1990年代に20万年前の石器が出てきたと騒ぎになって、結局、それは捏造でしたが、なぜ日本中があれで熱狂するかというと、20万年前に誰がいたとしても、それは自分たちのルーツに違いないという信念があるから。だから、連続性が証明できなくなつて構わない。素朴な感情として、この土地に昔いた人は自分の先祖に違いないという、それが一般的な歴史観だと思いますし、捏造の部分以外は、全然それで悪いことではないと思います。

ということは、アイヌも自分たちの歴史をそういうふうを考える権利がある。これは当たり前なのですが、なかなか確認されない。例えば、そういう歴史観1つとっても立場によって大きく変わるし、相手の立場に配慮する必要があるということをガイド教本の中では示しました。あとは、本当に日常に染み付いてまったく意識されないような、ちょっとした言葉遣いとか、無意識に例えば和人を主体にして語っている点。「アイヌ文化には文字がない」、「アイヌ語には文字がない」、「アイヌ文化には稲作がない」というように、「○○がない」という語りが非常にアイヌの紹介には多いですが、それは本来おかしいことです。例えば私という人間を紹介するときに「北原にはしっぽがない」、「北原には角がない。その代わり、手がある」と言ってみるのはすごくこっけいなことだと思うんですね。

「北原には手がある」、「鼻がある」、つまり紹介する対象に即したことを言えばいいのです。「アイヌには口承の文化がある」「アイヌには採集と狩猟に分散的に依拠した生活スタイルがある」と言えばいいのであって、他の文化を基準に「○○がない」というのは、特徴を明らかにする1つの手段だとは思いますが、それによって何かすごく主体性がないような紹介のされ方になってしまうというのは、ちょっと陥りがちなことであるので気を付けたい。そういうありがちな表現みたいなものをまとめて後ろの方に付録として付けたんですけど、そういう形で仕事をしている方に気付いてもらうきっかけになればと思います。

岡田:ありがとうございます。全部のフロアからの質問にもお答えできなかったんですけども、そろそろお時間も過ぎましたので、本日のオンラインフォーラムを閉会させていただきますと思います。北原先生、本日はさまざまな観点から重要なポイントをお話しいただきまして、ありがとうございました。

北原: どうもありがとうございました。

ニセコ町観光の展望

片山 健也

ニセコ町 町長

高橋 葉子

ニセコ町商工観光課 参事

石黒 侑介

北海道大学国際広報メディア・観光学院／メディア・コミュニケーション研究院 准教授

天田 顕徳

北海道大学国際広報メディア・観光学院／メディア・コミュニケーション研究院 准教授

木村 宏

北海道大学観光学高等研究センター 教授

「観光地域マネジメント論演習」2021 年度受講者

ニセコ町と北海道大学観光学高等研究センターは、2010 年に観光分野で協力する連携協定を結び地域資源の開発・活用、科学技術・文化の振興、人的交流・人材育成、生涯学習、地域の持続的な発展についての調査研究をおこなってきました。2020 年にはこの協定に基づきニセコ町観光振興ビジョンの策定に向けた共同研究が新たにスタートし一年をかけ議論してきました。本稿はこの議論とその成果発表、および国際広報・メディア観光学院が開講する「観光地域マネジメント論演習」を受講した学生による「持続可能な観光」をテーマにニセコ町内での調査研究の成果発表をあわせて開催した、北海道大学×ニセコ町官民共同研究事業コロキウム「ニセコ町観光の展望」における発表の記録です。

1. はじめに

1-1 司会あいさつ

木村：皆さんこんにちは。ただいまより、ニセコリゾート観光協会が主催し、ニセコ町及び北海道大学観光学高等研究センターが共催する、北海道大学とニセコ町官民共同研究事業コロキウム「ニセコ町観光の展望」を始めます。このコロキウムは、北海道大学観光学高等研究センター2021年度第3回オンライン観光創造フォーラムと併せて開催いたします。本日はオンラインでご参加の皆さんが60名ほどいらっしゃいます。会場には30名を超える皆さんにお集まりいただいています。会場の皆さんには、日曜日のいい天気の中にもかかわらず、お運びいただきましてありがとうございます。

それでは、開会のごあいさつを、ニセコ町長、片山健也様をお願いいたします。どうぞよろしく申し上げます。

1-2 ニセコ町長あいさつ

片山：皆さん、こんにちは。ニセコ町長の片山と申します。よろしく申し上げます。北海道大学大学院の皆さんには、3日間という大変ハードなスケジュールで来町いただき、調査及びその取りまとめをしてくださいましたことに感謝申し上げます。普通、リゾートに来るときは、健康的な環境の中、心身を癒やして帰るものでありますが、皆さん、ストレスをためながらの3日間の生活だったのではないのでしょうか。

今、私たちの社会は3つの大きな壁に当たっています。1つ目は、経済成長です。将来、経済成長という言葉自体が死語になるかもしれない。2つ目は、格差の問題です。世界中で生活の格差が拡大されており、日本国内でも大きな格差が生まれています。日本ユニセフが、これまでアフリカや南米に、いわゆる後進国と言われるところの子どもたちのために、水や食料や教育の応援をしてきました。しかし、私たちの町、日本を振り返ると、先進国の中でも教育格差は最悪の状態になってきているのです。子どもの人権をどうするかという研究も進んでいます。ニセコ町もその5つの検証団体の1つとして、子どもの暮らしや人権の調査をしています。

3つ目は地球環境です。気候変動や海洋汚染、それらをどうしていくかということは最も大きな課題です。これから、観光や農業というものを通じ、真正面からそのことを議論して、観光は気候変動にどう対応するのかをしっかりと考えていかないと、観光自体が危うい社会になります。私たちは今まで良い環境を子どもたちに残したいということで、2002年に環境基本計画を作りました。2年間徹底して住民と議論をして、乱開発させない、将来の子どもたちにこの景観や環境の価値を残していこうということを決めて、この環境を子どもた

ちに残したいと、「水環境の町ニセコ」というプランをつくりました。水環境の保全等を進めているところです。観光というものは、私たちの暮らしと直結するもので、この暮らしぶりが観光価値につながっていく。そういう地域づくりをしていきたいと思っています。

結びに2冊だけ、本を紹介します。地方創生の本ですけど、『キロワットアワー・イズ・マネー』という本です。エネルギーの価値創造をどのようにしていくかという本です。本当に良い本ですので、機会があったら図書館でお読みいただければありがたいと思っています。それからもう1つは、『共感資本社会を生きる』です。これまでのお金優先の社会から共感で経済を回していく、そういう社会に国全体を切り替えていく必要があるのではないかというような内容です。ぜひ機会があれば読んでいただきたいと思います。

本日、皆さんが3日間ニセコを検証した結果、その発表を実はとても楽しみにして来ました。最後まで発表を聞かせていただきたいと思いますので、よろしく願いいたします。皆さんがこうしてニセコ町にお越しいただきましたことを心から感謝を申し上げて、あいさつとします。ありがとうございます。

1-3 開催趣旨説明

木村：どうもありがとうございました。町長には公務でお忙しい中、この午後の時間をお取りいただき、ごあいさつに加えご視聴もしていただけるということでございますので、我々も楽しみに、町長からのコメントなどもお聞きしたく思っております。それでは、私から、今回のコロキアムの開催趣旨についてお話いたします。

2010年に、ニセコ町と私ども北海道大学観光学高等研究センターが、観光分野で協力する連携協定を結びました。地域資源の開発、活用、それから科学技術・文化の振興、生涯学習、また地域の持続的な開発についての共同研究、調査を共に実施するという協定です。この協定に基づいて昨年度、ニセコ町の観光振興ビジョンをお手伝いする機会を頂戴いたしました。私どもは主に、これから発表していただく中の1人であります石黒准教授の主導のもと、町との共同の調査、研究をしてみました。本日はこの調査、研究の成果発表ということで、この機会が設けられています。

実はこの研究発表は6月に開催する予定でした。昨年度の取りまとめをして新年度早々に開催ということでしたが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受けまして、2度ほど日時が延期になりました。三度目の正直ということで、本日この会を持つことができました。その報告のまとめということで、叢書¹が発行されておりますので、会場の皆様で、ご希望の方にはお配りしておりますので、ご覧になってください。

今日はこの叢書の内容をかいつまんでご報告をいただくお三方と、それから、私ども学院

¹ 『CATS 叢書 第15号：ニセコ町観光の諸相と観光振興ビジョン策定に向けた展望：ニセコ町観光振興ビジョン策定に係る調査研究委託業務報告書』 石黒侑介, 木村宏, 天田顕徳 編, 観光学高等研究センター(2021/3/31 発行)

の授業でもありますが、「観光地域マネジメント論演習」という演習授業に参加している大学院生、それから、DESTINATION MANAGER 育成プログラムという、観光地域づくりのマネージャーを目指す人たちのための講座がありまして、これを履修している主に社会人プログラム生のあわせて 14 名が参加し、この 14 名が 3 つのテーマを調査研究する 3 班に分かれて発表を行うというような趣向になっています。また、冒頭にもお話しした通り、これは公開講座として、私ども観光学高等研究センター主催のオンラインセミナーとしても同時に配信しておりますので、約 100 名の方が視聴している状況であります。

今日は、初めに「ニセコ町における持続可能な観光の取組状況」を、ニセコ町商工観光課の高橋参事からお話をいただき、その後、私どもの大学院の石黒先生、天田先生には、ニセコ町の観光の諸相、「山岳 DESTINATION のブランド化と文化資源」など、スキーリゾートが始まる前の時代に、山岳を信仰していた日本人、またニセコの人たちが愛する羊蹄山から得られる DESTINATION イメージといったものの考察についての発表をしていただきます。

また、学生からは観光情報発信の提案。それから、観光資源を生かした観光の在り方を移住、定住へとつなげていく推進のあり方、そして、観光客への持続可能な観光に対する意義付けの検討、という 3 つの視点から発表をお願いしているところです。

2泊3日という短い滞在中で、事前の調査もしてきたわけですが、昼夜を問わず、夜を徹して資料作りをしていた学生の発表も後半にさせていただきます。最後にはディスカッションも予定しておりますので、会場からの厳しい意見などお寄せいただければと思います。

一昨年に始まりました新型コロナウイルス感染症拡大は、あらゆる分野の活動に影響を与えました。特に観光を取り巻く環境においても、極めて甚大な事態を巻き起こしております。ニセコ町をはじめ観光産業が重要な役割を果たす地域にとっては、特に深刻な問題として今も根強く残っているところでもあります。一方で、コロナ禍を乗り越えた新しい時代のあり方が問われるのも事実でもあります。観光分野においては安心、安全の観光地域づくり、環境に配慮した受け入れ体制の整備、非接触を意識した ICT 活用、新サービスの模索など、まさにニューノーマルな時代が始まっています。これらの取り組みは旅行者、受け入れ地域の住民、それぞれの立場で共通の思いとして共鳴する関係づくりがベースになっていなければならないと考えているところです。

ニセコ町は有島武郎が提唱した相互扶助の精神が引き継がれたまちづくりに取りまわっています。特に先進的に取り組まれていることは、皆さんも承知のことだと思いますが、まちづくりの基本条例、情報共有と住民の参加をベースにした、まちづくりに対する条例が日本で初めて施行された町でもあります。町長のお話にもありました通り、SDGs の未来都市や、環境モデル都市も、多くの自治体に先駆けて選定をされ、これらの取り組みは今まさに進んでいるところでもあります。最近では COP26 の CO₂ の排出を 2050 年にはゼロにするというグラスゴー宣言にも署名されるなど、話題に事欠くことのない、このニセコ町であり

ます。先進的な取り組みをする観光の町のイメージが確立され、それが実践されています。

これらの取り組みを元に、行政や住民だけでなく、事業者、旅行者などとともに、いわゆる持続可能な観光地域づくりに取り組むことができないか。ニセコ町にとっての持続可能な観光とは何か。今回このコロキアムの発表を通じて、皆さんと一緒に考えてまいりたいと思います。4時半までという長丁場ではありますが、ぜひ皆さんの熱い意見を寄せ合っていて、またニセコ町の次の世代の観光について、少し触れていただければと考えています。

これで趣旨説明を終わらせていただきますが、これからそれぞれの発表をいただく中で、皆さんの考えをいろいろと巡らせていただければと思っているところです。では、今日1日どうぞよろしくお願いいたします。

ということで、司会進行も私が引きつづきやらさせていただきますので、よろしくお願いいたします。それではまず、ニセコ町の商工観光課、高橋参事にニセコ町の持続可能な観光の取り組みについてお話をいただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

2. ニセコ町における持続可能な観光の取り組み状況

高橋葉子：こんにちは。ニセコ町商工観光課の高橋です。学生の皆さん、3日間お疲れ様でした。今日は調査・研究の集大成ということで、学生の皆さんは、連日徹夜でプレゼン資料を作成していたのではないのでしょうか。この後、皆さんから様々な意見が聞けるのを楽しみにしています。

昨年度、北海道大学とニセコ町の共同研究という形で、1年間、観光学高等研究センターに通うことになりました。残念ながら、コロナの影響で、リアルに訪問できたのは1回だけでしたが、先生方との共同研究会を3回ほどオンラインで開催し、ニセコ町の観光をテーマに、いろいろと掘り下げた議論をさせていただきました。

今年度は、「ニセコ町観光振興ビジョン（以下、観光ビジョン）」の策定に向けて動いています。観光ビジョンの発表にあたって重要なキーワードとなるのが、「持続可能な観光」です。観光ビジョン策定にあたっては、現在、観光審議会で議論を重ねているところです。北海道大学の石黒先生にも、有識者ということで審議会の委員に入っています。また、本日会場にお越しの小樽商科大学の後藤先生にも審議会の進行に関わっていただいています。本日は、昨年度の北大との共同研究の内容に、観光ビジョンの進捗や持続可能な観光への取り組み状況を加えてお話できればと思います。皆さんにお配りした昨年度の叢書とは多少内容が変わってきているかと思いますが、ご容赦ください。

ニセコ町では、10年程前に、「ニセコ町観光振興計画」を策定しており、今年度、これを観光ビジョンという形に作り直しています。このビジョンは、上位計画として総合計画等があり、観光の分野別計画という位置づけです。他の計画と整合性を取りながら、策定を進め

ています。先ほど申し上げましたように、新しくこの先 10 年の観光ビジョンを作るとなると、欠かせないキーワードが「持続可能な観光」です。ご存じの方もいらっしゃると思いますが、世界的な観光のトレンドとして、サステナブルツーリズム、持続可能な観光が目立われ、国内でも大きな動きになっています。

ニセコ町が本格的に「持続可能な観光」に取り組んだのは 2020 年度からです。そのきっかけとなったのが、2020 年 6 月の観光庁「日本版持続可能な観光ガイドライン」の発行です。これが日本語で読めるはじめての持続可能な観光の国際指標ではないでしょうか。また、UNWTO（国連世界観光機構）でも、世界的な動きを受け、持続可能な観光を「経済面・社会面・環境面の影響も十分考慮に入れた観光」と定義し、推進しています。先日、イギリスのグラスゴーで開催された COP26（第 26 回国連気候変動枠組み条約締約国会議）で発表された観光分野における地球温暖化対策「グラスゴー宣言」に、ニセコ町は署名しています。

次にお見せするのは、サステナビリティに関する Booking.com のアンケート調査結果です。海外の旅行者はサステナビリティに配慮した観光に関心が高い中、日本の旅行者の関心はそこまで高くないという結果でした。このあたり、日本の旅行者の意識はかなり遅れているようです。多くの方は、「持続可能な観光」と言われてもイメージできないと思います。「ゴミを出さないツアーに参加すればいいの？」と捉える方もいるかもしれません。「持続可能な観光」は大きく分けると 4 つ分野があり、①持続可能な観光マネジメント、②社会経済のサステナビリティ、③文化的サステナビリティ、④環境のサステナビリティと、かなり多岐にわたる分野を範疇としています。そのため、これを一言で説明するのはとても難しいのですが、「結局、持続可能な観光って何なの？」とよく聞かれます。最近では「SDGs の観光版ですね。」と答えています。この回答が、皆さん一番納得してくれるように思います。細かく見たい方は、観光庁のホームページに日本語で掲載されたものがありますので、ぜひ目を通してみてください。4 つの分野で 100 以上のチェック項目があります。健康診断のような形でチェックリストをどんどん埋めていくと、観光地としてニセコ町には「何が足りていて、何が足りていないのか」が分かってきます。そこで、ニセコ町が足りない部分をこの先 10 年の観光ビジョンに入れていけたらと思い、検討を重ねているところです。このチェックリストをベースに持続可能な観光の国際機関「グリーン・デスティネーションズ」による、世界の持続可能な観光地のトップ 100 選にエントリーしたところ、ニセコ町は 2 年連続（2020 年、2021 年）で選ばれました。

そもそも、ニセコ町が持続可能な観光（GSTC）の国際基準のことを知ったのは、2019 年でした。これは北海道運輸局さんからのお声掛けで、持続可能な観光に関する実証事業をやるので、受入地域にならないかという話でした。その時、候補地に挙がったのが阿寒とニセコだったようです。何をやればいいですかと聞いたら、持続可能な観光のセミナーをやるので会場の予約と受講者の集客を支援してほしいとのことでしたので、喜んでという感じで気軽に受け入れました。その時は、これが観光庁「持続可能な観光ガイドライン」発行につながる動きになるとは知りませんでした。翌年（2020 年）に観光庁が「持続可能な観光ガ

イドライン」発行に併せてモデル地区を募集すると聞き、ニセコ町も応募しました。全国からたくさん応募があった中で、ありがたいことにニセコ町はモデル地域（5地域）に選ばれました。これが本格的に取り組みを進める原動力になりました。モデル地区としてこのガイドラインを活用して、自分たちの地域を見直し、その中で取り組めるものから着手していきました。モデル地区に対し、専門家派遣という支援メニューがあり、国内で活躍している持続可能な観光の専門家の先生方が次々ニセコ町に来てくださいました。先生からアドバイスや取り組みのヒントを示唆してくださるので、こちらも頑張らなければとモチベーションが高く取り組むことができました。

モデル地区に選ばれたことで、エンジンがかかってきたニセコ町でしたが、観光庁のモデル地区は1年で卒業しなくてはならず、「来年度からは自力でやらなきゃいけないのか」と悩んでいたところ、釜石市さんから、「一緒に持続可能な観光の推進に取り組まないか？」とお誘いがありました。意外に思われるかもしれませんが、実は先ほどの「グリーン・デスティネーションズ」による世界の持続可能な観光地で、国内で唯一、ブロンズというステータスを取っている地域が、岩手県の釜石市です。震災復興として、ゼロからまちづくりを再スタートする中で、彼らは持続可能な観光にいち早く取り組んでいたのです。釜石市が中心となり「これから持続可能な観光に取り組みたい」と考えている自治体に声を掛け、現在、ニセコ町を含む8自治体でアライアンスを組んでいます。内閣府の地方創生推進交付金にも8自治体でエントリーし、採択されました。今年度から3年間、一緒に取り組みを進めているところです。

この2年間で「持続可能な観光」については、かなり勢いがついたニセコ町ですが、中身の方をこれからどうやって仕込んでいくかという点については、まだまだ知恵も人材も不足しています。看板ばかり大きくなるのはよろしくないで、今後は頑張って中身を充実させていかなければと思っています。

木村：ありがとうございます。続きまして、この研究成果報告の2つ目でございます。国際広報メディア・観光学院の石黒准教授からお願いいたします。

3. 山岳デスティネーションのデスティネーション・マネジメント

一戦略の射程と構成

石黒：北海道大学の石黒です。「山岳デスティネーションの戦略の射程と構成」についてお話をさせていただきます²。

² 本発表の内容は、石黒（2021）を再編集したものである。石黒侑介（2021）「山岳デスティネーション

先ほど高橋参事からありました、ニセコ町としての政策の方向性を踏まえて観光振興ビジョンという行政計画を作らなければいけないというときに、その計画に何を盛り込まなければならぬのかを議論するというのが、そもそものスタートでした。まず、これまでニセコはスキーや雪、あるいはパウダースノーなど、冬のイメージで語られ、その結果、冬のデスティネーションとしてのその競争力が注目を集めてきました。しかしながら、こうした方向性は今後も維持されるのか、維持するべきなのかというところから考察したいと思います。

ニセコを雪あるいは冬、そしてスキーリゾートと定義してしまうと、当然ですが時期的な制約が生じます。もし今後の方向性を考える上で持続可能性という大きなテーマを議論するとすれば、この制約、限定性のようなものを克服するために、裾野を広げる必要があるのではないかと考えています。そのために私が提案したのが「山」です。

冬やスノーといったある意味では収斂した概念から、山というところまで1回「戻る」という発想です。それによってこのニセコ町という地域のあり方を議論する上での視野が広がるのではないかとこのことを提案させていただきました。そして、山の観光をさらに発展させて「山岳リゾート」に着目しました。

国内外の山岳リゾート研究をレビューした結果、世界観光機関（UNWTO）の概念図がよく整理されているという結論に至りました。これによれば、山岳デスティネーションは、「山岳の生態系が擁する資源」（上部）と観光サービス業といった「観光関連投資」（下部）の2つから形成されています。ニセコ町のスキーやスノーリゾートといった側面は下部の右側に位置づけられ「山岳スポーツ産業」を形成しているに過ぎません。つまりフィールドが山であるということに立ち返ると、スキーというのは複雑な生態系の構成要素の一つであって、「観光関連投資」はこれに「アクセス」や「おもてなし」、そして旅行者が有する「レジャースポーツの技術」などがなければ、山岳にとっての付加価値とはいえないということです。

さらに上部に位置づけられている「山岳生態系が擁する資源」に注目してみたいと思います。山岳を形作る「気候」や「自然」、そして「土壌の可能性」や「息をのむような絶景」が山岳の資源性を構成していることが分かります。スキーを入口に議論を始めると議論が非常に矮小化されてしまうのですが、このように一歩引いて全容を把握すると、持続可能性の対象が極めて広範に及ぶことが分かります。行政計画を策定する上では、この中でどこまでを政策目標に位置づけるのかを規定する必要があります。

研究の枠組みは非常に単純です。資源性に基づくデスティネーションとしての特性に近い国外のデスティネーションの取り組みを検証し、その最大公約数を見いだそうというものです。本研究では、世界的な競争力を持つスキーリゾートをその対象にしています。

のマネジメント——戦略の射程と構成」石黒侑介・木村宏・天田顕徳編『CATS 叢書第15号ニセコ町観光の諸相と観光振興ビジョン策定に向けた展望——ニセコ町観光振興ビジョン策定に係る調査研究委託業務報告書』北海道大学観光学高等研究センター，25-41.

いろいろと調べますと、実はそもそもスキーリゾートの競争力を定義することが難しいことが分かりました。最も一般的なものは観光客数、スキーリゾートの利用者数に基づいて定義することだと思いますが、スキーリゾートの利用者数の順位というのは存在しません。唯一入手できたのは、スキーリゾートの運営に特化したコンサルティング会社が発行するレポートです。これを参考にすると、世界で最も利用者数の多いのは、ヨーロッパ・アルプスを囲むように立地するスキーリゾートと、北米のスキーリゾートであるということが分かります。

次に、今回の目的は行政計画の策定ですので、その点を踏まえてこれらのスキーリゾートの中で関連する行政計画が公開されているものを抽出しました。データとしては限られています。ニセコ町が今まで「追い付け、追い越せ」という意識を向けてきた世界的なスキーリゾートが、どのような行政計画を持っているか、あるいは行政計画の中で持続可能性というものがどう描かれているのかを検証するということを試行しました。

例えば名峰モンブランを臨むフランスの La Plagne では、広域の行政組織で策定した観光計画というものが、大規模開発に対する規制やアクセシビリティの確保、あるいはいわゆるユニバーサル・ツーリズムの推進などが謳われています。高齢者、家族連れ、そして障がいのある人まで、あらゆる人が楽しめるリゾートになろう、という方針が示されています。そして山岳デスティネーションでありながら、文化観光というのも戦略の柱になっています。

このほかに、オーストリアやカナダ、アメリカの例を見ましても、それぞれに特徴はありますが、やはりスキーリゾートである前に山岳リゾート、あるいは山岳デスティネーションであるという自負が読み取れる内容になっています。通年型リゾートを目指すという方向性がほとんどの計画に出てくるのもその証左です。さらにニセコ町でも重視されている住民参加というのも、実は世界的なスキーリゾートに関連する行政計画に共通して見られる特徴です。観光関連の事業者がビジネスとして携わるだけでなく、観光に関連しない住民と観光との関係性をどのように位置づけるべきかが議論されています。

さらに環境保全というのも当然ではありますが、共通項として見いだすことができます。それもデスティネーション内部の環境だけでなく、観光客がどのような交通手段を利用してやってくるのか、車なのか、鉄道なのか、車でも、自家用車なのかライド・シェアなのかというところまで触れられている計画もあります。

また、イベントについても、やはり自然環境や住民との協調性という点が強調されています。そのほかには、商品開発や ICT、デジタル・トランスフォーメーションなどにも触れられている計画もありました。

つまり、グローバルなレベルでニセコが山岳デスティネーションとしての競争力を持つていくためには、持続可能性というメッセージが不可欠であり、なおかつ、そのメッセージを具体的な行政計画とするためには、ここであげたような要素、分野について触れていくことがグローバル・スタンダードなのだということです。やはりスキーとかスノーという前に

山であるというということが重要なのではないかと考えています。そして、この「山岳デスティネーション」であるということを中心に位置づけて計画を策定するべきではないかという結論を導きました。その上で、自然環境、アクセス、住民との協調というものは初めて位置けられるということです。もちろん、今後は、感染症や自然災害への備え、カーボンニュートラル社会への対応なども加える必要があるかもしれません。

最後に、冒頭で示したモデルの再検討です。

山岳デスティネーションは、「山岳の生態系が擁する資源」と観光サービス業といった「観光関連投資」の2象限で構成されているというモデルでしたが、私はここにデスティネーション・アイデンティティというものが重要なのではないかと考えています。舞台としての山岳、そしてそこに付加価値を提供する投資という2層構造を、ある意味、反転させて別の領域にまで拡大させ、そこに住民や経済的な持続可能性、アクセシビリティを確保するための社会基盤のようなものを位置づけるというアイデアです。

結論としてまとめますと、ニセコ町が観光振興ビジョンを策定する上では、自然とスキーやスノーリゾートという部分に目が向いてしまうのですが、一歩引いて俯瞰することで、山というものの、あるいは山岳デスティネーションというところにスコープを広げてみるのが重要だろうと考えています。その上で、観光客だけではなく、住民のみなさんとこのまち、デスティネーションをどうしていくのかを計画化していくことが必要ではないでしょうか。

以上です。どうもありがとうございました。

木村：どうもありがとうございました。お話の中に山岳デスティネーションという言葉が出てまいりました。スキーとかスキーリゾートではなくてももう少し広い視野で、季節を問わず山の上から町を俯瞰してみようというお話でしたが、この山岳デスティネーションという言葉に対して、さらに議論を進めたのが、天田先生のお話ではないかと思えます。天田先生よろしくお願ひいたします。

4. 山岳デスティネーションのブランド化と文化的資源

4-1 問題の所在と目的

天田：皆様よろしくお願ひいたします。ご紹介にあずかりました天田でございます。普段は山にかかわる宗教文化の「文化資源」としての利活用を考える研究をしております。ですから、私の話は文化資源の側面から山岳デスティネーションというあり方について考えてみようというようなお話になるかと思えます。

昨年の研究会で、私は、第2回研究会に登壇させていただきました。第1回研究会では、

石黒先生がご登壇なさり、持続可能なデスティネーション・マネジメントには山岳デスティネーションとしてのアイデンティティの確立が必要ではないかと述べられました。私は、この問題意識を一部引き継ぎながら、山岳デスティネーションとしてのアイデンティティを確立すべき「主体」は誰なのか、そして、デスティネーションの「範囲」はどのあたりになるのだろうかということをお話をさせていただきました。

研究会では、ニセコ町様より、リゾート開発が集中したエリアの自然と生活への影響を住民が懸念している、環境事業者の地域への貢献の見える化が必要ではないか、等々の地域の課題についてご説明をいただきましたが、こうした問題のうち、幾つかのもの解決に、アイデンティティの主体とデスティネーションの範囲を明確化することが資するのではないかと考えたからです。

4-2 「範囲」を考える

まずはデスティネーションの「範囲」を考えていきます。先に述べたとおり、私自身は、日本の山岳信仰を研究していきまして、普段は白装束を着た参拝者を迎え入れる、山小屋や宿坊などでお話をすることが多いです。これは山形県鶴岡市の例です。鶴岡市では「詣でる、つかる、いただきます」というキャッチフレーズで、社寺参拝、温泉、精進料理をセットにした観光PRが行われています。

続いてこちらは、地理学者の岩鼻通明先生の議論を援用して作成した、霊山の観光振興の概念図です。岩鼻先生は、出羽三山を事例に霊山が3つの圏域に分けられるという議論をしています。山頂を聖域とする聖域圏、その下に広がる門前町を準聖域圏、そして、その山を信仰する人たちが住む信仰圏というのがそれぞれです。現在、この信仰圏の衰退が霊山を要する地域の非常に大きな悩みになっています。信仰圏から聖域圏にお参りに来る人がすくなくなくなっているのです。信仰圏が衰退すると、準聖域圏である門前町が経済的な困難に陥ります。その結果、何が起こったかという、聖域圏の文化を準聖域圏において観光資源化することで、かつての信仰圏のみならず、それ以外のところからも人々を呼び込んでこうとうに様々な地域が取り組むようになりました。

4-3 ニセコの場合

ニセコの場合です。先ほどから羊蹄山というお話が何度か出てきましたが、羊蹄山を例に取った場合、先ほどの圏構造みたいなことが言えるのか。結論から言うと、言えません。まず、聖域圏に当たる圏域というのがハッキリとは見いだしづらい。一般的な日本の霊山というのは、宗教組織や団体みたいなところがガバナンスを行っている。神社があつたりお寺があつたりして、霊場を形づくっている例が多いわけですね。歴史を考えても当然ですが、そうした構造は見いだせない。

では、ニセコでは地域をアイデンティファイできるような山に関わる文化的資源はないのか。この点に非常に悩みまして、私も昨年ニセコ町に来させていただき、話を聞かせていただいたり、ドライブしたりと、走り回ったわけでございます。

勉強をさせて頂き、すぐに分かったことですが、ニセコ町には文化的な資源と言えるようなコンテンツが非常にたくさんありました。例えばスキー史です。本州ではレルヒ少佐という場合が多いのですが、こちらに来たときには中佐になっています。他にも、阿倍比羅夫の伝説や有島武郎、開拓の歴史。たくさんの魅力的な文化的資源を見つけることができました。しかし、率直に言えば、物はたくさんある一方で、それらをつなぐコンテキストが見いだしづらいという点にも同時に気が付きました。

例えばこの看板では「ニセコ エコ・ミュージアム」というタイトルで、有島地区や先述したさまざまな文化的資源が紹介されていますが、それがどういうコンテキストで結ばれるかということはみいだせません。これらのモノをエコというテーマで結ぶのが最適解なのかということ悩むところです。

こうした問題を考えていた際に見つけ、ちょっと面白いのではないかと思ったものが、こちらの地神塔でございます。叢書の中でも紹介させていただきましたので、あまり詳しくは述べませんが、こちらのお墓みたいな形をしたものですね。これはお墓ではなく、一般的には農業に関係の深い神様をお祀りして造立される石塔でございます。この地域では徳島県の影響を強く受けていると言われていています。昨年の調査ではこの地神塔をいろいろなところで見つけました。それを見ているうちにあることに気が付いたのです。

それは何かといえば、実はこの地神塔、この写真は倶知安神社の例で、ニセコ町ではなくて恐縮ですけど。こちらは『春秋社日醮儀』という文書ですが、この文書には地神塔には造立のルールが書かれています。天照大神の神名を正面に刻み、正面が北面する形で立てるなどのルールがあるのです。徳島では多くがそうしたルールに従って建っている。ですが一方で、「変形地神塔」というものも漁師町などにはあることが報告されています。漁師町などの例では、正面が海を向いているそうです。地神塔の正面が向く方向で何に祈っていたか、何かを大切にしていたかみたいなことが読めるのではないかという論文も報告されています。

非常に面白かったのは、羊蹄山周りの地神塔には、羊蹄山に正面を向いているものが存在しているのです。これは悉皆調査や聞き取りのようなしっかりとした調査をしないと言えないことですので、あくまでも「連想ゲーム」のようなものですが、羊蹄山を特別視するような心性というのがこうした地神塔から、ある程度推測できるのではないかと考えられます。蝦夷富士羊蹄山神社という神社がありますが、山からの恵みを祈りながら農業を行っていた人たちというのがいるのではないかということに思いが至りました。北海道の地神塔は、造田運動との連動性が指摘されているのですが、神様に祈りを込めながらお米を作っていた人たちがいたのではないかと。

地神塔であるとか初老碑であるとか、ニセコで暮らしてきた人々の願いや祈りのシンボ

ル、山と共に暮らしてきた人々の「暮らし」を忍ばせる文化的資源というのがニセコには非常にたくさんあります。地神塔との出会いにより、こうしたことに気付いたのですが、先ほどの圏域構造を振り返って考えると、次のようなことが言えるのではないのでしょうか。

先ほどの3種類の圏域構造というものを、「山岳」と「生活圏」、そして「眺望圏」という形で再整理してみましょう。山岳のエリアは、スキーリゾートやトレッキングルートという形で、非常にうまく資源化されて観光利用されています。一方で眺望圏もうまく活用されている。中山峠の望羊中山などは、まさに望洋、羊蹄山を望むということで、眺望がうまく活用されている。一方で、その間の「生活圏」にある文化資源が現状、等閑視されていないかということが、私の問題意識です。

開拓の歴史や有島武郎などは勿論取り上げられているのですが、彼らが格闘した現実や悩みのような「暮らし」そのものにあまりフォーカスがされていないのではないかということです。『カインの末裔』の冒頭部には、当時の開拓民の生活が描かれていますけれども、そういう人たちが何を思っただろうというふうに住らしてきたのかという点が、あまり物語化されていないのではないかと感じる次第です。これが、叢書の中で提案したアイデアの1つ目でございます。

4-4 「主体」について

では、それを誰が物語化していくのかというお話ですが、これは地域の住民たちの手で成されるべきだろうというのが、私の意見です。

叢書では生活圏の文化を自分たちで調べてブランド化するということの効用を述べて頂きました。私の専門からいえば、それが「売れるかどうか」ということについて自信をもって語ることは出来ないのですが、住民の手で身の回りのモノをモノガタリ化していくということには、売れる、売れない以上に重要な意味があります。

時間の都合でポイントのみとなりますが、住民自身が自分たちの過去の歴史やくらしぶりということを掘り出していくその過程で、再帰的に場所のアイデンティティが確立していく、あるいは、それを住民が獲得していくという事実が近年の研究では盛んに報告されています。

こちらは、福岡市史を引いてきたものですが、この市史のポイントは自己言及性と多声性です。あなたたちの文化にはこういう特徴や価値があるのだというふうに、外の専門家が言うのではなくて、自分に語らせる。そして、いろいろな人に語らせるということが、最近のトレンドになっています。こういうことをすると、だんだんと、我々がどんなくらしをしてきたか、そこをどういうふうにブランディングしていきたいのかが、浮き彫りになっていく。

非常に面白いのが、これは市史であるということです。市史の特別編ですけども。これまで市史というと、民俗学者みたいな者が集まって書いて、上から目線で書いていたのですが、分厚くて重い漬物石みたいな本になって、誰も読まない。福岡市史のように、多くの地

元住民に自分の言葉で語ってもらうやり方であれば、面白くて住民も読むし、かつ、この土地で我々がこんな暮らしをしていきたいというアイデアもどんどん出てきます。ステーキホルダー間の問題解決になるというような、そんな事例も出ています。

少し堅い話になりますが、民俗とは、生活というふうにも言い換えることができます。そして、生活とは、煎じ詰めていけば、私たちが想像する幸せを実現するための行為であるといえます。叢書では、住民自身にこれまでの生活や生活の技術を多声的、自己言及的に記述してもらうべきだというようなことを書きました。ある地域における人々の生活やくらしのあり方をその人たち自身に描いてもらうことは、その地域に生まれて暮らす人の「幸せ」について考える契機になります。外からのまなごしを体現したスノーリゾートというあり方も素晴らしいですが、それが住民の「幸せ」とどう関わるのか、という点はより重要でしょう。

4-5 まとめにかえて

以上の議論を通じて私が提言させていただいたのは、次の3点です。1つ目が、山岳デスティネーションの範囲を仮に山岳、生活圏、眺望圏とした場合、現在のニセコ地域においては、この生活圏の文化資源、山と共にくらしてきた人々の歴史の活用を、もう少し進める余地があるのではないかという点です。2点目は、生活圏の文化資源を使ったブランド化を住民が主体的に行う。また行える環境づくりをすることが、デスティネーション・アイデンティティの構築に資するのではないかということです。さらに、それを構築することが立地エリアの「将来像」を考えるための重要なプラットフォームになるのではないかという点です。

以上、ニセコの「自然」という話とはまた違う観点から、山岳デスティネーションのアイデンティティの範囲と主体についてお話をさせて頂きました。これで終わりにさせていただきます。

木村: ありがとうございます。石黒先生の山岳デスティネーションとしてのアイデンティティの確立といった問題提起。これが持続可能な観光社会を考えるきっかけになるのではないかという問題提起に対して、天田先生からは、最後に3つありましたが、特に生活圏のブランディングが、まだまだ確立されていないのではないかということですね。そこに生活圏の文化的資源を使ったとして、ブランド構築については住民参加、住民が語れることが大事だというようなことのお話でありました。

ニセコ町においては、他の町に比べれば多くの会合が開かれていて、ニセコ町の未来についての議論というのは、住民の中では進んでいる町ですが、山岳デスティネーションのアイデンティティの構築についてはさらなる議論によって可能性をさらに引き出せるのではないかというのが、天田先生のお話でありました。

5. フィールドワーク調査の研究発表

フィールド調査概要

木村：CATS 叢書 第 15 号では、石黒先生、天田先生及びニセコ町の高橋参事の議論を受けて私が、これからも多くの人を訪れるニセコ町及びニセコエリアにとってニセコの窓口とは何かを、最後の章でつづらせていただきましたが、今回は、その私の発表に代えて、ニセコの窓口を考えるときの 3 つの視点から、現地の調査を実施した学生からの発表をお願いしています。

先ほどもお話ししましたが、今回の学生発表については、国際広報メディア・観光学院の修士学生、それと社会人の学生。学生の中には留学生もいますので、こういった混合の班編成を 3 つ作りまして、それぞれにテーマを持ってお話をさせていただくということであります。繰り返しですが、3 日間の限られた時間の中で調査をし、多くの町民の皆さんのご意見を聞く機会がありましたこと、この点、私からあらためて御礼を申し上げます。その成果はいかなるものかというところは、インタビューに答えていただいた皆さんも関心事だと思いますので、それぞれの発表にゆだねてまいります。

まずは A 班からの発表をお願いしたいと思います。

5-1 ニセコ町の観光情報発信に関する提案

藤枝：では、A 班の発表を始めさせていただきます。A 班は「ニセコ町の観光情報発信に関する提案」をさせていただきます。まずメンバーの紹介です。私は A 班班長の藤枝穂乃花と申します。班のメンバーは、大野雅人、新海茜、孫梓文と高橋めぐみでございます。どうぞよろしくお願いいたします。

5-1-1 ニセコの目指す姿

大野：最初は大野からプレゼンさせていただきます。目次は「ニセコ」の目指す姿、現状分析とターゲット、提案のモデル、媒体ごとの現状と課題・提案、そしてまとめです。では、最初の「ニセコ」の目指す姿をお話いたします。

まずニセコ町の観光振興計画の中には基本理念が入っておりまして、観光客の満足度を高める、それから、町民生活を豊かにする、そして、持続可能な地域経済を確保する、そして最後に、自然（環境）を保全する。この 4 つがうたわれております。そして、これらを元に、住んでよし、訪れてよしの、持続可能な観光リゾートを目指すということが、記載されております。

これを受けまして、私たちのチームでは、主体を農業に従事している町民、それから、海外移住者、日本人移住者、そして観光客、4 つを主体として考えました。そして、有島武郎

のコモンズ概念を元に、この4つの主体が共存する居心地のいい町、四方よしの実現ということ、テーマとして考えました。

5-1-2 現状分析とターゲット

新海：次にニセコの観光情報発信についての現状分析について、私、新海から端的に報告させていただきます。

まず、現状のニセコの強みはこの左側ですが、一言で言うと、皆様ご存じのようにニセコの自然、とりわけパウダースノーを基軸とした圧倒的なブランド力を有するスキーリゾートとしての価値ということになると思います。

右側に弱みを列挙してありますが、私たちの発表のテーマは観光情報発信ということで、それをピックアップしたものが右上です、具体的に読みますと、情報発信ハードが古い。ハードというのは、ソフト、ハードのハードですが、例えばニセコの現在の情報発信の主体が、道の駅や観光案内所に依存しているのではないかと。アプリの周知があまりなされていないのではないかと。また、その情報が行政の機関や施設ごとにばらばらになっていてコントロールされていないのではないかと。住民と観光客をつなぐ仕組みがないのではないかと。または、情報発信のPDCAが存在していないのではないかとということが挙げられました。

では、それを踏まえた上でニセコ町の現在の観光情報発信はどうなっているのかと申しますと、旅前の情報に関しては、一般社団法人ニセコプロモーションボードというDMOが担っております。また、旅中の情報に関しましては、株式会社ニセコリゾート観光協会、ニセコ町役場様が担っております。旅後の情報については不在しているというのが現状です、それが先ほど弱みとして挙げた、PDCAがなっていないというのにつながっているのではないかと考えました。また、ほかの問題点として、これらの組織が有する情報がそれぞれ独立していて一元的になっておらず、活動もばらばらになっているのではないかとという問題点を挙げることができました。

孫梓文：ここからは、観光情報発信のターゲットについて簡単に説明させていただきます。まずステークホルダーについては、外国移住者、日本人移住者、町民と観光客と4つの区分に分けて設定しています。そして、情報のターゲットは、主にニセコを訪れることを決めて具体的な訪問先や滞在先の情報を探している観光客としています。そして、ここでの観光客の滞在は短期、中期、長期のすべてが含まれています。

全体的な提案のモデルについては、国土交通省の観光発信策検討プロセスを参考として、3段階に分けて作成しました。まずは課題の抽出、そして目的、発信の連結体制、そして、手段と媒体の2つの部分に分けて分析を行います。そして、最後は情報運営のシステムを設定します。

これは、私たちが作った基本の情報発信のモデルです。主にニセコリゾート観光協会を観光発信のハブとして、観光発信をコントロールすることです。そして、ソフト的なワ

ンストップの窓口を創生します。

5-1-3 媒体ごとの 現状と課題・提案

高橋めぐみ：それでは、高橋から媒体ごとの現状と課題を説明した後に、私たち A 班から提案を行います。

最初に、道の駅にある観光案内所ですが、課題として3点挙げております。①町民と観光客の接点がない。②外国人向けの情報が少ない。③短期観光で立ち寄る人向けのみということです。提案は課題の番号と対応しております、①の提案に関しては、例えば、道の駅の直売所では、農家の方が店頭に立ち、お客様の質問に耳を傾けるということです。そしてお客様の素朴な疑問にお答えする。先ほどアイデンティティという言葉もありました。時には、言葉の壁もありましょうから、インターナショナルスクールの子供たちが通訳ボランティアとして参加します。それから、②と③については、英語の交流員の配置ですとか、道の駅自体に国際交流センターの機能を持たせるというアイデアが出ました。これらの効果は、中長期的な滞在者と住民との交流です。

次に、ニセコ FM についてです。課題としましては、聴取率が不明であり、観光協会で運営しているメリットを生かしきれておらず、観光客に特化した番組がないということです。私たちの提案として、聴取率に関しては、アプリ経由でクリックをすると、それがどれぐらいの人が聴いているのかを把握できますので、その数をフィードバックして考えていただきます。組織内連携では、例えば「Slack」や「Chatwork」などを活用して、今どのような番組を放送しているのかを情報共有します。最後に、観光客に対して、時期や時間を限定して、例えばゲレンデ情報では、ゲレンデがどのような状態になっているのか、雪質はどのようなかなど放送してはいかがでしょうか。得られる効果としましては、現在は地元住民向けに特化した番組ですが、観光客にとっても、より有益な情報として活用できるのではないかと思います。

3つ目はアプリについてです。現在は「Niseko」と「Niseko Now」というアプリがあります。課題としては3点。①知名度が低い。②プロモーションボードと提携している店舗しか出てこない。③アプリのメリットが見えていないです。私たちの提案としましては、①には、道の駅のFreeWi-Fi利用時に、まずはブラウザで表示させ、そこからアプリをダウンロードするような紹介をします。②の改善策は、観光協会から無料で掲載している現在の店舗に、Webでも出してみませんかというような提案をしていただく。③に関しては、ARやQRコードを付加して、クーポンなどを発行してダウンロードを促進します。得られる効果としましては、まずは観光客に対してコンテンツの充実。それから、旅前の充実。旅中の情報をもう少しより詳しくということです。また、観光協会のメリットとしましては、情報の獲得と、それをデータベース化できるということです。

4つ目は、ホテルの窓口です。課題としましては、観光協会に対応しきれていない案件がホテルに求められてくるという、この手間が発生することです。提案としては、観光協会で

受けてさばききれなかったところは、電話でホテルにリファーします。そして、その件数分だけ、観光協会がホテルに報酬を支払うというシステムはいかがでしょうか。得られる効果としましては、観光協会と連携を取ることで、ホテル側が地域貢献できること。それから、観光協会と情報共有ができること。旅行者にとっても、素早く情報が得られるということです。

5 つ目は、「あそぶつく」についてです。課題としましては、観光客はまず足を運びません。また、文化的資源、先ほど出ました有島武郎記念館との連携がないということです。提案としましては、カフェの運営と本の販売。そして、ドネーションの提案です。現在ニセコにある文化的な施設と連携して、イベントの企画などを通して交流をすることを提案します。得られる効果は、次世代を担う子供たちのグローバル人材の育成。そして、国際交流の促進の場を提供できるということです。

5-1-4 まとめ

藤枝：これまでいろいろな媒体ごとの課題の提案や、今後どうすべきかのお話をさせていただきましたが、この提案を通じて最もお伝えしたいことといたしますのが、ニセコリゾート観光協会様が情報のハブとなってすべての情報をしっかりと把握した上で、いろいろなステークホルダーにしっかりと流していくという、その仕組みづくりをしていくということです。

それをすることによって得られることが、主に 2 つあります。まず 1 つは、観光客向けに発信した情報、例えば FM のラジオは、もともとは地域住民のための情報だったかもしれませんが、それが今となっては観光客も活用しているというところで、ただで住民と観光客を結び付けるような情報発信ができるということを目指して掲げています。それが最終的には、地域住民にとっても観光客にとっても居心地のいいまちづくりの実現につながるのではないかとするような提案です。

今回、私たちの班では観光客の定義を、先ほどもお話しましたが、短期的な滞在の観光客だけではなく、中長期的に滞在をしていて、例えばペンションに長期間泊まっているような方や、短期の移住者であるとか、長期の移住者をも含めて考えていることが重要な点です。

2 つ目は、情報データベースを、ハブ組織たる観光協会が一元的に管理をすることによって、住民や観光客が、町内のどこに居ても町の様々な情報を得られるということです。所有しているデバイスや、町の中でも住んでいる場所を、ひとまずしっかりと情報にアクセスできるということを徹底することで住民の利便性向上にもつながるのではないかとということです。

最後に、この左側に書いてある地域のブランド力が高まるということですが、やはり広域連携という点で、いろいろな町同士が情報のハブを持っていて、そのハブ同士が連携するプランが実施できれば、ほかの地域からも参考にされるとか、観光地としてのブランド力も上がるのではないかとこのように考えています。

以上が私たちの提案です。最後に、今回いろいろとお話を聞かせていただいた方々には心よりお礼を申し上げます。ありがとうございました。

木村：どうもありがとうございました。

5-2 農業資源を生かした観光と移住・定住の推進に向けての展開

木村：続いてB班の報告です。「農業資源を生かした観光と移住・定住の推進にむけた提案」ということで、資料がかなり細かくて読みづらいかもしれませんので、後ほど資料請求いただくか、叢書内で確認いただければと思います。

それでは、B班、よろしくをお願いします。

5-2-1 テーマの解釈と方向性

滝川：B班でございます。お題は「農業資源を生かした観光と移住・定住の推進に向けての展開」です。メンバーは、ハン飲、王婷、蓮尾純一、新堀裕幸と私、滝川徹也です。よろしくをお願いします。

まずテーマを考えるときに、ニセコ町は、観光と農業の町だということですが、しかしながら、連想するものはスノーリゾート、観光というところが強いと思います。移住、定住する多くはやはり観光にかかわることが多いということですが、もう一方の農業の担い手はいるのか、そのために移住する人はいるのか。また、観光と連携できる農業のあり方がありうるのかを、少し考えました。持続、発展できる農業には、担い手が来たくするような魅力あるニセコ農業というものを創造することが大切だと思っています。ですから、皆さんが振り向いてくれるようなニセコ農業とはどういうものかというのを、語っていきたいと思います。

今回、いくつか町の中でヒアリングをさせていただきました。移住の相談員の方、ワイナリーの経営者、農産物の加工をされている方、あとは農園の方々など、そのヒアリングを踏まえて発表させていただきます。

5-2-2 現状分析

蓮尾：まず、現状の分析からさせていただきました。相互扶助という考え方がこの町には根付いておりますので、その観点を中心に考察をしております。ストロングポイントとしては、何と言ってもニセコという知名度。こちらが一番強いポイントです。対してウイークポイントとなっているのは、業種間連携が不足している。あと、雇用の安定化が、相互扶助の観点からするとあまりできていないことが見えてきました。

利用できる機会という部分で、属性的、思考的多様性という難しい言い方をしておりますが、世界中の人々が集まっている多様性。日本の中でも、国内のいろいろな地域から来てい

る多様性。いろいろな商売をされている業種の多様性。これらの中には、いろいろな思考を持っている方々がいらっしゃると思いますので、ほかの市町村と比べるとさまざまな多様性が重なっている部分は、利用できる機会ではないかと考えております。次の考察の部分について考えられる脅威としては、過剰な開発熱、地目変更の問題。あとこれはすべての問題にも横たわっておりますが、高齢化が問題になっているのではないかと考察しております。

次に、ニセコ町の観光と農業に関しての、事業に及ぼす政治的、行政的な要因としては、国際的な情勢や国内の政治について、次のような要因が挙げられます。TPP 法案により輸入自由化等が与える影響、為替について国際問題があるごとに変動が起こる。消費増税等増税の度に支出抑制が起きる、ビザの発給要件の範囲内での労働制限があり 2 業種就労が難しいことがあげられます。

次に、事業に及ぼす経済的要因として、観光客を中心とした交流人口が生まれている。例として、地域内でのインバウンド増加による人流の拡大による商機の拡大、北海道新幹線の延伸による商圏の拡大、外資の進出による外貨の獲得、高速道路の延伸による商圏の拡大が含まれるかと思えます。

次に、事業に及ぼす社会的な部分の要因です。まず元来の開拓エリアに住む地元住民と新しい開発エリアの住民との間に距離感が生じている点をあげました。また、観光により公共インフラが消耗されていくということと、開発に伴い公共インフラに投資を多くしていかなくてはならない部分、行政負担の増加が問題となるのではないかと考えております。

次に、技術的な要因です。これについては、デジタル・トランスフォーメーションや、SDGs について、技術や機械の活用ができる部分があるのではないかとということで、考察を入れております。ICT の活用によりニセコと世界をより近づけることや、持続可能性を目指し課題やチャンスのため準備をする必要が、今の段階ではあるのではないかとということで、考察を終えております。

新堀：ニセコ地区、ニセコ町を見ていくと、どうしてもこの有島武郎先生の相互扶助の理念に突き当たります。有島先生は小説家でもあり農業事業者でもありました。ある時期、お持ちの土地をすべて無償で小作の方々に譲渡しました。一人一人に譲渡したのではなくて、みんな共同でその土地を経営するよという、相互扶助の精神を伝えました。

では、具体的にニセコ町の農業の課題抽出ということで、検討していきます。まずは農業所得の低迷があります。やはり農業物産の価格が非常に低いことに原因があります。そして高収益の作物等の検討をしてチャレンジはするのですが、なかなかそこが定着いたしません。いろいろな作物が総花的にあるのですけれども、未だこれといって主力となる作物自体が特定できていません。次に事業承継と労働力の不足です。どこの地区にも言える事ではありましようが、高齢化、そして若年層の流出があり、働き手、あるいはその事業を引き継ぐ方々が不足しているようです。

そして現在農地として利用しているところを、耕作を放棄して原野として高く売りたい

なる高齢者への誘惑などもあり、相互扶助のマインドが一部低下しているようなところが見受けられました。ですから、将来的に、事業としての農業の消滅などの可能性も若干見て取れたということです。

道の駅の消費拡大につきましては、冬期間の農作物の加工品などの消費の拡大、これに懸念があると思います。ただし、これらお話しするいろいろな対策を講じることによりまして解消できるのではないかと考えています。そしてそこには相互扶助の精神が必要だということにとらえています。

5-2-3 事例紹介

王婷：これらの現状と課題と踏まえて、実際の事例から、観光と農業の可能性について探りたいと思います。

まずこちらの事例では、自主的に6次産業化している仕組みです。こちらの農家さんは観光がきっかけで、ご縁があってニセコへ農家として移住してきました。この農家さんの信念としては、観光客が求めている農産品でこの地の気候にあったものを育てるのが適切だと考えブドウ作りに取り組みました。そしてこのブドウ栽培を多くの人にかかわってもらう仕組みを考えました。その事業展開としては、新規のブドウの栽培農家も加わり協議会をつくり、学生や一般の人に農作業を手伝ってもらうプログラム、つまり皆さんを巻き込み参加者が楽しめるというプログラムを考案し実施しています。

そのような仕組みがどのように就農人口の増加につながるかということは、総務省の関係人口の概念図から説明したいと思います。まずは農産品を買いに来る人と、観光行動として農作業を手伝ってくれる人がいて、それぞれはこの図の交流人口と関係人口に当てはまります。そして、観光を通して徐々に農家さんと価値観が共感されて、農家さんへの興味が高まります。そして何人かの人は農家さんとしてニセコに移住してくる可能性を、この事例で示しております。

また、農産物の生産だけでなく、6次産業化に取り組むなど、農家さんはどのように高付加価値化することができるのでしょうか。それを、この図で説明したいと思います。今まで、農家さんから観光マーケットへ農産物の販売は、収穫したものをそのまま道の駅の直売所に持ち込むのが常でした。加工された農産品はあまり多くありませんでした。それが原因で、冬場と夏場の農家さんの収入の変動が課題でした。

それは、農家さんと観光マーケットの間に、付加価値をつける役割を果たしている加工業者を入れるモデルです。まず加工業者は農家さんとの間の買い取りの契約を行い、定期的に、一定量の農産品を計画で仕入れることによって、農家さんは安定した収入を得ることができます。そして加工業者は、その素材を生かしてレストランの料理や特産品に加工し、観光マーケットで売買することによって、外貨の獲得もできます。そうやって農家さんから加工業者、そして観光マーケットまでの産業のチェーンが成立することにより、農産品が高付加価値化され、農業から観光までの Win-Win-Win モデルになります。

しかし、その間にいる加工業者が町内には多くないため、町内に現存する加工工場と相談して、工場の空いている時間を活用することが、現状では一番実現可能な仕組みだと考えます。

5-2-4 解決策

ハンズ：以上の抽出した課題と事例を踏まえて、いくつかの解決策を説明したいと思います。まずは、農業の消滅への懸念について、農業の持続的な発展が必要とされています。例えば、観光産業と農業の間に溝があるとすれば、その溝を埋めるために観光産業と農業の相互扶助を成立させる必要があります。前述の Win-Win mode を実現するために 6 次産業化を図ります。

主力野菜不足の課題については、多品種の野菜が栽培されるのに、どうしてブランド化ができていないのかという課題があります。課題解決のためのアイデアとしては、特筆すべきニセコの農産物を核とした宣伝をする。または、生産から消費まで地域内で地産地消することにより、ニセコに来ないと食べられないという付加価値をつけるのです。

次に、キーワードを TAG 化して表現していこうという取り組みです。例えば「こだわりのある」、「質の高い」、「オーガニック」などは最近よく使われるワードですが、ニセコ町では「水質がよい」という話もよく耳にしました。水のおいしさをすべての野菜に TAG 付してはどうでしょうか。

また、労働力強化については 2 点ポイントがあると思います。1 点目は、機械と IT 技術の導入です。労働力不足を補うためのスマート農業の可能性を探っていくべきです。もう 1 点は、民間企業で何ができるのかということを問いかけたとき、スイスアルプスの町の事例を参考にしてはいかがでしょうか。成功事例として参考にしたいのは、企業の経営者、特にリゾートの観光事業者たちは、得られた観光収入について、農業に投資するということです。さらに行政の取り組みについて、観光業と農業が相乗効果を高められるように、街が観光業者への特別な税金を課すということです。目的税として農業振興に活用します。

また、就業者不足を補うために海外からの観光者も含めた人材確保を考えたときに、ビザの条件緩和については、町では解決が難しい課題ではあり、国に働き掛けるべきことではあります。例えば国は、夏場のリゾートから農業の現場に雇用を提供する、冬季において農業の現場からリゾートに雇用を提供することにより、外国人就労者はニセコ町に 1 年の間働ける就労環境がつけられるなど、ビザの緩和がもたらす影響は大きなものが期待されます。もしビザの条件緩和が難しければ、リゾートホテルの業務範囲として、「農家サポート業務」を加えて、夏季に農家より業務を受託することが得策と考えます。

最後に、生産者たちの所得安定、向上については、農産物の販路、消費拡大が望まれます。生産される農産物に付加価値を付けて、販売するということが考えられます。それが 6 次産業化の工夫です。

5-2-5 解決策の具体案

滝川：これらの解決策がありますが、もうすこしだけ具体的に掘り下げたいところが、6次産業化の工夫と販路拡大です。農業と観光が交差するというのが道の駅ですが、道の駅の冬の活用が問われています。そこに圧倒的な商品のラインナップの拡大をしてはどうかということ、そうすることで冬に来るリゾートのお客様による消費拡大を図ります。観光と農業の域内交流というところを狙いたいのです。

ヒアリングの中で、ほとんどの方が言っていることは、新しいものを創出しないとだめだということでした。そこで提案するのが、既存にあるものを掛け算することによって、新しいものを生み出せないかということです。ちなみにここにあるのは、ほかの道の駅とかECサイトでかなり売れているものばかりですが、この地域にあるものでこういうものを創ってみようということです。例えば温泉と大豆、もし大豆を作っていないければ作るということも含めて、温泉豆腐とか揚げというものを作っていく。どこでもかなり人気のあるのはジェラートですけども、地元野菜と地元のミルクを掛け合わせたジェラートを作る。あとは、冬場に温かいものの販売が少ないのですが、果樹と小麦を掛け算することによって、焼きたてフルーツパイを作るというのはいかがでしょうか。

これらを作っていこうとする場合、やはり農家だけでは難しいので、先ほどの加工業者などを入れていくということと、道の駅にコーディネートをしていただくのが一番いいと思うのですが、そこにリニューアルの機会があれば、そういうところに組み込んでいただきたいと思います。

例えばリゾートの方のシェフとかパティシエの監修、あとはリゾートの不動産で外国人のスタッフの監修をすることによって、その方々がお勧め、宣伝役となることもありますので、そういう監修によるプラスアルファ、ブランド力の強化もできるということを思っています。もう1つ大事なのは、商品の開発を通じて、実はリゾートのお客様とか道内の観光のお客様、それらと農業との域内交流が生まれるということだと思っています。

リゾートの方は、魅力ある、人が来るということはあるのですが、農業についても観光と連携することで魅力あるものにし、農業を担う新しい移住、定住が生まれれば、持続可能なニセコの未来につながるのではないかと考えています。

5-3 観光客への 持続可能な観光に対する意識づけに関する提案

木村：ありがとうございました。C班については、観光客への持続可能な観光に対する意識づけ、どのように外の人たちに持続可能性というものを理解してもらうのか、また共有できるのかといったテーマであります。よろしくお願いします。

5-3-1 ニセコにとって「持続可能」とは

永岡：テーマは「観光客への持続可能な観光に対する意識づけに関する提案」です。メンバ

一は、永岡、王鷲庭、伊蘭、川崎孝利の4名です。よろしくお願いたします。

まず、この壮大な持続可能というテーマについて、どこから考えるべきなのかということに非常に迷ったところです。しかし多くの方々にお会いできまして、ヒアリングの結果から、私たちがこの発表をさせていただくに当たり、ニセコにとっての持続可能とは、暮らす人にとって町として持続することとまず設定をさせていただきました。町が持続しなければ観光も持続しないということで、ここを軸に考え、これからプレゼンさせていただきます。

5-3-2 持続可能な観光とは

王鷲庭：背景として、持続可能な観光を定義いたします。Global Sustainable Tourism 協議会は、持続可能な観光について共通の理解を提供するために基準を設定しました。

その基準は、持続可能なマネジメント、社会経済への影響、文化的影響、環境への影響という4つの分野があります。その中で、ニセコ町は持続可能なマネジメントでうまくできているのではないかと考えています。その基準に基づいて、UNWTO、国連世界観光機構は持続可能な観光を定義しました。観光庁は、環境的に優しい、経済成長ができる、社会文化的に好ましいと、要約しました。

私たちは、これに基づいて現在および未来の世帯にとって、環境的、経済的、社会的に暮らしやすい地域をつくるための観光まちづくりというニセコであることについて、訪れる旅行者に理解を得る必要があるのではないかと考えています。

5-3-3 検証とヒアリング結果から 浮かびあがる 課題や問題意識

永岡：では、次にヒアリングした結果を4つのポイントからご報告してまいります。まず1つ目、情報共有と住民参加が、ニセコ町のキーワードになっているようです。その点について実際はどうなのかというところを、ヒアリングしました。伺った結果、この情報共有と住民参加は、実際言われている通りの空気感だと感じました。住民が自ら考え行動するという土壌が確立されているように感じられました。町民自体は情報が公開されているとご自分の言葉でも語り、行政と住民が話し合う機会は頻繁にあるということもおっしゃっていました。第5次ニセコ町総合計画の町民アンケートの回収率が39.3%だそうです。この手のアンケートでは平均25%なのだそうですが、回収率の高さからも意識の高さが伺えます。ただ一方で、住民参加の機会に参加する層はある程度固定化しているという声も聞かれました。

次に、地域内での意識のギャップがあるのか。この点については、山側のように開発が進んでいるエリア、それから里側、平地側、農業のエリアですね。この場所的なもの。それから、観光事業者と非観光事業者。あるいは移住者と元からの町民。この方々の間に意識のギャップがあるのかというところを幾人の方に伺ったところ、ここについては意識のギャップはやはりあるようだというふうには感じられました。しかし、地元で暮らしている方、地元の町民の方は静かに暮らしたいと思っているものの、観光客に来てほしくないわけではな

いということも伺いましたので、ここがやっぱりニセコらしさというふうに感じられました。

3つ目。いろいろスゴイニセコですけれども、このスゴイ部分というのが観光客に伝わっているのかと考えたときに、自分たちも観光客の立場になってみると、ここは残念ながらあまり伝わっていないのではないかと感じられました。これはちょっともったいないことで、観光客の方にもっと知ってもらう努力を、もっともつとできるのではないかと感じたのですが、お話を伺うと、もともとニセコ町は旅ナカでのいわゆる口コミによる「ニセコってすごい、いいんだよ」という発信から、魅力が伝わっているというところもあるようですので、この部分についても口コミで何か展開できる部分もあるのかもしれないと思いました。

4つ目。現在展開している持続可能な観光コンテンツについて伺ったところ、まず1つがアドベンチャートラベル。ターゲット層はインバウンド、欧米豪で羊蹄山麓をニセコエリアとしてPRしたいとおっしゃっていました。2つ目、教育旅行。いわゆる修学旅行、宿泊研修の教育プログラムを、SDGs 未来都市のコンテンツで提案されていると伺いました。もうすでにこれは着手されているということでしたので、私たちの班は、この点については逆に考えずに、この視点ではないところを考えていこうと思いました。ちなみにアドベンチャートラベルについては、持続可能にも親和性がある部分ですので、とても発展性があるのではないかと考えています。

次に、ヒアリング結果から浮かび上がってきた課題や問題意識です。そもそも持続可能という非常に大きなテーマなので、どこを入り口にすべきかということについてとても悩ましく思っていました。例えば、地域のアイデンティティ、歴史文化の掘り下げが足りないということ。それから、少し視点を変えて、利用客に合ったインフラや人員配置ができていないのではないかとということ。2次交通の脆弱さ。また季節で客層が変わるということで、夏の誘客が今は課題になっているのではないかとということ。山側のにぎわい、いわゆる儲かっている部分については、市街地に本当に還元されているのかということ。

自然環境、エコということが、ニセコのPRポイントにもなるはずですが、ニセコ内では車で移動しないといけないというところは、CO₂削減という点ではどうなのか。住民、事業者、観光客の相互理解。この点についてはほかの地域よりも高いとは思いますが、まだまだ改善できるところがあるのかもしれない。アメリカンドリームならぬニセコドリーム層とニセコを愛する人々とのギャップも見受けられました。オーバーツーリズムを抑制するためのルールも必要ではないか。資源は限りあるもの。例えば雪や温泉といったものについての理解を促進していくことも、ニセコではできるのではないか。事業者自身からのSDGsの取り組みの発信ということもできるのではないか。これらが、ヒアリングをした結果、ご意見として伺ったものや私たちが考えたものです。

5-3-4 提案

ここで私たちのチームが考えたことが、ニセコ町で今までの100年とこれからの100年

を考えるサイクリングコースです。どうしていきなりサイクリングになったのかと思われるかと思いますが。昨日フットパスでニセコの町を歩きまして、この歩く速度で見えてくるニセコの町、歩く速度だから体感できるニセコの町という空気感と、お会いする方々が本当にニセコ愛にあふれる方々ばかりで、その方々が語ることをニセコで聞くことに意義があると思いました。

外向けのプロモーションで語っていただくのではなくて、この現地に来ていただいて、そこで共感していただくということが非常に大事な点になるのではないかと考えました。このサイクリングというのはあくまでも手段として、このサイクリングあるいはフットパスという手段を使って、ニセコ町の持っている地域としての精神性や持続可能な取り組みを、観光客にもっと知ってもらうことができるのではないかと考えました。よってターゲットとしては国内客、グリーンシーズンの時期を考えております。

次にこの自転車アクティビティーについての課題を説明します。

伊蘭：先ほど提示した問題点に対して、私たちの班が考えたソリューションは、自転車コースです。ニセコでの現時点で行われている自転車コースの概要と課題に対して紹介します。

まず初めに、ニセコにレンタルの店が少ないということ。こちらの図をご覧ください。「Google」で「ニセコ 自転車 レンタル」というキーワードで検索すると、こちらの図が出ます。何カ所かのレンタル店がありますが、ほとんどが倶知安の店で、ニセコ町ではレンタルの店が少ないということが分かります。

2つ目としては、いろいろなコースがありますが、SDGs をテーマとしたコースがないということです。

そして最後に、私たちが実際にニセコ町内を回って分かったことは、サイクリングを支えるインフラは不十分であるということです。具体的には、まず道標の設置があまりないということです。そして、各観光サイトに自転車用の施設の情報が少ないということ。そして、自転車ショップの自転車の保有数も不十分です。例えば観光案内所では 5 台しか用意していないということが分かりました。そして、羊蹄山の東側で自転車のレンタルのショップがないと、返却対応も用意がないということが分かります。

そして、現在のニセコでの既存のコースをご紹介します。MTB というコースがありますが、それはオフロードサイクリストのための完成度の高いルートです。SDGs を理解したいというビギナーにとっては、比較的料金が低いのではないかと分かりました。また、このコースには SDGs のコンテンツが入っていないということも分かりました。

王鷲庭：以上の課題が存在しているため、私たちは既存の問題に基づいて、事前宣伝、ガイドさんの SDGs に関する説明を前提に、SDGs をテーマにしたコースを考案しました。ご覧のように、右側は自然コースであり、左側のえんじ色は文化コースであります。その中で自転車ショップを、倶知安の駅とニセコにも位置しています。

では、各スポットはどのように GSTC 基準と SDGs と繋がっているかを整理しました。その中でダチョウ牧場を例として挙げたいと思います。現場でのヒアリングによって、廃棄されたものを餌に活用したり、ストレスのないようにダチョウを飼ったりということが分かりました。そういう手法で動物福祉への配慮が必要な自然環境の保護という、GSTC とつながって、そして陸の豊かさを守るという SDGs の理念が体験できるのではないかと考えています。

そして文化コースにおいて、一番代表的だと思う町民センターを例として挙げたいと思います。その町民センター、GSTC のマネジメントの組織と枠組み、そして、町民参加とフィールドワークの形が分かりました。例えばニセコ町は、2021 年 2 月 26 日に町民説明会で景観条例について、2021 年 8 月 11 日にはここ数年の町内における開発状況への認識についての情報を町民に共有しました。そのような形で進められ、続けられるまちづくり、平和と公正をすべての人に、そしてパートナーシップで目標を達成するという、SDGs の理念を実現できるのではないかと思います。

川崎：これらを踏まえて私たちが提案させていただきますのは、ニセコ町民と観光客が交流できるイベントとして、ゼロカーボンで楽しむニセコ探索というサイクリングイベントを提案いたします。ニセコ町の持続可能なスポットを巡って、取り組みを観光客に知っていただきます。ガイドは町民自らが語り、道中では世間話感覚で交流を通じて、参加する観光客への啓蒙を行っていきます。こういったイベントが他地域のサイクリングイベント、フットパスなどとも連携できれば、ニセコ町の取り組みを拡散することができます。

訪問先はこういったところを予定しております。タイトルに「観光客への意識づけ」というテーマがあり、もしかすると違和感を持たれる方がいらっしゃるかもしれませんが、ニセコ町民は地域の当たり前をあらためて再認識していただき、観光客は通常の観光では知ることができないことを、この機会を通じて理解を得る、知識を得るということを目的としております。

それから、今回提案させていただきました内容ですが、タピナカ、旅の途中で現地、ニセコでプログラムを通じて持続可能を紹介するものであります。これが最終結論ではありません。まだまだ方法、手法はあると思いますが、これからは出発前、タピマエに、ニセコ町に行くには責任ある立場での、旅行者としての行動の啓発ができればと考えており、このあたりをニセコ町で取り組んでいただき、日本の先進事例となればと思っております。

最後になりますが、今回ヒアリングにご協力いただきましたニセコ町民の皆様、会場に足をお運びいただきました参加者の皆様、そして、オンラインを通じてご視聴の皆様、私どもの大学院生 14 名のためにお時間を割いていただいて、ありがとうございました。

6. 車座意見交換会

木村：はい、それではお待たせいたしました。ここからは車座意見交換会に移ります。ここからは石黒先生に進行役をお願いしまして、今までの発表を踏まえて、会場からのご意見、質問なども交えて意見交換を考えていますのでよろしく願いいたします。

石黒：はい、では私がここから進行を代わりたいと思います。よろしく願いいたします。まず、3班とも本当にお疲れさまでした。

もちろん限られた時間の中ではありますが、実際に町民のみなさん、事業者さん、加工業者さん、ホテルさんのお話を聞かれた上でのご提案だったと思います。

まず3班それぞれ代表の方に来ていただいていますので、会場の皆さんからもしご質問があれば最初にお伺いをしたいと思います。片山町長、いかがでしたでしょうか。

片山：最初に、A班でしたね。コモنزの概念の持続というのをもうちょっと細かく説明してくれたらありがたいなと思います。よろしく願いいたします。

藤枝：ありがとうございます。A班の班長をしております藤枝です。今の質問に対して答えさせていただきます。コモنزの概念は、土地の共同利用という意味もありますが、今回提案させていただいた内容は、多くのステイクホルダーが存在し観光地域のまとめ役を担う観光協会を取り上げ、この組織が基軸となっておりいろいろな組織が連携を取りあい、お互いに助け合っていくというような精神が培われるべきだという思いと、住民と観光客がそれぞれWin-Winになるような関係性をつくるためのツールとして、情報発信の機能を充実させてはという願いを込めてこういった概念を使わせていただきました。

片山：はい、ありがとうございました。

石黒：はい、ありがとうございます。町長、もしよろしければ、2班、3班についてもお願い申し上げます。

片山：皆さんの発表は素晴らしかったです。聴いていて、「ああ、そういう視点とか」「そういう言い方ってあるのか」と言う気付きを多くいただき、本当にありがたいなと思いました。

B班の方が言われたビザの条件緩和とか、いろいろそれは国ともこれまでも協議しています。今、国に対してお願いしているのは、所有者不明土地のことです。山林の中の土地が原野商法で売られていて、実はニセコ町には所有者不明の土地が多くあります。町にその所有権を移転してくれというお願いをしています。少しずつ今動いて、利用権自体はいいと言っ

ているのですが、まだ所有権まで制度ができていないので、そこは引き続きそういう課題を解決していきたいなと思っています。

B班の話の中で、農地の耕作放棄地が増えるのではないかと、それから農業の担い手が減ってくるのではないかとされていて、それは僕らの認識と少し違うので、その辺のヒアリングの具体的な内容、こんなことでこんなふうにしたというのを教えてもらえればありがたいなと思いました。

滝川：はい、はい。B班班長の、滝川でございます。ありがとうございます。耕作放棄地のお話は、ヒアリングの中ではたびたび話題になりました。数人の高齢の方からは実際に耕作放棄地が存在することをお伺いしましたので、そのように述べさせていただきました。それ以上のことは分からず、定量的な調査をしたわけではありません。

担い手のお話は、多くの方が担い手として来町しているが、本気で農業を続けていこうと思う方は少ないのではとおっしゃる方が少なからずいらっしゃいました。スローライフの精神で来られた方が、理想と現実のはざままで悩み、それこそ耕作をやめてしまったとなるとやはり具合が悪いと思います。

そういうふうになってしまう前に、そもそも農家をやることで得られる魅力だとか、安定する仕組みであるとか、冬もきちんと商品が売れるとか、そういうプラットフォームとか仕組みをつくることによって、まじめに、本気で考えている方がたくさん来ていただける体制を作ることが望ましいのではないかと考えました。

片山：ありがとうございます。C班の意見は、サイクリングに視点を当てて、とても素晴らしいと思いますし、足りないところをいっぱい指摘いただきまして、そこは今後いろいろなビジネスチャンスになっていくだろうと思っています。

特に、GSTCで、私どもの町で足りないのは、観光客の皆さんに対するGSTCの意識です。SDGsを含めて。そういったものも町として何かしていますかという問いの項目があって、そこは、高橋さんから説明させていただきます。

実は、ヒルトンさんをはじめ大型ホテルに関しては、いろいろな環境の調査を2ラウンドやっています、実際に、先ほど絵にもあったように、温泉廃棄熱を利用してね、エネルギーに変えることをやったりしているんですが、事業者の皆さんが自ら考え行動するという時点ではうちのまだウイークポイントで、そこはこれからしっかりやっていきたいと思っています。

あと、特に質問でなくて、ニセコ町では当たり前のことが観光客の皆さんにとっては当たり前でないことがあります。例えば生ごみも100%堆肥化しています。それからごみ処理もクローズド型処分場って完全密封型の環境にやさしい処分場があります。そういうものをもう少し観光ツアーといいますか、そういう中に入れていくとゼロカーボンを楽しむ、自転車のみならず、ほかの関係もできるのかなということで、大いなる気付きをいただきました。

ありがとうございます。

石黒：はい、ありがとうございました。永岡さん何かご意見ありませんか。

永岡：町長さん、ありがとうございました。付け焼き刃だというのは重々承知しております、自分たちがちょっと考えていたことは、地元の方々に聞くと着手されていたり、すでに1周終えていたり、2周終えていたりというところで、非常に難しいなと思っておりました。

私たちが観光客の立場になったときに、事前に抱いていたイメージと実際に行ってみたときのギャップがありました。リゾートとしてすごいニセコというイメージだったのが、行ってみたら、もっと地元の人たちのニセコ愛の強さが非常に印象付けられました。そこがもっと伝わるときっと違う町にもなるのかなとも感じられたのですが、そこをうまく反映することができませんで、力不足で申し訳ありません。

石黒：ありがとうございました。

大学が行うフィールド調査とその結果を踏まえた提案というのは、「フレッシュさ」が求められますが、あまりフレッシュすぎると、荒唐無稽な、非現実的な「思いつき」になってしまう危険性もあります。その点、今回は社会人経験のあるプログラム生も参加していますので、フレッシュさと現実的な部分のバランスがある程度とれているかなと思っています。ニセコリゾート観光協会の山口事務局長、いかがでしょうか。

山口：観光協会の山口です。どうぞよろしく申し上げます。感想と質問があります。A班の皆さんのところであった、道の駅を国際交流センター化するというのはなかなかいいアイデアだなと思います。皆さんがいろいろと考えていただいた提案について、結局それをやるのは人だと思います。その「人」をどうやって育てていくかというのが今一番大きな課題になっていると思っています。そこで質問です。FM、ラジオニセコのお話がありましたが、ここもやはり観光協会の傘下にあるということのメリットを生かしてないのご指摘はその通りでして、これまでどうしたらいいかなと頭を悩ませているところではありますが何かいいアイデアがあればぜひ教えていただきたいです。2点目はラジオニセコについては、コミュニティFMなので、全国放送ではないのですが、観光客へのいろいろな案内をするというのは、お客さんがこちらに来ていただいてからの有益情報というようなことでよろしいでしょうか。

また、感想ですが、提案の3のところのAR、QRコードを活用して、クーポンを発行していただく、ダウンロードするという話がありましたが、これは確か倶知安観光協会がVACAN（バカン）というシステム導入をされて、各店の混雑状況の可視化とか情報をダウンロードしていただく方に割引券を発行するというような仕組みことだと思いますが、これは確かに有効であると考えておりましたので今後の参考にさせていただきます。

それと、観光協会からホテルにリファーするという話がありましたが、実際のところ年間お客様からホテルを取ってほしいというようなリクエストがあるのは両手で足りるくらいの数です。ほとんどOTAに移行している感じです。

なかなかホテルや宿泊施設からコミッションをもらうことの抵抗感はあるというのが本音のところですか。私たちは一般社団ではなくて株式会社という形態をとっています。DMOでありながらDMCの側面も持ち合わせています。DMOは基本的にDMCを育てるというか、稼ぐための司令塔であるべきで、会員の事業者さんからお金を取るのではなくて、来ていただくお客さんからしっかりいただきたいというふうに思っています。

藤枝：ご質問ありがとうございます。いただいた質問の1点目と2点目についてお答えさせていただきます。まず1点目の連携方法についてですが、先ほどのスライドの中で少しだけお話しさせていただいた「Slack」や、「ChartWork」というような社内連絡ツールというところを使用できるのではないかなと考えておりました。

何かといいますと、FMニセコにお話を伺ったときに、公式リリースされたような情報をいただくことが多く、より速い情報や、より詳細な情報というのがなかなか共有できてないとおっしゃっていました。であれば、例えば「Slack」や「ChatWork」という、組織の限られたメンバーで瞬時に情報共有ができるツールを活用することによって、メールよりは気軽に価値あるリアルタイムでの情報更新が可能と考えました。

2つ目のご質問に関しまして、ラジオはニセコにいらした方がというふうにおっしゃっていましたが、私たちのグループではそういうふうな考えでなく、「radiko(ラジコ)」のような、最近のアプリを使ってラジオを聴けるようになればいいのではないかということで、実際ラジオ局の方もお話しされていたことではありますが、最近はそういったアプリを使ってニセコ外の方からフィードバックをいただくことが多いというふうにおっしゃっていた。しかしあくまでもコミュニティーラジオというところで、地域住民の方に向けた情報発信というところの軸は変わらないと思いますが、もう少し視野を広げて、地元向けのラジオの情報が観光客にとってもいいお店を知るきっかけになるなど、ほかの観光情報には載っていない事柄を知るきっかけになるような有効活用ができるのではないかと考えた次第です。すなわち、答えとしては、ニセコにいらっしゃる前からそのラジオは聴いているという前提でお話をさせていただきました。

山口：ありがとうございました。「Slack」とか「ChatWork」とか、もう1回自分も勉強します。アプリの件は先ほどお話しさせていただいた、いろいろなインターネットサイトで聴けるというのは確かにあるので、その辺はうまく情報を流すことでお客さんに興味を持ってもらえるということもあると思います。

続いてB班の部分についてのコメントですが、もともとのタイトルで「農業資源を生かした観光」、「持続・発展する農業には、担い手が来なくなる魅力あるニセコ農業を創造する

ことが必要」と、まさしくその通りだなと思いました。やはり観光イコール食ですし、食イコール農業ということで、事業としても食の関係を明示していくことはとても大切だなと思っているので、あらためて発表していたことを確認しながら事業者さんとうまく連携しながら、来場者に農業関連のコンテンツを広めていきたいなと思いました。

先ほど町長の発言されたことと近いのかもしれませんが、北海道の農業というのは本州の農業とは比べものにならないぐらい壮大であります。本州では1反、300坪ぐらい耕作していれば大規模感はありますが、北海道はもっと大きくて、それこそ5反とか10反は当たり前、十勝などは別格に大きいです。大規模であるということは経費や資金も格別に大きくなります。1台1000万円以上するようなトラクターが必要である、資材の資金などを考えると、本当に就農してもらえるのだろうか、公的な支援とかも含めてできるのかなというのが正直な意見です。

滝川：はい、ありがとうございます。私も本州からの移住組ですので、北海道の農業について詳しくはありませんが、大きな土地を保有して耕作することは大変なことと想像いたします。またいかに新規の農家を誘致するかについては、本気にやる気のある新規就農者を、農業委員会やJAさんとも協力をしながら受け入れていく体制づくりがヒアリングの中でも聞かれました。

山口：ありがとうございました。すみません、続いてC班のニセコのよさが観光客に伝わっていないというお話ですが、これは我々の自戒を込めての話にもなりますが、観光でご来訪いただくお客様だけではなくて、地域の皆さんにも伝え切れてないことがたくさんあるなというふうには正直思いました。

いろいろとニセコ町の活性化事業を手伝わせていただいている中でも、町民の皆さんとか事業者さんの話から、観光客に伝えきれていないことも多いと実感します。

先生方のお話であったように、観光の貢献度の見える化について、町の商工観光課の方と協力してきちんと町民に伝えていかないといけないことであると正直思った次第です。

それと、先ほど少し話しました最後のページの方、アウトプットにあったと思いますけど、未来のところで、「ニセコに行くには責任ある旅行者の立場で」というのは本当にその通りだと思っています。サステナビリティを意識した観光に取り組むべきであると実感しました。要するに現状維持という考え方でいけばニセコの観光はいつか死んでしまうと思います。意識ある人たちに来ていただくということを考えながら、ニセコの魅力をもっと深掘りしながら、ニセコのストーリーを語っていただいている人に協力いただこうと考えています。

サイクリングの話がありましたが、地元の交流を仕掛ける人、ガイドなど語る人などはボランティアでやるとどうしても長続きしない。それを確実に事業化すると、どうしても利用料が高くなる。高いこともさることながら対価をいただくことの責任が我々にあることを

皆さんからいろいろな発表を聴かせていただいて、あらためて感じましたし、さらにやることがたくさんできてしまいましたけれども、頑張りますので、外からの目線でまたぜひいろいろと意見を寄せていただければと思います。

ここにいる若手の川口君、彼が地域振興担当で旅行業も今けん引し、一生懸命やっていますので、ぜひ皆さんのご指導をよろしくお願いします。

永岡：ありがとうございます。何度も申し上げますが、本当に難しく、最初、テーマだけを見たときは、ぱつと浮かんだのは、ハワイがレスポンスブルーツーリズムを打ち出して、ウェブプロモーションなどをされていますけれども、そういうことなのかなと漠然と思っていたのです。でも事業者の方、地域の方とお話をしてみると、そもそもニセコ町としてはそういうプロモーションをやっているというところが、ここに来た人がニセコはいいよねと言ってどんどん増えていったというところを伺ったので、この流れは崩してはいけない、今は崩してはいけないのだろうと思いました。

ただ、どこかのタイミングでは、おそらく緩やかにそういう流れにこの街なら変わっていくのかなと感じまして、そんなことをうまく伝えきれないままに最後のスライドに少しだけ載せたというところで、すみません、力不足でございます。

石黒：パリでは、DMOが旅行者に対して「パリの持続可能な観光のためにあなたは何かできますか？アイデアを募集します」というようなことをしています。態度変容というのはDMOや観光協会のように地域側が先導する方法もありますし、むしろ市場の方から変わってくることもあるかもしれません。

もう1つ、町長におっしゃっていただいた土地の話というのはキーポイントではないかと思っています。

もし天田先生がご存じだったら伺いたいのですが、不在地主の場所をどう扱うのか、空間としてどう位置づけるのかについて、他の事例などありますか。

天田：はい、非常に難しい問題だと思います。先ほどのコモンズという問題との関わりでお話したいと思います。私のフィールドでは不明土地問題が観光振興や地域作りとの関わりにおいて直接顕在化している例はあまりないわけですが、一方で、だれのものかハッキリしないという意味では、「入会地」をどういうふうに使っていくかということが問題になっている例がございます。公開の場で実名を挙げながら「ここでこんな問題が」と言うのは、なかなかお話しするのが難しい部分もありますが、特効薬のような処方せんがあるならば私も教えていただきたいです。

問題を難しくしているのは、入会地の例ではいわゆる「地縁」とか「血縁」のようなかつての固定的な社会集団に所属する共同体が土地を共有していたときと現在では状況が異なっているという点です。ニセコもさまざまなところからいろいろな方がいらっやって住

民になっている状況かと思えます。かつてであれば、「昔ながらのルール」が適用できるわけですが、地縁、血縁みたいなものから土地の所有が外れていっている状況で、どういふに共有地を考えていくのかというのが非常に難しい問題になる例があります。

少し私の発表に引きつけた答え方にはなってしまいますが、私が接した例では、外から来た人々を仲間化するためのイベントをたくさん繰り返して行って、その中で「地域のもの」をどういふに考えていくかということを考える住民参加の場を、たくさんつくっていくような仕方での解決を図っている地域があります。C班の発表で、地域の意見に少しギャップがあるというような話をされていましたが、そういうギャップがある人たちに共に語り合う場みたいなものをたくさんつくっていくというのが1つのポイントになるのかなというふうに感じています。

そうした点では、ニセコ町は非常に先進的な取り組みをされている地域だと思いますね。「まちづくりトーク」では、まさか町長自らお出ましになるとは思いませんでしたが、町長が町の方との話し合いの機会をたくさんつくっているということも勉強させていただきました。こうした場において、私の発表では「文化的資源」という言葉で言いましたが、地域の人々がどういふ暮らしをしてきて、これからどういふ暮らしをしていきたいのかみたいな、地域アイデンティティみたいなところに焦点を当てたテーマ、トピックをベースとして、外から来た人と中の人との交流の場をつくっていくということが共同体として、土地の利用をどうするかというコンセンサスを作っていく作業になるのかなと考えています。

私が関わった事例ではそういう仕方での対処をした例があります。

石黒: はい、ありがとうございます。もちろんコモンズという言葉は、ポジティブ、ネガティブ、どちらのものでもありませんが、経済学でいうとどちらかという悲劇と言う言葉とセットで認識されているかもしれません。住民のみなさんのもの、地域全体のものであったはずの土地や空間がいつのまにか失われてしまう、価値を喪失してしまうというのはニセコに限らず起こり得ることかも知れません。

今、期せずして天田先生からまちづくりとかまちおこしという言葉が出てきましたが、今日は地域おこし協力隊の方も何人かいらっしやっていて、まさに外から目で地域を見るところには非常に今適した視点をお持ちなんじゃないかなと思います。

突然のご指名ですが、寺地さん、いかがでしょうか。

寺地: はい、ありがとうございます。私はニセコ町役場の企画環境課に所属しておりまして、SDGsの推進などを主に担当しています寺地と申します。本日お話を伺っておりまして、いろいろなご視点が、すごく大事な視点がいっぱいあるなと思いました。ニセコ町として環境に配慮した取り組みをしていく、住み続けられるまちづくりにしていくのは当然のミッションですが、町民自身がそれを意識していくということはすごく大事なことで感じ

ました。SDGsではよくつくる責任が問われますが、逆に言えば住む責任とかもあるかなと思いましたが、観光客が担う訪れる責任も存在することを認識しました。観光客は、実際訪れたところでどう行動していくのかやさらに学ぶ機会にさせていただくことも持続可能な観光とかを考える上では大事な視点であると思いました。

石黒: はい、ありがとうございます。今ちょうど町民の皆さんの意識、あるいは住む責任などという、すごくキーになる言葉が出たかなと思います。

もう一方、まさに住み続けるというところでいうと、ニセコ町の未来を担う高校生がどのように考えているのかも気になります。

この町に住む責任、地元で学ばれている高校生の皆さんたちが持続可能な観光というのをどうとらえられるかということもちょっと交えながら、少し高校の様子などを教えていただきたいと思います。お願いします。

中谷: ニセコ高校の中谷と申します。よろしくお願いします。持続可能な観光については、本校には観光コースもありますので、その中で生徒も学習しております。特に最近ではSDGsを推進する町としてニセコ町の商工観光課、小樽商科大学さんと連携して、ワークショップなどを行って理解を深めているという状況です。

そういう意識を若いうちから付けるということはとても大切だと思っておりませんが、実はこれを学ばせるための仕組みが現在のところないということを感じています。

高校からだけではなく、観光の生徒だけではなく、できれば小学校や中学校の時代からこれらを学ぶ機会が必要であると感じます。そして、これらをどのように伝えていくかというところも大切だと思いました。今の子どもたちが大人になり、自立した町民となったときに、自然と意識付けができていような長期的な見方をしながら進めていくことも大切かなと思っています。

石黒: はい、ありがとうございます。ちょうどSDGsとかGSTCの議論が町で始まった時に奇しくも新型コロナウイルス感染症の影響で観光客が減少し始めたころでもありました。高校生の皆さんは、実際に観光客と接する機会があったのでしょうか。

中谷: これまでは新型コロナウイルス感染症の関係で厳しい状況でしたが、最近では徐々に観光客に接する機会とか、自分たちで持続可能な観光のコンテンツとしてツアーを実施する中で地域の方に参加していただいて、どちらかというとテストマーケティングのような形で意見を聞いて改善していくなどの取り組みをする中で地域内の交流も始まっています。彼らなりに工夫をしてどのように観光客や住民と触れ合っていくかを考える機会が増えていきます。高校生でするので町民や観光客は非常に優しく、いろいろな話を聞いてくださいますので、今後コロナの終息とともに、観光客と接する機会も増えてくるのではないかと感じて

います。

石黒:ありがとうございます。コロナ禍において会合などへの参加も消極的になりがちですが、こうして将来を担う高校生を指導する立場の先生がこの場に参加いただき、若い世代が何を担っていけるのかを議論していただけたことは、ある意味先ほど天田先生がおっしゃったニセコ町の先進性の原点の1つではないかと感じました。

それでは最後のトピックとして、壇上の3班の代表に意見を伺います。それぞれの班には現地でのヒアリングなどを通じていろいろなアイデアを示され、提言をしていただきました。その中であえて1つだけ、これは行政の計画として明記すべきことではないかと思うことをお話しいただけますか。

藤枝:ありがとうございます。グループの発表の内容を本当にそのままお伝えさせていただきますが、情報がいろいろなところにルール化されることなく拡散しているということは町民にとっても観光客にとっても十分な情報サービスを得られないということにつながってしまいますので、情報のプラットフォームをしっかりと構築するということを記載いただきたいと思います。

石黒:はい、どうもありがとうございます。滝川さんはいかがでしょう。

滝川:農業の通年化を意識し、加工品の生産に注力し、冬季の道の駅の地域産品の販売に力を入れていただきたいことと。また、その加工品も含め、リゾートエリアに在住している人、長期に滞在している人が、交流できる機会の創出を視野にいれて、ともに農業生産に携わる仕組みを作ること、この2点を提案します。

石黒:はい、ありがとうございます。永岡さん、いかがでしょう。

永岡:「ニセコに行くには責任ある旅行者の立場で」という気持ちを旅の前、いわゆるタビマエですね、から意識していただけるような仕掛けづくりを目指していただきたいです。地域のことは旅に出てから感じる人が多いように感じますが、タビマエの段階からアプローチできる部分の具体化を考えていただけたら思いが晴れます。恐らくこれができるのはニセコだけではないかと思えますので。

石黒:A班からは、情報のプラットフォームをつくるということ、B班は農業と観光を融合するにあたっての提案。そしてC班からは、タビマエのプロモーションの重要性が指摘され、旅する前からおのずと自覚ある観光客を仕立てるような施策があるべきではという提案でした。

それぞれのトピックに分かれて、多くの地元の方にお付き合いいただいて学生が出した結論ですので、ぜひ寛容に受け止めていただき、これをきっかけにさらに議論を深めていただければと思います。

最後に片山町長いかがでしょうか。

片山：皆さん、どうもありがとうございます。最後に刀を突き付けられました。情報のプラットフォームについては、今週もその打ち合わせをしていたのですが、町では「Twitter」や「Facebook」で情報発信していますが、コンセプトがバラバラでした。それらを整理しようということで、「note」での発信や、逆にこれはやめた方がいいとか、検討しているところです。内部情報も含めて、情報共有ツールを整理していますので、引き続きご指導いただければありがたいです。

それから、2番目、冬に売れる加工品も含めて、おっしゃる通りでいろいろやりたいと思いますが、やはり基本は行政主導ではなく、自ら考え、行動して、私がやりたいという人がいれば背中を押そうと思っています。ニセコ高校では、ヒートポンプを利用して地中熱で野菜栽培をやっています。冬場、それを学校給食センターに出すのです。私はニセコの雪の中で採れた朝どれの野菜をホテルの食卓に提供できたら素晴らしいなと感じています。よく農家の若い方に話すのですが、「町長、夏一生懸命働いたのだから、冬は少し休ませてくれよ」と言われます。実際に、冬もそういったことに挑戦したい人がいれば、しっかり応援したい。冬場の道の駅もそうですし、そういった加工品も含めて応援したいなと思っています。

それから3番目の、責任ある旅行者。今、宿泊税を動かそうとしています。「宿泊税を払うことでニセコのこの環境を守ることを応援したい。それから、足の確保など、長期滞在中の質も確保したい。だから私は、こういう税金を払っていきますよ」というような共通の理解が進むことは、すごく良いことではないかと思っています。ヨーロッパでは、実際に観光客に対して、「こういう人が来てね」というメッセージをあらかじめ出しているところもあります。今やっている GSTC の中で、私たちも頑張るし、来た人も一緒になってこの環境や資源を守って、次世代につながるまちづくりをしていこうよ、というようなメッセージを出せるようになれば良いなと思っています。

私から最後に1つだけ。まちづくりを見ていて、やっぱり自由度とかタブーとかのない町が良いと思っています。私自身は、何かの制約があったり、そこに従わなくちゃならなかったりするところには、まったく住みたいと思わないのです。だから、自分たちが自由に発想して自由に意見が言えて、基本的にはタブーがない町、そして人間の尊厳が守られる、子どもたちの尊厳も含めて守られる、寛容な地域がこれから残っていくのではないかと思います。引き続き、そういう努力をしていきたいと思っていますので、よろしくお願ひしたいと思います。それと、先ほど、ニセコリゾート観光協会の事務局長が言った通り、人不足です。ぜひ「ニセコに住んでまちづくりをやってやろうじゃないか」という人がいたら、ぜひ、お待ちしております。よろしくお願ひします。ありがとうございました。

石黒：片山町長ありがとうございました。つたない進行で大変失礼いたしました。

木村：はい、どうもありがとうございました。石黒先生にも取りまとめをしていただき、また、町長からも熱いメッセージを送っていただきました。

おかげさまで多くの方に視聴いただき多彩な議論ができました。ニセコ町の高橋参事、石黒先生、天田先生には貴重な発表をいただきありがとうございました。片山町長にも最後までご出席いただきそれぞれの発表に耳を傾けていただき、また示唆に富んだご意見やコメントをお寄せいただきましたこと御礼申し上げます。そして何より一番感謝したいのは、学生の発表を真摯に受け止めていただき、耳を傾けていただいた町民の皆さんがたくさんいらっしゃったこと、非常にありがたいと思っています。

学生自身も教室で発表して甲乙を付けられるだけではなく、実践の成果として、意見をいただいた皆さんの前で発表できたことは何よりの喜びです。学生からは皆さんからいただいた意見をまとめて、さらにアップデートしたものを最終的な発表の資料として提出させていただきます。そして、このコロキアムの記録は叢書にもまとめ発行予定です。

また、ニセコ町の観光ビジョン策定に向けて実施した昨年の研究会の取り組みが、こういう形で発表できたことと、それから繰り返しになりますが、学生の発表と併せてこれをご披露できたことは、非常によかったのではないかなと思います。来年の3月には完成する新しいニセコの観光ビジョンには今回の研究の成果もきっと、学生の発表も含めて、提言として盛り込まれるのではないかという予感がしておりまして、まさに山岳デスティネーションという意味では、山の上からすそ野を広げたのではないかと感じたところです。

本日ご来場、ご視聴の皆様にはニセコ町の新しい観光振興ビジョンの策定に当たって、興味を持って3月の結果を見ていただきたいと思います。本日はオンラインで参加いただいた方が全国各地から視聴されていらっしゃいますが、ニセコには行ったことはないけれどもニセコに興味があるというような方々が、たぶん大勢聴いていらっしゃったのではないかと思います。また、いろいろな意味で先進地であるニセコ町の姿や現状をこういう形で見ていただいたことはデジタル社会の時代を感じることができ、有意義な時間となりました。メッセージもだいぶ入っています。一つ一つご披露できませんでしたが、これも集約してニセコ町にお渡ししたいと思っています。

ともあれ無事議論ができましたことは、ニセコ町の皆さんのご協力あつてのことです。こういう機会をまた設けていければと思っています。

これで終わらずに、この思いを後輩たちに伝え、また来年も再来年もこういった研究発表ができればいいと思いますし、これをきっかけに、この中の何人かが将来ニセコ町で働いているようなことになれば本望です。

なかなか整いませんが、あつという間の3時間でありました。またお会いする機会を楽

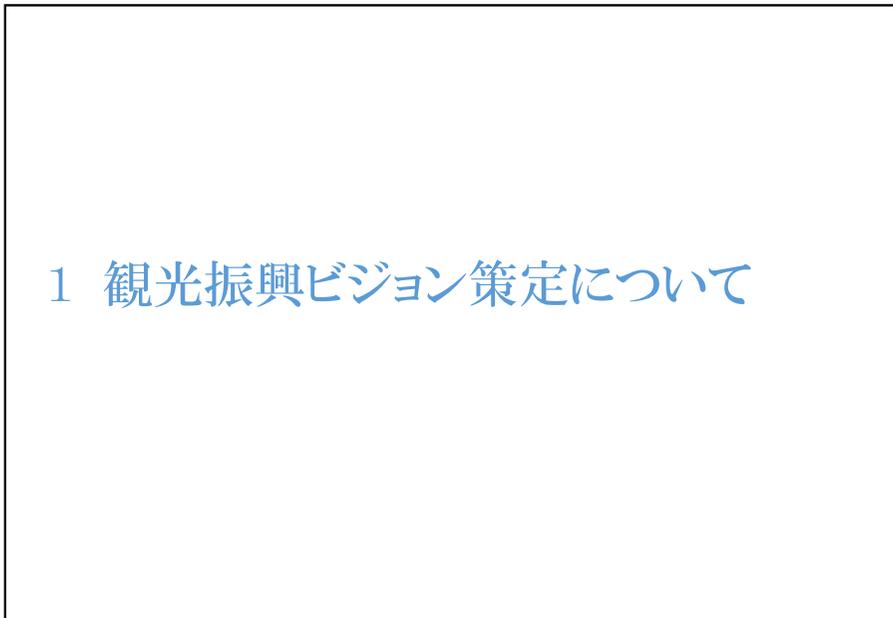
しみにしながら、結びのあいさつとさせていただきます。本日はどうもありがとうございました。



ニセコ町における 持続可能な観光の 取り組み状況

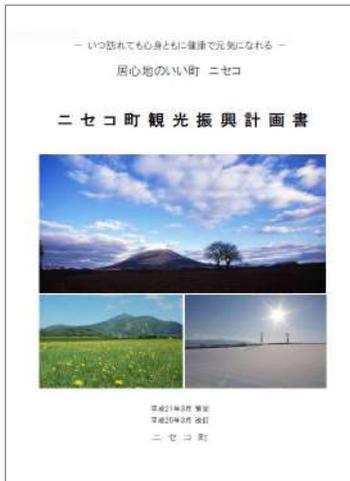
ニセコ町 商工観光課
参事 高橋 葉子

1



2

視点1：観光振興計画(ビジョン)とは？



ニセコ町観光振興計画 (平成21年3月策定)

【目標とする姿】

ーいつ訪れても心身ともに健康で元気になるー
居心地のいい町 ニセコ

【計画期間】

平成21年度～平成30年度
(2009年度-2018年度、10年間)

【目標設定】

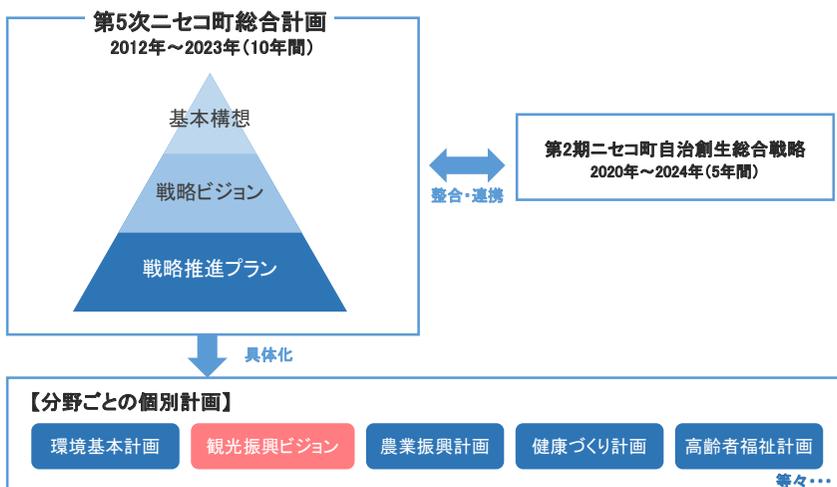
- ① 日帰観光客数を年間130万人、宿泊者数を年間70万人に
- ② 観光客の総合満足度について、「大変満足」と回答する割合を夏期27%、冬期35%に
- ③ 観光客の平均消費額を夏期48,000円、冬期65,000円に

ニセコ町観光振興ビジョン (令和4年3月策定)

3

3

【参考】ニセコ町観光振興ビジョンの位置づけ



4

4

視点2: 持続可能な観光地域づくりとは？

世界的な動き

ブッキングドットCOMの調査レポートによると、「世界の86%の人がサステナブルツーリズムを希望している」と回答しており、国際的には「サステナブルツーリズムに取り組んでいない観光地は10年後には淘汰される」とも言われている。特に、欧米豪の富裕層ほどこういった傾向は強く、選ばれる観光地（デスティネーション）となるためには持続可能な観光に大きく舵を切る必要がある。

観光庁

観光庁では、各地方自治体等が持続可能な観光地マネジメントを行うことができるよう、国際基準に準拠した「日本版持続可能な観光ガイドライン」を開発した。（UNWTO駐日事務所と連名で、2020年6月に発行）

UNWTO 駐日事務所

UNWTO（国連世界観光機関）では、持続可能な観光を「訪問客、業界、環境および訪問客を受け入れるコミュニティのニーズに対応しつつ、現在および将来の経済、社会、環境への影響を十分に考慮する観光」と定義している。



5

5


観光庁

「サステナビリティ」への関心の高まり

海外の市場では、サステナブルツーリズムへのニーズが高まっている
～市場から選ばれることが最大のインセンティブ～

○ Booking.comによる「2019 Sustainable Travel Report (April 17, 2019)」

<主な結果> ・世界では「旅行においてよりサステナブルな選択をしたい」という考え方が浸透→日本と大差
・世界の旅行者の70%が、「エコフレンドリーな宿泊先を好んでいる」
・世界の旅行者の70%が、この1年間に「環境に配慮した宿泊施設に1回以上滞在する予定あり」

<その他の結果>

| | 「はい」と回答した世界の旅行者の割合 | 「はい」と回答した日本人旅行者の割合 |
|--|--------------------|--------------------|
| サステナビリティを高めるために旅行中の行程を変え、可能な限り徒歩や自転車の利用、ハイキングを行うようになった | 52% | 34% |
| 旅行中に使ったお金を現地コミュニティに還元してほしい | 68% | 49% |
| 旅行中は現地の文化を代表するような本格的な体験をしたい | 72% | 47% |
| 旅行中によりサステナブルな行動をとるためのアドバイスを旅行会社から得たい | 41% | 22% |
| 滞在する宿泊施設のカーボン・フットプリントを相殺できる方法があるなら実行したい | 56% | 34% |

出典：Booking.com <https://globalnews.booking.com/bookingcom-reveals-key-findings-from-its-2019-sustainable-travel-report/>
世界18の市場で合計1万8,077名（内訳：ブラジル、カナダ、オーストラリア、中国、フランス、ドイツ、インド、インドネシア、イタリア、日本、メキシコ、オランダ、韓国、スペイン、台湾、アメリカ、イギリスからそれぞれ1,000名以上、イスラエルから883名）を対象に調査

6

【参考】: 持続可能な観光地の国際基準とは？



✓ グローバル・サステナブル・ツーリズム協議会（Global Sustainable Tourism Council）が開発した国際基準である観光指標をベースとしている。

✓ 観光地向けの指標では、**4つの分野**、合計38の大項目・174の小項目が設定されている。

A. 持続可能なマネジメント

B. 社会経済のサステナビリティ

C. 文化的サステナビリティ

D. 環境のサステナビリティ

7

7

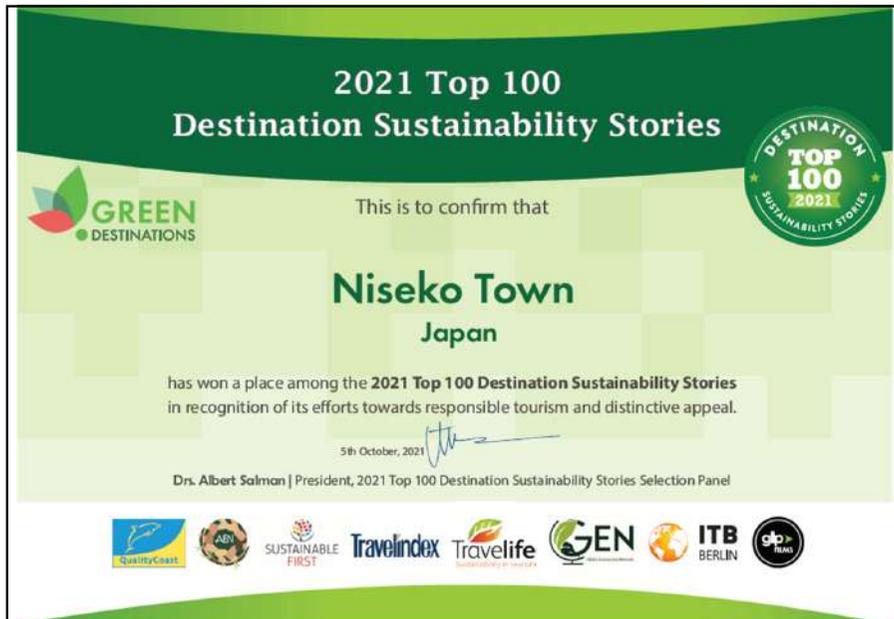
【参考】: 持続可能な観光地の国際基準とは？

● 【認証制度の例示】 Green Destinations Standard (GDS) による GSTC認証取得までのステップ (図2)



いま
ここ

8



9

これまでのニセコ町の「持続可能な観光」への取り組み

| | |
|-------------------|---|
| 令和元年度 (2019年度) | <ul style="list-style-type: none"> ✓ 北海道運輸局「国際的な観光指標の導入を踏まえた持続可能な観光の推進に関する実証事業」に受入地域として参画する。(対象地域: 釧路市(阿寒地域)・ニセコ町) |
| 令和2年度 (2020年度) | <ul style="list-style-type: none"> ✓ 観光庁「日本版持続可能な観光ガイドラインを活用したモデル事業」のモデル地区に選定される。 ✓ 2020年サステイナブル・トップ100 デスティネーションリストに、ニセコ町がはじめて選出される。 |
| 令和3年度 (2021年度) | <ul style="list-style-type: none"> ✓ ポストコロナを見据えた「持続可能な観光地域づくりモデル市町村」形成事業に参画(釜石市、ニセコ町、弟子屈町、小布施町、宮津市、三好市、小国町、与論町の8自治体) |

10

2 ニセコ町観光の現状と課題

13

2. ニセコ町における観光の現状と課題

2-1 観光の課題(SWOT分析)

| | | |
|------|--|--|
| 内部要因 | 強み (Strength) <ul style="list-style-type: none"> 国内外のスキーヤー・スノーボーダーに知られた「パウダースノー」をはじめ、国際的リゾート地としてのブランド力、認知度の高さ 日本百名山「羊蹄山」をのぞむ絶景、アンヌプリ連峰や清流尻別川など、豊かな自然環境 多様な観光体験（登山、スキー、ラフティング等のアクティビティや食（ワイン・日本酒・ビール）、温泉など） | 弱み (Weaknesses) <ul style="list-style-type: none"> 新千歳空港や札幌などから、最短でも車で2時間程度かかる立地 ニセコ町への交通アクセス、およびエリア内の域内の移動手段（2次交通、域内交通）が限定的（観光客のうち、8割自家用車・レンタカーを利用） 多様な顧客ニーズを満足させるサービス提供（サービスの種類・品質）の不足 |
| | 今後の機会 (Opportunities) <ul style="list-style-type: none"> 北海道新幹線の延伸（新函館～札幌間、隣接する倶知安町に新駅開業予定）、および高速道路（後志自動車道）の延伸 札幌での冬季オリンピック・パラリンピックの開催（2026年の開催を招致中／アルペンスキー会場） 宿泊施設（リッツカールトンリザーブ、アマン）、ウイスキー蒸留所（ニセコ蒸留所）等の新規開業 | 今後の脅威 (Threats) <ul style="list-style-type: none"> 地域間競争の激化（特に、冬季は、国内だけでなく、世界的なスキーリゾートが競合となる） 今回の新型コロナウイルス感染症の世界的な流行など、観光リスク（疫病、自然災害、戦争や不況等）の発生によるインバウンド客の急激な減少 過剰な観光開発等による自然環境への負荷増大、およびオーバーツーリズム（混雑や満足度低下） |
| 外部要因 | | |

14

14

2. ニセコ町における観光の現状と課題

2-2 各ステークホルダーのからの声(例)



町民

観光客がたくさん来ても、町民には特に恩恵はないのでは？
むしろ、物価が上がり、景観や自然環境は損なわれるなど、良くないことのほうが多い。
コロナ禍では、東京などからの観光客を見ると、「病気を運んでこないか」不安に感じる。

通年で安定的な集客が難しい。閑散期の誘客が課題だ。
慢性的なスタッフの人材不足。繁忙期は頭数の確保さえ難しいこともあった。
さらにマネジメント層の人材育成となると、手間も時間がかかる。



事業者



観光客

スキーシーズンの訪れると、宿も店も混んでいて、料金も高い。
天候が悪く予定していたアクティビティが楽しめず、その間やることがない。
滞在先の施設が外国人でいっぱい、気後れた。

ニセコは観光で稼げている。「食」を生かした町内での観光消費拡大が必要。
観光協会などの強み（第二種旅行業、道の駅の運営等）を生かしたい。
ニセコ町は「SDGs未来都市」であり、観光分野の持続可能な取り組みが必要だ。



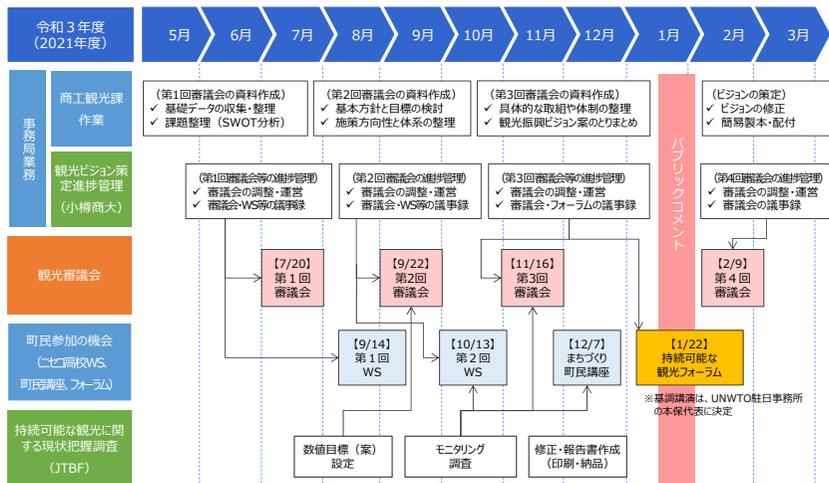
役場

15

15

ニセコ町観光振興ビジョン策定のスケジュール

現在、策定中！



16

16

Strategy for Mountain Destination

山岳デスティネーションの
デスティネーション・マネジメント
—戦略の射程と構成

CATS x ニセコ町観光創造フォーラム ②
YUSUKEISHIGURO

- 1

1

Theme

ニセコ町観光振興計画の
戦略的射程と構成の検討

新型コロナ・ウイルスの感染拡大に
限らず、2020年からの10年間は北海
道観光の内外の環境に大きな変化が
生じることが予想される

まずは資源性やイメージを切口に
ニセコ町のロールモデルを模索し
デスティネーション・マネジメント
戦略の射程と構成を検討する。
ただし最終的にはそもそも「山岳デ
スティネーション」としての類型が
妥当か否かについても考察する。

- 2

2

Mountain Destination

山岳エコシステムとの高い親和性

近代ツーリズムの源流の一つとも言える山岳ツーリズムは、ツーリズムの形態が多様化した今日、他のツーリズムと何を共有し、どう差別化されるべきか

山岳ツーリズムは他のツーリズムと多くの点を共有するが、独自の恩恵や障害をも併せ持っている。その最たるものは地理条件、気候、トポロジー(空間的位置関係)の重要性である (World Tourism Organization 2018)

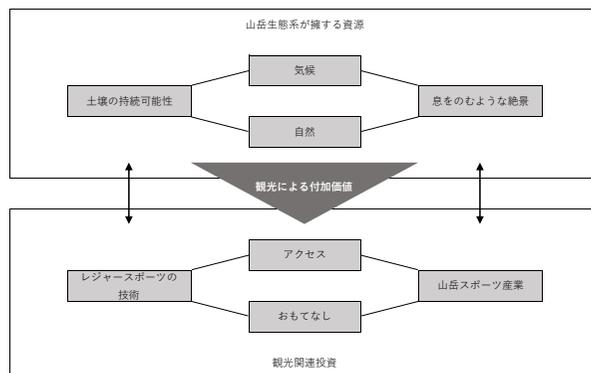
World Tourism Organization, 2018, Sustainable Mountain Tourism Opportunities for Local Communities, Madrid: UNWTO, 7.

- 3

3

Hou Tourism Works

山岳ツーリズムでは山岳というアトラクションが複合的な要素によって構成され観光産業(投資)に対して付加価値を提供する構造として説明されている



出所: Keller, P., 1998, A General Study of Snow Tourism and Winter Sports, Basic Report, 1st World Congress on Snow Tourism, Escaldes-Engordy, 38,より転載 (発表者訳出)

- 4

4

Research Question

2つのエコシステムへのアプローチ

世界的な山岳デスティネーションのデスティネーション・マネジメント戦略は山岳エコシステムとツーリズムのエコシステムの双方を射程とし、それそれに対応する構成を持ち合わせているのか

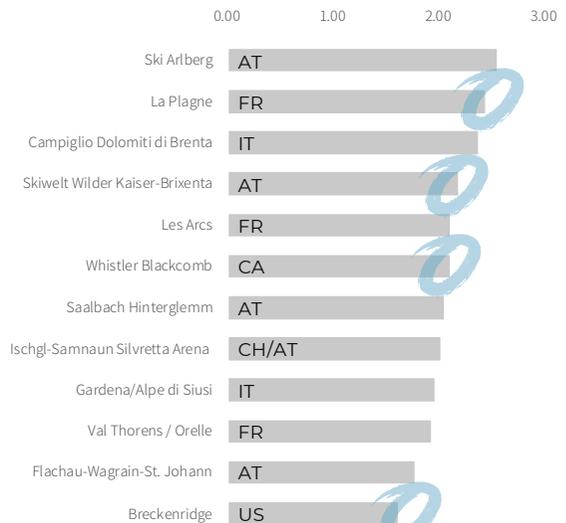
- 5

5

World Top Ski Destinations

実は欧州が独占的なポジションを保持

日本ではあまり注目されないが、「老舗」アルプスの絶対的優位性は変わらない。土地管理制度や環境配慮型デスティネーションとしての取り組みを含め、欧州は日本のロールモデルになる可能性



単位：100万人
出所：Laurent Vanat, 2020, 2020 International Report on Snow & Mountain Tourism, 15.にもとづき筆者作成

- 6

6

La Plagne

モンブランを臨む
フランス最大規模
のスキーリゾート

フランス東部の山岳地帯にあるスキー場。近隣には冬季オリンピックを開催したアルペールビルも



- 7

7

Tourism Plan

アルプスを守るための
持続可能な観光推進

自然環境への負荷軽減と
新規需要獲得の両立

- 大規模開発に対する規制
- アクセシビリティとユニバーサル
- 文化観光
- ハイキングと歩く観光
- 宿泊施設の管理
- 若年層の獲得
- 持続可能な開発
- ブランド・マネジメント
- サービス・パートナーとの連携

- 8

8

Skiwelt Wilder Kaiser-Brixental

スキー大国
オーストリアの雄

90ものケーブルカーを擁する
欧州最大規模のスキーリ
ゾートでありアルプスを代
表する山岳デスティネーシ
ョン



- 9

9

Strategy

住民の暮らしと
旅行需要の両立

観光セクターの
雇用環境改善も

- 市街地活性化
- 公共交通でのアクセス
- 住民参加型イベント
- 季節偏重の是正
- 宿泊施設別の開発管理
- 商品の価格アップとブランド向上
- 地産地消
- 住民に恩恵のある観光
- 起業促進と若年層の雇用拡大
- 従業員の福利厚生と雇用環境改善

- 10

10

Whistler Blackcomb

オリンピックの会
場にもなった
山岳リゾート

カナダ、ブリティッシュコロンビア州にありバンクーバーオリンピックの会場にもなったリゾート。リゾート全体が、Resort Municipality of Whistlerとしてそのまま自治体となっている



- 11

11

Master Plan

レクリエーションで
住民と観光客をつなぐ

住民がリゾートの管理に
積極関与

- 生活満足度と旅行者の満足度
- 観光開発と自然環境のバランス
- キャリング・キャパシティと混雑の緩和
- 公共施設・公園の整備
- 施設整備と運営の官民連携
- ブランド力の向上と商品開発
- スポーツツーリズムの推進
- パブリック・エンゲージメント

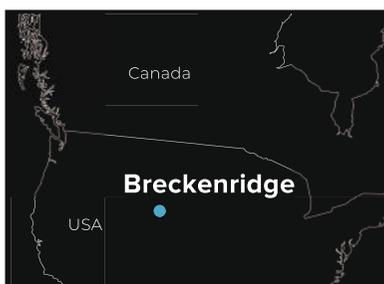
- 12

12

Breckenridge

ベイルと並ぶ
アメリカを代表する
スキーリゾート

コロラド州にあり全米屈指の人気を誇るスキーリゾート。かつてはゴールドラッシュで栄え1961年に最初のスキー場が整備されその後大きく発展した



- 13

13

Destination Management

文字通りの観光地域経営

需要を平準化し
滞在型を目指す

- 通年型観光を目指した誘客促進
- 観光セクターの雇用安定化と社会福祉
- 旅行者と住民双方による自然環境配慮
- ファミリー層の取り込み
- インターネット環境の整備
- 住民参加の拡大

- 14

14

Result

再頻出項目は「環境保全」、「アクセス」、「ブランド」、「イベント」の4つ。「地域住民」や「商品開発」を取り上げる事例も多いが、「雇用」や「安全管理」は少数

| | | 環境 保全 | アク セス | ブラ ンド | イベ ント | 地域 住民 | 商品 開発 | 施設 整備 | ICT DX | 誘客 促進 | 文化 資源 | 開発 規制 | 雇用 | 安全 管理 | 一次 産業 |
|---------------|-----|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|----------|----------|----------|----|----------|----------|
| オート=サヴォワ県 | FRA | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | |
| ワイルダーカイザー観光協会 | AUT | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | ○ | ○ | | ○ | ○ | | ○ |
| ウイスラーリゾート村 | CAN | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | | | | | |
| ブレッケンリッジ町 | USA | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | | | ○ | |

- 15

15

Conclusion & Discussion

01 Mountain Destination

スキーではなく山岳 destinations としてのアイデンティティ確立が肝要。環境やアクセス、ブランドの上位概念としてのアイデンティティ。

02 Local Community

環境やイベントなど住民と観光客の「共有」「共用」領域が多い。経済や産業と「思い」や「ビジョン」をいかに融合できるか

03 Emerging Issues

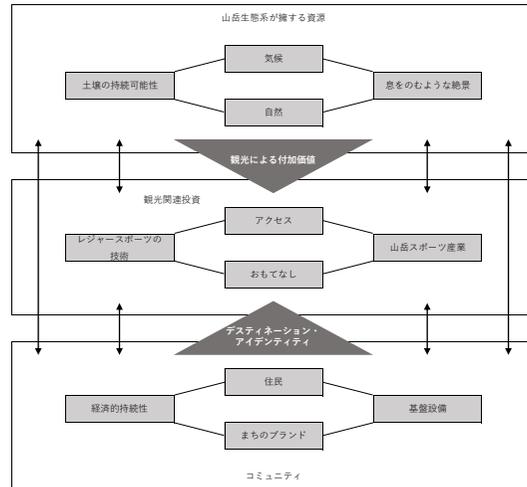
山岳や地域住民といった要素を今日的課題の解決とイかに結びつけられるか。温暖化、感染症、そしてカーボンオフセット。

- 16

16

A new framework?

山岳ツーリズムでは山岳というアトラクションが複合的な要素によって構成され観光産業(投資)に対して付加価値を提供する構造として説明されている



出所：発表者作成

山岳デスティネーションの ブランド化と文化的資源

ニセコ コロキアム 2021年11月14日
メディア・コミュニケーション研究院 天田顕徳

1

問題の所在と目的

- 第1回研究会における石黒先生のご提言

アイデンティティの
主体や範囲は？

- Mountain Destination

スキーではなく山岳デスティネーションとしてのアイデンティティ確立が持続可能なデスティネーション・マネジメントを進める。

2

ニセコ町からの問題提起

- (町内における大型開発プロジェクトの状況について) 個々の案件は規制ルール(準都/景観)の枠内だが、山岳リゾートエリアに開発が集中しているため、集中したエリアの自然と生活への影響を住民が懸念。
- 立地エリアにとっての可否判断の根拠(将来像)がない
- 「sustainable」をミッションとする「観光局構想」だが、環境保全と開発のバランスに関する合意形成が、ニセコ町と倶知安町、行政と民間の間でうまくできていない。
- 議論の切り口と積み重ねプロセスの方法論が見えない。
- ニセコらしい参加型の観光まちづくりが必要ではないか? (町民の理解(納得感)、わかりやすい評価の仕組み等)
- 観光事業者の地域への貢献の「見える化」が必要ではないか? (活発な投資の一方、地域に貢献できていない)

→「地域」や「住民」がキーワードに。

3

§1 「範囲」を考える

比較事例：霊山の観光化

出羽三山の事例

4

自己紹介



5

鶴岡の旅の楽しみ方

間山千四百年の月山・羽黒山・湯殿山を巡る「生まれかわりの旅」は、江戸時代に「出羽三山詣」として庶民に流行しました。参拝者は山菜の「精進料理」を食べて入山し、下山後は三山ゆかりの温泉につかって俗世に戻り、地酒や旬の食材、海の幸で今を楽しむ「精進落とし」の武儀を楽しみました。美食・美酒はこうした歴史に培われ、今も受け継がれる鶴岡市の伝統文化なのです。

詣でる、つかる、いただきますは、遠くの神さま仏さまに出逢い、大地の恵みに感謝して、いただく、鶴岡市の旅の楽しみ方。日本古来の自然と信仰のご縁を今に伝えます。

詣でる
Mouderu



つかる
Tsukaru



いただきます
Itadakimasu



一般社団法人DEGAM鶴岡ツーリズムビューローHPより (<https://www.tsuruokakanko.com/lp/mouderu/>)

6

[農泊 nohaku.net](https://nohaku.net)
 農泊ポータルサイト

泊まる 楽しむ 味わう

お気に入り

農泊サイト > 農泊地域（地域協議会等・自治体）一覧 > 農泊地域（山形県の地域協議会等・自治体） > 出羽三山門前町プロジェクト

出羽三山門前町プロジェクト



農泊ポータルサイトより (https://nohaku.net/council/council-19_1020/)

7

Login Register My Reviews

Yamabushido
Back to Nature, Back to Yourself

YAMABUSHIDO PROGRAMS REVIEWS ABOUT US DIRECTIONS FAQ MEDIA CONTACT

EXPERIENCE AUTHENTIC YAMABUSHI PRACTICE

WATCH OUR STORY

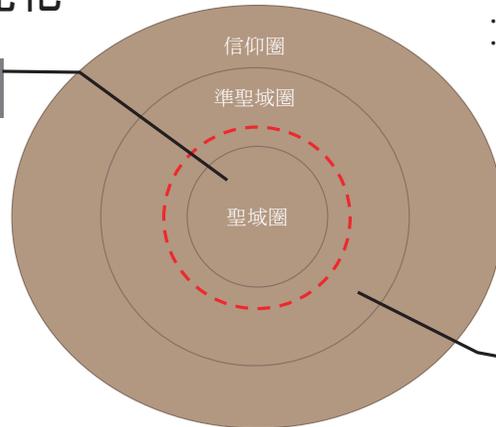


Yamabushido HP (<https://www.yamabushido.jp>)

8

霊山の観光化

ココの歴史や文化を



- ・信仰圏の衰退
- ・門前町等の経済的困難
- ・聖域圏の文化を観光資源化

山の裾野

ここで利用する

- ・ 圏構造については「岩鼻1981」を参照

9

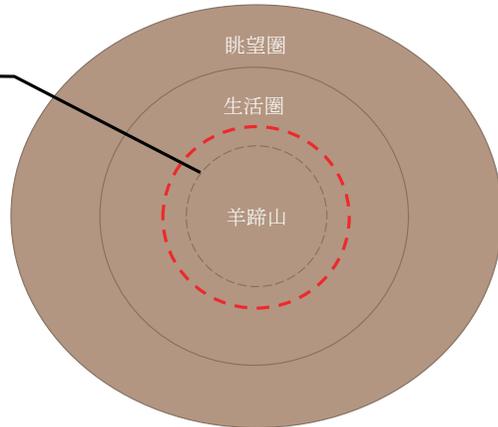
§2 ニセコの場合

山岳デスティネーションにおける観光の圏構造試論

10

羊蹄山を例にとると

聖域圏に当たる圏域が見出せない。



- 豊富な自然資源に対して、山に関わる「文化資源」はあるのか？

11

ニセコ エコ・ミュージアム (有島地区)



- 1 有島井上遺跡石碑
当跡の遺跡事務所近くには、歴史を「有島井上遺跡入口」の碑が置かれています。
- 2 有島神社
登山者によって建てられた神社と、歴史的な意義を後世に伝えるため1978(昭和53年)に建立されました。
- 3 有島神社境内
有島神社境内には、有島神社の「有島井上遺跡」を後世に伝えるため1978(昭和53年)に建立されました。
- 4 小島「新子」の碑
有島神社境内に「小島「新子」」に建立する石碑です。
- 5 有島神社
有島神社は、有島神社が小島の歴史を伝える上、有島神社を継承して、有島神社を継承しました。
- 6 有島神社
有島神社は、有島神社が小島の歴史を伝える上、有島神社を継承して、有島神社を継承しました。
- 7 有島神社
有島神社は、有島神社が小島の歴史を伝える上、有島神社を継承して、有島神社を継承しました。
- 8 有島神社
有島神社は、有島神社が小島の歴史を伝える上、有島神社を継承して、有島神社を継承しました。
- 9 有島神社
有島神社は、有島神社が小島の歴史を伝える上、有島神社を継承して、有島神社を継承しました。
- 10 有島神社
有島神社は、有島神社が小島の歴史を伝える上、有島神社を継承して、有島神社を継承しました。

コンテンツは非常に豊富

- ✓ スキー史
- ✓ 『日本書紀』
- ✓ 有島武郎
- ✓ 開拓の歴史

他方でコンテキストが見出しづらい。→エコ??

12

そんな中見つけたのが この地神塔

- 地神塔：大地を祀る石塔（大まかですが）。これは五神号型と呼ばれる五角形。
- 農業に関係の深い神号が掲げられ、作農の神として造立される場合が多い。

写真は天照大神、大国主大神、猿田彦大神、大宮媛大神、倉稻魂大神の神号

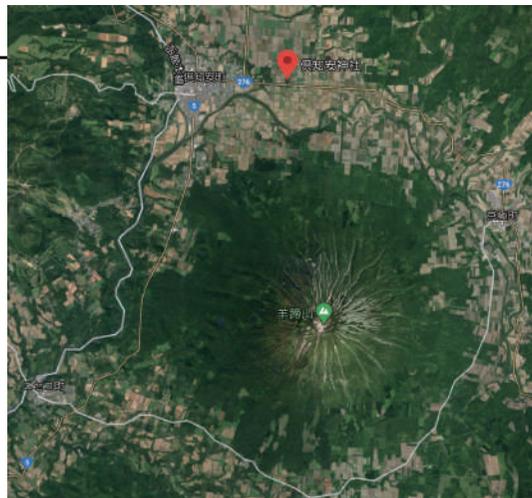
参考：[小林1945] [梅原1984]

→「開拓移民」の文化に関する研究

右の地神塔を見ていて気付いたことが。



13



- 左図「春秋社日醮義」より本朝社之略図

国立国会図書館デジタルコレクションより

14

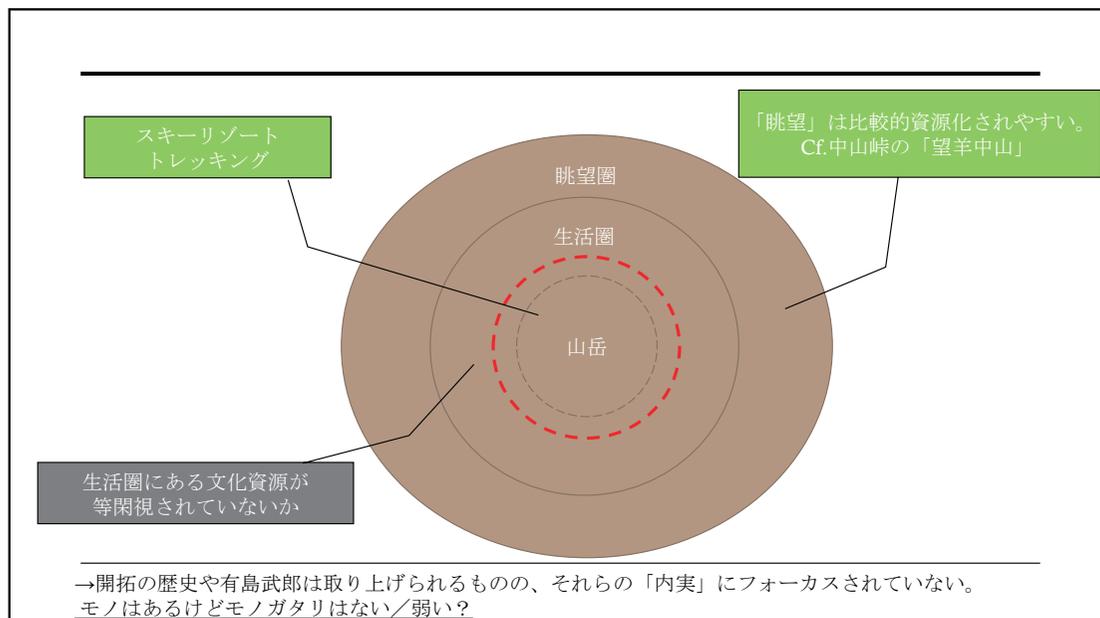
変則地神塔からくらしを想う

- 天照大神が羊蹄山を向く。
→変化のありようでその土地の人々の暮らしぶりがわかる。
✓羊蹄山を特別視する心性が推測される。(Cf. 蝦夷富士羊蹄山神社)



- 造田運動との連動 [村田2019]
そこで暮らす人々の願いや祈りのシンボル。
山とともに暮らしてきた人々の「くらし」を偲ばせる文化的資源。
馬頭観音／初老記念奉納碑なども

15



16

『地域との共生を考える』

クローズアップ①

～北村遊水地事業と地域創生～ 開催報告

(一財)北海道開発協会 開発調査総合研究所

地域との共生事例講演

北村の歩みに向きあう

～地神碑：五社大明神をめぐって～

村田 文江 氏 岩見沢市文化財保護委員会委員



今日は私の大好きな地神（ぢじん）さんの話をいたします。

私は昭和59年から岩見沢市に住んでいますが、北村とはあまりご縁はありませんでした。「幾春別川ふるさとの川づくり懇談会」のメンバーになり、河川事務

所の案内で北村遊水地のフィールドワークをしたとき、旧豊正5自治会の五社大明神の地神碑を見つけ、北村の歴史を調べて地神碑を探し回るようになりました。

まれています。また、神さまの名前がなく、五社大明神、地神社、地神宮と文字だけを刻まれた碑も多く、自然石に刻まれた碑もたくさんあります。お祭りは春秋の社日（しゃにち）に行われます。社日とは、春分や秋分の日にもっとも近い、戊（つち）の日で、今年は3月22日と9月18日になります。春の祭祀（まつり）では豊作を祈るほか、その年の営農についての相談や種籾（ねまひ）の交換などもします。秋は豊作を祝って神さまへお礼をし、翌年の農作業に向けてみんなで話し合いをします。

祭りをを行う集団は、部落会や農事実行組合、戦後は農事組合、自治会など、農作業や水利にかかわる一番小さな単位の集まりが一般的です。

地神碑は、自治会館のかたわらや神社の境内に建立されることが多く、祭りに神主（かみ）さんは関与せず、祝詞（のりと）やしめ縄づくりなども自分たちで行います。会館での

17

§3 「主体」について

再帰的な場所アイデンティティの構築について

18

自ら調べ、自ら語ることの効用

- アイデンティティの不在は観光信仰における方向性の喪失を招く。激動の時代における長期的なビジョンを描く上では、デスティネーションとしての競争力と同時に訪問者、**地域住民の双方で**共有可能なデスティネーション・アイデンティティを構築することが極めて重要である（石黒 2021: 26）

✓生活圏の文化を自分たちで調べブランド化する

→住民の手でモノをモノガタリ化する

19

現代のコミュニティ論に見る 住民参加の効用

- 現代の「コミュニティ」は、地理的な範疇や固定的な社会集団に由来する「共同体」としてではなく、「流動的でありながらも、人々の再帰的な帰属感」によって生み出される共同性として理解すべき。「地域イベント」や「街づくり」はそうした共同性を生み出すべく、地域自らが再帰的に場所のアイデンティティを確立しようとする過程。[鈴木2013：195-196]。
 - すなわち彼らは、自分たちの地域やそこで営まれる様々な文化的実践を調査しながら、自分の地域とは何か、そこに住む自分とはいかなる存在であるのかを彫琢しているのである。[門田2014：252]
- 住民自身が再帰的に**場所のアイデンティティを獲得**
-

20

「開拓の歴史」≠人々の暮らし ポイントは「自己言及性」と「多声性」

- このマチに生きてきた人々の知恵が時代に応じてどのような形で受けつがれてきたか、今を生きる人々がどのような工夫と創意をもってこの時代を生きているか、そして、これからマチがどのような形で先祖たちの知恵をふまえた繊細で大胆な飛躍をとげうるか、を明らかにすること。[関2012:8]

→暮らしを描くことで**マチや住民のアイデンティティ**を確立する狙い。



21

(ありきたりな) 民俗から くらし／しあわせを読む。

- 「民俗」は生活文化とも言い換えることができるが、その「生活」とは、結局のところ私たちが夢想する「しあわせ」を実現するための行為である。ある地域における生活の記述とは、その地域に生まれ、暮らす人々が抱いた「しあわせ」を描きだすことでもあるのだ。[高岡 2014:5]



22

まとめにかえて

- ・山岳デスティネーションの範囲を仮に、山岳・生活圏・眺望圏とした場合「生活圏」の文化資源（＝山とともにくらししてきた人々の歴史）の活用を。
 - ・生活圏の文化資源をつかったブランド化を「住民」が主体的に行う／行える環境作りをすることがデスティネーションアイデンティティの構築に資するのではないか。
 - ・それを構築することが立地エリアの将来像を考える際のプラットフォームの一つになるのではないか。
-

23

参考文献

- ・天田顕徳「『山伏文化』の資源化・商品化：山形県手向集落を事例に」（山中弘編『現代宗教とスピリチュアル・マーケット』弘文堂、2020年、pp.169-188）。
 - ・石黒侑介「山岳デスティネーションのマネジメント：戦略の射程と構成」（石黒ほか編『ニセコ町観光の諸相と観光ビジョン策定に向けた展望』北海道大学観光学高等研究センター、2021年、pp.25-41）。
 - ・岩鼻通明「観光地化にともなう山岳宗教集落戸隠の変貌」（『人文地理』第33巻5号、1981年、pp.74-88）。
 - ・梅原達治「北海道地神塔の儀軌」（『札幌大学教養学部紀要』（25）、1984年、pp.73-90）。
 - ・門田岳久「自分自身について語ること：民俗学における〈再帰性〉」（門田岳久・室井康成編『（人）に向きあう民俗学』森話社、2014年）。
 - ・小林己智次「江匡弼撰春秋社日醮儀：地神祭の起源に関する古文献」（『北海道帝國大學法經會法經會論叢』（11）、1945年、pp.199-232）。
 - ・鈴木謙介『ウェブ社会のゆくえ：〈多孔化〉した現実の中で』NHK出版、2013年。
 - ・関一敏「まえがき」（福岡市史編集委員会『福の民：暮らしのなかに技がある』福岡市、2014年、pp.8-10）。
 - ・関一敏編『現代民俗学の視点 二 民俗の言葉』朝倉書店、1998年。
 - ・高岡弘幸「はじめに」（高知市史編さん委員会編『地方都市の暮らしとあわせ：高知市史民俗編』高知市、2014年、pp.1-5）。
 - ・村田文江「北村の歩みに向きあう～地神碑：五社大明神をめぐって～」（北海道開発協会『開発こうほう』19年7月号、pp.26-30）。
-

24

十一月 2021

NISEKO TOURISM

ニセコ町の観光情報発信に関する提案

北海道大学観光学院A班 ©藤枝穂乃花、大野雅人、新海茜、孫梓文、高橋めぐみ



北海道大学観光学院

1



NISEKO TOURISM

目次

- 1. 「ニセコ」の目指す姿
- 2. 現状分析とターゲット
- 3. 提案のモデル
- 4. 媒体ごとの現状と課題・提案
 - ①道の駅・観光案内所
 - ②ニセコFM
 - ③アプリ
 - ④ホテル・タクシー
 - ⑤あそぶっく
- 5. まとめ

2

「ニセコ」の目指す姿 ①

《ニセコ町の観光振興基本理念》

- 観光客の満足度を高める
- 町民生活を豊かにする
- 持続可能な地域経済を確保する
- 自然（環境）を保全する



住んでよし、訪れてよしの、
持続可能な観光リゾート

01

「ニセコ」の目指す姿 ②

主体は4つ

- 町民（農業）
- 海外移住者
- 日本人移住者
- 観光客

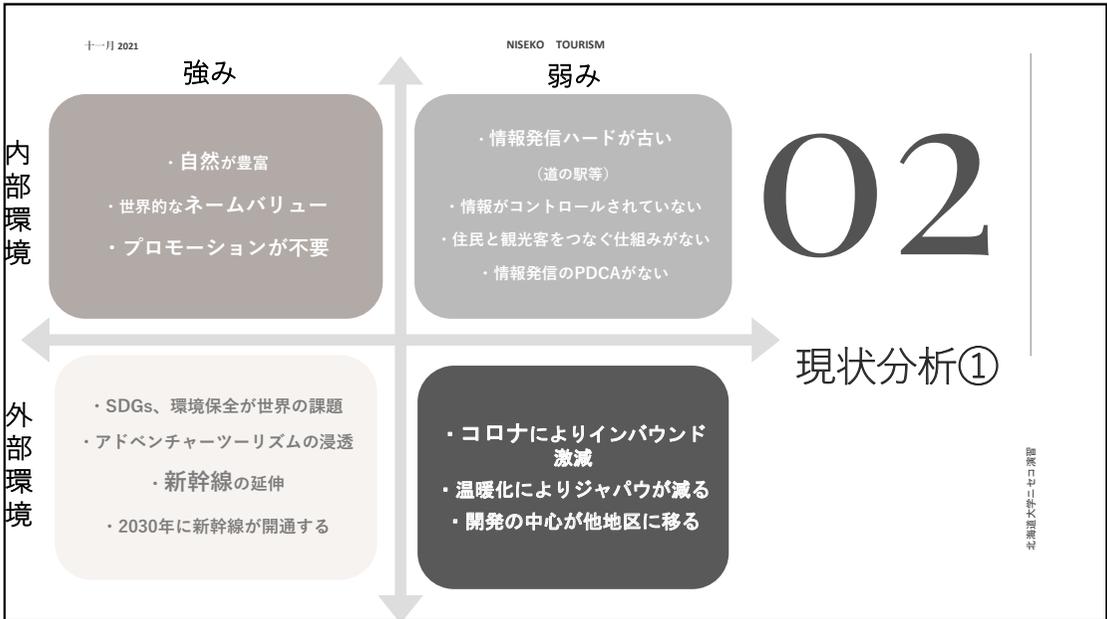


有島武郎の
「コモンズ」の
概念
ニセコ町の地域資
源を4者で共有

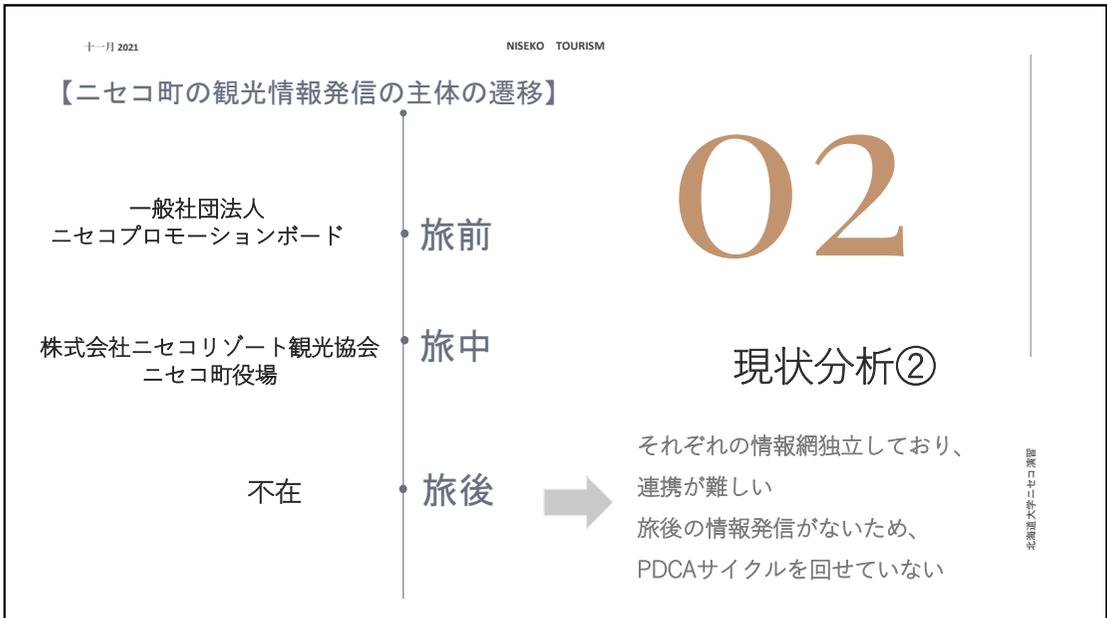


4つの主体が共存す
る、
居心地のいい
まち、
「四方よし」
の実現

01



5

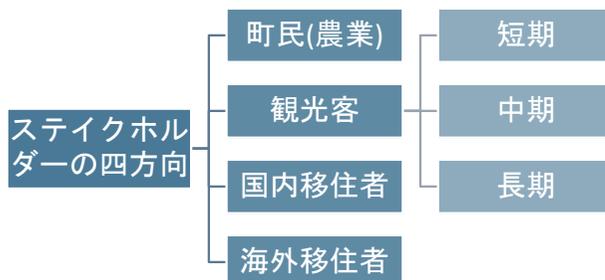


6

02

ターゲット

【観光情報の定義】



- 情報のターゲット:ニセコ訪問が決定し、具体的な訪問先や滞在先などを探している観光客

観光計画株式会社

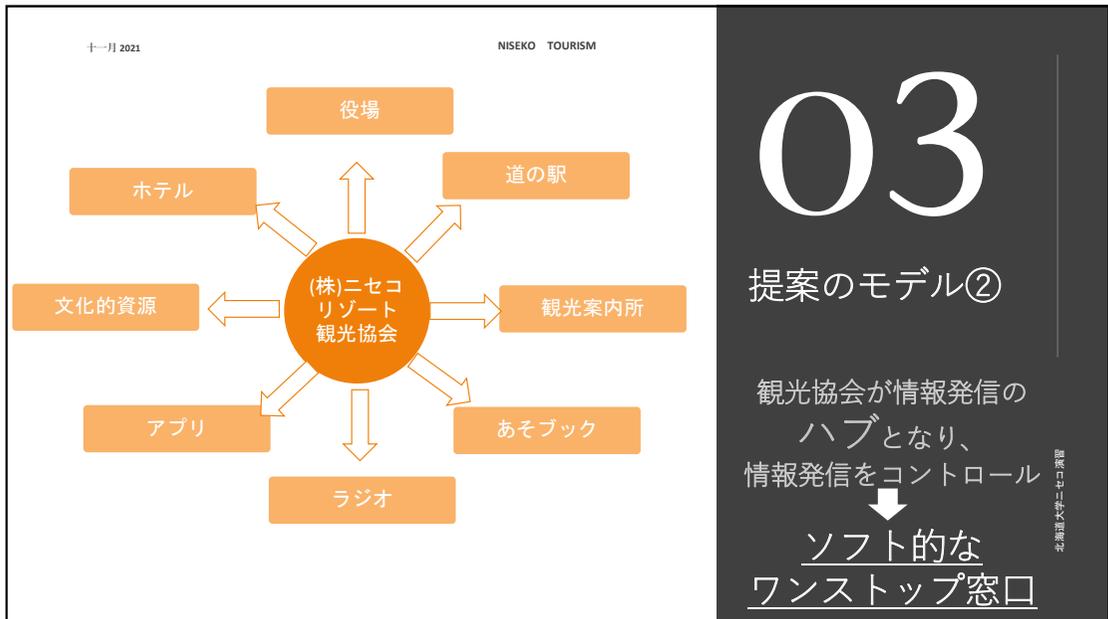
03

提案のモデル①



参考文献 「観光地が取り組む効果的な観光情報提供のための資料集」(p.51)「第1章 観光情報提供の検討プロセス」

観光計画株式会社



9

十一月 2021 NISEKO TOURISM

03

【ニセコ観光振興の9つの基本戦略】

1. 環境との調和
2. 人材育成・交流
3. 地域資源の活用
4. プロモーション活動の強化
5. 広域観光の推進
6. 受け入れ環境の整備
7. スポーツ観光の振興
8. シニア層増加、総人口減少へのアプローチ
9. ニセコに滞在する魅力の発信

「ニセコには毎年多くの観光客が訪れており、こちらから出かけなくても多くの人と交流することができる環境が身近にあります。また、観光客も地域生活や文化にふれたいと考える人が増えており、町民と交流する機会は確実に増えてきています。そこで、町民と観光客とが交流できる機会を積極的に設け、観光客の要望に応えながら同時に地域の活力を育てていきます。」

——出典『ニセコ観光振興計画書』

観光協会が情報発信のハブとなり、情報発信をコントロール

10

【ヒアリング結果】

・従来からのニセコ町民と長期滞在外国人観光客との間の**軋轢**は未だに
存する。

・**言語**の壁は大きい

・**子ども**同士の**順応性**は高い
(日本人の子どもとハーフの子どもは仲良くなるのが大人達より早い)
⇒早い段階からの良好な関係構築の必要性

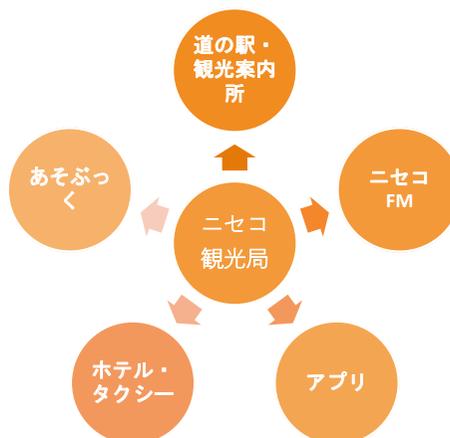
・ゴミ捨ての方法等、日本の**マナーや文化**の周知の必要性

03

観光情報発信を媒介に、町民と観光客の間の**交流**や**軋轢軽減**を図ることはできないか

04

媒体ごとの
現状と課題・提案



十一月 2021 NISEKO TOURISM

04

①道の駅・観光案内所

課題

- ・ ①町民と観光客の接点がない
- ・ ②外国人向けの情報が少ない
- ・ ③短期観光で立ち寄る人向けのみ

提案

- ・ ①野菜を作っている農家が道の駅でQandA対応！（インターナショナルの子ども通訳ボランティア参加）
- ・ ②③英語（媒体）交流員配置
- ・ 国際交流センターの機能を持たせる

効果

- ・ 中長期滞在者と地元住民との交流促進

国際交流センター各支店連携

13

十一月 2021 NISEKO TOURISM

具体的提案

道の駅「ニセコビュープラザ」改築に伴う国際交流センター機能の併設

- 国際交流センターが担う役割
- 海外諸都市との国際交流の推進
- 市民の国際交流活動に対する支援
- 国際交流に関する講演、講座、研修等の実施
- 市内在住の外国人の支援
- 国際交流に関する情報の収集及び提供

ニセコ町役場の国際交流員を数名配置し、長期外国人滞在者と海外移住者が“買い物ついで”に道の駅で諸事務手続きを行えるようにする。

ヒアリング結果、車を所有している長期滞在の外国人は道の駅を買い物で利用する傾向がある

①道の駅・観光案内所

04

国際交流センター各支店連携

14

04

②ニセコFM

課題

- ・①聴取率が不明
- ・②観光協会が運営しているメリットを活かしきれていない
- ・③観光客に特化した番組がない

提案

- ・①アプリ経由クリック数で聴取率を把握し、フィードバック
- ・②組織内連携（Slack、ChatWork活用）
- ・③時期、時間限定→観光情報を放送（ゲレンデ情報など）

効果

- ・現在は地元住民向けに特化しているが、観光客にとっても、より有益な情報を提供できる！

具体的提案

- ①外国人観光客向けの番組作り
例：スキーのゲレンデ情報、気象情報の提供
長期滞在外国人観光客向けの簡単な日本語教室
- ②観光協会内部の連携体制の強化
Slack、Chatwork等のフリーチャットアプリの活用
導入段階における外部資源のJNTOや北大生の活用
(例：マニュアル作成、アプリのレクチャー指導)
⇒アプリを使うことで端的で効率的な会話感覚での情報共有とタスクの可視化が可能!!

ヒアリングの結果、
来道前にラジオで情報
収集している観光客も
一定数存在していることが判明

②ニセコFM

04

十一月 2021

NISEKO TOURISM

04

③アプリ (Niseko・Niseko Now)

課題

- ①知名度が低い
- ②ニセコプロモーションボードと提携店しか表示されない
- ③アプリのメリットが見えない

提案

- ①Free Wi-Fi利用時にブラウザ版を表示し、アプリを紹介
- ②観光協会から無料掲載している現店舗にWEB掲載を提案
- ③AR,QRコードを付加してクーポン等発行、DL促進

効果

- ・双方向にメリット
- ・旅行者：コンテンツの充実と旅まえ情報、旅なか情報の充実
- ・観光協会：情報の獲得とデータベース化

図解：ニセコ観光協会

17

十一月 2021

NISEKO TOURISM

04

④ホテル

課題

- ・旅行者：観光協会に対応してもらえない案件をホテルに頼む手間

提案

- ・常時、観光協会と同じ観光情報を各ホテルが保有することで、宿泊者はいちいち観光協会に問い合わせずともホテルで情報が得られる

効果

- ・観光協会が情報のハブとなり、各ホテルと情報共有することにより、ホテル側は宿泊客の満足度を高めるとともに、地域全体の観光にも貢献できる
- ・(例) バス、タクシー、レンタカーなどの2次交通手段の情報

図解：ニセコ観光協会

18

04

⑤あそぶっく

課題

- ・①観光客は足を運ばない
- ・②文化的資産（有島武郎記念館）との連携は？

提案

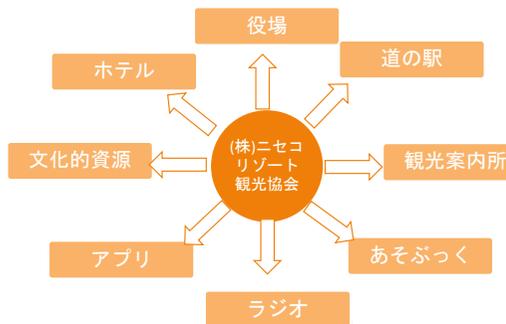
- ・①カフェの運営と本の販売
- ・ドネーションの提案
- ・②文化的施設（有島記念館）と連携し、イベント企画

効果

- ・次世代のグローバル人材育成
- ・国際交流促進の場の提供

提案のモデル図

ニセコ町

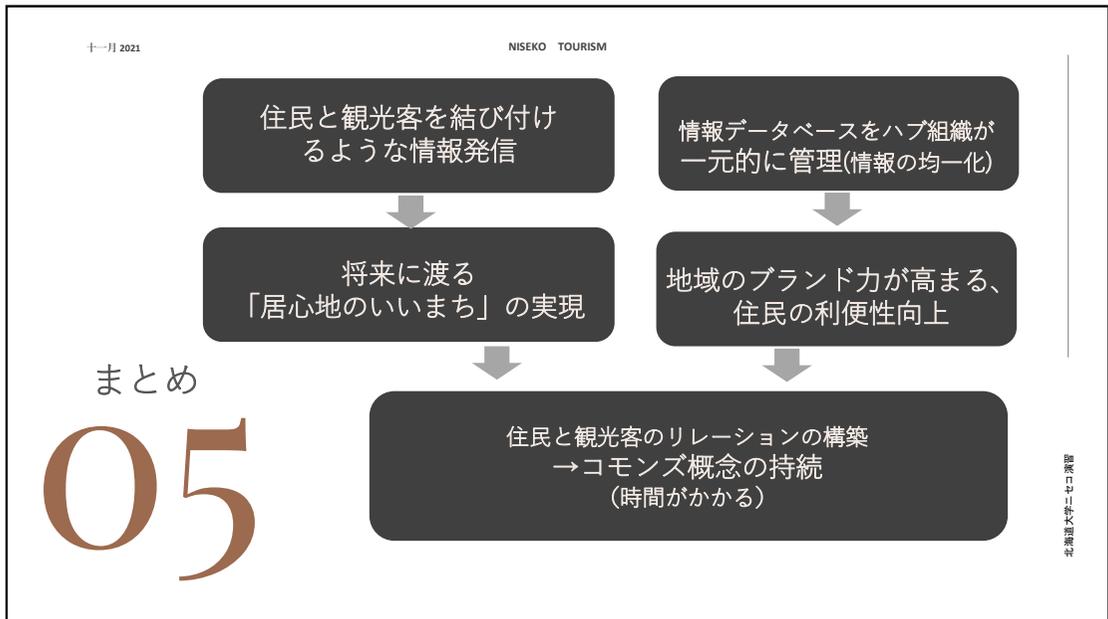


倶知安町



蘭越町





21

十一月 2021 NISEKO TOURISM

参考文献

○訪問先情報
 ニセコ観光協会ホームページ <https://www.niseko-ta.jp/>
 JRニセコ駅観光案内所 <https://tic.into.go.jp/jpn/detail.php?id=4212>
 道の駅「ニセコビュープラザ」 <https://www.michi-no-eki.jp/stations/views/18825>
 ラジオニセコ <http://radioniseko.jp/>

○参考文献
 水戸市国際交流センターホームページ
<https://www.city.mito.lg.jp/000271/000273/000284/bunka/p000718.html>
 「観光地が取り組む効果的な観光情報提供のための資料集」(p.51)「第1章 観光情報提供の検討プロセス」国土交通省/事業総括調整官室
<https://www.mlit.go.jp/sogoseisaku/region/kankojoho/index.htm>

北海道大学ニセコ演習

22

おわりに

本フィールドワークにあたり、現地調査では、突然の訪問にもかかわらず、本研究の趣旨をご理解いただき、快くご丁寧に対応して下さい、本当にありがとうございました。

また、ニセコ町長をはじめ、発表会場に足を運んでくださった皆様からの貴重なご意見を戴いたことは、私たちにとって貴重な経験であり、今後の研究の糧となります。この場をお借りして、メンバー全員で感謝申し上げます。

農業資源を生かした観光と 移住・定住の推進に向けての展開

2021年11月14日

北海道大学大学院
国際広報メディア観光学院
B班 ハン歆、王婷、蓮尾純一
新堀裕幸、滝川徹也



1

1. テーマの解釈と方向性

- ・ニセコ町は「観光」と「農業」の町
→でも、ニセコ町で連想するのは「スノーリゾート」「観光」
→移住・定住の多くは「観光」に関わる
- ・「農業」を真剣に担う為に移住する人は？
- ・「観光」と連携できる「農業」の在り方は？



持続・発展する「農業」には、担い手が来なくなる
「魅力ある」ニセコ農業を創造することが必要。

2

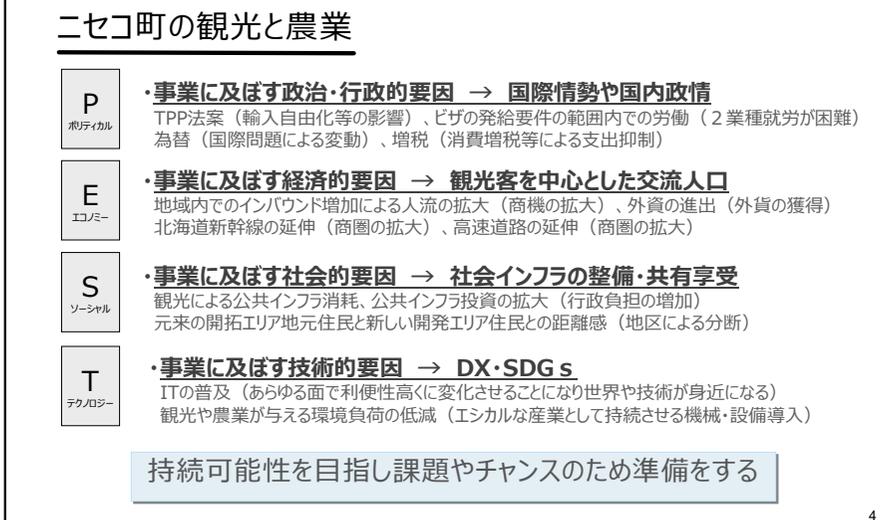
2

2. 現状分析①



3

2. 現状分析②



4

2. 現状分析③

継承される「相互扶助」

自らの農地を小作農に無償解放した有島武郎



「この土地のすべてを諸君に無償で譲渡します。」

しかし、それは諸君の個々に譲るのではなく、諸君が合同してこの全体を共有するよう御願いするのです。

その理由は、生産の大本となる空気、水、土地という類のものは、人類が全体で使用し、人類全体に役立つようし向けられねばならず、一個人の利益によって私有されるべきものではないからです。

諸君全体がこの土地に責任を感じ、助け合って生産を計り、周囲の状況の変化する結果となることを祈ります。」

5

5

3. 課題抽出

ニセコ町の農業の課題

- ✓ 農業所得の低迷 価格低迷、高収益作物の低迷
- ✓ 主力野菜の不在 多品種栽培の弊害（ブランド不足）
- ✓ 事業承継と労働力不足 高齢化、若年層の流出
- ✓ 農地利用の消滅懸念 耕作放棄、原野高額売買の誘惑
（事業としての農業の消滅）
- ✓ 道の駅の消費拡大 冬期間に集客できるラインナップの不足

6

4. 事例紹介①

農家が自主的に6次産業化できる事例



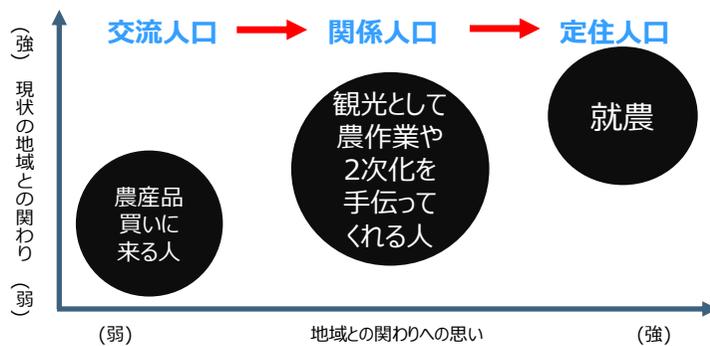
7

7

4. 事例紹介②

観光から就農へモデル事例

総務省が示す関係人口の概念図を参照

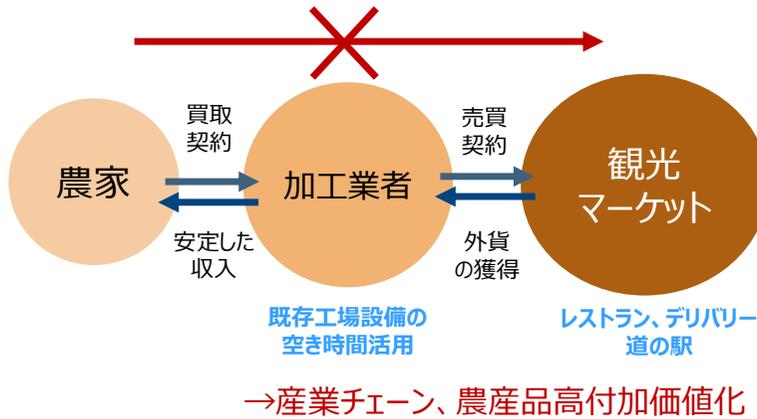


→観光と農業の新たな可能性を示す

8

8

4. 事例紹介③

農家が自主的に6次産業化できない事例

9

5. 解決策 ～「魅力ある」農業に向けて～

① 農業の持続的発展

→観光業と農業の相互扶助
win win mode—六次産業化の工夫

② 主力野菜の創出

→ニセコの「土地が肥沃」「オーガニック」「越冬」「尻別川の水質」など付加された価値が、**地産地消に傾注させる**ことで地域の消費者に評価され、先導的な品目となっていくことを図る。
それにより、生産者と消費者（生活者）の信頼関係強化と安定生産の上に、**その地域でしか手に入らないという希少性**でブランド力が上がることを目指す

→付加された価値をTAG付けしてブランドとして明確化し、視覚からも付加価値を認識できるようにする

10

10

5. 解決策 ～「魅力ある」農業に向けて～

③労働力強化

→機械、IT技術導入

民間：企業経営者は得た観光収入の一部を農業に投資する

行政：観光業と農業が相乗効果を高められるよう、
観光業者へ特別な税金を課してそれを農業へ分配する

→ビザの条件緩和

行政：外国人就労者に対し、農業は夏場の雇用を提供し、
リゾートが冬場の雇用を提供する

適用解釈の拡大：リゾートホテルは業務範囲として、農家サポート
業務を加え、夏期に農家より提携農園としての
業務を受託する

④農産物の販路・消費拡大

→観光と農業の交差する道の駅の冬季活用を図る

11

11

6. 具体案

・解決策の一部の具体案



①六次産業化の工夫

④農産物の販路・消費拡大

農業と観光が交差する道の駅

その道の駅の冬の活用
(圧倒的な商品ラインナップ拡大)



冬の訪日リゾート客の消費拡大
訪日リゾート客(観光)と農業の域内交流

12

12

6. 具体案

・圧倒的な商品ラインアップの拡大

既存のものの掛け算でこの地域として新しいものを創出
 (全て他の道の駅や越境ECで人気商品を応用)

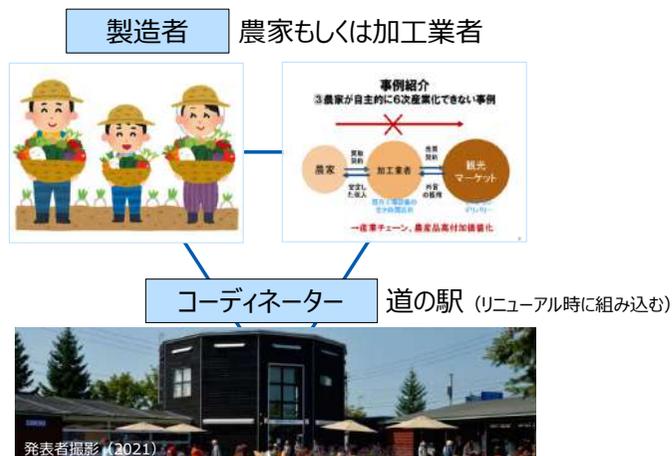
| | | | | |
|----|---|---------------------------------|---|------------|
| 温泉 | × | 大豆 | ≡ | 温泉豆腐 |
| 生乳 | × | 野菜 | ≡ | 野菜ジェラート |
| 野菜 | × | 野菜 | ≡ | 野菜ドレッシング |
| 果樹 | × | 小麦 | ≡ | 焼き立てフルーツパイ |
| 野菜 | × | アルコールに合う (ウイスキー、クラフトビール、日本酒) | ≡ | ピクルス |
| 野菜 | × | お持ち帰り | ≡ | レトルトカレー |

13

13

6. 具体案

・商品化のコーディネーター



14

14

6. 具体案

・リゾート（観光）と農業の連携

リゾートホテルシェフ・パティシエ監修
リゾート不動産の外国人スタッフ監修



リゾートホテル・コンドミニアムオーナーへの宣伝
リゾートホテル監修によるブランド力強化

商品開発を通じて
訪日リゾート・道内客(観光)と農業の域内交流

15

15

その先のニセコ町へ

魅力あるリゾート・観光だけでなく
「魅力ある農業」と観光との連携を通じて
農業を担う新しい移住・定住を促進し
持続可能な「ニセコ町」の未来に繋げる

16

観光客への 持続可能な観光に対する意識づけ に関する提案

C班
伊蘭・王鷺庭・永岡朋子・川崎孝利

1

ニセコにとって
「持続可能」とは

ニセコというまちが、 暮らす人にとって、 まちとして持続すること

まちが持続しなければ、観光も持続しない

2

持続可能な観光 とは



前文

グローバル・サステナブル・ツーリズム協議会（GSTC）の基準は、持続可能な観光についての共通理解を提供するために設定されました。GSTC 地域基準（GSTC-D）は、観光に関わるすべての地域が目指す必須の基準で、持続可能なマネジメント、社会経済的影響、文化的影響、環境への影響の主要 4 分野からなり、観光部門全体に適用することが可能です。

GSTC 基準は、「国際社会環境認定表示連合（ISEAL Alliance）の基準設定に関する規定」を遵守し、開発・改訂されています。ISEAL Alliance は、すべての産業部門で持続可能性の基準を設定するための国際規範について指導を行う団体です。2019年に改訂された GSTC-D 最新版は、2回にわたるステークホルダーからの意見聴取に基づいて作成しています。基準の開発プロセスや今後の改訂計画については、ウェブサイトを参照してください（www.gstccouncil.org、英語）。

3

持続可能な観光 とは

基準の構造

4つのセクションからなり、それぞれ2つまたは3つのサブセクションがあります。
合計38の大項目、174の小項目が設定

A. 持続可能なマネジメント

マネジメントの組織と枠組み
ステークホルダーの参画
負荷と変化の管理



←二セコ町のポイント！

B. 社会経済のサステナビリティ

地域経済への貢献
社会福祉と負荷

C. 文化的サステナビリティ

文化遺産の保護
文化的場所への訪問

D. 環境のサステナビリティ

自然遺産の保全
資源のマネジメント
廃棄物と排出量の管理

4

持続可能な観光とは

1 持続可能な観光とは？

「訪問客、業界、環境および訪問客を受け入れるコミュニティのニーズに対応しつつ、現在および将来の経済、社会、環境への影響を十分に考慮する観光」(UNWTO 国連世界観光機関による定義)

簡単に説明すると

- 1 環境的に優しい**
自然遺産や生物多様性の保全を図りつつ、観光開発において鍵となる環境資源を最適な形で活用する
- 2 経済成長ができる**
観光によってその地域で、安定した雇用、収入を得ることができるように、そして貧困緩和に貢献する
- 3 社会文化的に好ましい**
地域の伝統的な価値観を守り、異文化理解や異文化に対して寛容になる

T O P I C

**「持続可能な観光地」として
日本のトップランナーになりつつあるニセコ町**

ニセコ町は、今までの施策（景観、環境、水資源、ごみリサイクルなど）の実績が認められてSDGs未来都市に認定されています。主要産業は農業と観光業。農業が町の環境や景観を守り、観光業でその恩恵を受けますが、観光業は地元の産物を活用することで農業にお返しする。この主要産業がうまく連携することで地元の経済を循環させることが可能となります。町の環境や景観を守ることは、この町に住む人を気持ちよくするだけでなく、訪れた人の心も豊かにするのです。

Sustainable Top 100 Destinations に選ばれました！

ニセコ町は、2020年10月に「Sustainable Top 100 Destinations（持続可能な観光地「トップ100」）」に選ばれました。これは、オランダの非営利団体「GREEN DESTINATIONS」が、より良い観光地づくりに努力している地域を毎年選出しているものです。国際的にも、ニセコ町が「持続可能な観光地」であることの認知度が高まっています。




<https://www.town.niseko.lg.jp/information/3097>

出典:観光庁「ニセコ町持続可能な観光に関する調査レポート」

5

持続可能な観光とは

現在及び未来の世帯にとって、
環境的・経済的・社会的に暮らしやすい
地域を作るための観光まちづくり

**というニセコであることについて、
訪れる旅行者に理解を得る必要有り**

6

検証①

「情報共有」
「住民参加」
の実態は？

ニセコ町「住民自治のまち」

- ・ニセコ町づくり基本条例の制定（全国初）
- ・「まちづくり町民講座」の実施（200回超）

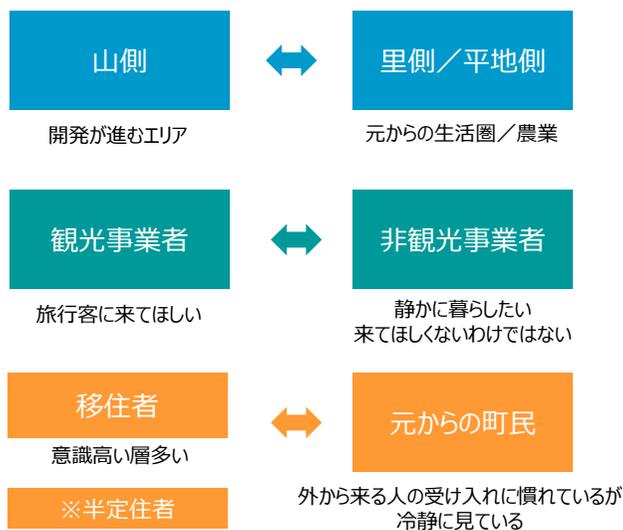
- ▶住民自ら考え、行動するという土壌の確立
- ▶町民は情報は公開されている認識
- ▶行政と住民が話し合う機会は頻繁
- ▶第5次ニセコ町総合計画 町民アンケート
回収率39.3%（回答590件／配布1500件）
※平均25%

ただし、「住民参加」の機会に参加する層は固定化しているとの声もある

7

検証②

地域内での
意識のギャップは
あるのか？



8

検証③

スゴイニセコは
観光客に
伝わっているか？

| | |
|-----------------------------|----------------------------------|
| 2014 環境モデル都市 | 2014 ニセコルール確立 |
| 2015 ブラチナシティ認定 | 2015 ニセコビュープラザが 「重点道の駅」に選定 |
| 2018 SDGs未来都市に認定 | 2018 世界首長誓約に誓約 |
| 2021 COP26 グラスゴー宣言に署名 | |

→伝わっていないのでは？

▶ 観光客に知ってもらおう努力を
※そもそもニセコは、実はクチコミで魅力が伝わっているエリア

9

検証④

現在展開している
「持続可能」
観光コンテンツは？

アドベンチャートラベル

- ・ターゲット：インバウンド層（欧米豪）
- ・羊蹄山麓をニセコエリアでPR



教育旅行

- ・ターゲット：教育旅行
修学旅行、宿泊研修時の
教育プログラムを提供
- ・SDGs未来都市



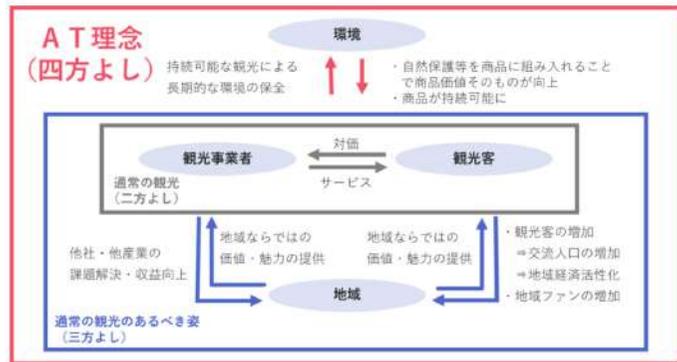
10

検証④

現在展開している
「持続可能」
観光コンテンツは？

「アドベンチャートラベル」

- ・「自然とのふれあい」「文化交流」「アクティビティ」のうちふたつ以上の要素を持つ旅行
- ・旅行を通じ、自分自身の変化や地域社会への貢献が期待



ホームページ：北海道運輸局「アドベンチャートラベル」より

11

ヒアリング結果から
浮かびあがる
課題や問題意識

地域のアイデンティティー
歴史文化の掘り下げが足りない

利用客数に合ったインフラ・
人員配置が出来ていない

季節で客層の変化
・夏の誘客

二次交通の脆弱さ

山側の賑わい（＝稼ぎ）は、
市街地に還元されているか？

車で移動しないといけないが
CO2削減は？

住民、事業者、観光客の
相互理解

“ニセコドリーム”層と
ニセコを愛する人々とのギャップ

オーバーツーリズムを
抑制するためのルール必要

事業者からのSDGs
取り組みの発信

資源は限りあるものという理解の促進
（雪、温泉）

12

提案

“持続可能”
を観光客に
意識づけるために

ニセコ町で 今までの100年と これからの100年を考える サイクリングコース

13

提案

“持続可能”
を観光客に
意識づけるために

▼目的

ニセコ町がもっている地域としての精神性や
現在の取り組みを、観光客に知ってもらう
(観光客に歩み寄ってもらう)

▼ターゲット

国内客
グリーンシーズン

▼手段

サイクリング (※またはフットパス)
・エコ対応
・2次交通問題への対応

14

自転車
アクティビティに
関する課題

- ①ニセコ町に、レンタルの店が少ない
※観光案内所は5台用意
- ②SDGsをテーマにしたコースがない
- ③サイクリングを支えるインフラは不十分
 - ・道標の設置が不十分
 - ・サイトに自転車用施設がない
 - ・自転車ショップの自転車保有数が不十分
 - ・羊蹄山東側で自転車ショップがない



15

既存アクティビティ

MTBコース

オフロード・サイクリストのための完成度の高いルート

- ・比較的高価
- ・SDGsのコンテンツがない

● 1日ツアー
MTB+リバーカヤック1日ツアー
ツアー開始時間①10:00~
料金 おひとり様¥15750
ツアー所要時間 6時間
最低催行人数

● MTBレンタル
1名30分 ¥1000~

● 下りメイン10kmツアー
ツアー開始時間
①10:00
②11:30
③13:00
④14:30
⑤16:00
出発時間 1日5回

料金
おひとり ¥5000
おふたり ¥8000
3名以上 1名あたり¥3500
最大7名まで対応



photo / SNOW E!

16

SDGsを
テーマにした
コースの考案

今までの100年とこれからの100年を考えるサイクリング

● 文化コース
● 自然コース

*事前宣伝・ガイド付き（SDGsに関する説明）・エコ活動連携（トレイル巡り）により、参加者の意識変化を求める

17

各スポットの
GSTC基準と
SDGs

▼自然コース

| | GSTC基準 | SDGs |
|-----------------|----------------------------------|------|
| 1 羊蹄山眺望 | D1 配慮が必要な自然環境の保護 A10 気候変動への適応 | |
| 2 ダジョウ牧場 | D1 配慮が必要な自然環境の保護 D4 種の搾取と動物福祉 | |
| 3 羊蹄の湧き水 | D7 水質 | |
| 4 ふきだし公園 | D1 配慮が必要な自然環境の保護 D3 野生生物との関わり | |

18

各スポットの
GSTC基準と
SDGs

▼自然コース
「ダチョウ牧場」

- D1 配慮が必要な自然環境の保護
- D4 種の搾取と動物福祉



19

各スポットの
GSTC基準と
SDGs

▼文化コース

| | GSTC基準 | SDGs |
|------------|--|---|
| 1 有島記念館 | C1 文化遺産の保護 C2 工芸品 C3 無形遺産 | 12 持続可能な消費と生産 11 持続可能な都市とコミュニティ |
| 2 町民センター | A(a) マネジメントの組織と枠組み A5 住民参加とフィールドワーク | 16 平和と公正な司法制度 11 持続可能な都市とコミュニティ 17 パートナーシップによる目標の達成 |
| 3 ミルク工房 | B3 地域事業者の支援と公正な取引 C3 無形遺産 | 12 持続可能な消費と生産 11 持続可能な都市とコミュニティ 8 経済成長と雇用 |
| 4 ストーンサークル | C1 文化遺産の保護 | 11 持続可能な都市とコミュニティ |
| 5 レルヒ記念公園 | C1 文化遺産の保護 | 11 持続可能な都市とコミュニティ |

20

各スポットの
GSTC基準と
SDGs

▼文化コース
「町民センター」

A(a) マネジメントの組織と枠組み
A5 住民参加とフィールドワーク



21

住民と観光客が
交流できる
イベント

ゼロカーボンで楽しむニセコ探検

地域住民と観光客がともに参加できるサイクリングイベントの開催

- ▶ニセコ町の“持続可能”スポットめぐり
ニセコ町の取り組みを知ってもらう
 - ▶地域住民にニセコを語ってもらう（相互交流）
道中で世間話感覚での交流を通じ、参加する観光客への啓蒙
- ★他地域のサイクリングイベント、フットパスなどと連携できれば、ニセコの取り組み拡散も期待できる

22

住民と観光客が
交流できる
イベント

ゼロカーボンで楽しむニセコ探検

● スポットイメージ



・有島記念館
(相互扶助)



・ニセコ町役場
(断熱建物)



・ニセコ町民センター
(太陽光発電)



・アンヌプリスキー場 (地熱利用)



・廃熱による暖房や除雪エネルギー

23

“持続可能”
を観光客に
意識づけるために

タビマエ

タビナカ

タビアト

現在

未来

現地ニセコでの
プログラムで
“持続可能”を
紹介する

クチコミ拡散

ニセコに行くには
“責任ある旅行者”
の立場で

24

ご清聴ありがとうございました

ヒアリングにご対応いただきました皆さま
ご協力ありがとうございました

新たな祭りの創出と地域への定着

——実行委員会から見た祭りの 10 年 課題と展望——

山下 新一郎

湯涌ぼんぼり祭り実行委員会 委員長

山村 高淑

北海道大学観光学高等研究センター 教授

1. 開催趣旨

山村: 司会を務めます北海道大学観光学高等研究センターの山村高淑と申します。どうぞ宜しくお願い申し上げます。今回は「新たな祭りの創出と地域への定着——実行委員会から見た祭りの 10 年 課題と展望——」と題しまして、講師には、金沢市湯涌温泉で、湯涌ぼんぼり祭り実行委員会の委員長を務めていらっしゃいます山下新一郎様にお越しいただきました。山下様、本日は何卒宜しくお願い申し上げます。なお、本日のフォーラムは、北海道大学観光学高等研究センターと一般社団法人地域発新力研究支援センター (PARUS) 様との共催でお送りいたします。PARUS 様と私共のセンターとは、2015 年に包括連携協定を提携させて頂きまして、その後、コンテンツツーリズム分野の共同研究・共同事業を推進しております。この場をお借りいたしまして、開催に当たり多大なるお力添えを頂きました PARUS 様に心から御礼申し上げます。

さて、本日のタイトルにある〈湯涌ぼんぼり祭り〉は、『花咲くいろは』というアニメーション作品がきっかけとなって、2011 年に金沢市湯涌温泉で創出されたお祭りです。2011 年以降、毎年開催されるようになり、地域の祭りとして定着、コンテンツツーリズムの成功事例として全国から注目を集めてきました。コンテンツツーリズム界では知らない人のいない事例と言っても過言ではありません。さらに今年 (2021) 年 8 月には、祭りの 10 周年を記念するとともに、コロナ禍での 2 年間の休止を乗り越え、来年からの再開を祈ることを目的に、地元実行委員会・製作委員会・ファン・研究者が協力する形で、書籍『湯涌ぼんぼり祭り 2011-2021～アニメ「花咲くいろは」と歩んだ 10 年～』が出版されました¹。

今回のフォーラムでは、第 1 回目から祭りの実行委員長を務めてこられた山下新一郎様

¹ 書籍『湯涌ぼんぼり祭り 2011-2021～アニメ「花咲くいろは」と歩んだ 10 年～』については、以下の公式サイトを参照されたい。<https://parubooks.jp/books/bonbori10th/>

をお招きし、祭りの10年の歴史を整理して頂くとともに、ご尽力なされた点、ご苦労された点、地域社会が抱える課題と今後の展望等についてお話しを伺います。その中で、大きく三つの点について、学ぶことができると考えております。第一に、〈温泉街・地域社会と権利者との関係性の構築と維持〉について。第二に、〈ファン・旅行者の皆さんとの良好な関係性の構築と維持〉について。そして第三に、〈地域が抱える課題と、アニメツーリズム／コンテンツツーリズムが持つ可能性や課題〉について、です。

さて、山下様のお話をお伺いする間に、少々お時間を頂戴いたしまして、アニメーション作品『花咲くいろは』と〈湯涌ぼんぼり祭り〉について、簡単にご紹介を致します。『花咲くいろは』は、2011年4月から9月にかけてTV放送されたオリジナルアニメーション作品(マンガや小説などの原作を持たず、当初よりアニメーション作品として企画・制作された作品の意)です。ストーリーを簡単に申し上げますと、東京で暮らしていたが、わけあって祖母が経営する温泉旅館(湯乃鷲温泉・喜翠荘)で仲居をしながら暮らすことになった主人公の高校生・松前緒花を中心に、登場人物たちの奮闘と成長を描く物語、となるでしょうか。そして、この作品の舞台である架空の温泉街(湯乃鷲温泉)のモデル(いわゆる舞台モデル)となったのが〈湯涌温泉)なのです。このような縁があり、湯涌温泉では、アニメ作中で描かれた架空の祭り「ぼんぼり祭り」を2011年10月に湯涌温泉で実際に開催することとなります。その後、同祭りは第9回まで継続致しますが、2020年、2021年と、コロナ禍に伴い開催できない状況が続きました。

また、冒頭で湯涌ぼんぼり祭りをコンテンツツーリズムの成功事例と申し上げました。その理由を私なりに整理したものが図1になります。コンテンツツーリズムの継続的な展開において最も重要なキーポイントのひとつが、地域側と権利者(著作権者)とファンとの良好な関係性の構築と維持です。そして、その際重要になるのが、権利者と地域との複雑な手続きをどのような人材あるいは組織が〈調整役〉として担うのか、という点になります。湯涌ぼんぼり祭りの場合は、この〈調整役〉を〈ぼんぼり祭り実行委員会〉が担われています。そしてこの委員会は設立時から、地域の皆さんと権利者(アニメ制作委員会)の双方からメンバーが参画しています。この立ち上げ時からの双方の参画という点が、非常にきめの細かな、丁寧な祭りの実行を実現している大きな背景になっていると私は感じています。さらには、作品ファンの有志によって〈湯涌サポーターズ〉という地域活動をサポートするチームも結成されていて、ファンの皆さんの声も地域に反映される形になっています。他の類似事例を見ても、このように関係者間が良好につながり続ける仕組みを構築した例はなかなか見当たりません。まさにこのあたりに、祭りの開始から10周年を迎え、単なるイベントではなく、地域の祭りとして定着していった秘訣があるように感じております。

前置きが長くなってしまいましたが、是非、このあたりのことを中心に、山下様から多くのことを学ばせて頂ければと存じます。それでは山下様、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

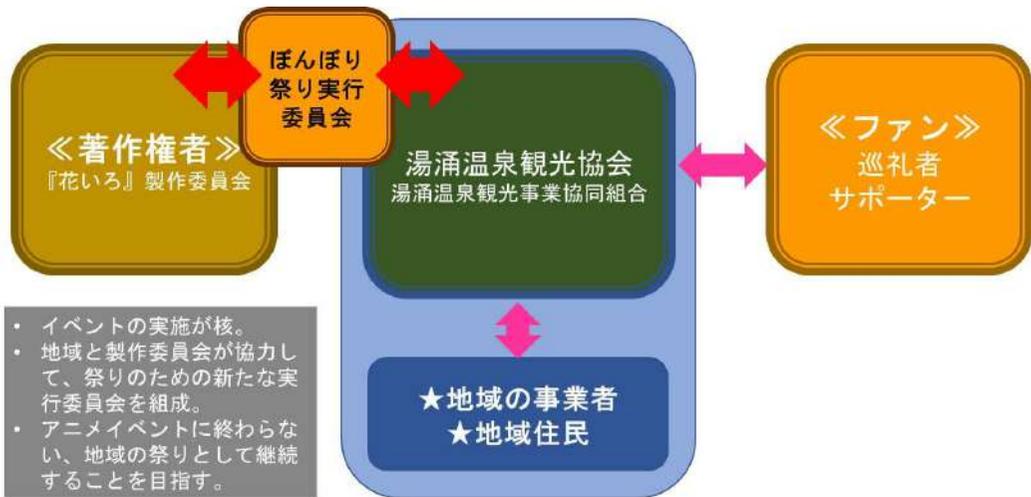


図1 〈湯涌モデル〉——〈湯涌ぼんぼり祭り〉実施体制モデル

2. 湯涌温泉とアニメ『花咲くいろは』について

山下:皆様本日はどうぞ宜しくお願い申し上げます。金沢市にごございます湯涌温泉から参りました、湯涌ぼんぼり祭り実行委員会の委員長、山下新一郎でございます。早速、お話しを始めさせていただきます。

さて、まずは湯涌温泉についてです。ご存知ない方もいらっしゃるかと思いますのでご説明させていただきます。湯涌温泉は、石川県金沢市にある小さな温泉街ですが、歴史は古く、718年にお湯に浸かって傷を癒している一羽の鷲を農夫が発見したというのがいわれとなっております。それ以降、加賀前田藩の隠し湯でもございましたし、大正時代時には大正浪漫の旗手・竹久夢二が最愛の人・彦乃と人生最良の二週間を過ごしたということで、今は湯涌温泉に夢二の記念館もございます。現在は9軒の旅館が営業しており、年間6万人程度のご宿泊を頂いております。各旅館は小さいながらも、お料理ですとかおもてなしですとか、そういう〈人〉の部分で非常に高い評価を得ておりまして、ミシュランガイド等でも紹介されております。

先程山村先生からもお話しがありましたアニメーション作品『花咲くいろは』ですが、こちらを制作されたのは、湯涌温泉のお隣、富山県南砺市にありますP.A.WORKSという制作会社さんです。ストーリー等は先ほどの山村先生の説明にあった通りなので割愛させていただきます。こちらの作品は、2011年のテレビ放送後、2013年には劇場版が公開

され、2019年には電子書籍で続編が発表されるといったように、高い人気を誇っておりま
す。国内のみならず海外でも非常に高い人気ということで、舞台モデルとなりました私ども
からすると非常に嬉しい限りです。私どもが湯涌温泉にいて肌で感じますのは、「多くの海
外のお客様もこの作品をご覧になっているんだなあ」という点です。実際に中国の動画視聴
サイト bilibili では同作品に 9.6 点という非常に高い点数が付いておりまして、あの有名な
『鬼滅の刃』等よりも評価が高いという状況でした。

こちらは湯涌温泉の外国人宿泊者数の推移(表 1)です。新型コロナウイルス蔓延以降は、
さすがに外国からのお客様はいらっしゃらないわけですが、作品が始まる前の 2008
年——この 2008 年というのが後ほどキーワードになってくるかと思うのですが——には
年間 60 人しか外国人観光客がいらっしゃいませんでした。そもそも湯涌温泉は、地元客の
割合が非常に高い温泉街だったんです。2008 年の数字を見ますと、67%が地元のお客様で、
県外の方は非常に少なかったことがわかります。ところがそれ以降、2011 年に『花咲くい
ろは』がオンエアされ、2015 年には北陸新幹線が開業しまして、そういう流れの中で徐々
に数字も変化していきました。海外からのお客様も 90 人だったのが、2018 年には 840 人
まで伸びました。このように海外からのお客様の伸び率が高かった中でコロナ禍となっ
てしまいました。温泉街としましては今、非常にもどかしい時期を過ごしております。

表 1 湯涌温泉における外国人宿泊者数の推移 (2008-2018 年)

| | 2008 | 2009 | 2010 | 2011 | 2012 | 2013 | 2014 | 2015 | 2016 | 2017 | 2018 |
|-------------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 全体客数 (人) | 59,988 | 55,387 | 50,342 | 53,512 | 51,566 | 49,018 | 51,445 | 65,397 | 59,942 | 60,125 | 64,204 |
| 石川県内客 (人) | 40,262 | 36,092 | 30,372 | 28,969 | 28,123 | 23,920 | 23,306 | 21,889 | 18,365 | 15,945 | 14,013 |
| 県内客割合 (%) | 67 | 65 | 60 | 54 | 54 | 49 | 45 | 33 | 31 | 27 | 22 |
| 外国人宿泊客数 (人) | 90 | 120 | 118 | 127 | 190 | 350 | 403 | 749 | 585 | 697 | 840 |
| 外国人客割合 (%) | 0.15 | 0.20 | 0.23 | 0.24 | 0.37 | 0.70 | 0.78 | 1.10 | 0.97 | 1.15 | 1.30 |

※2008 年 7 月 浅野川水害

※2011 年 4 月 花咲くいろは OA

※2013 年 3 月 花咲くいろは劇場版 全国公開

※2015 年 3 月 北陸新幹線開業

※2017 年 8 月 県道 10 号線 崩落

3. 〈湯涌ぼんぼり祭り〉開催までの経緯

アニメの舞台モデルになった経緯とそのインパクト

アニメーションの舞台モデルになった経緯についてお話致します。これは 2009 年の後半
のことになります。湯涌温泉観光協会のほうに『花咲くいろは』の製作委員会、P.A.WORKS
様からお話がありまして、お話を私がお伺い致しました。「湯涌温泉をモデルにアニメー
ションを作りたい」というお話でした。その時は、何と言いましょか、信用して良い話なの
か——本当に田舎者なので非常に猜疑心も強くて——話を飲み込めずにおりました。そん

なわけで当初は、製作委員会の皆様には非常にご迷惑をおかけしたと思います。先ほども申し上げましたとおり、湯涌温泉は、地元客が多くて観光客が少ない中で、昔ながらの商売をずっと続けて来た、どちらかというと保守的な町です。そうした町に、アニメーションという、いわばとんでもない話が突然降って湧いたわけです。なかなか地元側では話がまとまらなかったことを覚えています。

お話を頂いた2009年というのは、その前年2008年7月に、湯涌温泉を大きな水害（浅野川水害）が襲いまして、温泉街としても非常に大きなダメージを受けていた時期でした。さらに、その後の2011年の東日本大震災で、日本中が自粛ムードに包まれてまして、温泉街として苦しい状況下に置かれることになりました。当時を、そういう時系列で押さえておいて頂ければと思います。

さて、こちらが実際の湯涌温泉街の風景と、作中に出てきました湯乃鷺（ゆのさぎ）温泉街です。スタッフの皆さんが取材を重ねられ、非常に細部まで丁寧に描かれておりまして、私どももオンエアされたものを見て、ちょっと驚いた覚えがございます。こちらも温泉街の入り口にある看板ですけれども、当初「アニメーションではなく実写なんじゃない？」という話が出たくらい精密に描かれております。

実際にアニメーションの舞台モデルになるまでに、スムーズに話が進んだわけではございません。そもそも「アニメーションの舞台モデルに」という話自体、機密性が高いお話でしたので、観光協会の中でも私を含めた一部の役員のみでまずは情報を共有して協議を重ねておりました。湯涌温泉街のお客様に占める地元の方の割合が6〜7割という中で、アニメーション作品の視聴者層と温泉街の客層とのギャップが大きいのではないかと、当初はやはり否定的な意見も多かったです。そうした意見の背景には、やはりアニメーションのファン、俗にいうオタクという方々に対する偏見等が多くあったと感じています。

実際に舞台モデルになり、オンエアがされますと、ある日突然、具体的にはオンエア後のゴールデンウィークになるのですが、大勢のファンの方が湯涌温泉に押し寄せまして、突然歩行者天国のような状態で、温泉街の中を車が行き来できないような状態になったんですね。私どもも、まさかこんな騒ぎになるとは、ということで非常に驚きましたし、先ほど申し上げましたように、舞台モデルになったことは地元でも一部の人間しか知らない話ですので、当時、商店を運営されていた方たちも、「突然若いお兄ちゃんたちがお店に押し寄せてきて……一体何があったの？」みたいな感じで、ちょっとしたパニック状態に温泉街が陥りました。アニメーションの持つ力というのを非常に強く感じたエピソードです。

また、そうしていらっしやった大勢のファンの皆様のマナーが非常に良かったという点も、当初の私たちの想定とは違った点でした。特にこの点は、その後の取り組みの大きな追い風となったと思います。

湯涌温泉は、従来は常連のお客様に支えられていたわけですが、常連のお客様というのは温泉街の中を歩かれません。一方でファンの方は温泉街の中を非常によく散策される。ファンの方が温泉街を散策されるようになったことで、私たちは、町が生き返ったよう

な、そんな印象を受けました。

開催準備

さて、先ほども述べましたように、アニメーション作品の舞台モデルにという話を頂いてから、私どもがなかなか「うん」と言わないものですから、製作委員会の方が何度も足しげく湯涌温泉に通っていただくかたちになっておりました。〈ぼんぼり祭り〉というのは、そうした話し合いの中で出てきたキーワードでした。小さな女の子の神様が神無月に出雲に帰る際に道に迷わないよう人々が〈ぼんぼり〉の明かりで道を照らす。神様はそのお礼に、人々が〈のぞみ〉を書いた札を出雲に届けて願いを叶える、というのが作品の中で描かれる〈ぼんぼり祭り〉のストーリーなんです。なるほど素敵なストーリーだと思ひまして。これを湯涌温泉でやってみたいということ、オンエア直後なんですけれども、私どものほうから製作委員会に打診をいたしました。

先程も申し上げましたように、湯涌温泉は2008年に浅野川水害という非常に大きな水害に見舞われておりましたので、それから3周年、お陰様で立ち直りました、というところを当時復興にご協力いただいた皆様に見ていただく意味合いでも、〈ぼんぼり祭り〉を開催したいという思いがありました。こちらは浅野川水害の時の写真です（図2、図3）。

奥が上流になるんですけども、上流のほうから車が流れてきています。私どもも初めて見る光景で現実とは思えませんでした。実際、旅館の中にお客様が取り残されてしまい、半日以上ずっと旅館の中に閉じ込められるという状況が続いておりました。今この写真を見ましても、当時を思い出して寒気が致します。

いずれに致しましても、当時、「ぼんぼり祭りをやりたい」と言っただけは良いが、実際には準備期間も半年しかないわけで、「さあどうするんだ」ということで大慌てになったことを覚えております。また、当時は、アニメファンに対する偏見も、地域の側に根強く残っていた時期で、実施に向けて不安があったことは確かです。

図4は、湯涌ぼんぼり祭り開催までの経緯を時系列でまとめたものです。まず、湯涌温泉から製作委員会に「湯涌温泉ぼんぼり祭りをやってみたい」と言いましたのが2011年4月でございます。それと時を同じくしまして、湯涌稲荷神社の宮司様に「こういったお祭りをやってみたいんですけど」ということでご相談をいたしました。宮司様からも「非常に面白い試みなので湯涌温泉のためでしたら、ぜひ協力させていただきます」ということでご快諾を頂きました。金沢市行政にも打診をしたのですが、当初は取り付く島もなくすぐ帰って参りました。その後、何とか地元で力を合わせて祭りを実現するんだということで、湯涌ぼんぼり祭り実行委員会を立ち上げたのが2011年5月です。それ以降は、週2~3回のペースでP.A.WORKS様と打ち合わせを重ねました。私どもは変則的な商売というか当時私自身も旅館をやっておりましたので——しかも厨房で料理をやっていました——なかなか先方様と時間も合わず、それこそ夜遅い時間に私共が先方にお邪魔することもあれば、先方からこちらにご足労いただくこともあり、P.A.WORKS様には本当にご迷惑をおかけいた



図2 浅野川水害 (1)



図3 浅野川水害 (2)

しました。

実際にぼんぼり祭りをやると言ったのは良いのですが、そもそもどんな規模でやるかを考えなければなりません。そこで、まず点灯式という形で、本祭の前にあらかじめ皆様の反応を伺ってみようということになりました。こうして 2011 年 7 月に点灯式を開催致しました。十分な告知はしなかったのですが、それでも当日 500 人以上の方が湯涌にいらっしやって点灯式をご覧になりました。それを受けたタイミングで、この調子で本祭は目標 3 千人が妥当であろうと決定いたしました。

開催決定から開催まで実際に半年間という短い期間でしたので、本祭の全体構成が最終的にフィックスできたのは 10 月 7 日、実際の本祭開催日は 10 月 9 日でしたので、本当にギリギリ、綱渡りの状況でした。なお、そのタイミングでも「温泉街の雰囲気こそぐわない」という意見は多数寄せられてはおりました。

3～湯涌ぼんぼり祭り～

開催準備

- ▶ 湯涌温泉から製作委員会に「湯涌ぼんぼり祭り」の打診 2011年4月
- ▶ 作中の「ぼんぼり祭り」は神無月 2011年10月
- ▶ 行政に打診 → 取り付く島もなし 2011年4月
- ▶ 湯涌ぼんぼり祭り実行委員会発足 2011年5月
- ▶ 以降、週2～3回ペースでP.A.WORKS様と打ち合わせ
- ▶ ファンの方の反応が見たい事も有り、点灯式を開催 2011年7月
- ▶ 点灯式に500人以上の来場があった為、本祭の目標を3,000人に
- ▶ 全体構成が最終的に決定したのは10月7日（本祭は10月9日）
- ▶ 湯涌温泉街の雰囲気こそぐわないと反対意見多数

図4 湯涌ぼんぼり祭り開催までの経緯

アニメファンの特徴と地域側の意識の変化

私も事業者も含め地域住民の方々の意識の変化について触れたいとおもいます。アニメのオンエア前に、私たちがアニメファンに対して抱いていたイメージは——やはりニュース報道等で何か事件があって容疑者はアニメファンでしたといった感じの、ちょっと偏った報道を目にすることが多かったものですから——「気持ち悪い」「怖い」「引きこもっていそう」「ニートみたい」というものでした。ただ、実際にオンエアされ、ファンの方が湯涌温泉に足を運んで下さり、地域住民の方々と触れ合う機会が増えるとともに、私たち地域側の認識も変化していきました。いらっしやるファンの皆さんは非常に礼儀正しくて、マナ

ーが良くて、お話し好きな方が多い。総じて皆さんいい人だよ、ということで、アニメファンの方々に対する認識が大きく変わったのです。この認識の変化は、湯涌ぼんぼり祭りを開催するうえでは大きな推進力になりました。

実際に湯涌にいらっしゃるアニメファンの方々のエピソードをいくつかお話し致します。湯涌ぼんぼり祭りの開催前に、ファンの方同士が SNS 等で呼びかけを行い、自主的に湯涌稲荷神社や温泉街の清掃をされていたんですね。また、湯涌ぼんぼり祭り第 1 回開催当日、5 千人以上の方が湯涌にいらっしゃったのですが、タバコの吸い殻も空き缶も一つも落ちていないんです。皆さん自主的にゴミを集められて、それこそ落ちていたゴミも拾って集積所に持って行って頂いたりしていたのです。こうしたことには、私どもも本当にびっくりいたしました。それに、ファンの方々は、本当に、心から楽しそうに温泉街を散策されているんですね。そうした姿を見た地域住民の方々から、非常に心が温まるといった感想も頂きました。ぼんぼり祭りの時は多くの行列ができるのですが、そんな時も誰一人文句も言わず、係員の指示に従ってくれます。こうしたファンの皆さんのマナーの良さは、私も強く印象に残っています。

ファンの皆さんの年齢層は、今までの湯涌温泉街ではありえないくらい若い方が多い。そうした若い皆さんが、旅館のサービスに対して非常に感動して下さった。そうした姿は、旅館を経営している側、旅館で働いている側にも非常に新鮮に映りました。中には高校生で、一生懸命アルバイトをしてお金を貯めて、湯涌に来て宿泊をしてくださる方もいらっしゃいました。そうした高校生の姿に感動し、サービス業としての初心を取り戻した、というように話も旅館の方々から多く聞かれました。

これがまたこの事例に特徴的な出来事なのですが、『花咲くいろは』をご覧になって、湯涌温泉の旅館で働きたいという方が現れました。実際、私がやっていた旅館でも、たぶん 10 人以上いらっしゃったと思います。長く続いた方もいらっしゃいますし、合わなかった方もいるので、そこは作中じゃないリアルな温泉旅館ということでいろいろあったのだろうと思いますが……。

4. 祭りの構成

〈湯涌ぼんぼり祭り〉の構成をまとめたものが図 5 です。構成と致しましては、まず、点灯式がまずございます。こちらは大体 7 月の下旬に行っておりまして、全国の皆様から協賛いただいた〈ぼんぼり〉を、この日から湯涌温泉街に灯します。言わば、湯涌ぼんぼり祭りのキックオフ的な祭事です。

その後、10 月（神無月）に湯涌稲荷神社の神様を出雲にお送りする一連の祭事を執り行います。まず〈神迎え行列〉からスタート致します。その後、〈神迎え式〉、〈神送り行列〉

(お迎えした神様をお送りする神送り行列)と続きます。そして、その神様を送り出す〈神送り式〉と〈お焚き上げ〉、という流れになっています。〈神迎え行列〉が大体20時スタートで、〈お焚き上げ〉が21時20分頃ですので、全体で一時間半くらいの時間で、湯涌温泉街に大変マッチしたお祭りになったのではないかと自負しております。

こちらは点灯式の様子です。こちらの背景に写っておりますのは、全国の皆様からご協賛いただいた〈ぼんぼり〉で、この日以降、湯涌温泉街を夏の間照らしてくれることになるわけです。こちらは本祭の模様です。温泉街自体が非常に狭いので、人口密度が高くなってしまっているのですが、何とか行列が通れる程度のスペースを皆様協力して空けて下さるので、今のところ、ここでトラブルが起こったことはございません。その後に〈神迎え式〉ということで、湯涌温泉街にある湯涌稲荷神社に神様をお迎えにあがりまして、宮司様に祝詞をあげていただきます。そして、お迎えした神様を今度はお焚き上げが行われます玉泉湖という、湯涌温泉の奥にごございます湖に行列をなしてお連れします。玉泉湖に到着致しますと、〈神送り式〉です。まず宮司様から祝詞をあげていただきまして、その後に神様——赤い着物を着ている女の子が神様なのですが——が灯す火で、皆様が〈のぞみ〉を書いた望札をお焚き上げするという、こういう流れになっております。

3～湯涌ぼんぼり祭り～

お祭りの構成

<点灯式>

- ・7月下旬に皆様にご協賛いただいた「ぼんぼり」を灯す、湯涌ぼんぼり祭りのキックオフ的な祭事。

<本祭>

- ・10月(神無月)に湯涌稲荷神社の神様を出雲にお送りする祭事

・以下の構成

- ▶ (1) 神迎え行列：お祭りのスタート。神様を稲荷神社までお迎えにあがる行列
- ▶ (2) 神迎え式：稲荷神社で神様をお迎えする儀。宮司様の祝詞を上げていただく
- ▶ (3) 神送り行列：稲荷神社でお迎えした神様をお焚き上げを行う玉泉湖までお送りする行列
- ▶ (4) 神送り式：玉泉湖畔浮島にて祝詞を上げ、神様を出雲までお送りする儀
- ▶ (5) お焚き上げ：稲荷神社に奉納又は行列の道中でお預かりした人々の「願い」がしたためられた「のぞみ札」をお焚き上げ、大願成就を祈念する

図5 〈湯涌ぼんぼり祭り〉の構成

5. これまでの取組を振り返って

開催費用の捻出

この湯涌ぼんぼり祭りですけれども、いまだに苦労していることは多々あります。最初の年などは、そもそも予定をしていなかった祭事ですので、私ども観光協会としましては全く予算を組んでおりませんでした。行政からの補助金等も得られませんでしたし、そもそもどんなお祭りなのか未定の部分もあり、全体の構成も決まらない中で、まずは事業費が算出できなかつたんですね。最終的には、旅館、商店さんを含め観光協会会員が自己負担をしても構わない、という気持ちで、取引先の皆様に協賛をご依頼したり、運営費を捻出するために記念グッズを制作して販売したりすることで、何とか運営費が捻出できました。湯涌温泉では、これまで『花咲くいろは』というアニメーションを使って商売をしないでおきましょう、ということの一つのスローガンとして掲げてきました。ですから記念グッズも、商売ではなく、あくまでお祭りを開催するための資金の捻出という位置づけです。こういった方法の開催費用の捻出というのはありなのではないかと感じております。

その後、第2回、第3回と祭りが続いていくわけですが、製作委員会様に、湯涌ぼんぼり祭りのポスターを毎年描いて頂くようお願いしております。毎回毎回、本当に素晴らしいポスターを描き下ろして制作して頂いております。今年の10月には第10回のポスターをお披露目させて頂きました。描いていただいたポスターを基に、記念グッズを制作しまして販売しております。併せまして現在は行政からも助成金が付くようになりました。当初文化庁にも付けて頂いておりましたが、現在は金沢市から補助金を頂いております。

第2回ぼんぼり祭りの時から、湯涌ぼんぼり祭りに賛同してくださる皆様に協賛を募りまして、協賛して頂いた方のお名前の入った〈ぼんぼり〉を、湯涌温泉街に灯させていたいております。こうした協賛ぼんぼりは現在350基ございます。

あとは、当然大勢の方が湯涌ぼんぼり祭りにいらっしゃるので、そういった方々の胃袋を支える飲食ブースがございます。こうした飲食ブースの出店者の方々に、お祭りのクライマックスである〈お焚き上げ〉を観覧できる入場パスの抽選券を配布し、売り上げ保障としたうえで、出店料を徴収して開催しております。

一方、点灯式以降、北陸鉄道という地元のバス会社が記念乗車券を販売しております。この記念乗車券のロイヤリティも運営費に充てるという形をとらせて頂いております。また、地元の企業が制作・製造します記念グッズについても、ロイヤリティおよび委託販売を行いますので、そういった収入も開催費用として使用させて頂いております。

こちらは過去の記念グッズの一例ですけれども、アニメのキャラクターとともに金沢の観光名所が描かれたポスターや、金沢カレーの『花咲くいろは』バージョン、こういった商品も作っております。こちらが第9回湯涌ぼんぼり祭りの時のポスターになるのですが、告知用として使用する以外に、販売グッズとしてもポスターは活用しております。また参照

される皆様にもできればお持ち頂きたいという思いで開発しましたのは、手持ち用の小さな〈ぼんぼり〉です。こういった記念グッズを製作して運営費に充てられるというのは、私どもにとっては非常に大きなアドバンテージだなと感じています。

山間の小さな温泉街故に

湯涌ぼんぼり祭りを行っております湯涌温泉ですけれども、先ほどから何度も申し上げましたように、温泉街自体が非常に狭いんですね。それこそ端から端まで 400 メートル程度しかございません。よくある隣の路地とか、向こうの障子とかという感じのものは一切なく、本当にメインストリート 1 本しかない温泉街です。ですから、大勢の方をお迎えするために、近隣にある行政の施設〈金沢湯涌みどりの里〉を借り上げて、祭り当日は記念グッズの販売所、お客様用のレストスペース、飲食ブース等を設ける形で活用させて頂いています。

狭い温泉街でございますので、当日は一般の方の車は入れない形で、第 1 回の時から入場規制を厳しくかけさせて頂いています。とはいえ、車でいらっしゃる遠方の方も多いものですから、そういった方向けに、近く——と言いましても 10 キロ程度離れているのですが——、金沢大学の駐車場をお借りしまして、そちらに止めて頂いて、金沢大学と湯涌温泉間を北陸鉄道のシャトルバスでつないで頂いています。当日は温泉街自体、車が行き来する状況ではないものですから、周辺の道路につきましても一方通行に交通規制をかけさせて頂いている状況です。なお、湯涌温泉観光協会の会員の皆様の事業所や自宅もこうした規制区域に入ってしまうので、そうした皆様には車両の通行許可証を発行することで、一方通行にもご理解を頂いています。

この湯涌ぼんぼり祭りのハイライトである〈お焚き上げ〉が行われる玉泉湖というのは、大体 800 人程度しか入れない非常に狭い空間です。冒頭で申し上げました通り、当初設定した来場者の目標が 3 千人だったのですが、空間の容量上、この人数全てに〈お焚き上げ〉を見て頂くことができない。しかしお祭りでハイライトを見ることができないというのはあんまりではないだろうかということで、第 1 回の時から Ustream で〈お焚き上げ〉の様子を配信させて頂いております。

併せまして、温泉街からなるべく分散するよう配慮しつつ、近隣の学校を会場としてお借りしまして、『花咲くいろは』の製作委員会の皆様主催のトークショーですとか、ライブ、そしてサイン会等も行っております。このように、大きな会場が無い狭い温泉街ということで、湯涌温泉が有するあらゆる資源を駆使して祭りを実施しているのが実情です。

こちらは、みどりの里の夕食ブースですけれども、このような形で、テントで、大勢の方々の胃袋を満たすように鋭意努力しております。

こちらは記念グッズの販売店です。こちらにも非常に人気がございます、朝一番から並ばれる方、ともすれば前日から並んでいる方もいらっしゃいます。長い時は物販で 3 時間待ちぐらいになることもあるので、そこは今後の課題かと思っております。

こちらは物販ブース並びに飲食ブースですけれども、かつてコンビニエンスストアさん

ともタイアップ致しました。お互いのPRになるよう、ご協力を頂きました。

こちらが地元の北陸鉄道の臨時のシャトルバスです。行先表記が〈湯涌温泉〉ではなく、アニメの中での舞台地名〈湯之鷺温泉〉になっています（図 6）。ファンの皆さんのハートをくすぐる仕掛けをして頂いております。



図 6 金沢大学～湯涌温泉間シャトルバス

こちらが Ustream を配信するパブリックビューイングですけれども、皆様が一か所で携帯電話でご視聴になられると回線が持たないという問題もございまして、こういうパブリックビューイング会場を温泉街に数か所設けるようにしております。

当日は日中このような形で地元のアマチュア演奏家の方のライブイベント等も行なっております。祭り当日は湯涌温泉での滞留時間が非常に長くなるものですから、来場される方々を飽きさせない工夫をしております。

こちらが本祭の関係者挨拶のシーンです。壇上から見るとこのような形で、本当に人で埋め尽くされております。これは多分第 1 回の時の写真です。確かあと 1 名来賓の方がいらっしゃったのですが、早く会場に着きすぎたということで、「ちょっと温泉街をグルッと見てくるね」と言ったきり行方不明になってしまいましたため、予定より 1 名減という状況の写真になっています。それだけ大勢の方がこの狭い温泉街に押し寄せ、身動きが取れなくなってしまうんですね。こんなに大勢の人で温泉街での身動きが取れなくなるとは、私どもからすると本当に驚きでした。

人手が足りない

この湯涌ぼんぼり祭りの大きな問題は——これは第 1 回の時から変わらない問題なのですが——、やはり人手不足です。そもそも家族経営の小さな旅館、商店ばかりなものですから、皆さんはご自身の商売で手一杯なわけです。ましてや湯涌ぼんぼり祭りのタイミングで、当然旅館なんかもあつという間に満室になりますし、商店の方々も朝から晩まで働いても追いつかないような状況なわけです。ですので、当日イベントを行うにしても、イベント会場ですとか物販会場、そういった所へのスタッフの割り振りというのが非常に難しい。旅館は経営者自身が調理をしている——私もそうだったのですが——そういったメンバーも多いため、なかなか観光協会の方ですら、神事の行列への参加が難しい。神様を含め、行列には地元の子供たちにも参加してもらっているのですが——これが田舎の辛いところでございまして——児童の数が極端に少ない年もあったりして、〈小さな女の子の神様〉と言いながら 160 センチぐらいある……みたいなこともあったりします。この辺りの問題は、地域の方々と一緒に取り組まなければならないテーマだと思っています。

子供たちの話で言えば、祭りの開催時期が 10 月の連休になることが多いものですから、そういうタイミングですと児童の皆さんは、地域のクラブ活動等でなかなか参加が難しいというケースも出てきます。やはりこども頭の痛い問題です。人手は必要なものですから、近隣の大学等にもお話に行ってお協力を仰ぐわけですが、大学生の皆様もスケジュール調整がなかなか難しい。当然ぼんぼり祭りに参加すると事前の打ち合わせ、リハーサル等が必要になるのですが、「何度も何度も足しげく湯涌に通うことができないんです……」という方も多く、難しい問題だなと感じています。地域の青年団等もあるのですが、こども先ほどの児童の減少と同様、やはり年々人数が減っておりまして、ここに頼ることも難しいのが現状です。

そんな中で、湯涌温泉には、ありがたいことに〈湯涌サポーターズ〉という組織がございます。湯涌ぼんぼり祭りのみならず、湯涌温泉で行われる各種のイベントをサポートして下さるボランティアグループです。元々は『花咲くいろは』で湯涌温泉を知って、湯涌温泉にいらっしやった方々です。最初は作品ファンとして訪れて頂いた皆さんが、来訪を繰り返して地元の方々との人間関係が構築されていく中で、温泉街の側から「ちょっと今度手伝ってよ」、といった軽い感じで始まったグループです。現在は、合計で 30 名程度、地元の方はそれほど多くなく、全国から集まって頂いています。湯涌ぼんぼり祭りめがけて前日の夜中から出て、朝から晩までイベントを手伝って頂いと、本当に、祭りを楽しむ余地がないんじゃないかなと思いつつも、「みんなでこうやって集まって一つの事をやるのが楽しいんですよ」という言葉に甘えながら今まで力をお借りしています。こういった方々のご協力無しには、湯涌ぼんぼり祭りだけでなく、その他イベントも湯涌で開催できないのではないかと思います。本当に欠くことのできない大きな存在になっています。

これは湯涌温泉の本当に大きな特徴なのですが、皆さん商売をされながらお祭りに関わられているので、〈湯涌ぼんぼり祭り〉の全体像を把握している方が意外と少ないんです。

実行委員会のメンバーはある程度全体像を把握していますけれども、それでも打ち合わせに参加できないメンバーもいたりします。こうした点は湯涌温泉の大きな課題だと思う反面、それを今補う形でファンの方々が手伝って下さっているというのが、今の湯涌温泉を前向きにしている大きな要素だと思っています。

これまでの来場者数の推移

表2は、湯涌ぼんぼり祭りの今までの来場者数の遍歴です。点灯式・本祭と交互にございますけれども、当初（初回）の点灯式には500人、本祭に5,000人だった来場者数が、その後、一番多い年で、点灯式に延べ1,400人、本祭に延べ15,000人を超える方がいらっしゃっています。私どもも、まさかここまで大勢の方がいらっしゃると思わなかったですし、第1回から人数が増え続けたことも全く想像していなかった点です。それこそ『花咲くいろは』の製作委員会の皆様も、徐々に徐々に人数が減ってソフトランディングする形になるのではないかと予想されていた中では、非常に驚きの結果となりました。第7回が来場者数のピークではあるのですが、それ以降の第8回、第9回は、台風の影響で順延並びに開催規模を縮小して実施、その後の第10回は新型コロナウイルスの影響で未だ実施できていないという状況です。

表2 〈湯涌ぼんぼり祭り〉来場者推移

| 湯涌ぼんぼり祭り来場者数推移 | 人数 | 備考 |
|----------------|--------|---------------------------------|
| 第1回湯涌ぼんぼり祭り点灯式 | 500 | アニメ花咲くいろはOA中 |
| 第1回湯涌ぼんぼり祭り本祭 | 5,000 | アニメ花咲くいろは最終話直後 |
| 第2回湯涌ぼんぼり祭り点灯式 | 1,000 | 個人協賛開始 |
| 第2回湯涌ぼんぼり祭り本祭 | 7,000 | 劇場版花咲くいろは前売り券セット発売 |
| 第3回湯涌ぼんぼり祭り点灯式 | 1,000 | 劇場版花咲くいろは公開後 |
| 第3回湯涌ぼんぼり祭り本祭 | 10,000 | 劇場版DRセット先行発売 |
| 第4回湯涌ぼんぼり祭り点灯式 | 1,200 | リアル宝探し開催 |
| 第4回湯涌ぼんぼり祭り本祭 | 12,000 | サークルサックススタイアアップ |
| 第5回湯涌ぼんぼり祭り点灯式 | 1,400 | 北陸新幹線開業 |
| 第5回湯涌ぼんぼり祭り本祭 | 14,000 | 北陸新幹線「かがやき」で行く準天頂衛星「みちびき」コラボツアー |
| 第6回湯涌ぼんぼり祭り点灯式 | 1,400 | |
| 第6回湯涌ぼんぼり祭り本祭 | 15,000 | サークルサックススタイアアップ3年目 |
| 第7回湯涌ぼんぼり祭り点灯式 | 1,400 | 世界ジェラート大使 柴野大造ジェラートイリュージョン |
| 第7回湯涌ぼんぼり祭り本祭 | 15,000 | 県道10号線崩落 |
| 第8回湯涌ぼんぼり祭り点灯式 | 1,200 | 湯涌温泉開湯1300年記念事業 |
| 第8回湯涌ぼんぼり祭り本祭 | 6,000 | 台風25号の影響で順延、縮小 |
| 第9回湯涌ぼんぼり祭り点灯式 | 1,200 | 金沢湯涌ホテルの里に認定 |
| 第9回湯涌ぼんぼり祭り本祭 | 8,000 | 台風19号の影響で順延、縮小 |

新たな取り組み

湯涌温泉の現在の取り組みですけれども、冒頭で山村先生からお話があったように、記念誌の発刊ということで、第1回から今までのぼんぼり祭りの歩みを書籍化していただいております。こちらは非常に内容が——たぶんそうとは知らずに買った方もいらっしゃるみたいですが——学術的で面白かったという話も頂いております。ぜひ皆様もお手に取って頂ければ幸いです。

目下、第10回湯涌ぼんぼり祭が開催できない状況下にあるのですが、そんな中でも、やはり何とか来年こそは開催できるようにということで、今年の10月には、〈第10回湯涌ぼんぼり祭り開催祈念〉ということで、全国の方から〈ぼんぼり〉を募集いたしました。湯涌温泉では、夏の〈ぼんぼり〉がなくてはならないものになりつつあります。逆に無いとクレームが来てしまうんですね。「何でないの？」と。そういった大勢の方の声に答えるためにも全国の方に呼びかけを致しまして、来年のぼんぼり祭りに向けてお力をお貸しください、というかたちで始まったのがこの取り組みです。

10月23日には湯涌温泉街からオンライン配信イベントを実施致しました。先ほどの書籍を基に山村先生と PARUS の佐古田様にもご出演頂いた湯涌ぼんぼり祭りのアーカイブトークや、『花咲くいろは』の主題歌等を歌っているアーティストによるライブ、声優さん・プロデューサーさんをお招きしたトークショーなど、非常に内容の詰まった配信イベントでした。こちらの配信イベントも、企画・進行・撮影・配信、全て自分たちで行っております。

これが当日の様子ですけれども、このような形でライブを行って頂きました。「来年こそ湯涌ぼんぼり祭りが開催できますように」という願いを込めた花火を上げております。

あわせて、現在、湯涌温泉では、アニメーションコンテンツを使ってマップを作っております。このマップによって広域の観光連携ができないかということで企画したものです。まず第一弾として、2019年に金沢市湯涌温泉と P.A.WORKS さんの本社がある富山県南砺市、これら二つのまちを巡るマップとして「金沢・南砺 アニメで巡る旅マップ」を企画いたしました。1万部マップを用意したのですが、7,000部以上が1年で掃けておりますので、かなり大きな反響があったと感じています。その次年2020年には、更にエリアを広げて福井県の坂井市を巻き込んで「アニメでつなぐ北陸湯めぐりマップ」としてリニューアルしております。これらはいずれも P.A.WORKS さんの作品の舞台モデルとなった地域を巡る形で、当然舞台モデルとなった場所等も紹介しておりますが、それ以外の魅力というものもそれぞれの地域にあるわけで、そういったものも知っていただくためのツールとして開発しました。

これらマップは、湯涌温泉という小さな温泉街と金沢市とが協力して制作したのですが、これまで他の行政区域を紹介した事例というのはほとんど無いので、私どもが最初に、例えば福井県にご説明に上がった際の先方の反応が印象的でした。たぶん最初に P.A.WORKS さんに対して私たちがしたような表情だったんじゃないかなと思うのですが、「そんなことタ

ダでしてくれるの？」という、ちょっと胡散臭さも交えたような目で我々をご覧になられたのが印象的でした。

良かったなと思う点

今まで9回〈湯涌ぼんぼり祭り〉を開催してきて良かったなと思う点ですが、私たちが当初から言っております〈地域に根付いたお祭り〉という目標に順調に近づいてきている点です。地域の方の協力体制ですとか、それこそ広く金沢市内での認知度というところも含めて、本当に地域に根付いてきたなという実感があります。ただ先程も申し上げましたように、関係者一同、第3回目以降は、徐々に来場者数も減って湯涌温泉という町のスケールに見合った数になるんじゃないかなと思っていたのですが、それが良い意味で裏切られまして、年々来場者数が増え続けている状況です。

開催資金を捻出するための施策、これは記念グッズであったり、〈ぼんぼり〉を通した個人協賛であったりするのですが、これらは企画として非常に良かったと思っています。また、ぼんぼり祭り際には、地元の小中学生に〈ぼんぼり〉に絵を描いてもらって、その〈ぼんぼり〉を掲出しているのですが、これも地域に根付かせる意味では非常に有益だったと思っています。

先ほど写真にありましたように、ぼんぼり祭りでは地元のアマチュアの演奏家の方々にライブをして頂くのですが、何でも好き勝手やられても困るということもありまして、制約を設けています。ライブをやってもいいけれど、『花咲くいろは』の楽曲を最低1曲やってください、という縛りを設けています。ご覧になれる方も違和感なく楽しめますし、それこそ『花咲くいろは』以外の楽曲も演奏することになりますので、そういった意味では逆に『花咲くいろは』をご覧になったことがない方々でも楽しめるわけです。こうした意味で、非常にいい企画だなと自負しております。

飲食ブースなども、可能な限り地域性を大切にしております。先ほどの金沢カレーもそうですが、それ以外にも石川県でオムライスを売りにしている地域もありますし、そのオムライスも作品では大きな役割を果たしたということで、そういった物を積極的にお客様に提供できるような体制を取っております。

問題点

問題点ですけれども、一つは情報発信の難しさです。台風の際に特に感じたことなのですが、例えば、「中止ですよ」もしくは「順延ですよ」ということの情報伝達、これが非常に難しいと感じました。それこそ『花咲くいろは』のファンからスタートして、湯涌ぼんぼり祭りに毎年毎年通ってくださるような方々というのは、こちらの発信する情報を逐一チェックして下さっているので大きな問題はありません。しかし、例えば、金沢市内に住んでらっしゃる方で、「湯涌ぼんぼり祭って祭りがあるみたいだから行ってみようか」というような位置づけの方々には、なかなかそういう情報が伝わらないんですね。かといって、そう

いった方々に伝えるために広告を打ったりできるかという点、それはやはり資金面で難しい。ここの難しさは痛感しています。

次にアクセスの悪さですね。今ほど申し上げましたように、湯涌温泉、非常に小さな温泉街ですし、なかなか空いた土地——休耕田はたくさんあるのですが——、使える土地という意味合いでの空いた土地が無くて、例えば関係者駐車場等、どうにかこうにか、下手すると林道とか農道まで使ってしまうようなレベルで対応していますので、こういったところも問題です。

そして、やはり増大する経費ですね。ここがやはり頭の痛いところです。来場者が増えれば増えるほど、それに対する安全対策にお金を割かなきゃいけなくなってきます。そこをどう捻出していくかという点は頭の痛い問題です。

それと、地域のスケールを上回る来場者の受け入れ。これは先天的というか、第1回からですけれども、ずっとマンパワー不足です。最後に、第8回第9回にありましたような天候に左右される開催。そして、新型コロナウイルス感染症という問題が、やはり大きな問題として立ちふさがっています。

6. これからの湯涌ぼんぼり祭り

最後に、これからの湯涌ぼんぼり祭り、これからの湯涌温泉について、どうあるべきなのか、私なりの考えをまとめたいと思います。

情報発信

情報発信に関しましては、今のところやはり速報性、拡散力の強さで Twitter を主に使っております。ただ、Twitter をフォローしていない方々へのアプローチ、ここをどうするかという点が大きな課題で、やはりこの点では、地元新聞メディア等とのお付き合いが重要だと感じています。地元新聞メディア等に、報告ではなくてパブリシティな部分で取り上げて頂くことも必要だとは思いますが、なるべく広く多くの方に知っていただくような方法を見つけていかなければならないと感じています。ただその反面、万人を受け入れるスタイルが良いのかどうか。これから先、「ちょっと行ってみよう」という感覚の方と、この日を楽しみに半年前から準備をしてきた方々とを、同列に見るべきではないのではないかとこの葛藤も抱えています。そんな中で、各種イベントや様々な事業を通して、湯涌の SNS にお客様を誘導するような、そういう展開をしていく必要があるのではないかと感じています。

アクセス

湯涌温泉のアクセスの問題ですけれども、車両に関しては今後も継続して制限せざるを得ないと考えています。やはり近隣住民の皆様にも路上駐車等でご迷惑をおかけするわけにも参りません。ただ、先ほど申し上げました近隣の金沢大学の駐車場、こことシャトルバスで結んでピストン輸送をして頂くというのが現段階ではベストの方法だとは思っているのですが、その際配置する警備員や整備員、こういった方々の人件費が非常に大きなコストになっているのも、やはり問題点かと思えます。第8回、第9回の時は台風で順延になったわけですけれども、順延日での駐車場やシャトルバスの確保というのがなかなか難しいんですね。それこそ当日、北陸鉄道様におかれましては、空いているバスを全て湯涌温泉に回すくらいの体制で配車して頂いているので、なかなか突発的に「今日台風なので来週にしましょうか」というわけにはいかないのです。やはり開催日程に合わせ、予備日も設定する必要があるんじゃないかと感じています。このシャトルバスですけれども、路線的に、シャトルバスの中に通常の路線バスも混ざってしまうんですね。先ほどご覧いただきました行先表示を見ればお分かりいただけると思うのですが、いかんせん大変な混雑の中、路線バスとシャトルバスの区別がつかなくて、路線バスに乗りたくても間違っただけでシャトルバスに乗ってしまっただけで、途中で降りたかったのに金沢駅まで行かされちゃったというケースもあつたりします。そういったところは公共交通事業者の皆様と再度お話しをする必要があると感じています。

先程、車で来る方に関しては非常に厳しい制限を、という話をしましたが、そうすると敵もさるもので、今度は二輪車で来るようになってしまい、年々バイク・自転車を含め二輪車が非常に増えております。この駐輪場をどうするかという問題があります。この話を突き詰めていくと、最終的には、最後のレベルとなる〈来場者の制限〉というところまで、もしかしたら踏み込まなければいけないのかとも感じています。

経費・財源

今後の経費の問題ですが、今申し上げた〈来場者の制限〉に関して言えば、来場者を制限することで警備費が削減できる。飲食ブースや記念グッズの販売ブースに関しても、私どもがこれを直接運営するのではなく業務委託というかたちで業務を切り離すことによって財源がスマート化できるのではないかと感じています。

恒久的な開催のための予算管理、運営開催費の新たな財源確保という点から協賛金も重要になるのですが、これにつきましては、例えば各旅館が取引先に「いいから協賛しろよ」という形ではなく、協賛する側、される側、それぞれにメリットがある形での財源確保を目指しています。

また、当然のことですが、新たな財源確保も視野に入れなければならないと思っています。これに関しては、実は金沢市内の宿泊施設の皆様と既に何度かお話しはさせていただいておりまして、湯涌ぼんぼり祭りの時に宿泊される方々に、インセンティブのある宿泊プランを

構築しようという方向性は決定しております。

受益者負担ということの観点から、湯涌ぼんぼり祭りに入場する際の料金を徴収する必要があるんじゃないかという意見も出てきております。また、配信コンテンツの有料化ということも実は考えておまして、先ほど10月に配信イベントを行ったと申し上げましたが、将来的には実際の（リアルの）お祭りとお祭りの配信、この二本立てでいく方向になるのではないかと私は感じています。ただ単に、それこそ防犯カメラのように、お祭りをダラダラ映していても有料化はできないでしょうから、配信ならではの特性、面白みがあるコンテンツでなければ有料化できないのではないかとということで、今いろいろと試行錯誤をしています。

祭りの規模の適度なスケールへのダウンサイジング

あとは、適度なスケールへのダウンサイジングですね。やはり15,000人というのは、どう考えても湯涌温泉にとっては多すぎる来場者数だと感じています。この地域のキャパシティを上回る来場者の受け入れという点に関しては、やはり安全確保が最重要課題です。これが湯涌温泉にとっては生命線だと思っています。この点で何か問題が発生すれば、やはり今後の開催が危うくなるのではないかと感じています。誰でも受け入れるというのは、この先難しくなるのではないかと感じています。来場された方々の満足度の向上のためにも、こうした点への配慮が必要になるでしょうし、感染症対策という点でも有効な手立てになるのではないかと感じています。

コロナウイルス感染症があったことで、今後來場者の事前登録が必要になるのではないかと感じています。また、先ほど「3時間待ちもある」と申し上げました記念グッズの販売ですが、こちらも現状でオンライン販売も開始致しましたので、こうした仕組みを活用して、なるべく待機列ができない、人が密にならない空間を作っていかなければならないと感じています。総じて、やはり〈入場者の絞り込み〉がキーワードになると思っています。

マンパワー

マンパワー不足については、先ほど申し上げましたように、飲食・物販というところを業務委託にすることによって負担を軽減したいと思っていますし、あとは地域の企業、そういった方々とのタイアップによって経費ならびにマンパワーを補填できればと思っています。やはり少子化が湯涌温泉としては大きな悩みですので、地元の小中学校のみならず、交流のある近隣の小中学校等も含めた教育機関等との連携について、これから先、可能性として考えていかなければならないと思います。また、湯涌ぼんぼり祭りを支える〈湯涌サポーターズ〉に関しましても、この先、メンバーの拡充が必要になってくると感じています。

開催日程

湯涌ぼんぼり祭りがこれまで天候に左右されてきた点についてですが、なるべく台風シ

ーズンを避けるという意味で10月の後半を目処に開催する必要があるのかなとも感じています。ただ10月の後半になりますと、夕方からかなり暗くなって寒さも厳しくなりますので、全体的に開催時間を前倒しする必要があると思います。なお、台風につきましては、多くの〈ぼんぼり〉が湯涌温泉に飾られていますので、これらに被害が出てはいけないということで、取り付け機材等の改良を既に実施しています。

予備日の設定についてですが、2年程前に検討はしていたのですが、まだ具体的に決定していません。ただ、予備日に関しましては公表しない方向です。と言いますのも、やはり予備日を公表してしまいますと、どちらの日程も宿泊施設を押さえる方が出てこられます。そうすると、やはりご商売されている方からすると大きな打撃になりますので、予備日に関しましては、たぶん事前には公表しない状態で進めることとなります。

総括

最後に総括を致します。今後の湯涌ぼんぼり祭りですが、神迎行列からお焚き上げまでという基本構成は、そのまま踏襲致します。こちらがぶれると、湯涌ぼんぼり祭りではなくなると感じています。ただ、そうした基本構造にプラスするものとして、新たな楽曲ですとか踊りといった部分を強化することで、来場された方にとって、今までは鑑賞しているだけだったお祭りから、参加できるお祭りへと、進化を目指したいと思っています。地域の文化・風習を積極的に取り入れていきたいなど。また地域の人材に積極的に参画して頂いて、単なる観光協会のお手伝いという形ではなく、企画段階から地域の方々と一緒に一貫して祭りを行っていく、そういう仕組みを作っていきたいと思っています。車両に関しましては、やはりどうしても祭り中は温泉街に入っていたくわけにはいきませんし、入場者数に関しても、安全上の理由から入場制限を行っていく必要があると思います。その上で、オンラインでの付加価値のある配信も行うことで、リアルと配信の2本立ての〈ぼんぼり祭り〉をこれから築き上げていかなければと感じています。

長時間のご清聴ありがとうございました。

7. 総合討議

山村：山下様、ありがとうございました。この10年間のご苦勞から今後の展望まで、非常に濃密な、しかも精緻に整理された内容で、大変勉強になりました。本当にありがとうございました。特に最後にお話し下さった、現地開催と配信を組み合わせるといふ、ハイブリッド型の祭りの展開を、先を見据えて目指されているお話は、現在各地で議論されているアフターコロナ、ウィズコロナにおける観光のあり方を考えるうえで大変参考になりました。今後、こうしたお取り組みが湯涌モデルとして全国にも知られていくのではないかと感心い

たしました。

それから、〈湯涌ぼんぼり祭り〉が10年間なぜ続いたのか、なぜ続けられたのか、という点について、今日のお話を伺って、私自身も腑に落ちた部分が多くありました。やはりスタートの段階から〈本物の祭りを目指された〉という点が重要だったのだなと感じた次第です。宮司さんをお願いをされて、祝詞も本格的なものを作っていただいたという……

山下：祝詞は確かに長いですね。

山村：ですよね。祝詞については、これはアニメイベントじゃない、本物の神事だな、という声をファンの皆さんからよく聞くんですよ。やはり本物のお祭りを作っていくというスタートがあって——よく山下さんをはじめ実行委員会の皆さんがおっしゃっていましたけれども——「アニメイベントではなくて、将来的に地域のお祭りとして定着するものをしっかり作る」という姿勢で、小学生や地元バンドの方も含め、地域の皆さんに参加して頂きながらお祭りを作っていかれたんですよ。まさにアニメ作品をきっかけとしたお祭りが〈地域のお祭り化〉していった10年のプロセスを学ばせて頂いたように思います。本当にありがとうございました。

視聴者の皆さんからご質問を頂いております。

「『咲くいろは』で商売はしないでおこうと決めていたというお話がありました。それは製作側と湯涌サイド、どちらから出た声だったのでしょうか。またそう決めていた理由はあるのでしょうか」というご質問です。いかがでしょうか。

山下：制作側からは一切こういうお話はなかったんです。湯涌サイドのほうで自主的に、こういう方向でいきましょうということで皆さんにご提案したんです。最初は温泉街からすごく怒られまして。やはり温泉街は経済区域なわけですよ。そんな中で、「せっかく自分たちが稼ぐためのツールが手に入ったのにそれを使わせないと何事だ」という声もありました。ですが、私が当初から重視したのは、湯涌温泉であり続けることが大切だという点です。『花咲くいろは』に流されて湯涌温泉が〈湯之鷺温泉〉になってはいけなないと。あくまで〈湯之鷺温泉〉のモデルとして取り上げたいと製作委員会の皆様に思っていたけど、その〈湯涌温泉〉であり続けることがやっぱり一番重要だと思っていました。ですので、『花咲くいろは』を使って商売をしない、『花咲くいろは』に流されるような温泉街では駄目だ、ということを温泉街の皆さんにお話しました。そういった意味では、当初いろいろと地域の皆様とぶつかったこともあるのですが、最終的には地域の皆様にもその点をご理解頂き、湯涌温泉にお越しになる大勢の皆様からの評価にもつながりました。結果として正しくて良かったなとホッとしています。

山村：ご商売をされている以上、本当に難しい決断だったと思います。ありがとうございました

した。次の方からご質問頂きました。

「コンテンツを通じた広域観光連携のお話についてです。他県の自治体と連携する際に重要なポイントはありますか。交渉に押さえておくべきポイントがあれば教えていただきたいです」というご質問です。先程お話しいただいた湯涌温泉と富山県南砺市ですとか、越県した連携についてポイントがあれば教えていただきたいというご質問です。

山下：基本的に、広域観光連携に対して、行政の皆さんはアレルギーをお持ちでないと思います。ただ、行政主体ではなかなか進まないのも事実かと思えます。ですので、まずは民間同士の交流から始めて、その中に行政を巻き込んでいくというやり方がいいのかなと私は感じました。やはり、行政主体で動かそうと思うとスピード感もそうですし、それこそ予算の問題もあろうかと思えますので、そこは民が主体となって推し進めていくのがいいんじゃないかなと思います。

山村：地域側の民間が率先して主体的に動いて、結果を出していきながら行政に働きかけていく、ということですね。

山下：はい。

山村：ありがとうございます。次のご質問に行かせて頂きます。

「貴重なお話ありがとうございます。記念誌読ませていただきました。ソーシャルディスタンスや湯涌温泉自体のキャパシティー等の問題の解決策としてバーチャル化を進めていくとのお話がありました。配信ならではの取り組みとしては、具体的にどのようなことを考えていらっしゃいますでしょうか。学生や遠方に住んでいて現地に足を運べない潜在的な観光客にとっても非常にありがたい取り組みだと感じています。先日のYouTubeライブや記念花火、非常に楽しく拝見させていただきました。」というご質問です。

山下：ご視聴頂きありがとうございます。私どもからすると、やはり本当は湯涌ぼんぼり祭りを現地で楽しんで頂きたい。これが率直な思いです。ただ、そうは言いながらも様々な問題で現地に來ることができない方もいらっしゃいますし、本日お話ししたように、私どもの方から入場者制限をせざるを得ないことも考えられます。そんな中でのバーチャルの必要性というところを考えています。現地にお越しになられた方はお祭りの空気感を楽しめると思うのですが、やはりバーチャルだと、そうした空気感が伝わらない。現段階では具体的なことはお話できませんが、配信ならではの良さを強調しながら、一方的に見るだけではない楽しみ方をご提供できるような環境を作っていきたいと思っています。

山村：ありがとうございます。湯涌ぼんぼり祭りは早い段階でUstream中継を実施される

など、オンライン活用も先駆的に進められてきていらっしゃると思いますよね。そういったノウハウの蓄積から今後どのようなバーチャルなお祭りへの参加方式、コンテンツの誕生につながっていくのか、本当に楽しみです。次のご質問です。

「この10年で湯涌温泉の雰囲気は大きく変わったと思いますが、ぼんぼり祭り開催以前からの湯涌温泉ファンの皆さんからは何かご意見を頂いていますでしょうか」というご質問です。

山下：そうですね。『花咲くいろは』という作品をきっかけに、湯涌温泉は大きく変わりました。もちろん『花咲くいろは』という要素だけでなく、北陸新幹線というファクターもあったのですが、いずれにしても、湯涌温泉は全国でも非常に大きく変貌した温泉街のひとつになったと思います。そんな中で、以前から湯涌温泉を愛して下さっていたファンの方とお話しする機会もありまして。まちの変化について「どう思われましたか？」と実際に聞いてみたんです。私はてっきり「私の好きな湯涌温泉じゃなくなった」といったような答えが返ってくると思ってたのですが、実際はそうではありませんでした。その方から言わせると、『花咲くいろは』がオンエアされる以前から、徐々に徐々に湯涌温泉は来場者数が減っていたんですね。そういった状況をご覧になっていた方だったので、「あの時はすごい寂しかったけれども、『花咲くいろは』を愛して大勢の若い方が湯涌温泉に足を運んでくれるようになって、町が生き返ったようで私はすごく嬉しい」と言われました。これは意外でもありましたし非常に嬉しかったです。

山村：いいお話ですね。そのエピソードで、私も山下様からお伺いした話をひとつ思い出しました。このコロナ禍で、逆に若い世代の『花咲くいろは』ファンが増えていて、湯涌温泉さんにいらっしゃるようになったという。若い世代のファンが、実はこの巣ごもりの時期に生まれているというお話ですね。その辺りをお話しいただけないでしょうか。

山下：はい。『花咲くいろは』は、10年以上前の作品になるんですよね。当時リアルタイムでご覧になっていた方というのはそれなりの年齢になられているわけですが、最近では、当時リアルタイムでご覧になっていないであろう年齢層の若いファンの方が結構湯涌温泉にいらっしゃるんですよ。何故だろうとお話を伺うと、コロナ禍のステイホームということで、家にいらっしゃる時間が長くて、ネット配信等でP.A.WORKS様の最近の作品から、リンクをたどってだんだんと過去の作品の存在を知って、『花咲くいろは』にたどり着く、という感じの方が多いですね。10年前とアニメの視聴環境が変わっていて、そうした変化が湯涌温泉の来場者層にも影響を与えているのだとびっくりしました。海外からのファンのお客様も、ネットで見ていたかが多く、改めてネットってすごいなと思いました。

山村：そうですね。特にこの2、3年のネット配信プラットフォームの普及はすごいもの

があつて、いろいろな面に影響を与えていますよね。年齢層に関して言えば、これまでコンテンツツーリズムの限界性・弱点としてよく指摘されてきたのが、作品放送時のファンが、その後もずっとファンで居続けて、新しいファンはその後あまり生まれてこない、固定化されたマーケットがその後も年齢を持ち上がっていく、という点ですよね。それが、今お話しいただいたように、ネット配信という視聴環境の変化によって、新しい世代もあまり時代を意識せずに過去の作品に容易に接することができるようになった。巣ごもり需要やネット配信にはいろいろと課題もあるとは思いますが、この新たな作品ファン、そしてそれがきっかけとなった湯涌ファンを生んでいる点は、ポジティブな側面として把握しておく必要がありますね。

山下：はい。ただ、その中で私たちが幸運だったのは、やはり『花咲くいろは』という作品の持つ力——P.A.WORKS さんの 10 周年の記念作品だったというところもあったと思うのですが——がすごいという点です。そういうすごい作品じゃないと、やはりなかなか 10 年という時を経てもなお支持されるのは難しいと思います。作品自体が 10 年の時の流れに負けない、強い魅力を持った作品だったという点、これは私たちからすると非常にありがたいことです。新しい世代のファンが生まれてきている本質的な理由はそのあたりにあると思っています。

山村：そうですね。今見ても全く古く感じない内容ですもんね。本当に素晴らしい作品だと思います。次の質問です。

「お祭りの実行委員会の中に製作委員会の方も入っていらっしゃるということでしたが、どのような関係性を築かれていらっしゃるのでしょうか」というご質問です。

山下：実際には P.A.WORKS 様に入って頂いている形になります。私ども、第 1 回の際から P.A.WORKS 様とは何度も何度も話し合いを重ねて参りました。一緒に湯涌ぼんぼり祭りを作ってくださった関係性だと思います。今現在の湯涌ぼんぼり祭りについて言えば、実行委員会の中での湯涌温泉側の意向は 8 割というところだと思います。どちらかというと、現在の実行委員会における製作委員会の皆様というのは、「そこはそうした方がよい」といったアドバイスを頂くアドバイザーのような立ち位置です。ぼんぼり祭りを始めた当初から比べますと、実行委員会の中での製作委員会の皆様の声というのはより小さめに、湯涌温泉側の主体性がより強くなっている、という形です。

山村：関係者の中での実行委員会の位置づけとしては、最初に私がお見せした図 1——自信が無かったのですが——のような感じで宜しいですか？

山下：はい、まさにあれです。

山村：ありがとうございました。安心致しました。それでは最後のご質問になります。

「アニメがきっかけで、実際に旅館でお仕事をされるようになったファンの方もいらっしゃるのとことでしたが、ファンの方も実行委員会に参加なさったりするようなことはあるのでしょうか」というご質問です。

山下：重要なお質問ですね。実際にファンの方が実行委員会に入っているかということ、実はいらっしゃいません。と言いますのも、やはり作品ファンの方ですと、作品に対する思いがかなり強い。思いが強くて、やはり軸足が作品の方になりがちなんです。そういった意味では——これはバランス感覚だと思うのですが——お祭りをつくっていく上では、作品寄りの思考になりすぎてもいけないのではと私は思っています。実際に作品を大切にしつつも、作品をご覧になっていない方々も楽しめるような、そういうお祭りづくりを——やはり地域に根差す祭りと言っている以上——目指さなければいけないわけですね。そんな中では、今のところ、まだファンの方に、祭りの実施のコアの部分に関わって頂いている状況にはなっておりません。

山村：逆に、先ほど山下さんがおっしゃられたサポーターズというかたちで、側面支援、ボランティアな形でサポートするという位置づけになりますね。

山下：はい、今のところそういう状況です。

山村：ありがとうございました。最後に私から一つ質問なのですが、本日のお話で非常に重要な、かつ重いキーワードとして、〈ダウンサイジング〉という言葉がございました。これは、従来もオーバーツーリズムなどの問題で指摘されてきた点ではありますが、コロナ禍になって改めて大きく注目されるようになった言葉ですね。今やあらゆる観光地がダウンサイジング、あるいは適正な規模をどう捉えるか、悩まれていると思います。この辺りのことについて、今後の湯涌温泉でのご展望を具体的にお聞かせ頂けませんかでしょうか。

山下：〈ダウンサイジング〉については、私自身、結構早いタイミングで考えてはありました。湯涌ぼんぼり祭りが〈地域のお祭り〉ではなく〈イベント〉として開催しているのであれば、早いタイミングから〈ダウンサイジング〉に踏み切っていたと思います。ただ、イベントではなくて地域のお祭りとしてこれから先もやっていきたい、ということでやっている私たちが、「見たい」と言って下さる方々を締め出すというのは、やはり難しいんですよね。ですので、本当に今でもずっと葛藤しております。来年の第10回湯涌ぼんぼり祭りは大勢の方に見て頂きたいという思いは当然あります。そして、それと同じくらいの熱量で、やはり11回から先の湯涌ぼんぼり祭りも開催し続けたいという思いもあります。例えば来

年限りで終わるお祭りや祭事でしたら入場制限をしないで済む方法を探すとは思いますが、やはり11回目から以降のことを考えましても、適正な規模で——開催規模、財源規模を含めて適正な規模で——開催する方向にシフトしなければ継続がきつくなるのではないかと考えています。

山村：そもそも湯涌温泉さん自体が、今日もお話がありましたけれども、空間的にも交通の便的にも制約があるわけですね。旅館が合計9件で、宿泊人数のキャパが500人という。そんな中で、これまで10年間、お祭りを継続されてきた湯涌温泉さんが、これからどういうふうに具体的な形で適正規模を考えられていくのかについては、同じような問題に悩まれている全国の皆さんにも、大変参考になるのではないかと、本日お話を伺って強く思いました。是非今後の展開についても、改めて勉強させて頂ければと思っております。ありがとうございます。

そろそろ終了のお時間となりました。山下様には長時間にわたり貴重なお話、そして質問へのご回答を頂き、本当にありがとうございました。ご視聴頂いた皆様には、最後までお付き合ひ頂き、また、たくさんのご質問も頂きましたことを心から御礼申し上げます。ありがとうございます。それでは最後に、山下様、一言頂戴できますでしょうか。

山下：本当に皆様、長時間にわたりご視聴いただきましてありがとうございました。湯涌温泉は、湯涌ぼんぼり祭りという大きな宝物を頂き、これをどう育てていくか、日夜考えております。今後、私どもも皆様からご意見等を頂戴して参考にさせて頂くこともあろうかと思えます。湯涌ぼんぼり祭り並びに湯涌温泉を引き続きどうぞ宜しくお願い致します。

山村：山下様ありがとうございました。皆様、改めまして山下様にオンラインで拍手をいただければと思います。ありがとうございました。ご視聴いただきました皆様もありがとうございました。これにて本日の中継を終了したいと思います。長い間ご視聴ありがとうございました。失礼いたします。山下様、ありがとうございました。

山下：ありがとうございました。

登壇者一覧（50 音順）

青野 友哉

東北芸術工科大学 准教授

天田 顕徳

北海道大学 国際広報メディア・観光学院／メディア・コミュニケーション研究院
准教授

石黒 侑介

北海道大学 国際広報メディア・観光学院／メディア・コミュニケーション研究院
准教授

岡田 真弓

北海道大学 観光学高等研究センター 准教授

小野 哲也

標津町ポー川史跡自然公園 園長

片山 健也

ニセコ町 町長

北原 モコットウナシ

北海道大学 アイヌ・先住民研究センター 准教授

木村 宏

北海道大学 観光学高等研究センター 教授

高橋 葉子

ニセコ町商工観光課 参事

西山 徳明

北海道大学 観光学高等研究センター 教授

山下 新一郎

湯涌ぼんぼり祭り実行委員会 委員長

山村 高淑

北海道大学 観光学高等研究センター 教授

「観光地域マネジメント論演習」2021 年度受講者

山村高淑 編

『観光創造フォーラム 2021 講演録』

CATS 叢書第 16 号, 北海道大学観光学高等研究センター

2022 年 3 月 31 日 発行

発行：北海道大学観光学高等研究センター

〒060-0817

北海道札幌市北区北 17 条西 8 丁目

TEL 011-706-5382

印刷：柏楊印刷株式会社

装丁：前田弘志（バナナムーン・ステュディオ）

表紙写真：岡田真弓, 木村宏, 西山徳明, 山村高淑

Proceedings of Tourism Creation Forum 2021

Edited by
Takayoshi Yamamura

Center for Advanced Tourism Studies
Hokkaido University

cats Library Vol.16



Center for Advanced Tourism Studies
HOKKAIDO UNIVERSITY

北海道大学 観光学高等研究センター

〒060-0817 北海道札幌市北区北17条西8丁目
TEL 011-706-5382 FAX 011-706-5362

www.cats.hokudai.ac.jp